

大友府内 7

中世大友府内町跡第1・2次調査報告

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2



2004

大分市教育委員会

大友府内 7

中世大友府内町跡第1・2次調査報告

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2



2004

大分市教育委員会

序 文

本書は中世大友府内町跡第1次・第2次調査の正式報告書です。

中世の大分には、鎌倉時代以来豊後の守護であり、北部九州の戦国大名に成長した大友氏の本拠地「府内」が所在しました。今回の調査地点はこのうち「横小路町」に比定される地点にあたっています。

「府内」については、ザビエルが訪れ、日本初のキリスト教会が置かれた都市として、フロイスの「日本史」にもその繁栄ぶりが記され、海外にも知られましたが、近世以降長い間その実体は謎のままでした。今回報告する調査はその「府内」に入る初めての本格的な考古学的発掘調査であり、調査の結果、最大幅約10mにも及ぶ道路跡をはじめ、多くの遺構や遺物が検出されました。出土した東南アジア産を含む陶磁器や天秤皿、羽口やトリベなどからは、府内を拠点として南蛮貿易を行った商人たち、ものづくりに励んだ職人たちの活動よって繁栄していた「府内」の姿を窺うことができます。

本書が、本市からの情報発信の一つとして、歴史・文化研究をはじめ、文化交流の一助となるならば望外の喜びです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の上梓にいたるまでご協力いただきました関係各位、ならびにご指導下さいました諸先生方に深く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

大分市教育委員会

教育長 秦 政博

例言・凡例

- 1 本書は、大分市教育委員会が大分駅周辺総合整備事業に伴って実施した中世大友府内町跡第1・2次調査の正式報告書である。
- 2 発掘調査における遺構図作成、遺構写真撮影等の記録作業ならびに基準点・水準点測量については、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに作業を委託した。また、第1次・第2次調査の全景写真（合成）は、同社が作成したものである。本書に使用した遺構実測図、遺構写真、空中写真は上記の両社が作成・撮影したものを使用しているが、一部の遺構写真については調査担当である杉崎重臣が撮影したものを使用している。第2次調査の空中写真については、株式会社パスコに委託して撮影した。
- 3 調査の際には旧日本測地系 第2座標系の座標値を実測・測量の基準として使用した。
- 4 本書作成に至るまでの遺物整理作業（遺物の注記・復元・実測）および遺物・遺構図版作成作業（トレース・版組等）は整理作業担当職員である高畠豊の他、井口あけみ、梅田昭宏、羽田野達郎、羽田野裕之（大分市教育委員会文化財課嘱託）ならびに次に記す大分市・大分市教育委員会臨時職員の多大な協力の下に実施されたものである。（順不同）
渕野玲子、吉高和子、村木佳、薬師寺流美加、小田原由実、結城由利恵、小野千恵美、江藤井津子、林裕子、河野誠、大島紅、武田真知子、長木恵里子、木村藍子、松場泉、伊東みほ、河野裕子、小野啓子、工藤絵美、江藤梓、副直美、近藤智史、植田高夫、清本類
また、一部遺物の実測作業については、有限会社九州文化財リサーチ及び株式会社人間文化都市研究所に委託した。
- 5 6 出土遺物の写真撮影は、高畠及び羽田野達郎が行った。
- 7 本書作成に至る作業中、下記の方々よりご指導並びに有益な助言をいただいた。（順不同、敬称略）
亀井明徳 石井進 佐伯弘次 大庭康時 宮武正登 清水実 金沢陽 矢島律子 西田宏子 楠崎彰一
藤沢良祐 井上喜久夫 大橋康二 森本朝子 青柳洋治 森村健一 山本信夫 小野正敏 西尾克己
古賀信幸 増野晋次 乗岡実 菊池誠一 重見高博 川口洋平 柴田圭子 百瀬政恒 水野哲郎 降矢哲男
向井亘 宮田絵津子 中島恒次郎 橋本久和 徳永貞紹 宮崎貴夫 中村和美 狹川真一 山村信榮
前川要 島谷和彦 上田秀夫 西野範子 佐藤浩司 西村昌也 服部実喜 堀内明博
- 8 本書で使用した方位は全て座標北（G.N.）である。
- 9 出土遺物および調査の記録・資料は大分市教育委員会文化財資料室に保管している。
- 10 本書の執筆は第4章を梅田昭宏が、その他を高畠が行い、編集については高畠及び梅田が行った。
校正には、奥村義貴、松竹智之（大分市教育委員会文化財課嘱託）の協力を得た。
- 11 本書に用いた遺構略号は、SK：土坑、SD：溝、SE：井戸跡、SF：道路状遺構、SP：ピット、SX：性格不明遺構を表す。
- 12 本書で用いた出土陶磁器の分類及び編年観は主として以下の文献による。
なお、中国産の染付を「青花」と呼称する。
青花 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
森毅 1995 「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通 - 大坂の資料を中心に -」『ヒストリア』
第149号
白磁 森田勉 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
青磁 上田秀夫 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
備前焼 乗岡実 2000 「中世備前焼（壺）の編年案」『第2回中世備前焼研究会資料』
乗岡実 2000 「中世備前焼擂鉢の編年について」『第3回中世備前焼研究会資料』
京都系土師器 塩地潤一 1998 「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」『博多研究会誌第6号』
また、一部の陶磁器等の産地同定・分類・編年観については小野正敏氏（国立歴史民俗博物館）、森本朝子氏（福岡市教育委員会）、森村健一氏（堺市教育委員会）、木村幾多郎氏（大分市歴史資料館）にご教示いただいた。

本文目次

第1章 序

1 調査に至る経過	1
2 調査組織	1
3 調査地点の位置と歴史的環境	5

第2章 調査の成果

1 発掘調査の概要	9
2 第1面の遺構と遺物	10
道路状遺構SF001及び関連遺構	10
SD175	17
SD183	17
SD221	17
SD224	17
SD229	17
SD330	17
SD799	18
SD810	18
SD820	18
SD830	18
溝状遺構 (SD)	18
SD161	18
SD870	18
土坑 (SK)	21
SK012	21
SK013	22
SK072	23
SK092	24
SK101	24
SK123	24
SK124	27
SK137・SK139・SK155	27
SK147	32
SK169	32
SK180	33
SK307	34
SK309	34
SK501	34
SK542	35
SK610	35
SK650	35
SK666	36
SK735	36
SK770	37
SK828	37
井戸跡 (SE)	38
SE967	38
性格の不明な遺構 (SX)	38

SX818	38
3 第2面の遺構と遺物	40
溝状遺構 (SD)	40
SD970	40
SD403・SD408・SD978	43
SD433	45
土坑 (SK)	51
SK011	51
SK145	51
SK182	52
SK275	52
SK300	53
SK401	53
SK453	55
SK827	56
SK868	57
SK968	58
井戸跡 (SE)	58
SE400・SE460	58
性格の不明な遺構 (SX)	64
SX409	64
SX487	64
SX975	65
SX700	66
4 その他の遺構出土遺物	66
陶磁器・土器	66
瓦	68
石製品	70
金属製品	74
錢貨	77
5 遺構検出時出土遺物・表採遺物	77
第3章 まとめ	79
第4章 付篇 豊後府内における全体遺構配置図の検討 ～遺構の把握と継続管理について～	83
掲載遺物観察表	
写真図版	

插 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)	6
第2図 中世大友府内町跡各調査区位置図 (1/8000)	7
第3図 中世大友府内町跡第1次・第2次調査区位置図 (1/1000)	8
第4図 検出遺構略図(1/400)	9
第5図 基本土層模式図	9
第6図 遺構配置図 (道路状遺構よりも上層の遺構)(1/120)	11・12
第7図 第1次調査区西壁・東壁土層断面図 (1/60)	13・14
第8図 道路状遺構土層断面図(1/40)	15

第9図 溝状遺構（道路状遺構側溝）土層断面図（1/20）	16
第10図 道路状遺構SF001整地層出土遺物（1/3）	16
第11図 SD161・SD221・SD224・SD229出土遺物（1/3, 1/4）	19
第12図 SD330出土遺物（1/3, 1/4）	19
第13図 SD799出土遺物（1/3, 1/4）	20
第14図 SD810出土遺物（1/3, 1/4）	20
第15図 SD870出土遺物（1/3, 1/4）	21
第16図 SK012平面・断面・土層断面図（1/40）	21
第17図 SK012出土遺物（1/3・1/4）	22
第18図 SK013・SK072・SK123平面・断面図（1/40）	23
第19図 SK013出土遺物（1/3, 1/4）	23
第20図 SK072出土遺物（1/3, 1/4）	24
第21図 SK092・SK101出土遺物（1/3）	25
第22図 SK092・SK101平面・断面図（1/40）	25
第23図 SK124出土遺物（1/3）	25
第24図 SK123出土遺物（1/3, 1/4）	25
第25図 SK137・SK139・SK155平面・断面・土層断面図（1/60）	26
第26図 SK139平面・断面図（1/40）	27
第27図 SK137出土遺物実測図1（1/3, 1/4）	28
第28図 SK137出土遺物実測図2（1/3, 1/4）	29
第29図 SK137出土遺物3（1/4）	30
第30図 SK139出土遺物（1/3, 1/4）	30
第31図 SK155出土遺物（1/3, 1/4）	31
第32図 SK137・SK139検出時出土遺物実測図（1/3）	32
第33図 SK147出土遺物	32
第34図 SK147・SK169・SK180平面・断面図（1/40）	32
第35図 SK169出土遺物（1/3）	33
第36図 SK180出土遺物（1/3, 1/4）	33
第37図 SK309平面・断面図（1/40）	34
第38図 SK307・SK309出土遺物（1/3, 1/4）	34
第39図 SK501・SK542平面・断面・土層断面図（1/40）	34
第40図 SK610・SK650・SK735平面断面図（1/40）	35
第41図 SK666平面・断面・土層断面図（1/40）	35
第42図 SK501・SK610・SK666・SK735出土遺物（1/3, 1/4）	36
第43図 SK650出土遺物（1/3, 1/4）	36
第44図 SK770平面・断面図（1/40）	37
第45図 SK770出土遺物（1/3）	37
第46図 SK828平面・断面図（1/40）	37
第47図 SK828出土遺物（1/3）	38
第48図 SE967平面・土層断面図（1/60）	38
第49図 SX818平面・土層断面図（1/40）	39
第50図 SX818出土遺物（1/3, 1/4）	39
第51図 SD970・SD403土層断面図（1/20）	40
第52図 遺構配置図（道路状遺構よりも下層の遺構）（1/120）	41・42
第53図 SD970出土遺物1（1/3）	44
第54図 SD970出土遺物2（1/4）	45
第55図 SD970（第1次調査）出土遺物1（1/3）	46
第56図 SD970（第1次調査）出土遺物2（1/4）	47

第57図	SD970 (第1次調査) 出土遺物3 (1/4)	48
第58図	SD403出土遺物1 (1/3)	48
第59図	SD403出土遺物2 (1/4)	49
第60図	SD408出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	49
第61図	SD978出土遺物 (1/3, 1/4)	50
第62図	SK011平面・断面図 (1/40)	51
第63図	SK145平面・断面・土層断面図 (1/40)	52
第64図	SK145出土遺物 (1/3)	53
第65図	SK182平面・断面・土層断面図 (1/40)	54
第66図	SK300平面・断面図 (1/40)	54
第67図	SK275平面・断面図 (1/40)	54
第68図	SK182出土遺物 (1/3, 1/4)	55
第69図	SK275・SK300出土遺物 (1/3)	55
第70図	SK401平面・断面図 (1/40)	55
第71図	SK401出土遺物 (1/3)	56
第72図	SK453平面・断面・土層断面図 (1/40)	56
第73図	SK453出土遺物 (1/3)	56
第74図	SK827平面・断面図 (1/40)	57
第75図	SK827出土遺物 (1/3, 1/4)	57
第76図	SK868平面・断面図 (1/40)	58
第77図	SK968平面・断面図 (1/40)	58
第78図	SK868・SK968出土遺物 (1/3)	58
第79図	SE400・SE460平面・断面図 (1/60)	59
第80図	SE400出土遺物1 (1/3)	60
第81図	SE400出土遺物2 (1/3, 1/4)	61
第82図	SE460出土遺物 (1/3, 1/4)	62
第83図	SE400・460検出時出土遺物 (1/3)	63
第84図	SX409出土遺物 (1/3, 1/4)	63
第85図	SX487平面・土層断面図 (1/40)	64
第86図	SX487出土遺物 (1/3, 1/4)	64
第87図	SX975平面・土層断面図 (1/40)	65
第88図	SX975出土遺物 (1/3, 1/4)	65
第89図	SX700出土遺物 (1/3, 1/4)	66
第90図	各遺構出土主要遺物1 (1/3)	67
第91図	各遺構出土主要遺物2 (1/3)	68
第92図	各遺構出土土製灯火具 (1/3)	68
第93図	各遺構出土瓦 (1/4)	69
第94図	各遺構出土石製品 (1/3, 1/4)	70
第95図	各遺構出土金属製品 (1/3)	71
第96図	各遺構出土銭貨拓影1 (2/3)	71
第97図	各遺構出土銭貨拓影2 (2/3)	72
第98図	各遺構出土銭貨拓影3 (2/3)	73
第99図	各遺構出土銭貨拓影4 (2/3)	74
第100図	遺構検出時出土遺物・表採遺物1 (1/3)	75
第101図	遺構検出時出土遺物・表採遺物2 (1/3)	76
第102図	遺構検出時出土遺物・表採遺物3 (1/3)	77
第103図	各遺構出土遺物実測図 補遺 (1/3)	77
第104図	明治時代の地籍図に見る地割	80

第105図	横小路町における道路推定位置	80
第106図	出土灯火具分類図 (1/4)	81
第107図	府内古図A類 模式図	83
第108図	作図過程	84
第109図	豊後府内における全体遺構配置図 (推定大友氏館跡周縁: 1/4000)	87
第110図	豊後府内における遺構配置図 (中世大友府内町跡第1・3次調査区: 1/1000)	89

表 目 次

第1表	出土銭貨一覧表	74
第2表	作図に用いた各調査地の参考元一覧	85

写 真 図 版 目 次

写真図版1	SK137・SK139・SK155 (南から)
第2次調査区遠景空中写真 (東より)	SK145 (南から)
写真図版2	SK180・SK148・SK147 (南から)
第1次・第2次調査区全景 (合成写真)	SK275 (南から)
第2次調査区全景	写真図版6
写真図版3	SK309完掘状況 (北から)
道路状遺構 (西から)	SK309遺物出土状況 (北から)
道路状遺構土層	SK501遺物出土状況 (南から)
道路状遺構土層断面とSD970土層 (東から)	SK610 (南から)
SD140・SD403土層 (西から)	SK650遺物出土状況
SD140・SD403土層 (南から)	SK868 (南から)
SP551三彩出土状況	SK828遺物出土状況 (南から)
SD799土層2 (東から)	SK828完掘状況 (南から)
SD799土層3 (東から)	写真図版7
写真図版4	SK012刻花青花瓶 (17-1)
SD799遺物出土状況 (南から)	SK013朝鮮王朝産陶器皿 (19-1)
SD970土層断面	SK092朝鮮王朝産陶器瓶 (21-1)
SD970 (南東から)	SK101褐釉陶器壺 (21-4)
SD799 南東から	SK137鬼瓦片 (29-42)
SD820石列 (南から)	SK137器種不明焼締陶器製品 (27-31)
SD970・SD978 (南から)	写真図版8
SE400・SE460井戸枠 (南から)	SK139中国産焼締陶器鉢 (30-11)
SE400・SE460完掘状況 (南から)	SK124焼締陶器鉢? (23-6)
SE460 遺物出土状況	SK147朝鮮王朝産陶器皿 (33-1)
SK011 (南から)	SK155朝鮮王朝産陶器舟徳利 (31-12)
SK012 (北から)	SK180中国産焼締陶器鉢 (36-6)
SK013 (南から)	SK180五彩皿 (36-1)
SK072 (南から)	SK180瓦質土器椀 (36-3)

SD221中国産焼締陶器鉢 (11-5)
SD403中国産焼締陶器鉢 (58-24)
SD403青白磁(枢府系)皿 (58-7)
SK650青白磁合子 (43-1)
SK650青磁菊皿 (43-3)

SK585ベトナム長胴瓶 (90-15)
SK930華南三彩蓋 (103-7)
S089中国産焼締陶器瓶? (90-3)
SP551華南三彩瓶 (90-13)
華南三彩水注 (101-47)

写真図版9

SK827青白磁(枢府系)皿 (75-4)
SK828瀬戸・美濃産?陶器瓶? (47-9)
SK828朝鮮王朝産象嵌青磁皿 (47-6)
SD870備前擂鉢 (15-5)
SD870備前壺 (15-6)
SD870褐釉陶器壺(表) (15-9)
SD870褐釉陶器壺(裏) (15-9)

写真図版10

SD970土師器壺 (53-32~34・39)
SD970天秤皿 (95-5)
SD970青磁蓋? (55-14)
SD970青磁酒海壺蓋 (55-19)
SD970中国産焼締陶器鉢? (55-22)
SD970白磁蓋 (55-7)
SD970翡翠釉皿 (55-5)
SD970中国産焼締陶器鉢 (53-10)
SD970鬼瓦? (54-44)
SD970ベトナム産長胴瓶 (53-11)

写真図版11

道路状遺構出土中国産焼締陶器鉢 (10-5)
道路状遺構出土中国産焼締陶器鉢 (10-6)
SE460木製櫛 (81-45)
SE460漆器椀 (81-44)
SE400青磁瓶 (80-9)
SE400タイ陶器四耳壺(耳) (80-21)
SE400白磁八角鉢 (80-2)

写真図版12

SX975タイ産陶器四耳壺 (88-7)
SX700青磁壺蓋 (89-6)
瀬戸・美濃産陶器皿 (90-10)
朝鮮王朝産陶器 (90-17)
中国産焼締陶器鉢 (90-4)
中国産焼締陶器鉢 (90-7)
中国産焼締陶器鉢 (90-8)
中国産焼締陶器鉢 (91-27)
中国産焼締陶器鉢 (101-43)

写真図版13

SK001赤間硯 (94-1)
SK760灰色磁器小壺 (90-20)

写真図版14 遺構検出時出土遺物 表採遺物

中国産焼締陶器鉢 (101-42)
褐釉磁器碗 (100-15)
褐釉陶器茶入 (101-48)
華南三彩瓶? (101-46)
褐釉陶器壺 (101-50)
ベトナム産焼締陶器長胴瓶 (101-49)
タイ産?陶器壺 (101-51)
瀬戸・美濃産陶器鉢 (102-56)
朝鮮王朝産白磁皿 (101-52)
朝鮮王朝産白磁皿 (101-53)

写真図版15

各遺構出土綠釉陶器碗
各遺構出土越州窯系青磁
小柄・笄
出土灯火具集合写真
灯火具 (11-4)
灯火具 (58-22)
灯火具 (103-3)
灯火具 (103-2)

写真図版16

灯火具 (92-2)
灯火具 (58-21)
灯火具 (15-7)
灯火具 (92-1)
灯火具 (92-3)
灯火具 (19-10)
灯火具 (50-5)
灯火具 (38-6)
灯火具 (84-13)
灯火具 (103-1)
灯火具 (89-9)
灯火具 (84-14)
灯火具 (58-23)
灯火具 (11-3)
灯火具 (80-42)
灯火具 (55-43)
灯火具 (53-38)
灯火具 (84-12)
灯火具 (80-43)
灯火具 (61-16)

第1章 序

1 調査に至る経過

大分市は、市内中心部の経済的再活性化と都市交通の円滑化を目指し、大分駅周辺の総合整備事業を計画した。

これは「大分駅付近立体交差事業」、「大分駅南土地区画整理事業」、「庄ノ原佐野線等関連道路事業」の三事業を一体とする大規模公共事業であり、各事業は平成6年度から平成7年度にかけて、順次決定をみた。

事業の推進に伴って、大分駅南地区の既存の住宅の中には移転の必要に迫られるものが発生することが予想され、これに対する代替地事業が平成8年度から着手されることとなった。事業に先立って事業を主管する都市整備課駅南対策室（平成8年度から駅周辺総合整備課）から大分市教育委員会へ埋蔵文化財に関する照会があり、代替地予定地のうち数カ所については埋蔵文化財包蔵地にあたることが判明した。その一つである錦町地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「中世大友城下町跡」の範囲内にあたっていた。

中世大友城下町跡は、戦国時代に大友氏のもとで都市として繁栄したとされ、キリスト教の布教も行われていたことなどでも著名な「府内」の遺跡として範囲指定されたものであり、かねてより「府内」に関連する遺構の存在が予想されていた。しかし、平成7年の時点では当該地域における考古学的調査例がほとんどなく、実体が不明なままであった。このため大分市教育委員会では代替地事業の実施に先立って試掘調査を実施して、遺構の遺存状態を確認することとし、平成7年9月13日に試掘調査を実施した。

その結果、戦国時代のものと思われる遺構及び遺物が多数検出された。大分市教育委員会は、駅周辺総合整備課と遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、錦町地区の代替地全域の発掘調査を実施して遺構の記録保存を行うことにした。これを受け、第1次調査は平成8年5月7日～平成9年4月2日まで行われ、620m²を調査した。第2次調査は第1次調査地点の北側及び北西側の残りの部分と下水管等埋設部分を発掘調査したもので、平成9年4月7日～平成9年8月11日まで行われ、調査面積は200m²であった。なお、調査にあたっては、いずれも(株)埋蔵文化財サポートシステムに発掘調査補助業務委託を行っている。

2 調査組織

平成7年度（試掘調査）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 文化振興課

課長 工藤久典

主任技師 塔舟光司

参事 秦政博

主任技師 坪根伸也

室長 堀和則

主事 徳丸ひとみ

主査 佐藤宏明

技師 池邊千太郎

専門員 讀岐和夫

技師 塩地潤一

指導主事 後藤典幸

平成8年度（本調査）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 文化振興課

課長 工藤久典

室長 堀和則

専門員 讀岐和夫

参事 秦政博

主査 佐藤宏明

指導主事 後藤典幸

主任技師 塔鼻光司	発掘作業員 橋本満	永易喜美子
主任技師 坪根伸也	岡崎哲雄	古城英治
主事 徳丸ひとみ	岡崎日出夫	吉高和子
技師 池邊千太郎	甲斐辰夫	岡和子
技師 塩地潤一	真部茂人	麻生妙子
嘱託 杉崎重臣（調査担当）	古長咲子	
嘱託 新藤美由紀	玉井多紀子	
嘱託 中西武尚	後藤登久子	
文化財調査員（臨時）大野康弘	安部富美子	
文化財調査員（臨時）奥村義貴		

平成9年度（整理作業）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 文化振興課

課長 野尻政文	嘱託 大野康弘	真部茂人
参事 秦政博	嘱託 奥村義貴	後藤登久子
主幹 玉永光洋	嘱託 羽田野達郎	安部富美子
文化財室 室長 植木正巳	文化財調査員（臨時）中西武尚	永易喜美子
次長 讀岐和夫	文化財調査員（臨時）幸しのぶ	古城英治
主査 佐藤宏明	文化財調査員（臨時）田淵芳則	吉高和子
指導主事 藤沢敏夫	文化財調査員（臨時）小野貴史	麻生妙子
指導主事 後藤典幸	文化財調査員（臨時）林潤也	玉井多紀子
主任 安部貴美代	文化財調査員（臨時）大藤弥生	井野和歌子
主任技師 塔鼻光司	文化財調査員（臨時）永松正大	利光克寛
主任技師 坪根伸也		林 房枝
主任技師 池邊千太郎	発掘作業員 橋本満	吉高和子
技師 塩地潤一	岡崎哲雄	大谷明宏
技術員 河野史郎	岡崎日出夫	
技術員 高畠 豊		
嘱託 杉崎重臣（調査担当）	甲斐辰夫	

平成10年度（整理作業）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 生涯学習課

課長 園田裕彦	指導主事 藤沢敏夫	技師 河野史郎
参事 秦 政博	指導主事 後藤典幸	技師 塩地潤一
主幹 玉永光洋	主任 安部貴美代	技師 高畠 豊
文化財室 室長 植木正巳	主任技師 塔鼻光司	嘱託 杉崎重臣
次長 讀岐和夫	主任技師 坪根伸也	嘱託 大野康弘
主査 福田誠一	主任技師 池邊千太郎	嘱託 奥村義貴

嘱託 神尾至	文化財調査員（臨時）幸しのぶ
嘱託 佐藤道文	文化財調査員（臨時）莉谷史穂
嘱託 萩幸二	文化財調査員（臨時）永松正大
嘱託 羽田野達郎	文化財調査員（臨時）古木裕文
嘱託 橋本幸治	文化財調査員（臨時）野中慶誠
文化財調査員（臨時）柄原嘉明	文化財調査員（臨時）水上仁
文化財調査員（臨時）小野貴史	文化財調査員（臨時）安部知美
文化財調査員（臨時）近藤晃弘	

平成11年度（整理作業）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 生涯学習課

課長 安部信彦	主任技師 池邊千太郎	嘱託 大野康弘
参事 秦 政博	技師 河野史郎	嘱託 柄原嘉明
主幹 玉永光洋	技師 塩地潤一	嘱託 横山歩
文化財室 室長 植木正巳	技師 高畠 豊（調査担当）	嘱託 早田利宏
次長 讃岐和夫	嘱託 杉崎重臣	嘱託 宮川泰男
主査 福田誠一	嘱託 高木隆司	嘱託 永松正大
指導主事 藤沢敏夫	嘱託 奥村義貴	
指導主事 後藤典幸	嘱託 神尾至	
指導主事 甲斐猛	嘱託 佐藤道文	
主任 安部貴美代	嘱託 萩幸二	
主任技師 塔鼻光司	嘱託 小野貴史	
主任技師 坪根伸也	嘱託 羽田野達郎	

平成12年度（遺物整理作業）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 文化財課

課長 秦 政博	主任技師 坪根伸也	嘱託 佐藤孝則
課長補佐 帯刀修一	主任技師 池邊千太郎	嘱託 羽田野達郎
主幹 玉永光洋	技師 河野史郎	嘱託 大野康弘
文化財係長 讃岐和夫	技師 塩地潤一	嘱託 横山歩
主査 福田誠一	技師 高畠 豊	嘱託 早田利宏
指導主事 藤沢敏夫	事務員 永松正大	嘱託 宮田剛
指導主事 後藤典幸	事務員 三浦亜紀	嘱託 羽田野裕之
指導主事 甲斐猛	嘱託 杉崎重臣	嘱託 上野淳也
指導主事 姫野公徳	嘱託 奥村義貴	嘱託 小住武史
主任 幸裕美	嘱託 萩幸二	
主任技師 塔鼻光司	嘱託 田中貴	

平成 13 年度（遺物整理作業）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 御沓義則

事務局 大分市教育委員会 文化財課

課長 帯刀修一	主任技師 塩地潤一	嘱託 松尾聰
主幹 玉永光洋	技師 河野史郎	嘱託 松竹智之
管理係	技師 高畠 豊	嘱託 荏谷史穂
課長補佐兼管理係長 熊谷一秋	技師 中西武尚	嘱託 水町裕子
指導主事 姫野公徳	主事 永松正大	嘱託 梅田昭宏
主任 幸裕美	嘱託 杉崎重臣	
主事 三浦亜紀	嘱託 奥村義貴	
文化財係	嘱託 荻幸二	
課長補佐兼文化財係長 讃岐和夫	嘱託 佐藤孝則	
指導主事 後藤典幸	嘱託 羽田野達郎	
指導主事 甲斐猛	嘱託 宮田剛	
主任技師 塔鼻光司	嘱託 羽田野裕之	
主任技師 坪根伸也	嘱託 上野淳也	
主任技師 池邊千太郎	嘱託 小住武史	

平成 14 年度

調査主体 大分市教育委員会

教育長 御沓義則（～平成 14 年 6 月 27 日）

秦 政博（平成 14 年 6 月 28 日～）

事務局 大分市教育委員会 文化財課

課長 帯刀修一	技師 中西武尚	嘱託 勝間田あや
参事 玉永光洋	主事 永松正大	嘱託 岩尾美保子
管理係	事務員 佐藤道文	嘱託 梅木信宏
課長補佐兼管理係長 熊谷一秋	嘱託 井口あけみ	
指導主事 姫野公徳	嘱託 奥村義貴	
主任 幸裕美	嘱託 荻幸二	
主任 桑原治	嘱託 佐藤孝則	
主事 三浦亜紀	嘱託 羽田野達郎	
文化財係	嘱託 宮田剛	
課長補佐兼文化財係長 讃岐和夫	嘱託 羽田野裕之	
指導主事 後藤典幸	嘱託 上野淳也	
専門員 塔鼻光司	嘱託 小住武史	
主任技師 坪根伸也	嘱託 松尾聰	
主任技師 池邊千太郎	嘱託 松竹智之	
主任技師 塩地潤一	嘱託 荏谷史穂	
技師 河野史郎	嘱託 水町裕子	
技師 高畠 豊	嘱託 梅田昭宏	

平成 15 年度（報告書刊行）

調査主体 大分市教育委員会

教育長 秦 政博

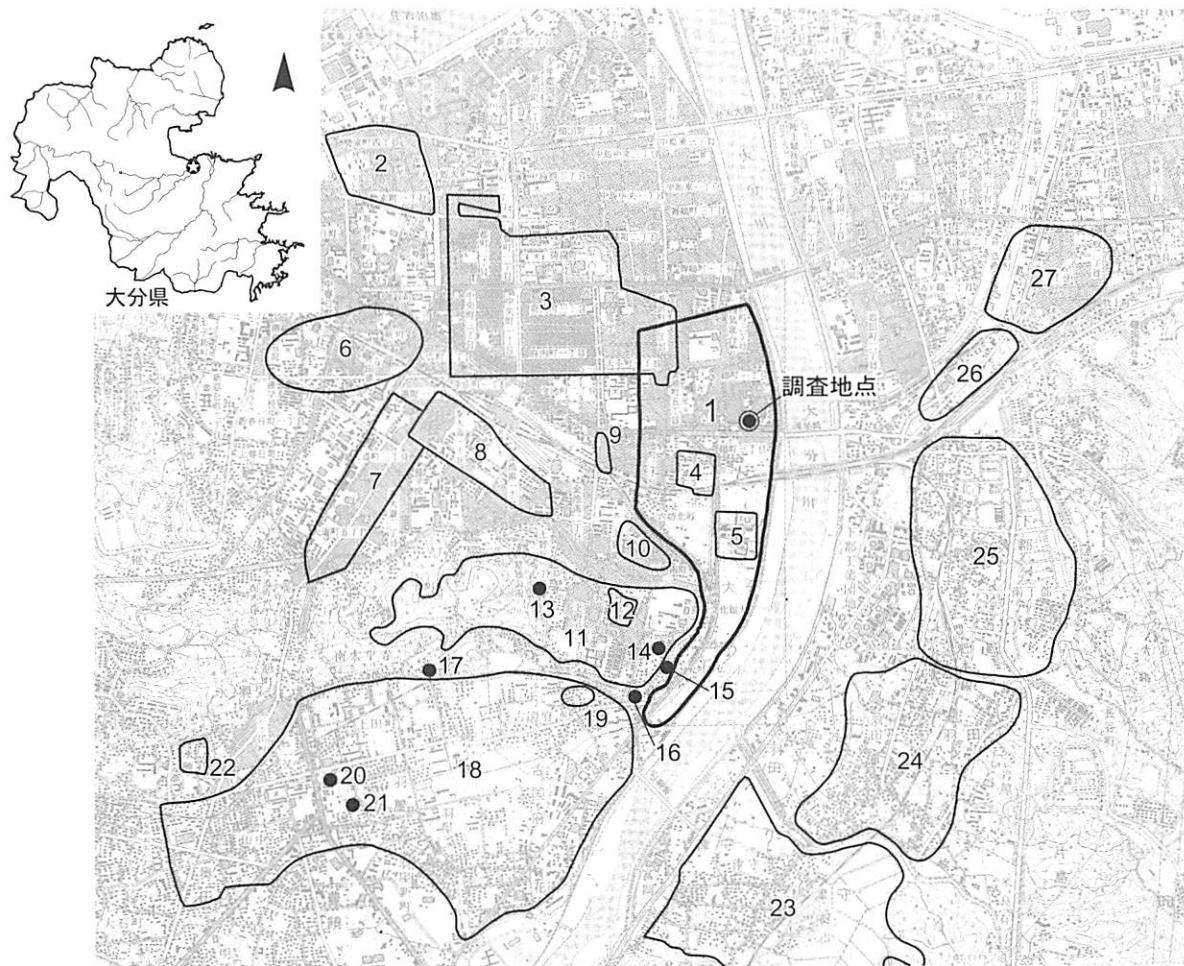
事務局 大分市教育委員会文化財課

課長	帶刀修一	技師	中西武尚	嘱託	小住武史
参事	玉永光洋	主事	永松正大	嘱託	羽田野裕之
管理係		主事	佐藤道文	嘱託	水町裕子
係長	久多羅岐明	事務員	五十川雄也	嘱託	小橋寛之
主査	平野勝敏	嘱託	井口あけみ	嘱託	衛藤亮介
指導主事	姫野公徳	嘱託	荻 幸二	嘱託	江上正高
主任	桑原 治	嘱託	宮田 剛	嘱託	大野瑞恵
主任	安倍一成	嘱託	奥村義貴	嘱託	秦さとみ
主事	三浦亜紀	嘱託	苅谷史穂	嘱託	吉本明弘
文化財係		嘱託	羽田野達郎		
課長補佐兼管理係長	讚岐和夫	嘱託	梅木信宏		
専門員	塔鼻光司	嘱託	上野淳也		
指導主事	後藤典幸	嘱託	梅田昭宏		
主任技師	坪根伸也	嘱託	岩尾美保子		
主任技師	池邊千太郎	嘱託	佐藤孝則		
主任技師	塙地潤一	嘱託	松竹智之		
技師	河野史郎	嘱託	松尾 聰		
技師	高畠 豊				

3 調査地点の位置と歴史的環境

中世の大分は、守護大友氏の本拠地として守護所がおかれて、はじめ「府中」、後には「府内」と称されていた。既に大友氏入部前の 13 世紀前半には、「府中」の呼称が文献上知られている。仁治 3 年 (1242) および寛元 2 年 (1244) に大友氏が制定した「新御成敗状」二十八ヶ条および「追加」十六ヶ条には、この府中を対象とした「都市法」と言うべき条文が見られるが、既にこの時期には市街地的景観が見られたことを推測させるものである。大友氏は中世を通じ一貫して豊後守護をつとめ、守護大名から戦国大名へと発展を遂げ、最盛期には北部九州 6 力国の大名として君臨することになる。これに伴い分国の中心地である豊後の府内は、政治的あるいは経済的中心地として都市的発展を遂げた。宣教師ルイス・フロイスによれば、8000 戸もの家があったと伝えられるほどである。こうした都市的発展については大友氏権力の積極的関与も窺われ、戦国時代の 16 世紀中葉～後半には、館や御蔵場の整備・建設等、政策的に都市の整備が行われたことが文献上も知られている。このほか、中国人等の外国人で府内に居住する者がいたことも指摘されており、戦国時代の府内は国際貿易都市としての性格も持つようになっていた。

府内は戦国時代末期の天正 14 年～15 年 (1586～1587)、島津軍の府内侵攻により占領され、その際に焼亡したとされる。その後、十分に復興される間もなく、文禄 3 年 (1593) 大友吉統が除国され、慶長 2 年 (1597) に



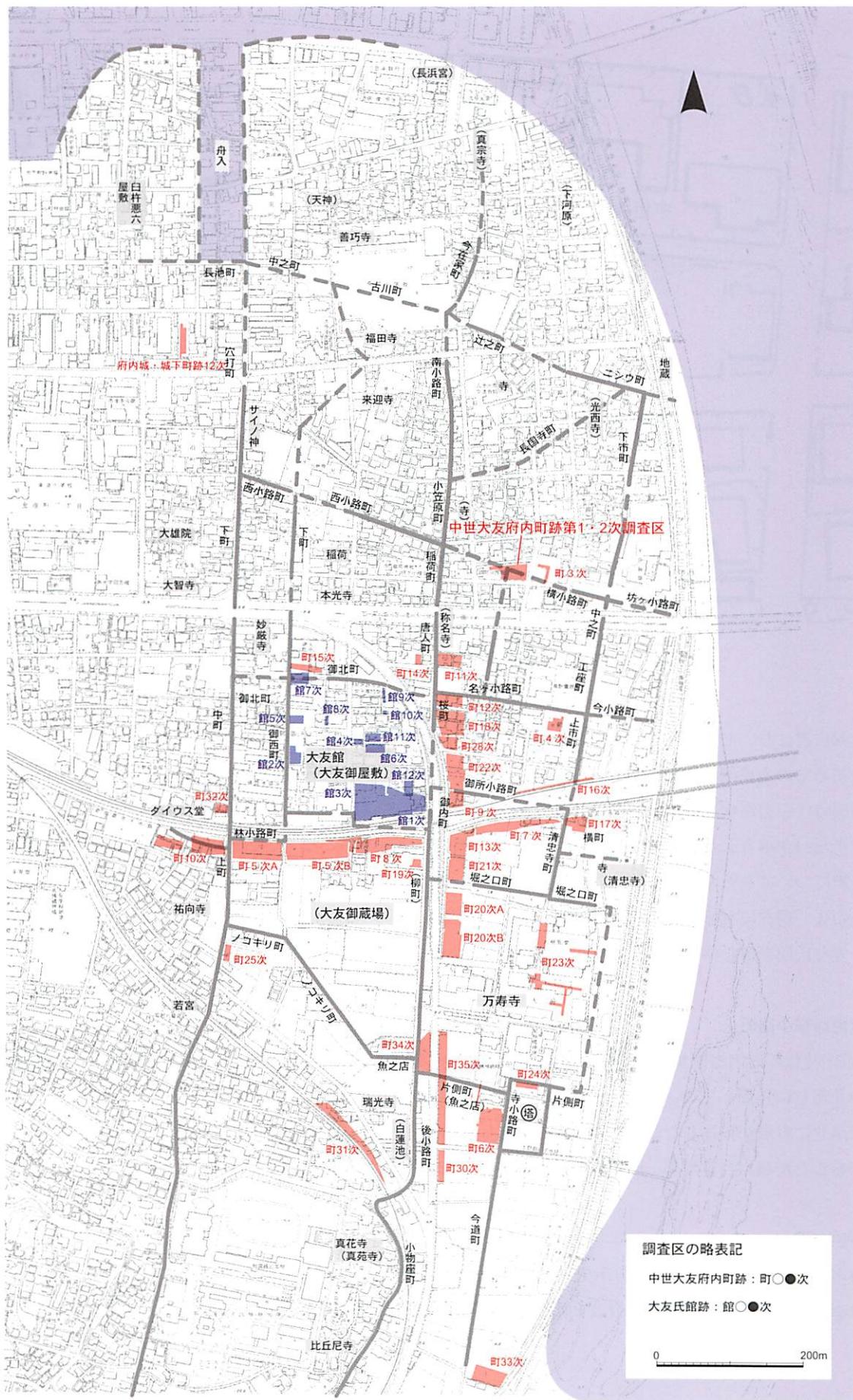
1	中世大友府内町跡	10	若宮八幡宮遺跡	20	羽屋園遺跡
2	沖ノ浜遺跡	11	上野遺跡群	21	羽屋井戸遺跡
3	府内城・城下町跡	12	上野大友館跡（上原館跡）	22	永興遺跡
4	大友氏館跡	13	上野廢寺	23	津守遺跡
5	万寿寺跡	14	上野竜王畠遺跡	24	羽田遺跡
6	東田室遺跡	15	元町石仏	25	下郡遺跡群
7	大道条里跡	16	岩屋寺石仏	26	牧六分遺跡
8	大道遺跡群	17	伽藍石仏	27	牧遺跡
9	南金池遺跡	18	古国府遺跡群		
		19	岩屋寺遺跡		

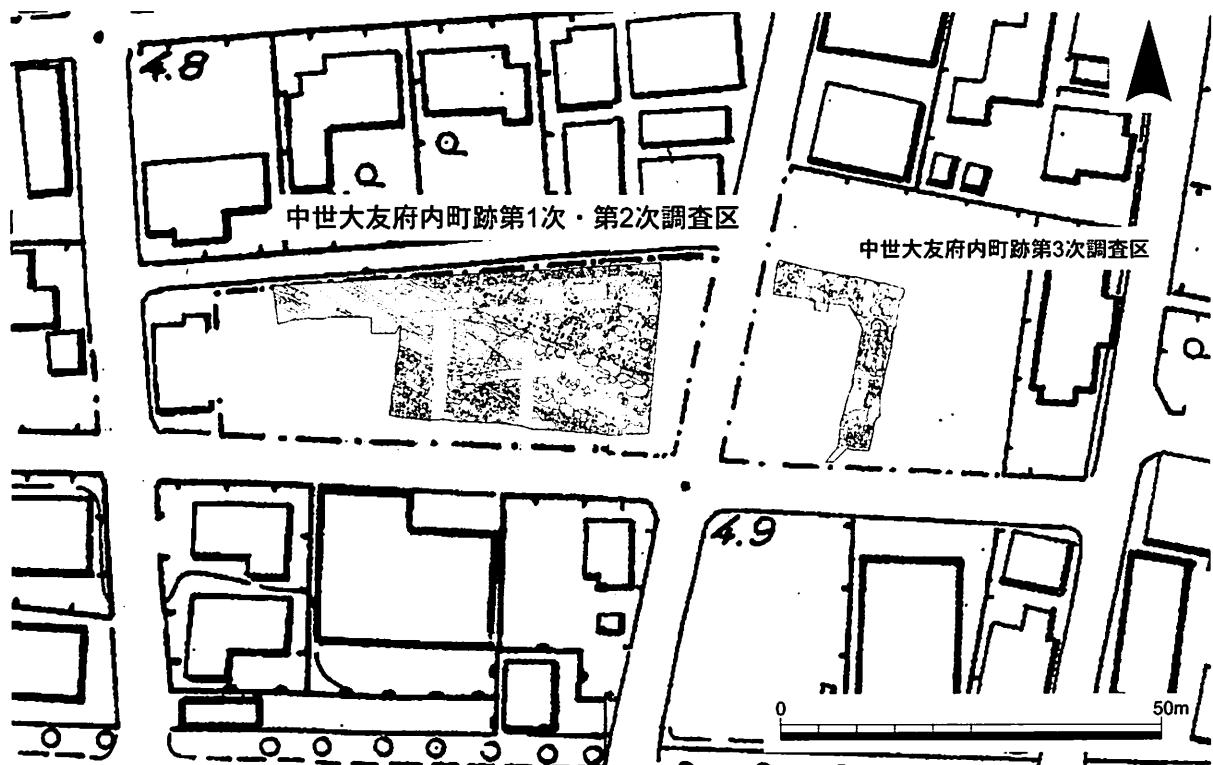
第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

始まる府内城の築城とその完成（慶長13年：1608）に伴って旧府内町は府内城下町に移転されることになる。こうして、中世の都市域は僅かな重複域を持ちつつも北西側に大きく移動することとなり、旧府内町のほとんどは程なく農村化していったと考えられる。

戦国時代の府内については、近世以降に作成された絵図により、その全貌を窺うことができる。これらは、大別して3種類、計12点知られるが、1つの原図から写された同一系統のものと推定されている。それによれば「府内」は大友氏館を中心として南北3本、東西4本の道路によって区画されていることが看取される。さらに道路に沿って44もの町名が記入されており、木戸を有する両側町あるいは片側町が形成されていたことが表現されている。

この絵図の現地比定作業が1987年の大分市史編纂時に行われ、それにより、「戦国時代の府内復原想定図」が作成された。この範囲が現在、「中世大友城下町跡」として周知される範囲であり、南北2.2km、東西0.7kmに及んでいる。





第3図 中世大友府内町第1次・第2次調査区位置図 (1/1000)

本報告書において報告する、中世大友府内町跡第1次調査は、1996年に実施され、中世府内町解明の端緒となる初めての本格的な発掘調査であった。この調査の結果、「戦国時代の府内復原想定図」とほぼ一致する位置で戦国時代の道路状遺構が検出され、「復元想定図」の正確さ、ひいては「府内古図」の信憑性を示す結果となつた。また、1998年には「復元想定図」による大友氏館推定地南東部における発掘調査で庭園状の遺構が検出され、大友館についてもその存在が確認された。

その後、現在に至るまで府内町跡33次、大友氏館跡12次（2003年10月現在）と調査が重ねられてきており、大友氏館を含む中世府内町の全貌が次第に明らかになってきている。

調査地点横小路町

「戦国時代の府内復原想定図」によれば、今回の調査地点横小路町は大友氏館が所在する「府内」中心部からやや北寄りに位置し、W-19°-Nに斜行する東西方向の道路に面している。「府内古図」によれば道路を挟んで南北に町屋が存在したことが表現されており、明治時代の地籍図でも道路を挟む形で短冊形の地割が展開していることが窺われるため、両側町であったことが予想される。

【参考文献】

大分市史編纂委員会 1987『大分市史』上巻、中巻

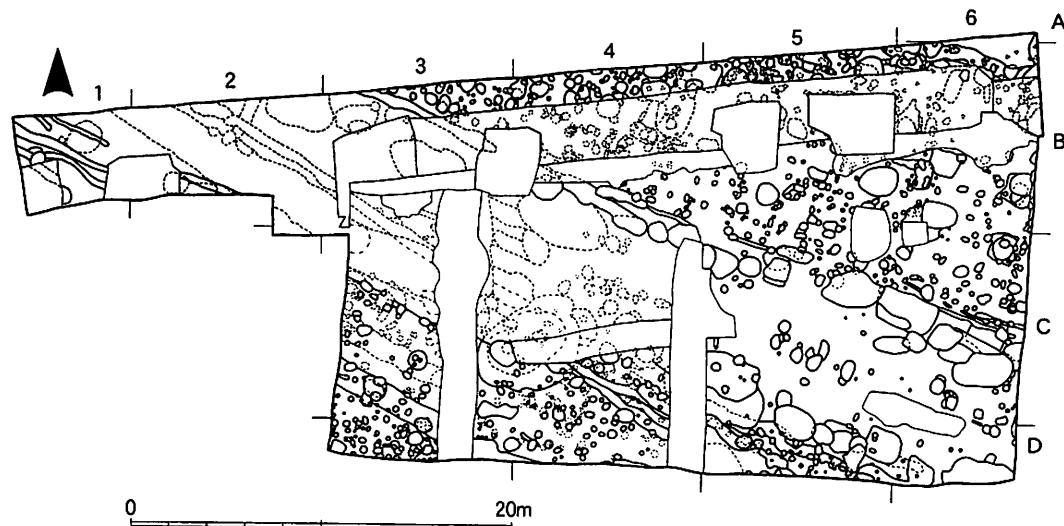
大分市教育委員会・中世都市研究会 2001『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』

第2章 調査の成果

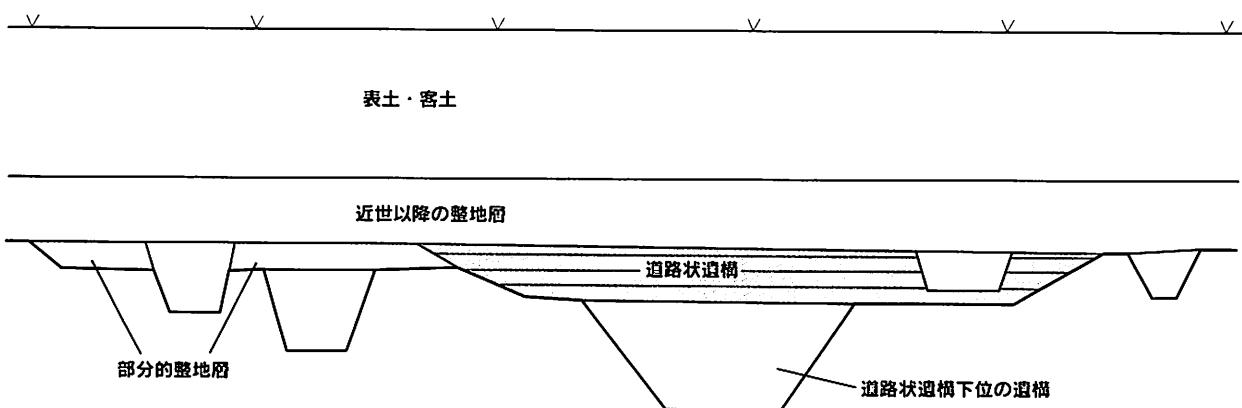
1 発掘調査の概要

第1次、第2次調査の調査地点は横小路町に比定される地点にあたり、道路を挟む両側町が形成されていることが推定されていた。今回報告する2次にわたる発掘調査により、推定されていた位置とほぼ合致する形で戦国時代の道路状遺構が検出された。

これらの遺構が掘り込まれている遺構面については、大別して2面に分けられる。すなわち、第1面は道路状遺構の整地層上面及びこれに対応する道路両側における整地層上面であり、道路状遺構整地層直下の面が第2面である。道路状遺構両側においては、整地層より下で検出された遺構、すなわち道路状遺構構築以前に遡る可能性がある遺構も存在していたと考えられるが、整地層が薄くかつ判別が困難であったため、発掘調査においてその上下の遺構面を区別することはできなかった。加えて、第1次調査の表土剥ぎ時には、道路状遺構の路面よりもかなり下の土層にまで重機により掘り下げてしまっていた。部分的には道路状遺構の整地層をほぼ除去してしまい、道路状遺構最下部の砂礫層にまで掘り下げた所さえある。これに伴って、道路両側の整地層をもかなり掘り下げてしまった。このような状況により、道路状遺構の整地が及ぶ部分以外においては、第1面と第2面の区分はほとんど不可能となった。よって、道路状遺構直下で検出された遺構以外については第2面の遺構として層位的な認識に基づいて確実に報告できるものがほとんど無い。このほか、部分的な整地層も認められる



第4図 検出遺構略図 (1/400)



第5図 基本土層模式図

が、遺構面として明確に区分することはできなかった。以上のようなことから、本報告においては、道路状遺構の整地層よりも下位で層位的に検出された遺構と、道路状遺構分布範囲で検出された遺構のうち埋土の状況により道路状遺構よりも下位の遺構と推定されたもののみを第2面の遺構として報告する。

遺構図の提示にあたっては上記のような調査の状況をふまえ、調査の過程において作成された2枚の遺構全体図をそのまま提示することとする。これらは、遺構の検出、掘り下げの進行に伴って作成されたものであり、第1図より第2図がより下位で検出された遺構を図示してはいるものの、遺構面の別を必ずしも反映したものではない。

なお、第1次調査の調査面積は620m²、第2次調査は200m²である。遺構番号のうち、400番台までが第1次調査での検出遺構で、500番台～900番台が第2次調査での検出遺構である。1、2次調査で同一の遺構と考えられるものに別の遺構番号がつけられている例（例えばSD140とSD970）もいくつかみられるが、この場合は第2次調査の遺構番号をもって代表させている。同一であるか否か疑問がある場合は、別々に説明している。

2 第1面の遺構と遺物

道路状遺構 SF001 及び関連遺構（第6図、土層：第8図）

調査区中央を北西から南東に斜行している整地遺構として確認されたものである。先述したように、第1次調査においては、表土剥ぎの際に本遺構の整地層の下部まで重機により掘り下げてしまったため、路面の確認は壁面の土層により行ったのみである。しかし、第2次調査においては、遺構上面の硬化面（路面）を広範囲に確認することができた。道路状遺構の整地層は、粘質土・砂・小礫を交互に突き固めて積み上げた版築の手法により構築されている。（第8図）遺構北端における整地層下面と遺構中央における整地層下面とでは前者のレベルが約25cm高いことが観察される。同様に、遺構南端における整地層下面と中央とでは南端のほうが約40cmレベルが高い。同様な状況は調査区東側及び西側の土層断面においても観察される（第7図）。よって、この道路状遺構の整地層は一種の掘り込み地業により築造されているものと判断される。こうした版築状の整地層は、調査区北西部で約10.0m、南東部分で約9.5mを測る。

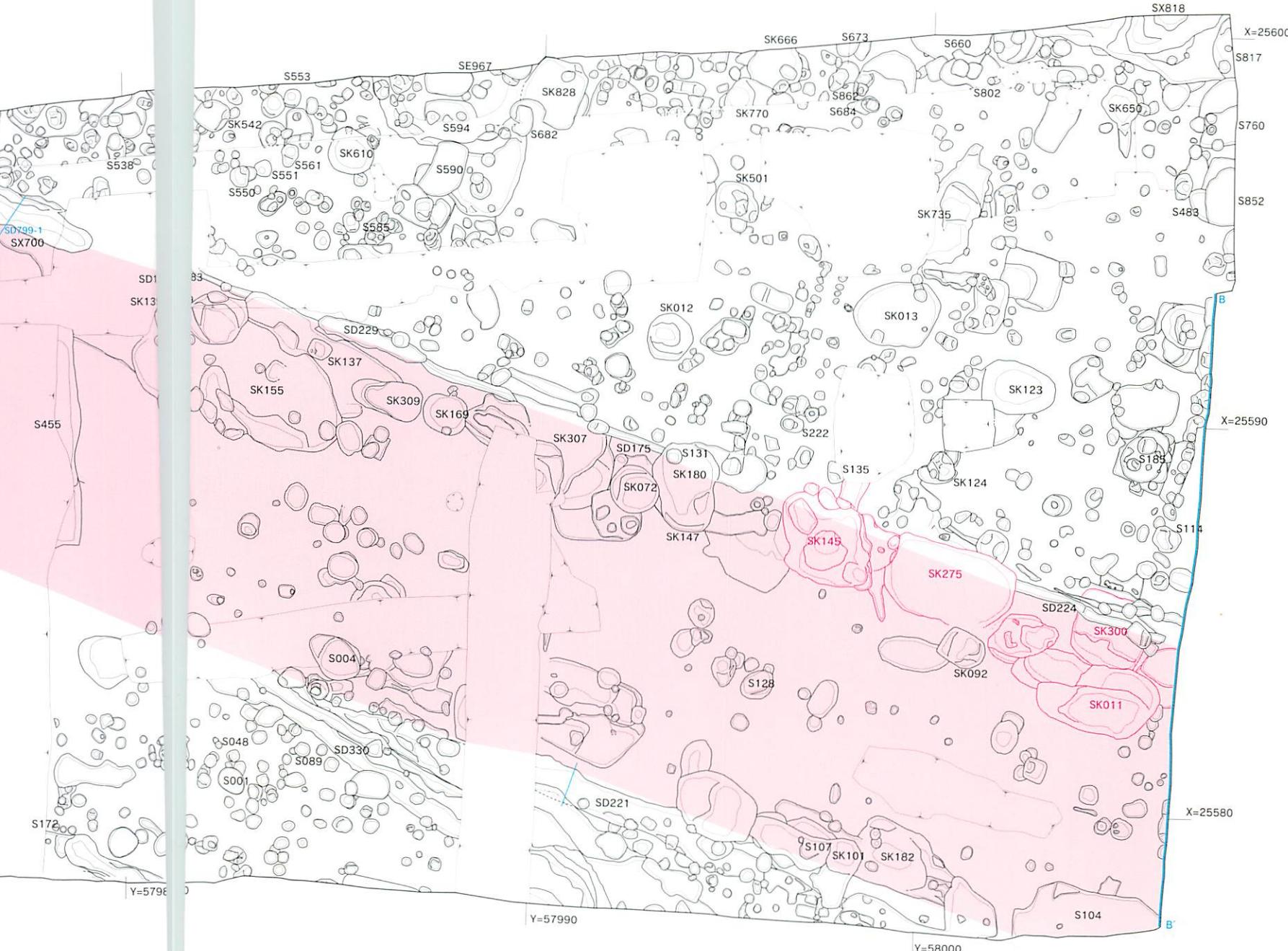
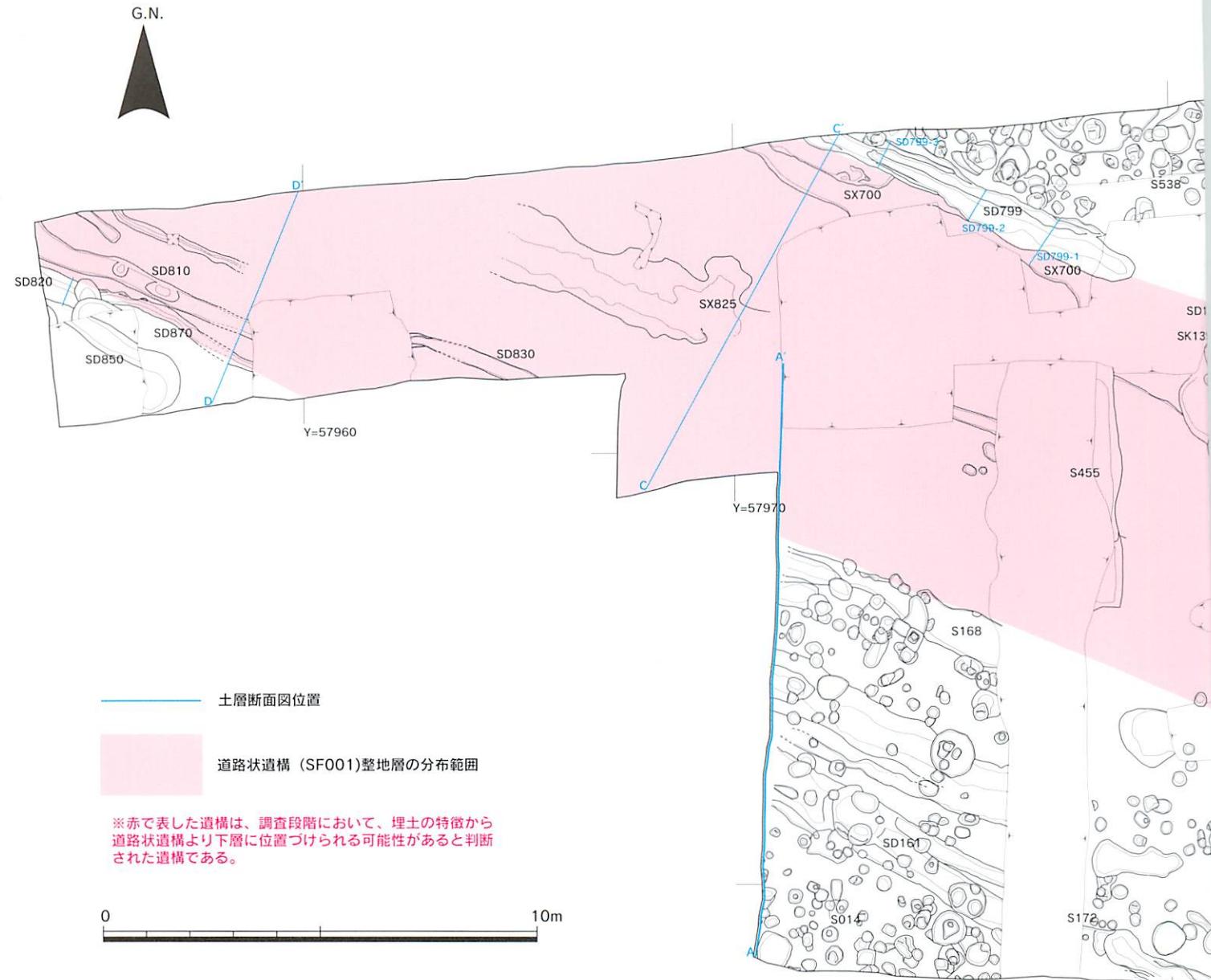
第2次調査で検出された遺構表面の硬化面は、その中央に幅1.1～1.7m、深さ10cm程度の溝状の浅い窪みがあり（SX825）、これらは焼土を多量に含む土で埋積していた（第6図）。

道路状遺構整地層の北端及び南端には整地層分布範囲に平行して溝状遺構がいくつか掘り込まれており、側溝と推定される。しかし、連続して延びる溝は検出されず、多くは断続的に収束する溝状遺構であった。このうち北側側溝と考えられるSD799については道路状遺構との層位的な関係を判断できる断面観察が可能であったが、明確な切り合い関係は観察できなかった。このほか、側溝の可能性がある溝状遺構にはSD175、SD183、SD221、SD224、SD229、SD330、SD810、SD820、SD830がある。

道路状遺構の整地層中からは、概ね16世紀中葉から後半を下限とする遺物が出土している。道路状遺構直下にあるSE400・460及び、SD970の埋土上部からは比較的古相の京都系土師器が出土していることから、道路状遺構の築造は16世紀中葉頃に行われたものと推定される。

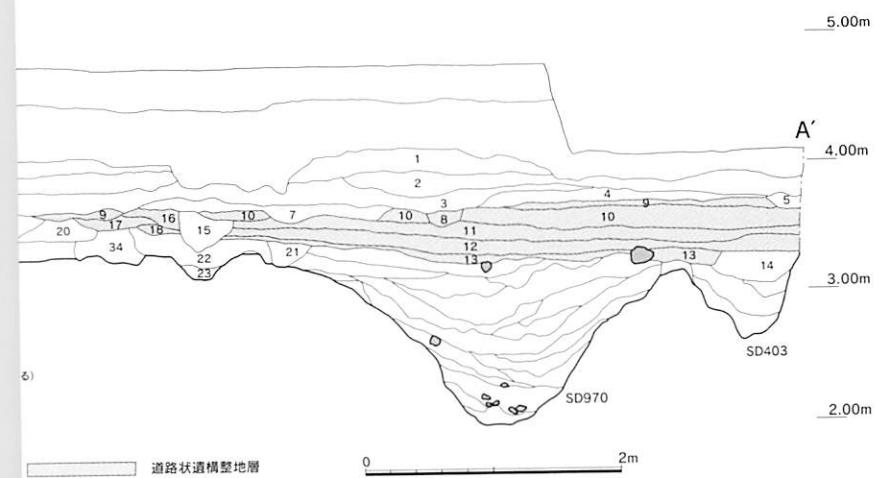
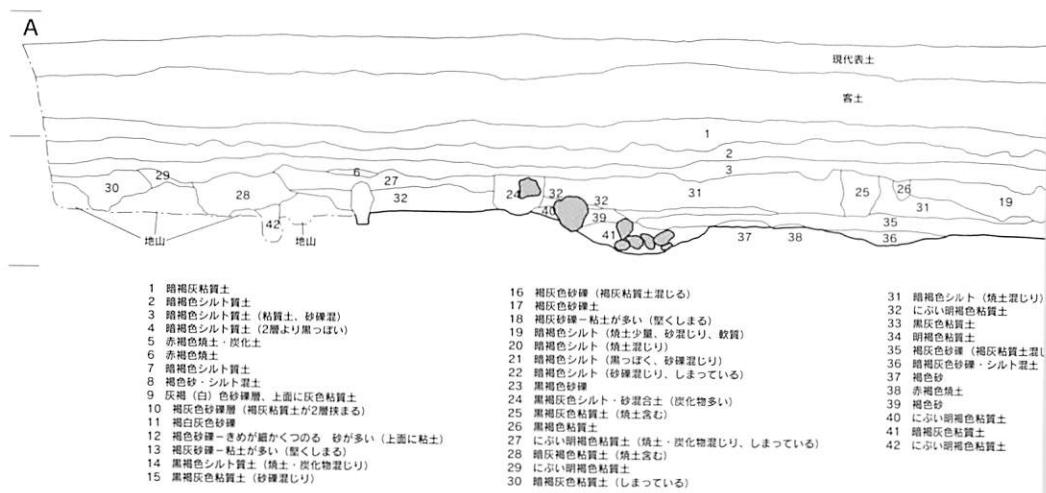
道路状遺構整地層出土遺物（第10図）

1は白磁皿、2は外面に沈線のみ施文する青磁碗である。3は青花碗E群の底部である。道路状遺構整地層から出土した遺物中最も新しく位置づけられるものであるが、これが整地層のどのあたりから出土したものかは残念ながら明確でない。4は9～10世紀に比定される越州窯系青磁碗である。5は口縁部が玉縁状となる焼締陶器鉢で、中国産と推定されるものである。6も中国産と推定される焼締陶器鉢の底部であろう。7は工具により内面に段が形成される土師器坏である。

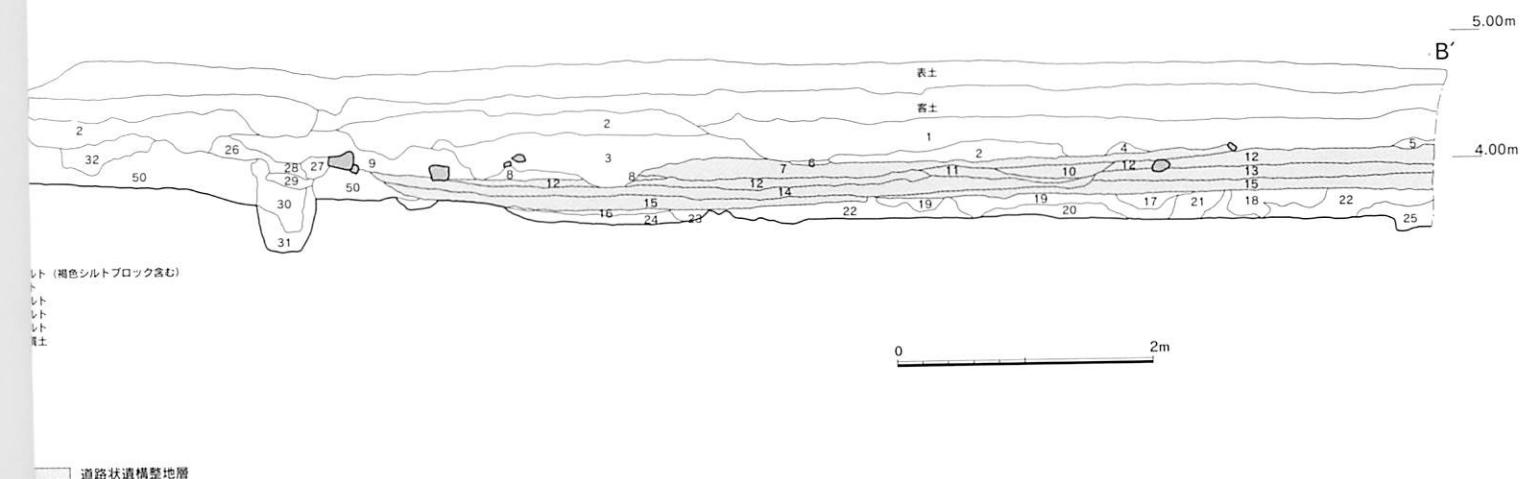
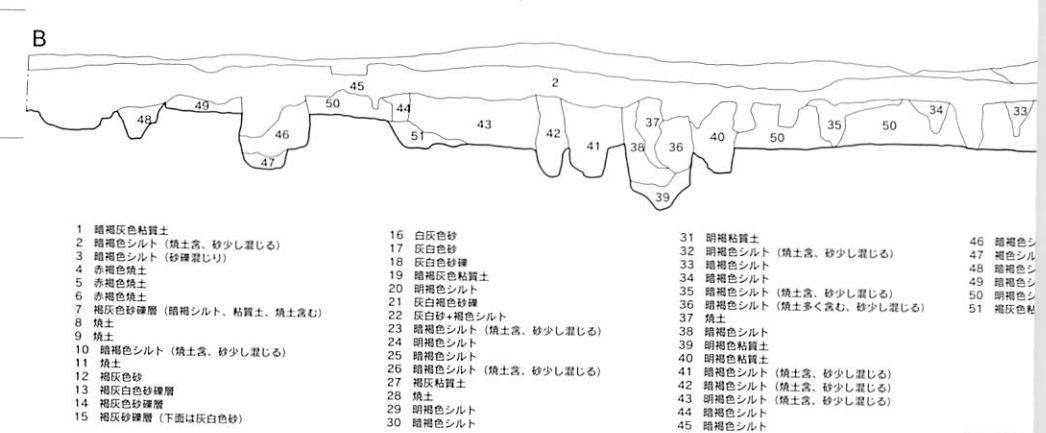


第6図 遺構配置図(道路状遺構よりも上層の遺構、1/120)

西側土層

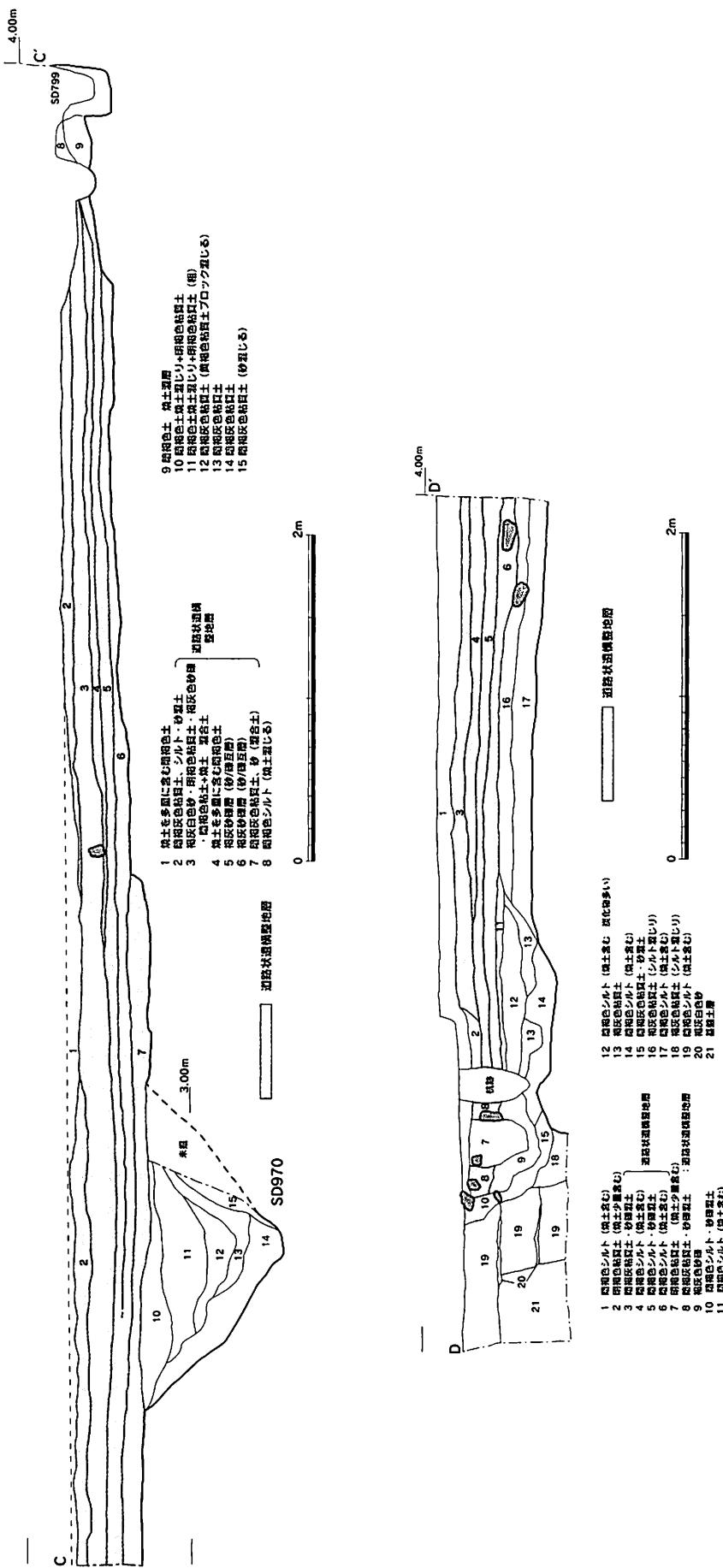


東側土層

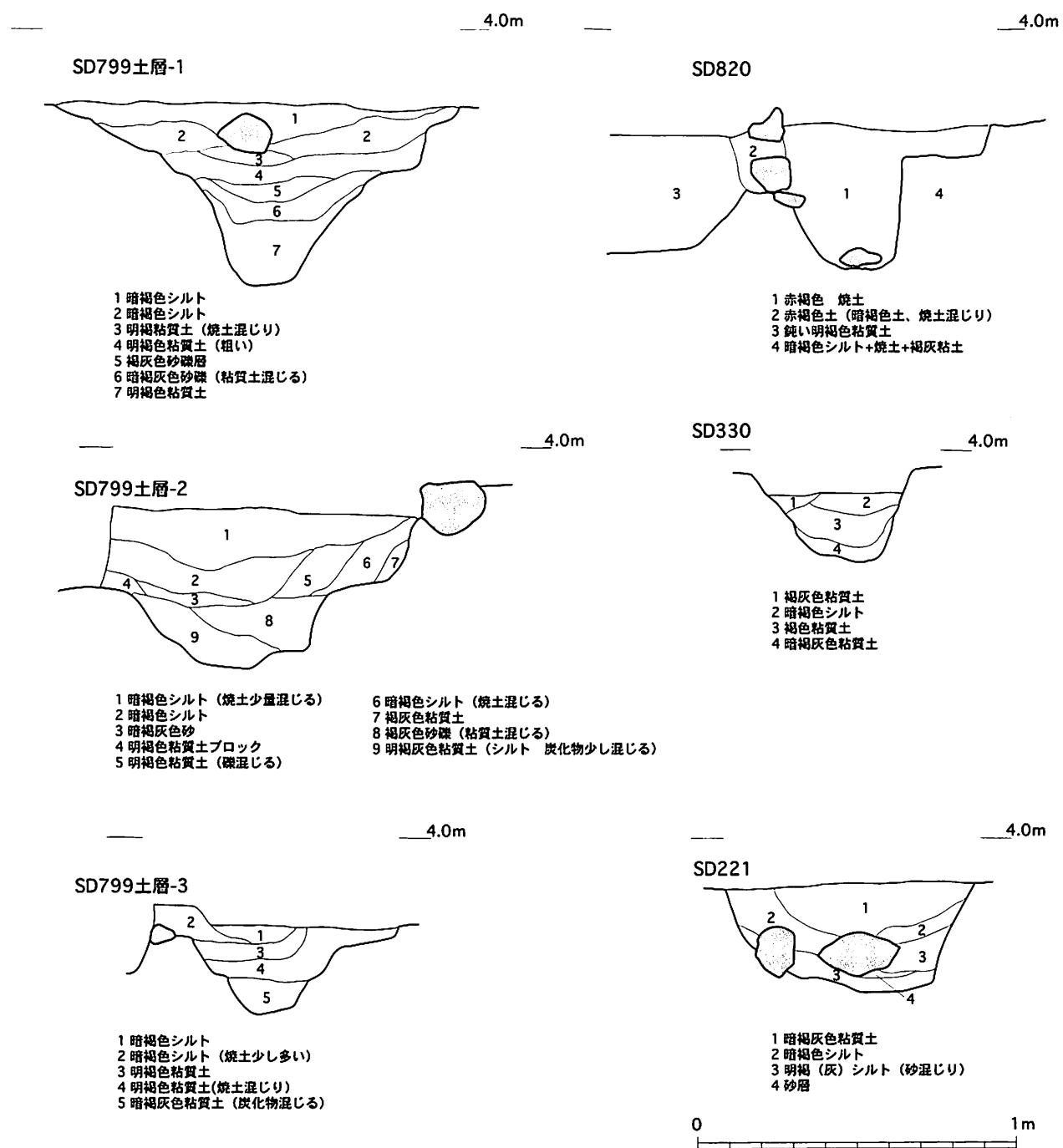


第7図 第1次調査区西壁・東

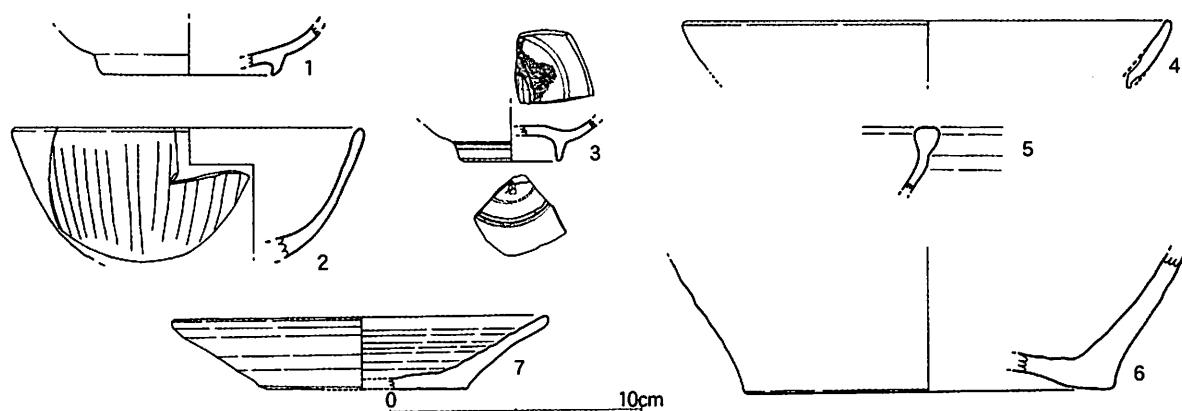
壁土層断面図 (1/60)



第8図 道路状遺構土層断面図(1/40)



第9図 溝状遺構（道路状遺構側溝）土層断面図(1/20)



第10図 道路状遺構 SF001 整地層出土遺物 (1/3)

SD175 (第6図)

B-4区からC-5区にかけて検出された溝状遺構で、主軸方向はN-73°-Wである。最大幅0.3m、最大深15cm程度である。道路状遺構北側側溝の一部であることが考えられる。

SD183 (第6図)

B-4区で検出された溝状遺構で、攪乱により削平されていたため、幅20cm、深さ10cm程度しか残存していない。主軸方向はN-60°-Wであり、道路状遺構北側側溝である可能性が考えられる。

SD221 (第6図・土層:第9図)

C-5区からD-5区にかけて検出された溝状遺構である。最大幅1.1m、最大深0.4mを測る。東に行くほど浅く、また、底面の標高も高くなり、収束している。主軸方向は、N-67°-Wである。

出土遺物 (第11図5)

中国産と推定される焼締陶器鉢で、口縁部が鍔状になるものである。

SD224 (第6図)

C-6区で検出された溝状遺構で、主軸方向はN-70°-Wである。道路状遺構の北側側溝の一部の可能性がある。

出土遺物 (第11図6)

6は、京都系土師器皿である。

SD229 (第6図)

B-4区で検出された溝状の土坑であり、主軸方向はN-71°-Wである。道路状遺構の北側側溝の一部である可能性がある。

出土遺物 (第11図7・8)

7はロクロ成形の土師器坏で、内面の段は不明瞭である。8は備前焼擂鉢で、16世紀後半～末に位置づけられるものであろう。

SD330 (第6図・土層:第9図)

C-4区からD-4区にかけて検出された溝状遺構で、北西側のC-3区及び南東側のD-5区では検出されていない。最大幅0.8m、最大深約0.3mで埋土中には多数の礫を含む。道路状遺構SF001の南側側溝の可能性もあるが、主軸方向はN-56°-Wとやや北に振っている。出土遺物に古相の京都系土師器があることから、埋積時期の下限は16世紀中葉以降と考えられる。

出土遺物 (第12図)

1・2は青磁皿で、稜花皿の可能性があるもの。3は外面に蓮弁を描く青磁碗、4は口縁部外面に雷文帯を有する青磁碗である。5は青花皿B1群で、内面に十字文が描かれるものである。6は白磁皿。7～9はロクロ成形の土師器坏である。10・11は京都系土師器皿で、塩地編年1期に位置づけられる。12は瓦質土器擂鉢である。13は備前焼甕の底部であろう。14は常滑焼甕で、口縁部の形態により13世紀後半～14世紀前半に位置づけられるものである。

SD799 (第6図・土層:第9図)

B-3区で検出された溝状遺構で、最大幅1.1m、最大深0.7mを測る。土層断面の観察により、3回以上の掘り返しが行われたものと推定される。遺構の主軸方向はN-64°-Wである。道路状遺構の北側側溝の一部である可能性も考えられる。また、南東側の延長線上にはSK137が存在し、同一の遺構である可能性もある。遺構から確実に出土したもので判断すると、溝は16世紀中葉～後半に廃絶した可能性がある。

出土遺物 (第12図)

1は青花碗C群である。2は、白磁小壺である。3は白磁碗である。4は無文の青磁碗。5～8はロクロ成形の土師器小皿である。9～12はロクロ成形の土師器壺である。これらのうち、6・7・10は京都系土師器と類似した白色系の胎土である。13～24は京都系土師器皿で、概ね塩地編年1期に比定されるものである。25は備前焼擂鉢口縁部である。

SD810 (第6図)

B-1区で検出された溝状遺構であり、主軸方向はN-65°-Wである。最大幅は0.6mであるが、深さは10cm程度と非常に浅いものである。焼土を含む暗褐色土で埋積している。道路状遺構の南側側溝の可能性が考えられる。

出土遺物より、16世紀末に下る可能性がある。

出土遺物 (第13図)

5は青花碗C群、6は白磁皿である。7・8は備前焼で、8は乘岡編年近世1期bに比定される擂鉢である。

SD820 (第6図)

B-1区で検出された溝状遺構で、道路状遺構の南側側溝の一部である可能性が考えられるものである。幅0.6m、深さ0.4mで、一部に石組みが見られる。溝の最上部は焼土を多量に含む土で埋まっている。

SD830 (第6図)

B-2区で検出された溝状遺構で、主軸方向はN-70°-Wである。最大幅0.4m、最大深10cm程度の浅い溝で、道路状遺構南側側溝の一部である可能性が考えられる。

溝状遺構 (SD)

SD161 (第6図)

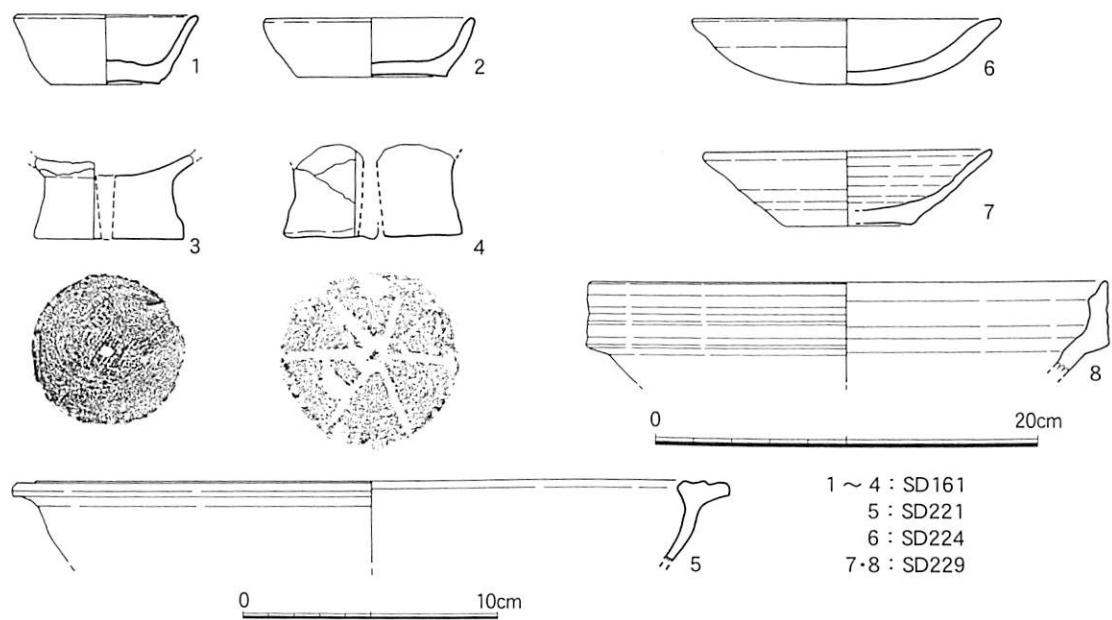
調査区南西部で検出された。最大幅約1.2m、最大深0.4mの溝で、主軸方向はN-66°-Wを指向し、道路状遺構にほぼ並行する。SX235もこの溝と同一の遺構である可能性が高い。何らかの区画溝と推定されるが、道路状遺構SF001と時期を異にする道路側溝の可能性も考えられる。

出土遺物 (第11図1～4)

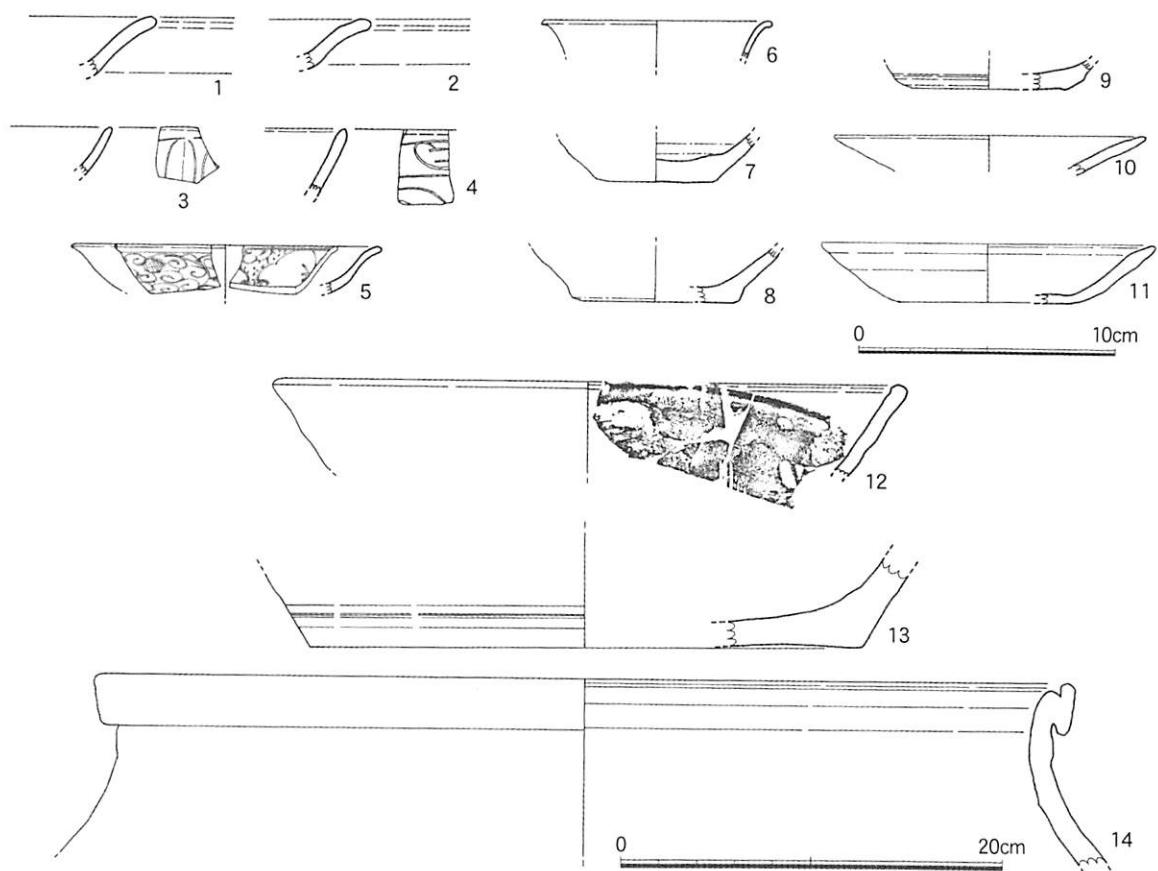
1・2はロクロ成形の土師器小皿である。3は土製灯火具で、壺部の張り出しが明瞭なものであるが、端部は欠失している。底部には糸切り痕が明瞭に残る。4も土製灯火具であるが壺部は欠失しており、形態は不明である。底部は6本の太い沈線と2本の細い沈線が放射状に描かれている。

SK870 (第6図)

B-1区で検出された溝で、最大深15cmである。SD820の続きとも考えられるが、蛇行しているため別遺構と



第11図 SD161・SD221・SD224・SD229出土遺物 (1~7:1/3, 8:1/4)

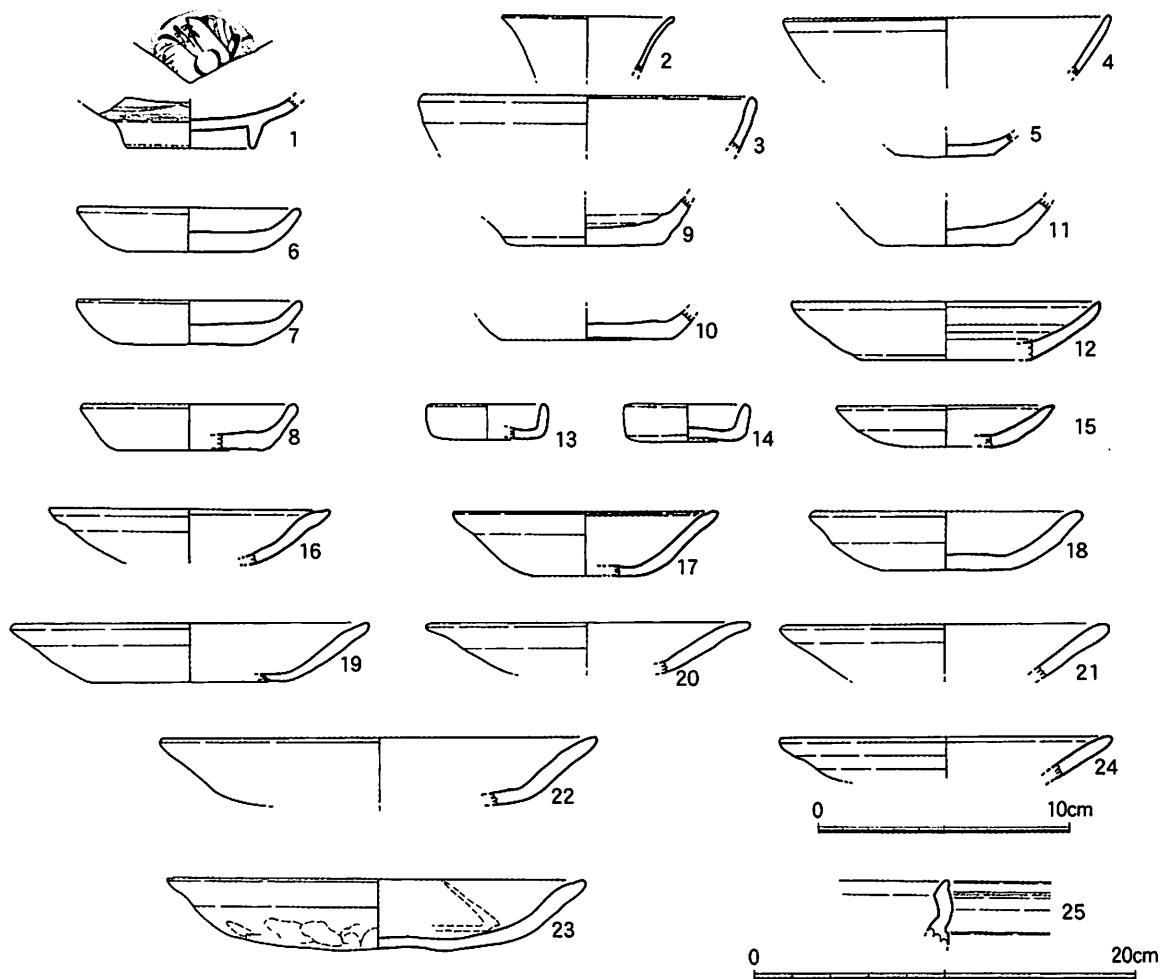


第12図 SD330出土遺物 (1~11:1/3, 12~14:1/4)

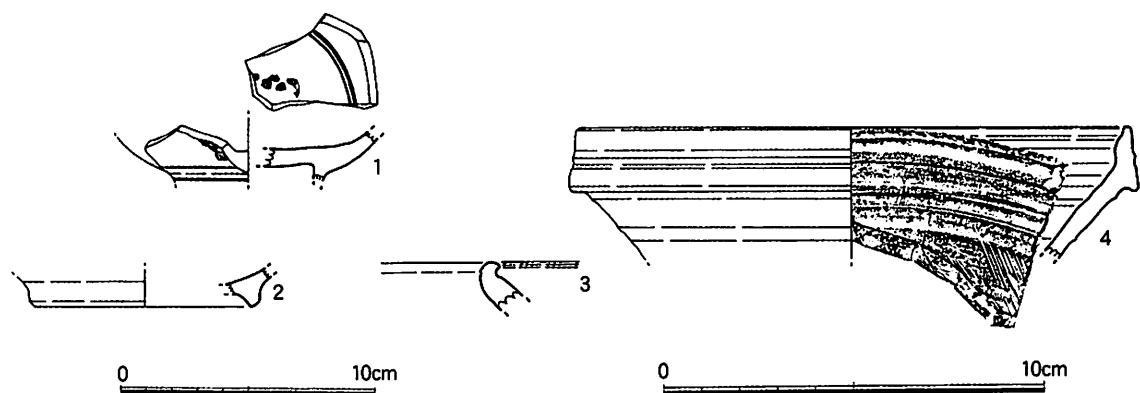
した。

出土遺物 (第15図)

1は青花碗Cである。2は青磁碗。3・4は口クロ成形の土師器である。5は備前焼と推定される小型の擂鉢で、内面には交差する摺目が施されている。6は焼締陶器小壺で、底部には糸切り痕を残す。胎土は灰色に発色して

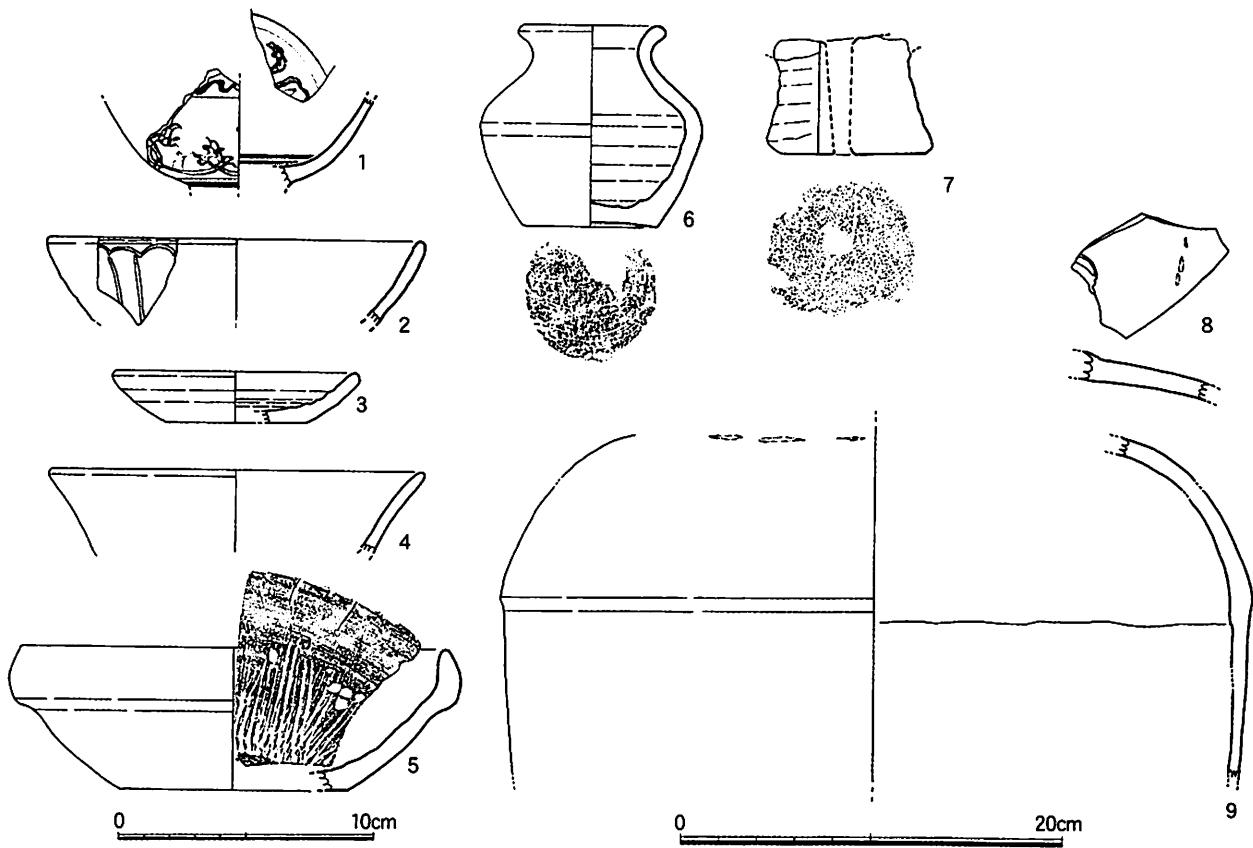


第13図 SD799出土遺物 (1~24:1/3, 25:1/4)



第14図 SD810出土遺物 (1~3:1/3, 4:1/4)

いるが、備前焼ではないかと考えられる。7は土製灯火具で、貫通する穴があけられている。胎土は口クロ成形土師器と共に通する。8・9は中国産の褐釉陶器四耳壺である。8は口縁部に近い肩部の破片で耳の一部が残存している。胴部と肩部の境界には稜線が形成されている。表面には茶褐色の釉が掛けられている。肩部には白色の砂状物質が付着しており、頸部の周りを輪状に廻っているものと思われる。これは焼成の際に付いたものと思われ、中世大友府内町跡第3次調査出土品にも見られるものである。



第15図 SD870出土遺物 (1~7:1/3, 8·9:1/4)

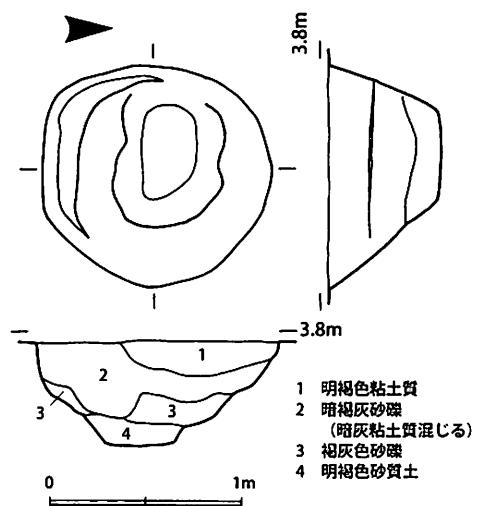
土坑 (SK)

SK012 (第16図)

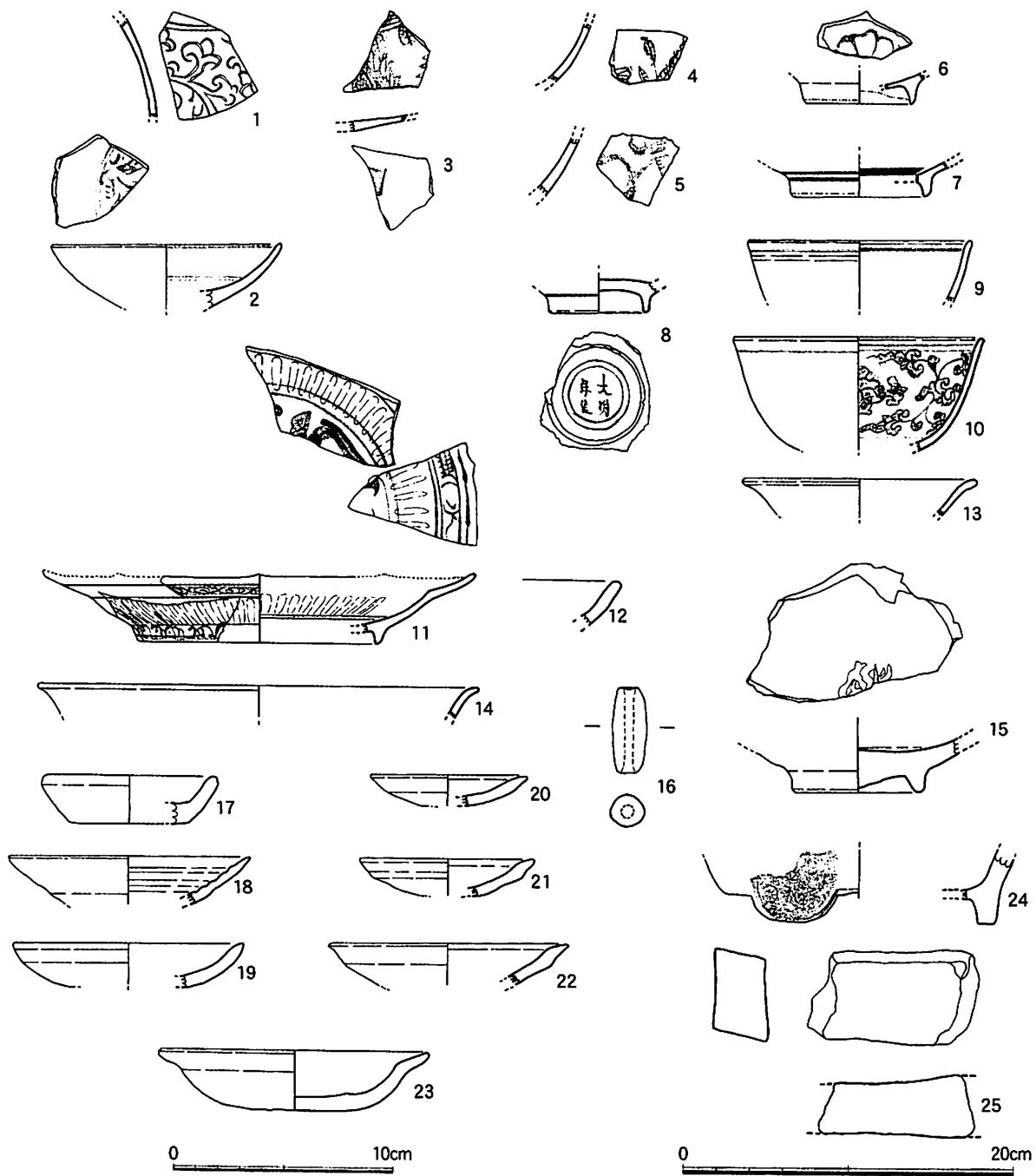
B-5区で検出された廃棄土坑であり、直径1.2mの円形状を呈し、検出面からの最大深は0.6mを測る。道路状遺構との切り合い関係がない位置にあるため、同遺構との時間的な関係は不明であるが、比較的古相の京都系土師器を含むことから、道路状遺構築造と前後する時期の所産と推定しておきたい。

出土遺物 (第17図)

1は青花の瓶と考えられるものの胴部破片であり。呉須により描かれた二本の圈線が確認される。唐草状の文様は陰刻されたものである。2は青花皿C群と考えられる。3は青花皿E群の底部ではないかと思われ、裏面には落款状の刻印が呉須で描かれる。4は青花碗E群か。6·7は青花碗C群であろう。5は?州窯系の青花碗である。8~10は青花碗E群で、10は内面に花唐草文が描かれる。11は口縁部が輪花となる青花皿F群で、体部の内外面に鎧状のヘラ彫りが施文される。12は青磁皿、13は白磁皿である。15は青磁碗で、見込みには不明な文様が描かれる。14は越州窯系の青磁碗である。17·18はロクロ成形の土師器、19~23は京都系土師器で、塩地編年の1期から2期にかけてのものである。24は瓦質土器で、小型の火鉢もしくは香炉と思われる。脚部付近には菊花文がスタンプされる。25は砂岩製の砥石である。



第16図 SK012平面・断面・土層断面図 (1/40)



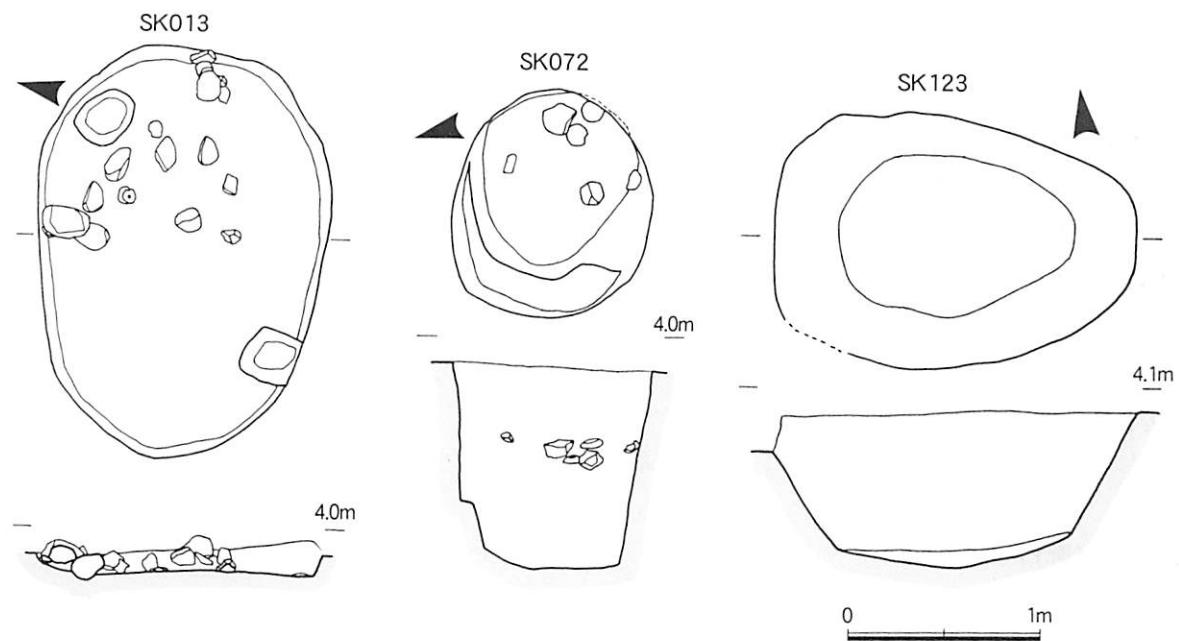
第17図 SK012出土遺物 (1~23:1/3, 24・25:1/4)

SK013 (第18図)

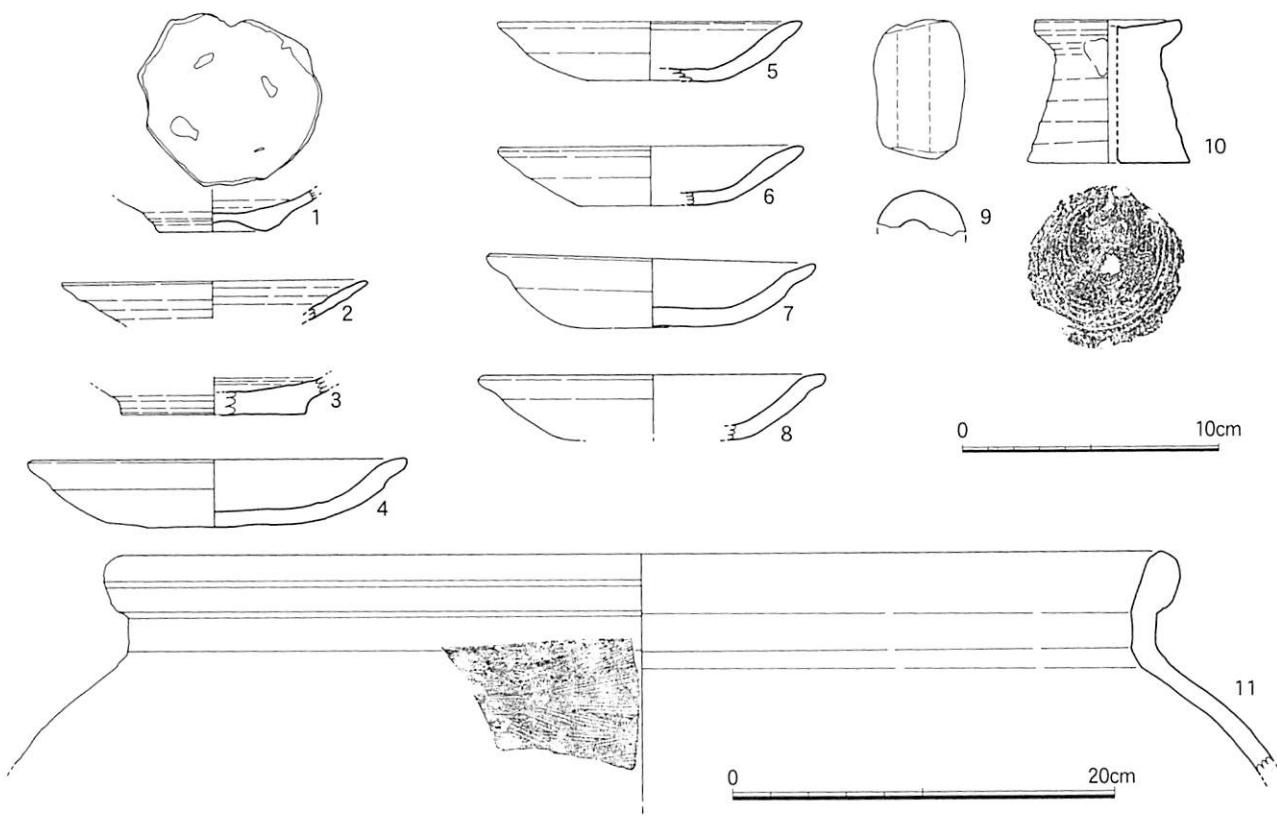
B-5区で検出された廃棄土坑で、長軸 2.1 m、短軸 1.5 m と大規模であるが、検出面からの最大深 0.2 m と浅い遺構である。出土遺物から 16世紀後半に廃絶したものと考えられる。

出土遺物 (第19図)

1は朝鮮王朝産陶器皿で、いわゆる雑釉陶器である。細かい白色粒子を含む暗灰色の胎土に、やや白濁した釉が掛かる。見込みには4箇所の目跡が認められ、胎土目積みで焼成されたと推定される。2・3はロクロ成形の土師器で、内面には工具による段が形成される。4~8は京都系土師器皿で、塩地編年の2期に位置づけられる。9は大型の土錘である。10は土製の灯火具で、底部には糸切り痕を残す。上端で直径 8 mm、下端で直径 5 mm をはかる穴が上下から開けられ、貫通している。胎土や色調は、ロクロ成形土師器と共に通する。11は備前焼の甕



第18図 SK013・SK072・SK123 平面・断面図 (1/40)



第19図 SK013 出土遺物 (1~10: 1/3, 11: 1/4)

である。

SK072 (第18図)

C-5区で検出された廃棄土坑である。長軸 1.2 m、短軸 1.05 mの円形に近い平面形を呈し、検出面からの深さは最大 1.05 mを測る。埋土の下部には明らかな不整合面が認められ、掘り返しが行われたものと考えられる。

出土遺物（第 20 図）

1 は白磁皿である。2～12 は京都系土師器で、概ね塙地編年 1 期から 2 期にかけてのものである。11 は内面に布目压痕が確認できる。13 は瓦質土器の擂鉢。14 は瓦質火鉢で、器壁から張り出す脚が付けられている。15 は瓦質土器の鍋である。外面下半分にはヘラ削りが著しい。

SK092（第 22 図）

C-6 区で検出された土坑で、長軸 1.3 m、短軸 1.2 m、最大深 0.75 m である。東側の壁面はオーバーハンプグし、袋状となる。下層には多数の石が廃棄されていた。

出土遺物（第 21 図 1～3）

1 は朝鮮王朝産陶器の舟徳利である。2 は京都系土師器、3 は口クロ成形土師器である。

SK101（第 22 図）

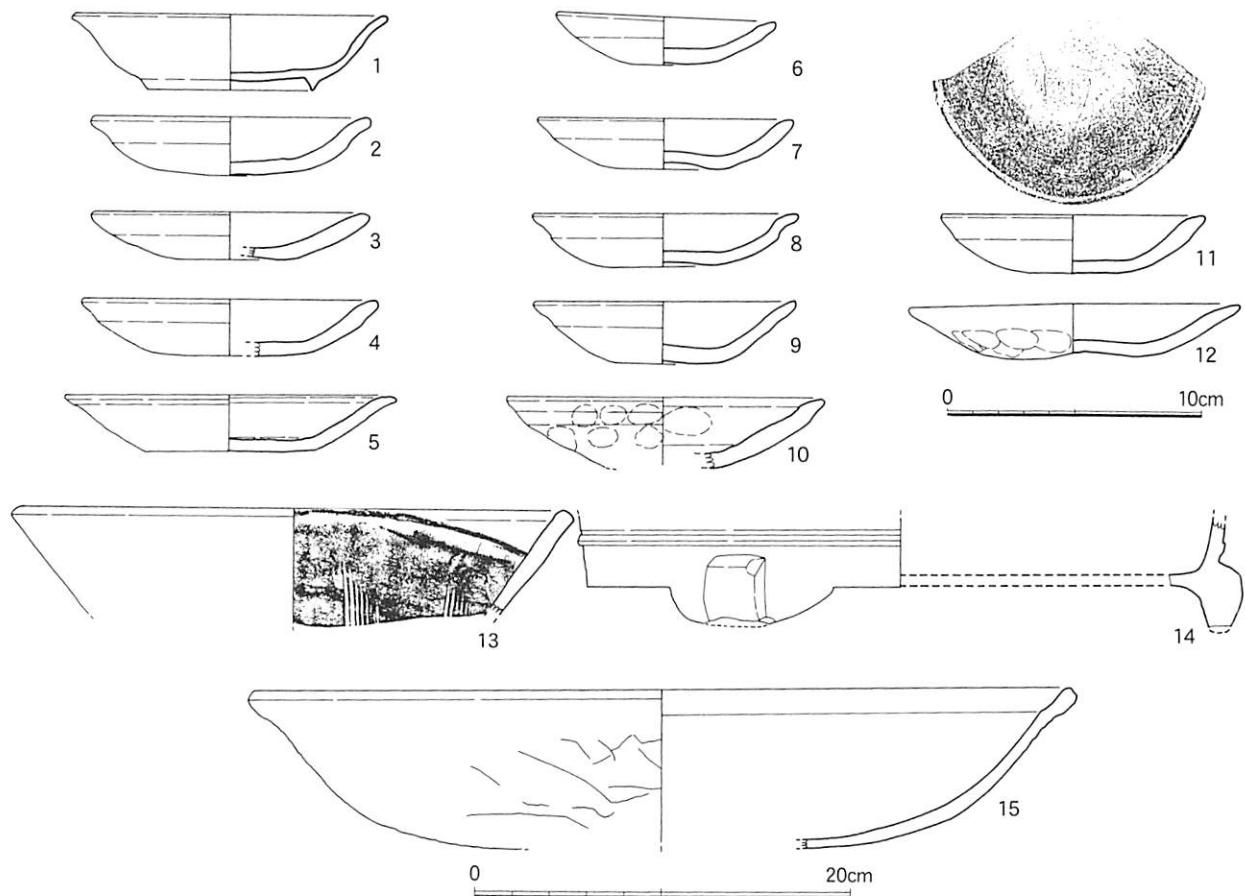
D-5 区で検出された土坑で、長軸 1.0 m、短軸 0.45 m、最大深 0.4 m である。

出土遺物（第 21 図 4～6）

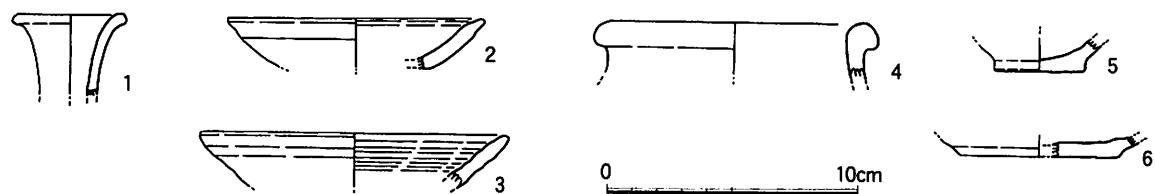
4 は中国産褐釉陶器の壺で、口縁部は玉縁状となる。外面に黒褐色の釉が掛かる。5・6 は口クロ成形土師器で、5 は小皿、6 は壺である。

SK123（第 18 図）

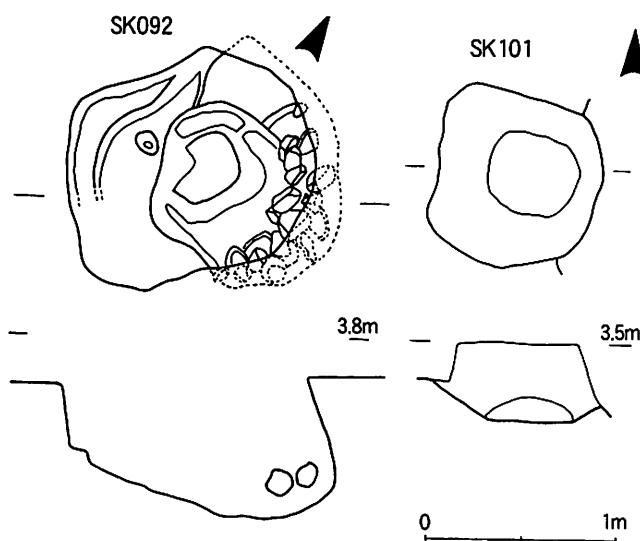
B-6 区で検出された廃棄土坑であり、長軸 1.9 m、短軸 1.4 m、最大深 0.85 m を測る。出土遺物より、16 世紀後半に位置づけられる。



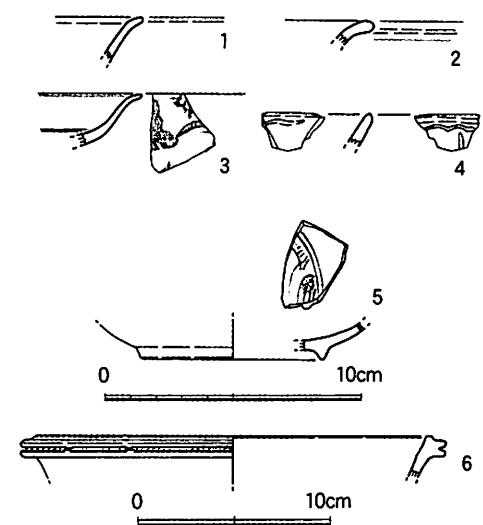
第 20 図 SK072 出土遺物 (1～12: 1/3, 13～15: 1/4)



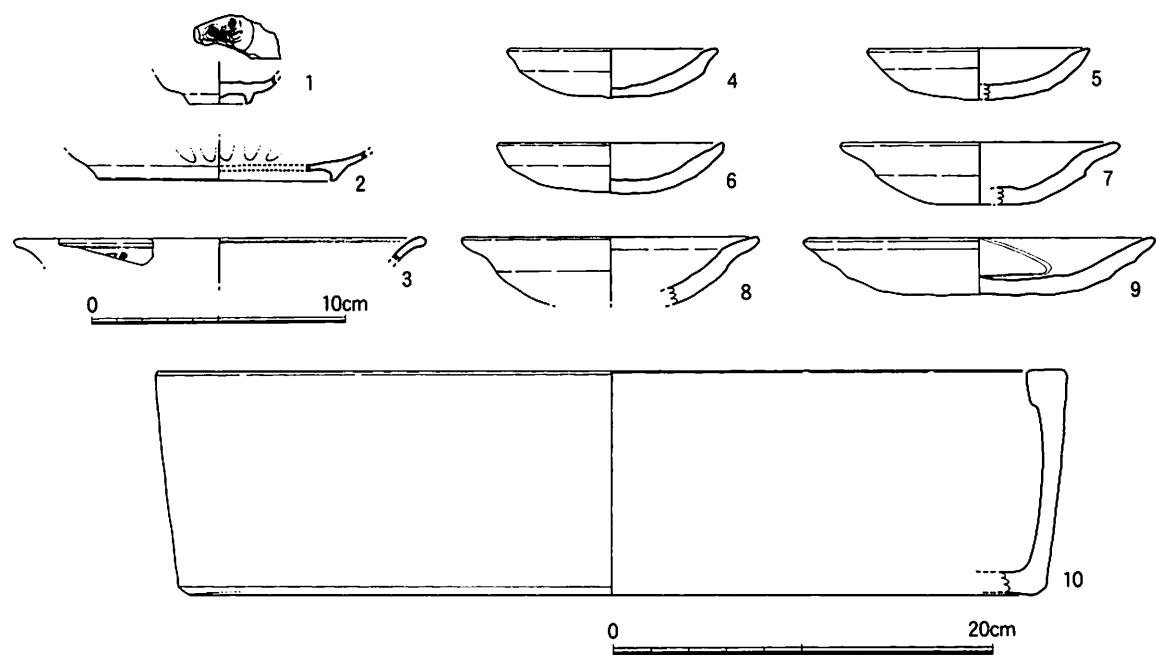
第21図 SK092・SK101出土遺物 (1/3)



第22図 SK092・SK101平面・断面図 (1/40)



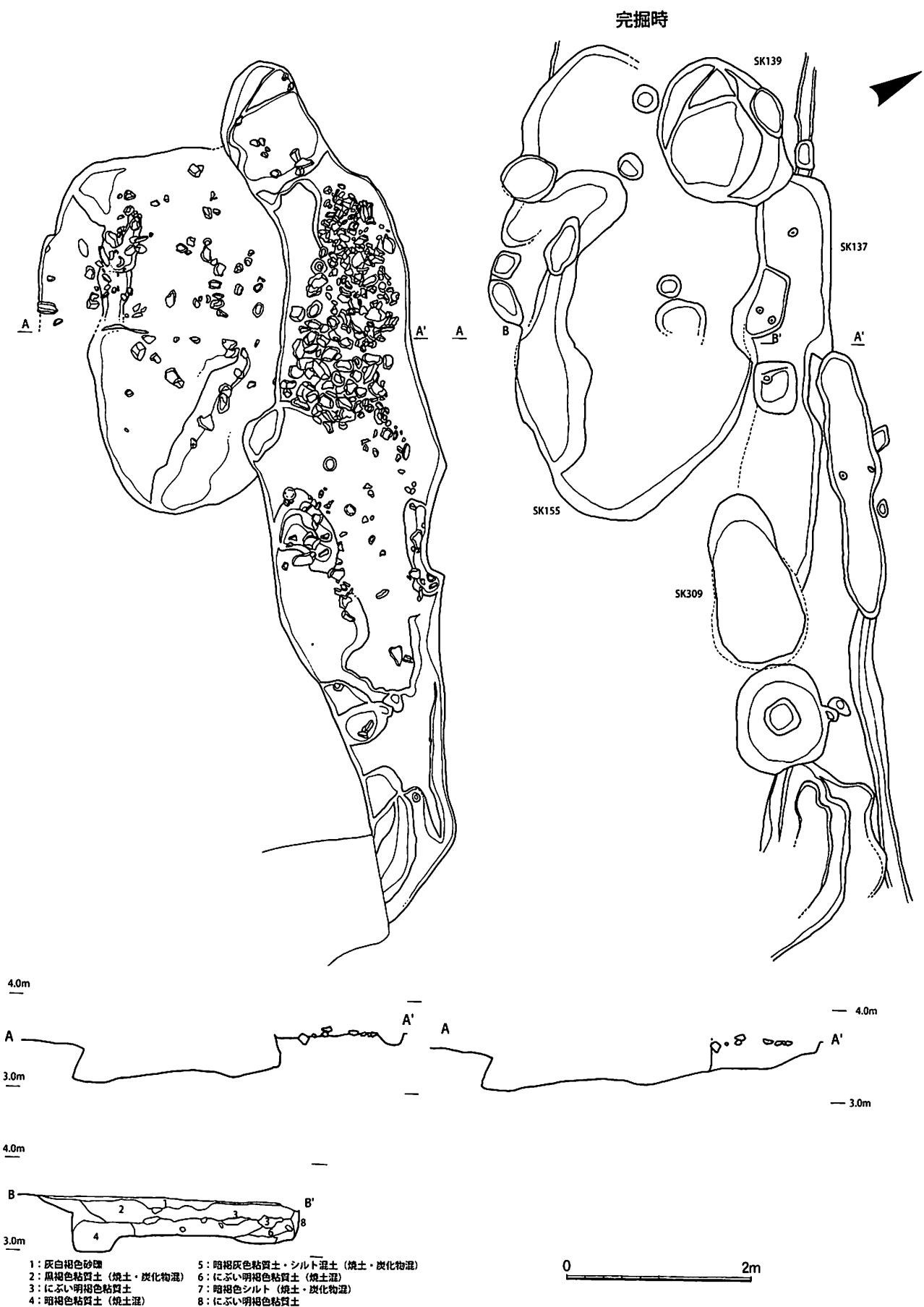
第23図 SK124出土遺物 (1~5:1/3, 6:1/4)



第24図 SK123出土遺物 (1~9:1/3, 10:1/4)

出土遺物 (第24図)

1は五彩の小杯で見込みは蛇の目釉剥ぎされ、中心に花卉文?が描かれている。2は青磁菊皿、3は青花皿B1群である。4~9は京都系土師器で概ね塩地編年2期に位置づけられるものである。10は瓦質土器の火鉢である。



第25図 SK137・SK139・SK155平面・断面・土層断面図 (1/60)

SK124(第6図)

C-6区で検出されたピット状の土坑で、長軸0.5m、短軸0.3m、最大深0.5mを測る。

出土遺物(第23図)

1は白磁皿、2は青磁皿、4は青磁碗である。3・5は青花皿B1群と推定される。6は鉢と推定されるもので、暗赤褐色に発色する堅緻な焼成で焼締陶器と考えられるが産地は不明である。口縁部には2条の凸帯が廻る特徴的な形態である。

SK137・SK139・SK155(第25図)

B-4区で検出された遺構群であり、道路状遺構SF001を切って掘り込まれている。これらの遺構の最上層は灰褐色砂礫土層で覆われ、検出面付近では多量の礫が出土したため各遺構の境界は不明で1つの遺構のように見えていたが、これを除去すると、遺構の切り合いが判明した。

SK137はSK155に切られている長軸4.2m、短軸0.4m、最大深0.2mの浅い溝状の土坑である。埋土上部からは多量の礫が出土した。

SK139はSK155とSK139を切っている土坑である。長軸1.5m、短軸1.3m、最大深0.4mを測る。出土遺物に新しい様相を有する京都系土師器が含まれていることから、廃絶時期は16世紀末～17世紀初頭に下る可能性がある。

SK155は長軸5.0m、短軸2.7m、最大深0.5mの楕円形の土坑である。焼土を多く含む土で埋積しているが、火災処理坑といえるほどではない。

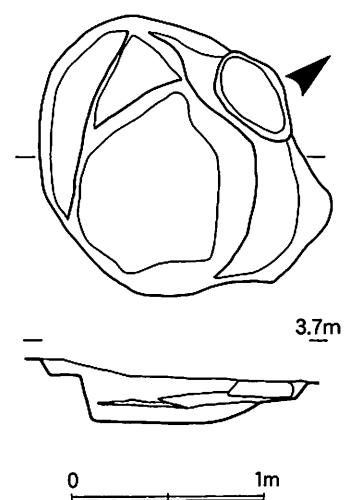
SK137出土遺物(第27図・第28図)

1は白磁小壺、3は白磁皿である。2は青磁鉢で、見込みには不明な文様がスタンプされる。4～9は青花皿B2群である。5～8は外面に花唐草文、口縁部内面に四方櫛を簡略にしたような斜線が施文されるもので、少なくとも4個体以上あるものと考えられる。13・16は青花碗C群。10・14は青花碗E群の可能性がある。11は漳州窯系の青花皿である。15は底部が碁笥底となる青花で、小壺と考えられる。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。12は漳州窯系の青花碗で、見込みは蛇の目釉剥ぎされる。17～19はロクロ成形の土師器である。20～30は京都系土師器で、塩地編年1期～2期に位置づけられる。

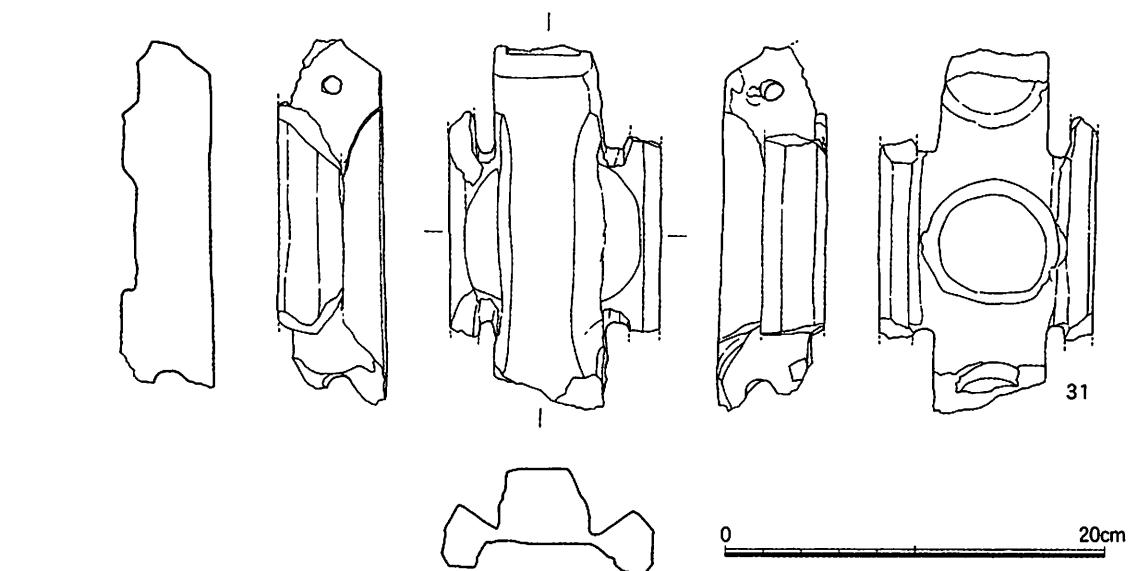
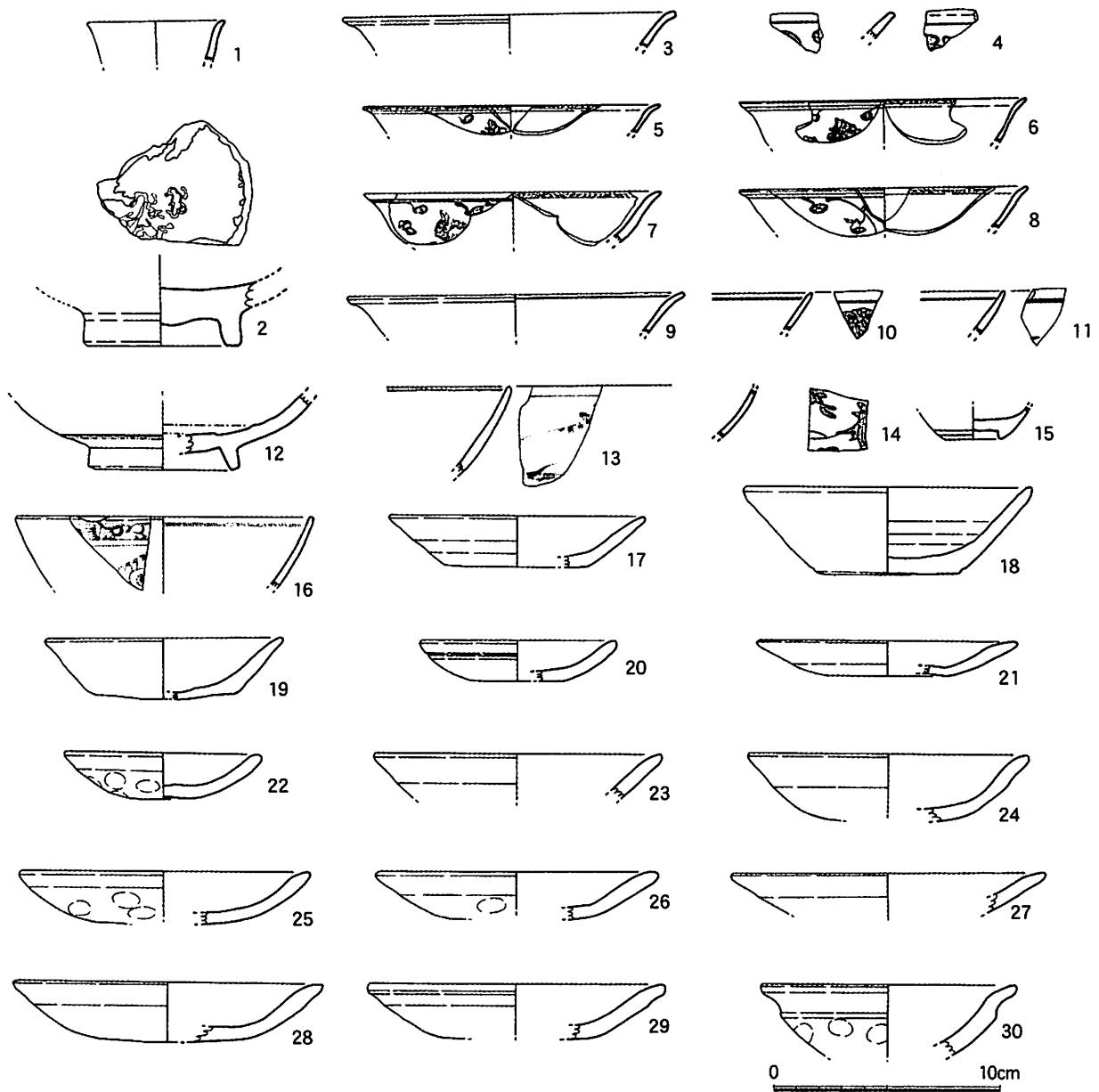
31は器種不明の焼締陶器製品である。裏面には直径5cmの円形の凹みが作られていたようで、横断面は凸形を呈する。両端に直径7～8mmの穴が開けられている。何らかの器具の部品であったことが考えられる。胎土は備前焼製等と同様のものである。32・33は備前焼擂鉢で、33には交差する擂り目が認められる。34は瓦質擂鉢である。36は凝灰岩製のふいご羽口。35・37は平瓦で、糸切り痕が明瞭に残る。38は砂岩製の茶臼である。39～41は砂岩製の砥石で、繰り返し使用された結果、全面に溝状の作業面が形成されている。針状の製品を研磨したものと考えられる。42は鬼瓦で、右側の眉から目にかけての部分と思われる。眉などを表現した墨が認められる。43・44は土製ふいご羽口である。

SK139出土遺物(第30図)

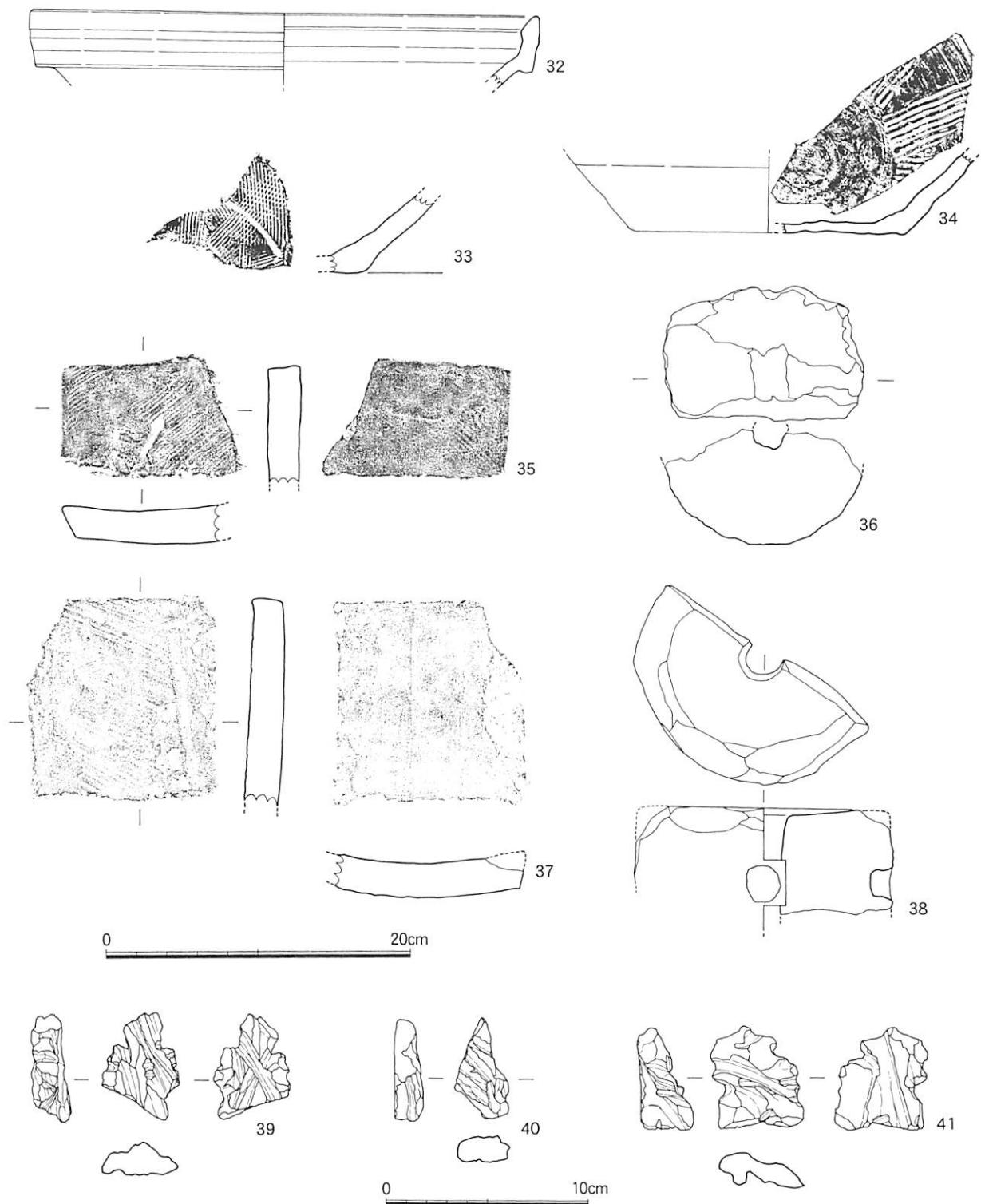
1は青花碗で、内面に四方櫛文、外面に花唐草文が描かれ、青花碗E群と類似する文様構成であるが、口縁部はやや外反する。2は青花皿E群である。3はロクロ成形土師器小皿。4～8は京都系土師器である。8は塩地編年3期もしくは4期としてもよいような器壁が非常に厚いものである。11は中国産と推定される焼締陶器鉢で、口縁部は断面台形状に肥厚する。内面には薄い褐釉が掛かっているようにも見受けられる。12は凝灰岩製のふいご羽



第26図 SK139平面・断面図(1/40)



第27図 SK137出土遺物実測図1 (1~30:1/3, 31:1/4)



第28図 SK137出土遺物実測図2 (32~38:1/4, 39~41:1/3)

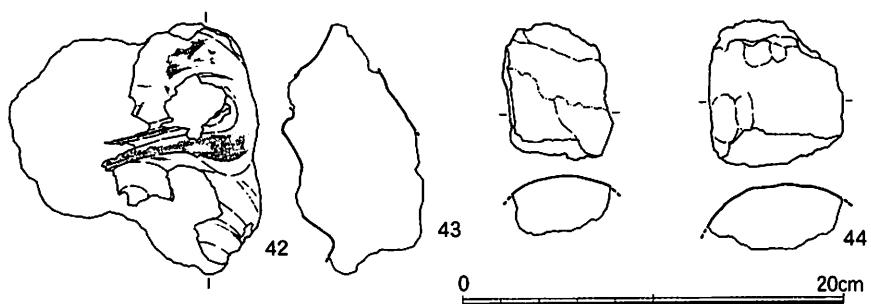
口で前面に鑿による調整痕が認められる。実測図左面は円形に窪められており、ここから外部に接続されるのであろう。13は備前焼擂鉢口縁部で、16世紀後半～末に比定されるものである。14は瓦質土器擂鉢である。

SK137・SK139検出時出土遺物（第32図）

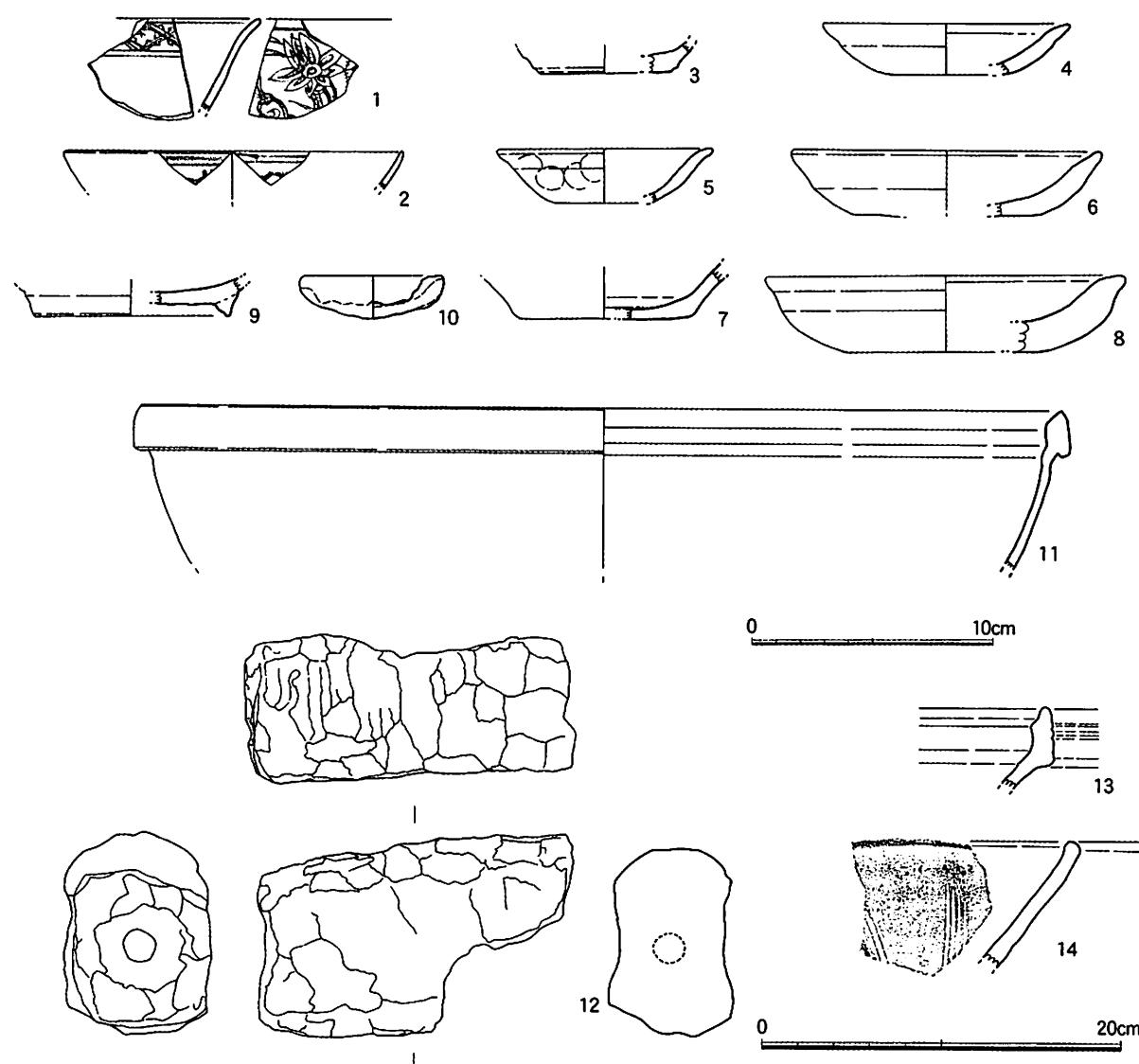
3は青花皿で、口縁端部が欠失しているが、皿F群の可能性が考えられる。6～13は京都系土師器で、塩地編年1期から2期にかけてのものである。

SK155 出土遺物 (第 31 図)

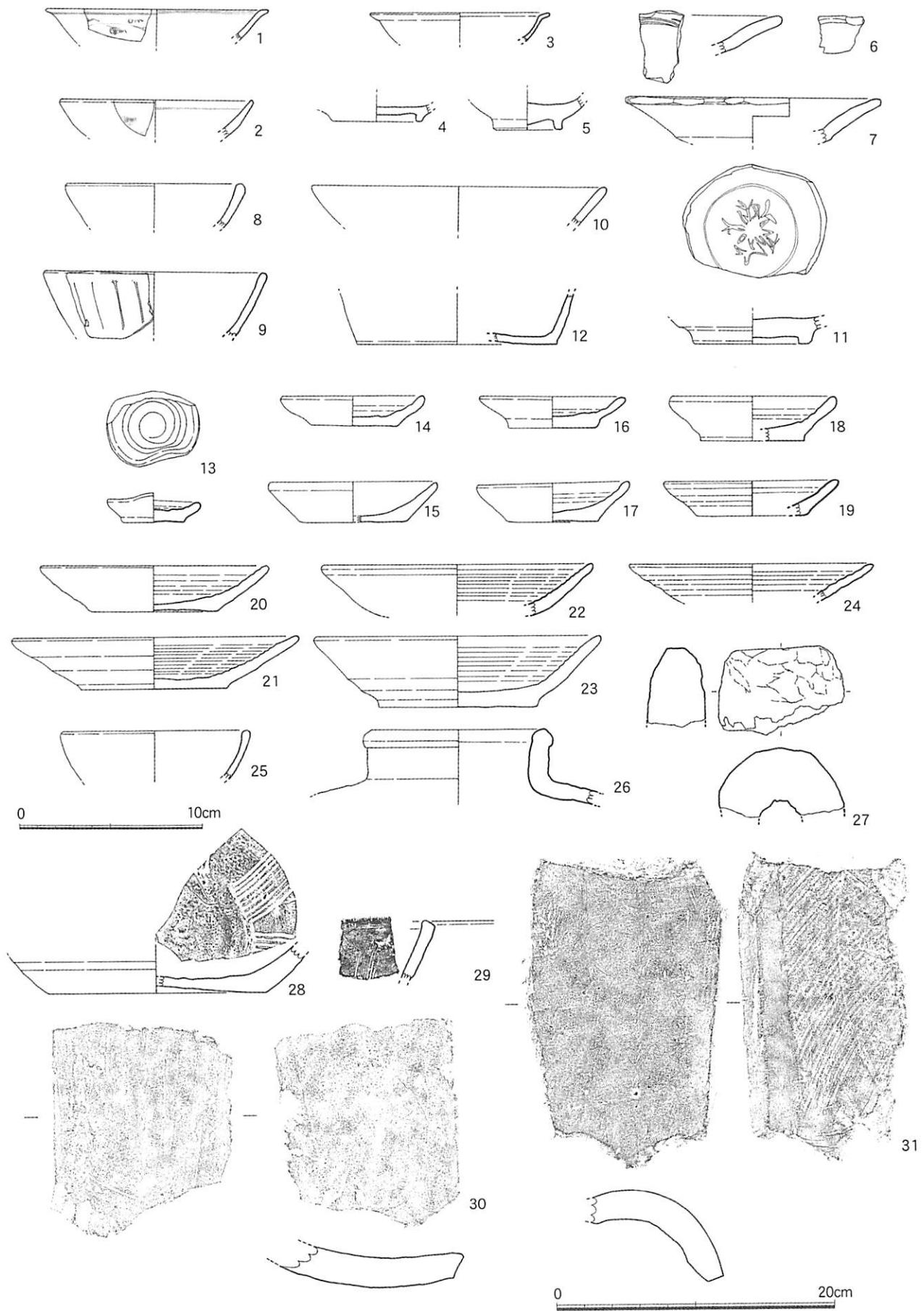
1 は青花皿 B1 群である。2 は青花皿 C 群と思われる。3・4 は白磁皿である。5・8～11 は青磁碗で、11 の見込みには花文がスタンプされる。6・7 は青磁棱花皿である。12 は朝鮮王朝産の陶器舟徳利と考えられ、底部を含む外面に施釉されているが、二次被熱のためか表面がざらついている。13～19 は在地系のロクロ成形土師器小皿である。13 は成形後に歪められ耳皿とされたものである。20～24 は在地系ロクロ成形土師器の坏で、内面に工具による段形成が著しい。25 は瓦質土器の碗である。26 は備前焼の壺である。27 は凝灰岩製のふいご羽口である。28 は備前焼擂鉢、29 は瓦質土器擂鉢である。30 は平瓦、31 は丸瓦である。



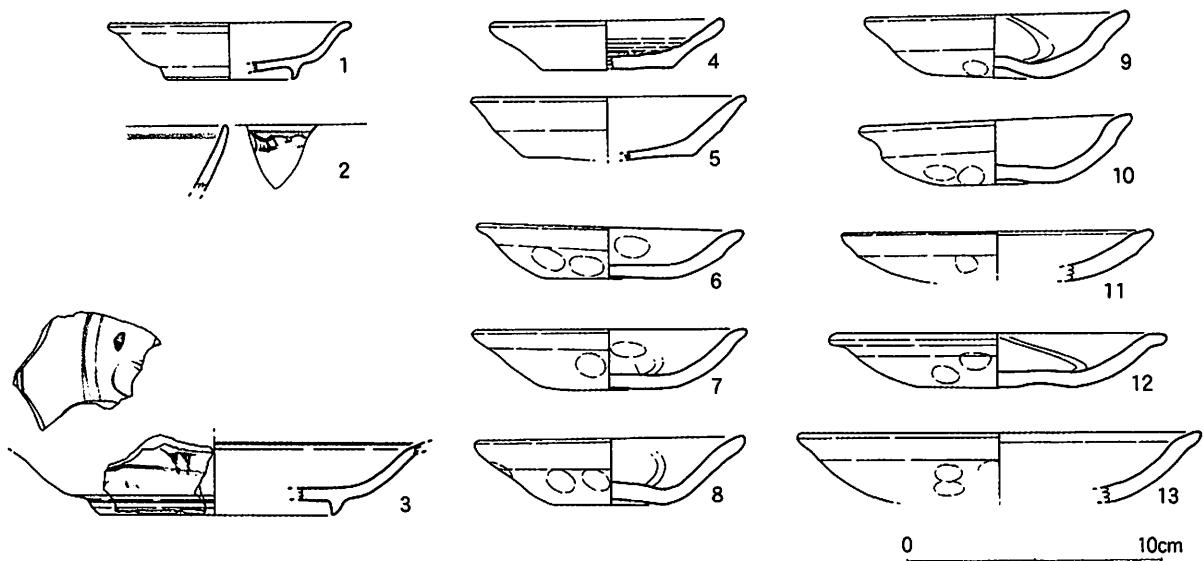
第 29 図 SK137 出土遺物 3 (1/4)



第 30 図 SK139 出土遺物 (1 ~ 11: 1/3, 12 ~ 14: 1/4)



第31図 SK155出土遺物 (1~25:1/3, 26~31:1/4)



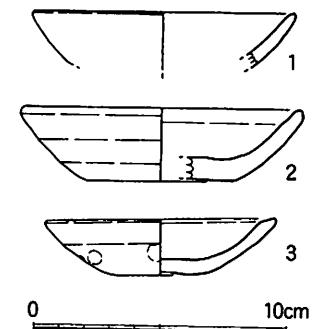
第32図 SK137・SK139検出時出土遺物実測図 (1/3)

SK147 (第34図)

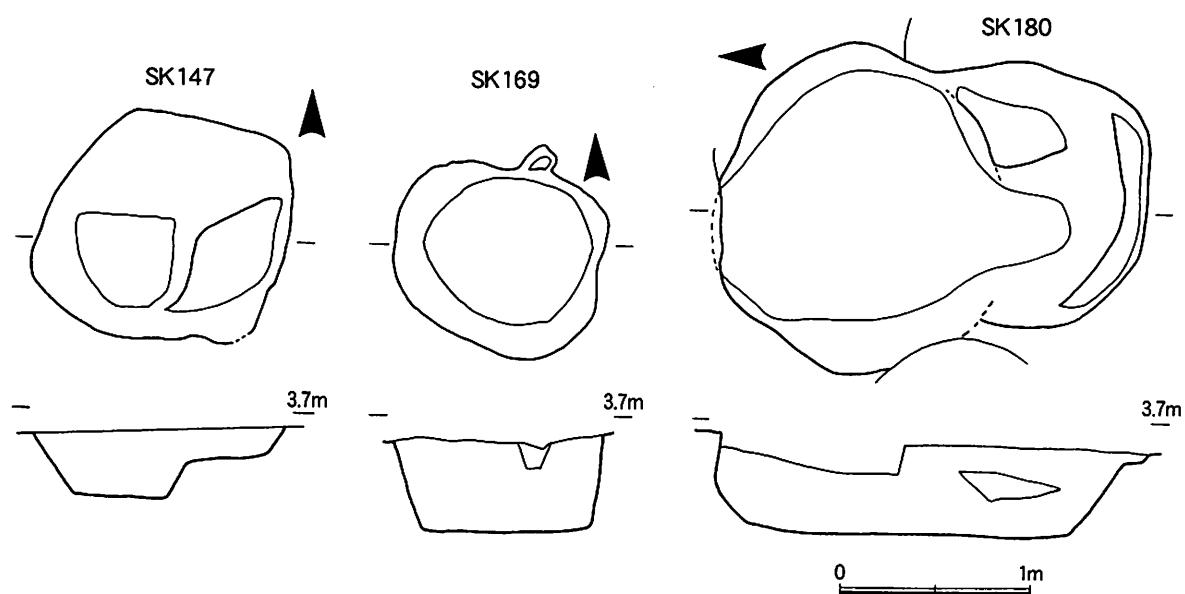
C-5区で検出された廃棄土坑で、SK180を切って掘り込まれている。東西1.4m、南北1.2mの不整方形状を呈する。西側が一段深くなっている。検出面からの最大深は0.4mを測る。

出土遺物 (第33図1～3)

1は朝鮮王朝産の陶器皿で、いわゆる雑釉陶器である。白色あるいは黒色の粒子を多数含む灰色の胎土で、透明釉が掛けられている。2はロクロ成形土師器、3は京都系土師器小皿である。



第33図 SK147出土遺物



第34図 SK147・SK169・SK180平面・断面図 (1/40)

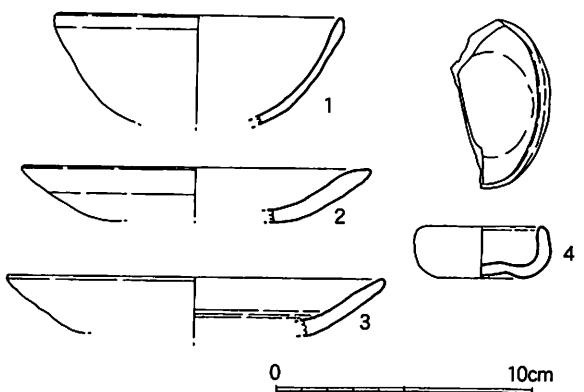
SK169 (第34図)

B-4区からC-4区にかけて検出された土坑で、長軸1.2m、短軸1.0m、最大深0.5mを測る。SK137・

139・155周辺に広がっていた礫群を含む土層を除去した結果検出されたものである。

出土遺物（第35図）

1は瓦質土器の碗で、内型により成形されたと推定されるものである。2は京都系土師器皿である。3はロクロ成形の土師器であるが、京都系土師器に器形が類似するものである。4は京都系土師器小皿で、成形後に歪められている。



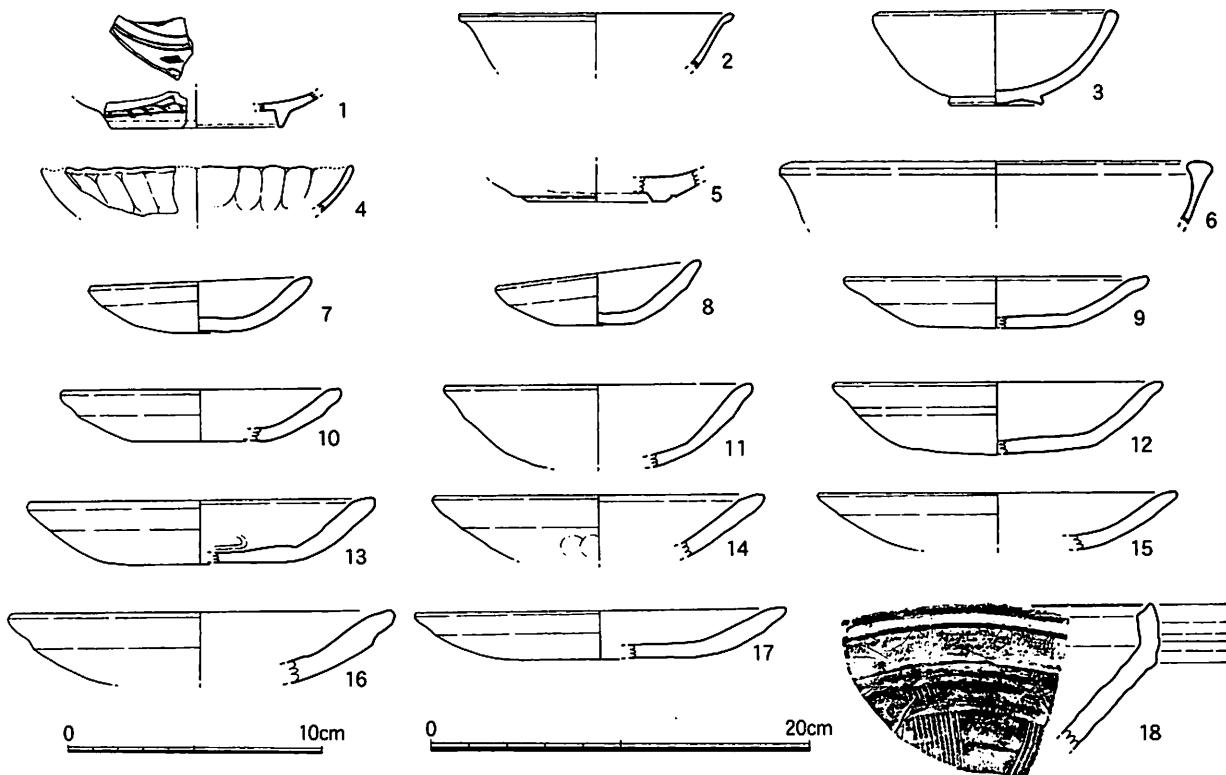
第35図 SK169出土遺物（1/3）

SK180（第34図）

C-5区で検出された廃棄土坑で、SK147に切られている。東西1.8m、南北1.5m程度の楕円形状と推定され、検出面からの深さは約0.5mを測る。出土遺物から16世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（第36図）

1は五彩の皿で、内外面に赤・黄色などの顔料で上絵付けされていることが観察される。2は白磁皿で、4は菊皿、5は見込みと底部が無釉となる粗製のものである。3は瓦質土器椀で、近年大分において報告例が増加しつつあるものである。内型により成形されたものと考えられる。6は中国産と考えられる焼締陶器鉢で、内面には薄い鉄釉が掛かっているようにも見受けられる。体部は非常に薄く口縁部は折り返されて成形され、断面三角形状に肥厚する。7～17は京都系土師器皿で、比較的古相のものが多いが、16のように塩地編年2期以降に位置づけられるものも存在する。18は備前焼擂鉢で、擂り目が交差しない乗岡編年近世1期aに比定されるものである。



第36図 SK180出土遺物（1～17：1/3, 18：1/4）

SK307 (第6図)

B-4・5区～C-4・5区で検出された浅い落ち込みで、現状で約2.7m×2.3mの規模であるが深さは10cm程度である。道路状遺構を構成する整地層の一部に過ぎない可能性もある。

出土遺物 (第38図1～5)

1～3はロクロ成形の土師器である。5は、不明土製品で羽口の先端部である可能性も考えられるが、二次的に被熱していないこと、外面を工具により削って調整されていること、胎土が砂粒の少ない精良なものであることから、何らかの土製品の一部であることが考えられる。4は、緑釉陶器碗の底部であり、古代の畿内産と推定される。

SK309 (第37図)

B-4区からC-4区にかけて検出された土坑で、SK137の床面で検出された。長軸1.8m、短軸0.95mで、壁面はややオーバーハングしている。検出面からの最大深は約1.0mである。埋土の中程からは、20cm程度の礫が多数出土した。

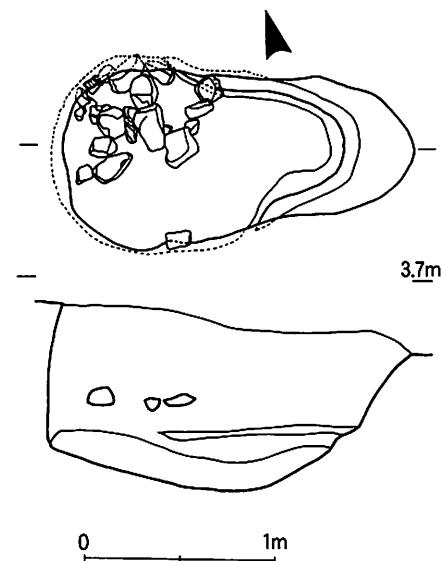
出土遺物 (第38図6・7)

6は完形の灯火具と考えられるもので、中心部には直径5mm程の穴が穿れているが、穴は貫通していない。ロクロ成形により成形され、底部には回転糸切り痕を残す。胎土は京都系土師器と類似した、粒子の少ない明灰色に発色する土が使用されている。7は凝灰岩製の羽口である。

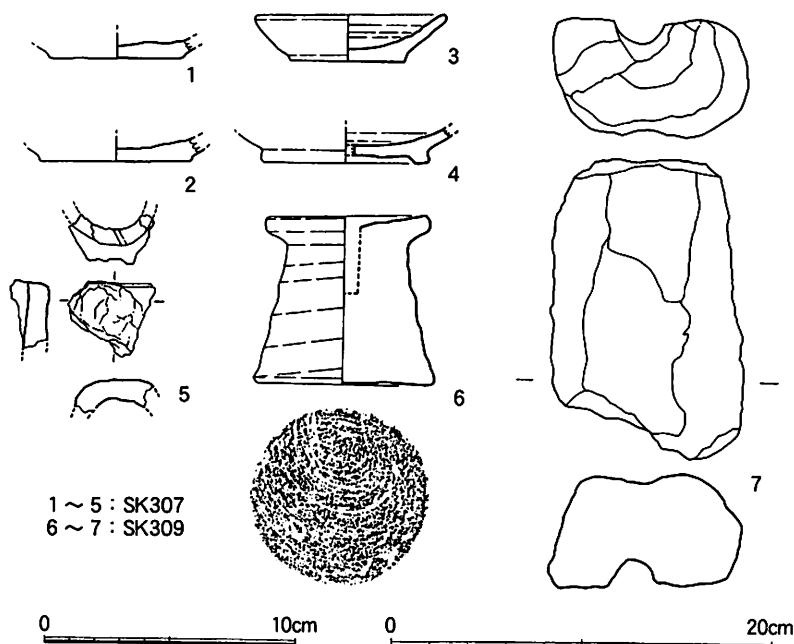
SK501 (第39図)

B-5区で検出された土坑で、長軸1.3m、短軸1.1m、最大深0.3mを測る。粘質土を基調とする土で埋積しているが、最上層は焼土及び炭化物を含む土からなる。

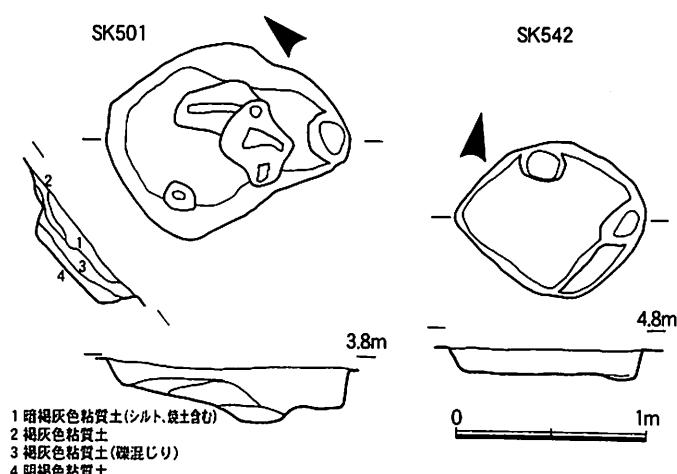
出土遺物 (第42図1・2)



第37図 SK309 平面・断面図 (1/40)



第38図 SK307・SK309 出土遺物 (1～6: 1/3, 7: 1/4)

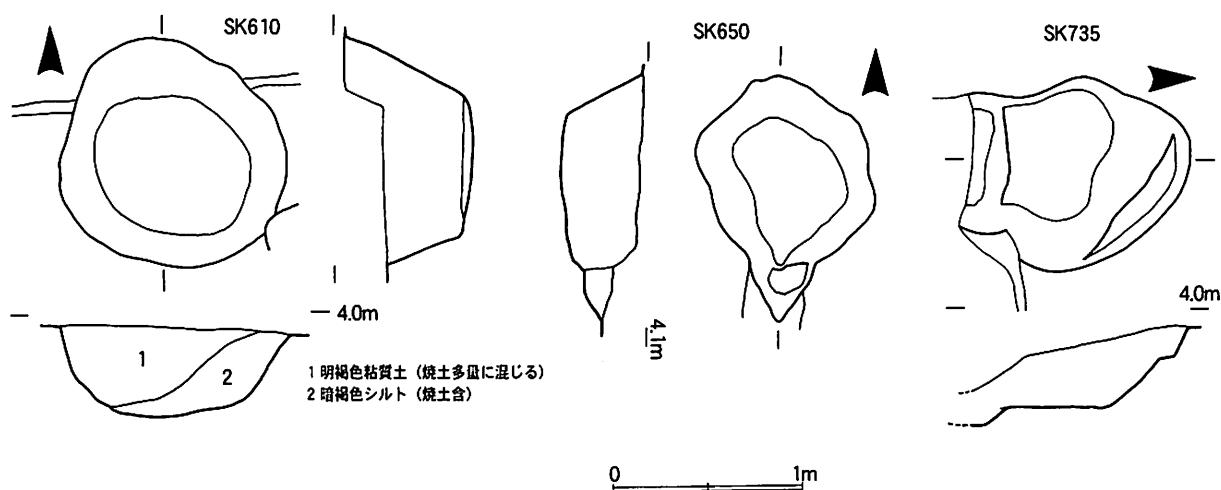


第39図 SK501・SK542 平面・断面・土層断面図 (1/40)

1は青花碗E群で、高台内に「萬福攸同」銘が認められる。2は青花皿B1群である。

SK542 (第39図)

B-4区で検出された土坑、長軸1.0m、短軸0.85m、最大深0.15mの浅い遺構である。炭化物を多く含み焼土を含む暗褐色土で埋積している。



第40図 SK610・SK650・SK735 平面断面図 (1/40)

SK610 (第40図)

B-4区で検出された土坑で、長軸1.2m、短軸1.1m、最大深0.5mを測る。埋土は焼土を含むもので、特に1層は焼土を多量に含む土であることから、火災処理坑である可能性も考えられ、島津氏の府内侵攻時(1586～1587年)に比定できる可能性がある。

出土遺物 (第42図3～5)

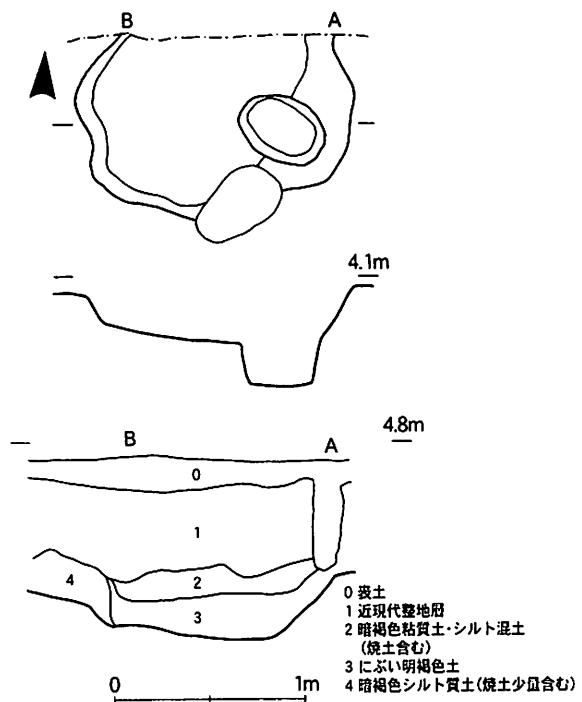
10は京都系土師器小皿、11・12は青花皿E群である。

SK650 (第40図)

B-6区で検出された土坑で、長軸1.3m、短軸0.9m、最大深0.4を測る。埋土の上部は焼土を含む暗褐色土で、下部は焼土を含む褐色シルト質土であった。

出土遺物 (第43図)

1は青白磁の合子で、12世紀代の所産である。2・3は青磁の皿及び菊皿で、景德鎮窯産である。5はロクロ成形の土師器小皿、6～8は京都系土師器で塩地編年の1期に比定される古相のものである。4は漳州窯系の青花で、青花皿C群の器形を呈する。見込みには「福」字が描かれる。9は備前焼擂鉢である。



第41図 SK666 平面・断面・土層断面図 (1/40)

SK666 (第 41 図)

B-5 区の壁面沿いで検出された土坑である。現状で長軸 1.4 m、短軸 0.95 m、検出面からの最大深 0.55 m を測る。床面ではピットが検出され、これは先行する遺構の可能性がある。出土遺物は僅少であるが、16 世紀後半以降の廃絶時期が考えられる。

出土遺物 (第 42 図 6)

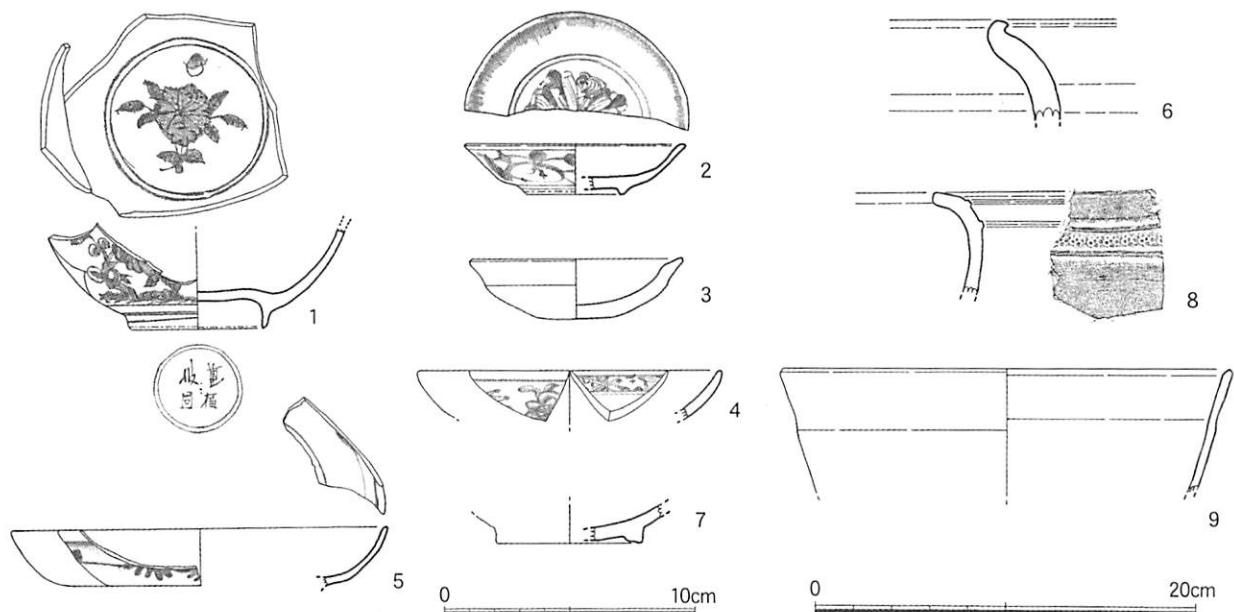
6 は備前焼水屋甕の口縁部破片である。

SK735 (第 40 図)

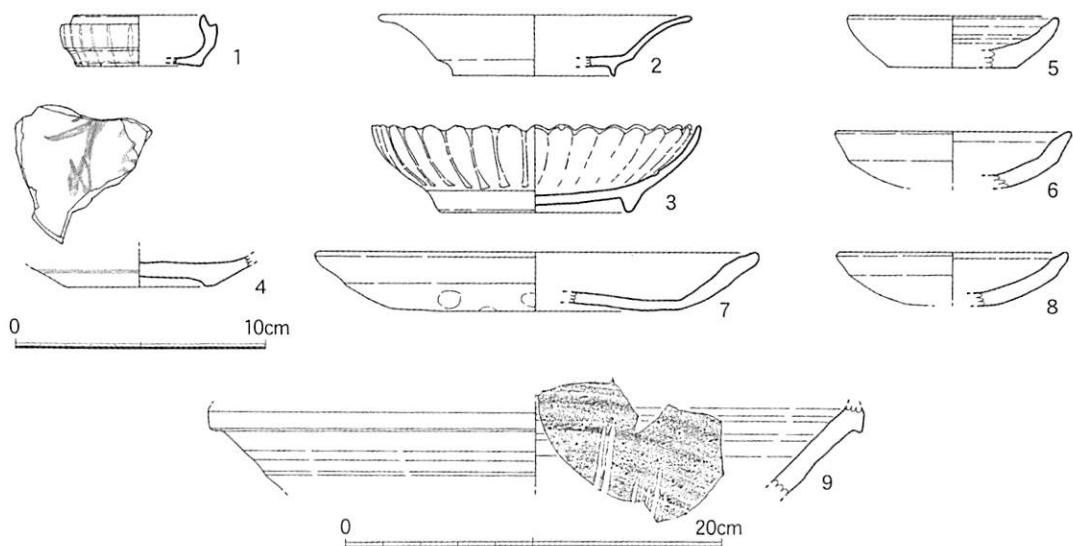
B-6 区で検出された土坑で、南端は第 1 次調査時に削り取ってしまっているため不明であるが、現状で長軸 1.1 m、短軸 1.0 m、最大深 0.4 m を測る。南端部分は一段深くなっている。別の遺構が重複していた可能性もある。

出土遺物 (第 42 図 7 ~ 9)

16 は古代の縁釉陶器碗底部である。胎土より、畿内産の可能性が考えられる。17 は瓦質土器の火鉢である。口縁部外面の突帯間に梅花状の文様がスタンプされる。18 は瓦質土器の鍋である。



第 42 図 SK501・SK610・SK666・SK735 出土遺物 (1 ~ 5・7 : 1/3, 6・8・9 : 1/4)



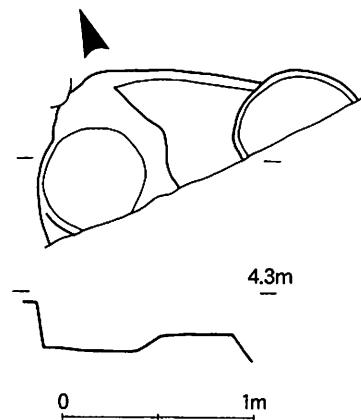
第 43 図 SK650 出土遺物 (1 ~ 8 : 1/3, 9 : 1/4)

SK770 (第 44 図)

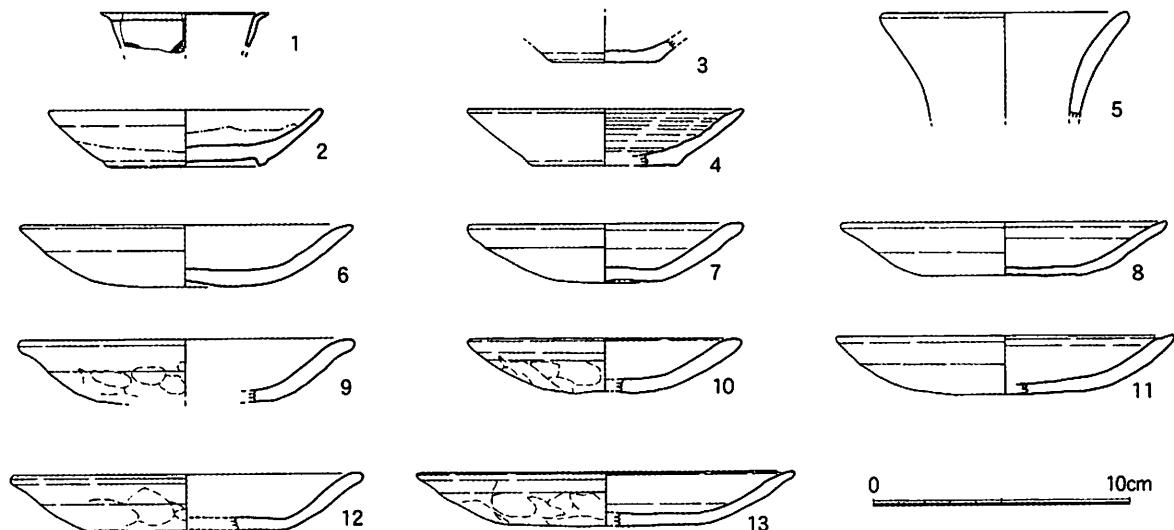
B-5 区で検出された浅い廃棄土坑で、SK671 に切られている。南側は調査時に掘り下げすぎたため失われている。現状で、南北 0.75 m、東西 1.4 m、最大深 0.75 m を測る。焼土を含む暗褐色シルト質土を埋土とする。出土遺物から 16 世紀中葉に位置づけられる。

出土遺物 (第 45 図)

1 は青花小壺で、口縁端部は鋭く外反する。2 は見込みと底部が広く無釉となる粗製の白磁皿。3・4 はロクロ成形の土師器壺。5 もロクロ成形の土師器と推定される。6～13 は京都系土師器皿で、概ね塩地編年 1 期に収まるものと考えられる。



第 44 図 SK770 平面・断面図 (1/40)



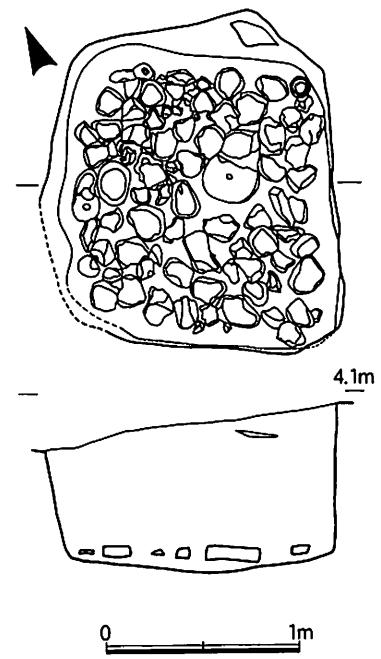
第 45 図 SK770 出土遺物 (1/3)

SK828 (第 46 図)

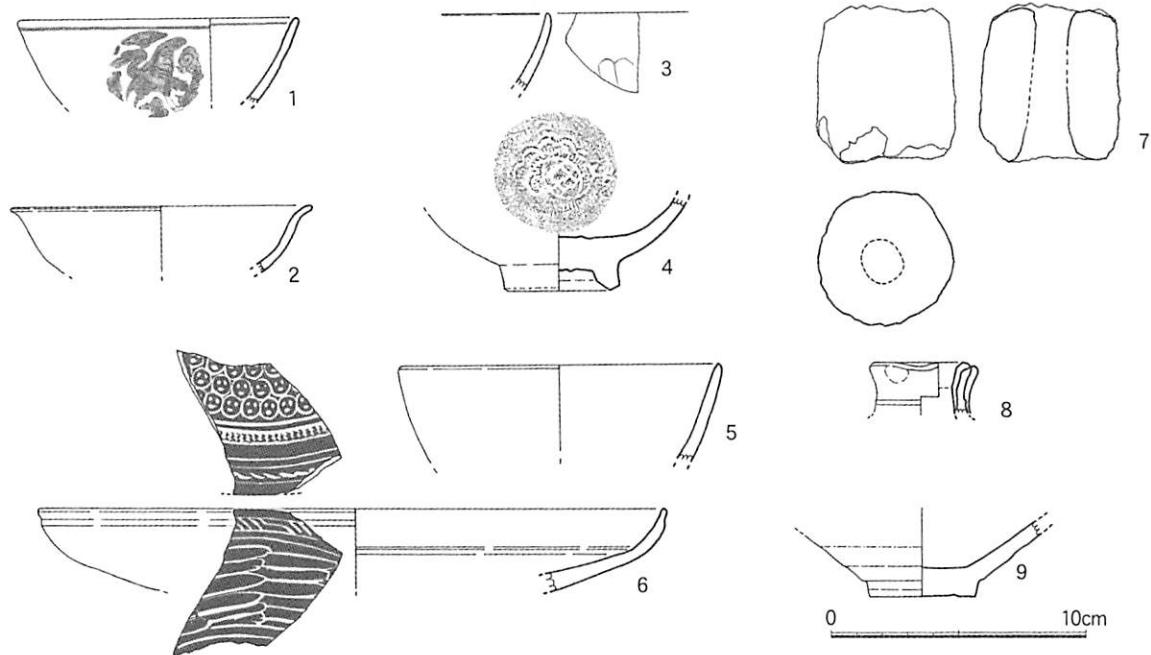
B-4 区から B-5 区にかけて検出された土坑で、長軸 1.8 m、短軸 1.5 m の隅丸長方形状の平面形を呈し、最大深 0.8 m である。SE967 を切って築造されている。底面には石膏片を含む礫が敷ききつめられていたが、どのような機能を有していたのかは不明である。出土遺物に唐津焼の可能性があるものが認められ、16 世紀末以降の廃絶年代が考えられる。

出土遺物 (第 47 図)

1 は青花碗 E 群で、外面に雲鶴文が施文される。2 は白磁皿、3 は剣先状の蓮弁が施文される青磁碗である。4 は青磁碗であるが、焼成不良のため胎土は陶器質であり、釉も黄色く発色している。見込みに花文状のスタンプが認められる。5 は無文の青磁碗である。6 は朝鮮王朝産の象眼青磁皿で、焼成が不良なためか胎土は黒紫色に発色し、表面の釉もやや白濁している。朝鮮王朝初期の 15 世紀前半に製作されたものとみられる。7 は凝灰岩製のふいご羽口である。8 は備前焼小壺の口縁部である。9 は産地の不明な陶器で、外面に灰釉と考えられる淡緑色の釉が認められるが底部及び内面は無釉である。底部は糸切りの後、浅く削り出されている。唐津焼もしくは瀬戸・美濃産の可能性が考えられる。唐津焼とすれば、今回報告する遺構で、唐津焼を伴う唯一の例となる。



第 46 図 SK828 平面・断面図 (1/40)



第47図 SK828出土遺物 (1/3)

井戸跡 (SE)

SE967 (第48図)

B-4区で検出された井戸跡で、SK828に切られている。堀り方は検出面において、直径約3.6mを測るが、井筒は、土層の観察に認められる痕跡から直径50cm程度であったとみられる。調査区壁面沿いであるため、標高約2.7mまで掘り下げたところで以下の調査を断念した。遺物は僅少であり図示できるものがないが、京都系土師器とみられるものが出土しているため、その廃絶時期は16世紀中葉まで下る可能性がある。

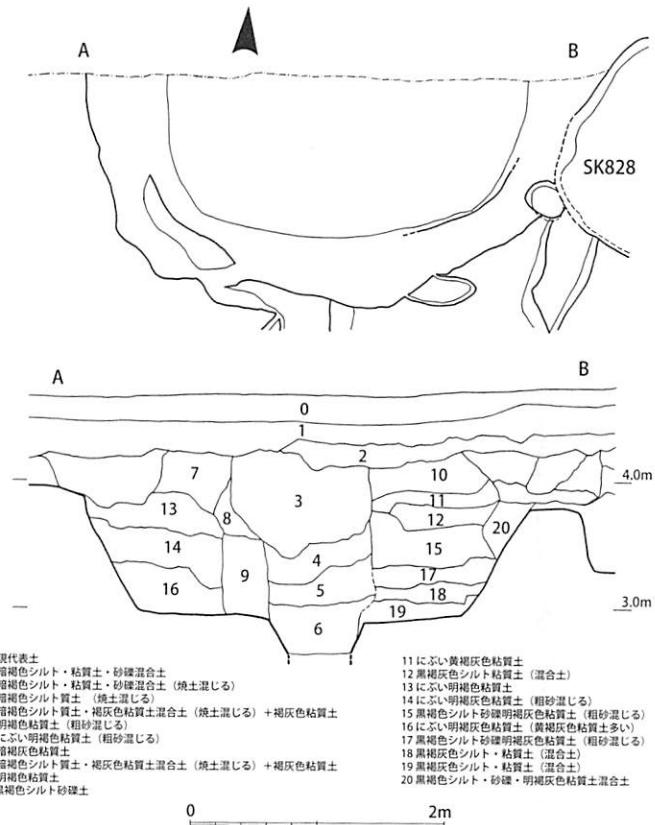
性格不明な遺構 (SX)

SX818 (第49図)

A-6～B-6区で検出された落ち込みで、現状で長軸5.2m、短軸1.8m、最大深1.0mである。複数の遺構が切り合っている可能性が高いと考えられる。

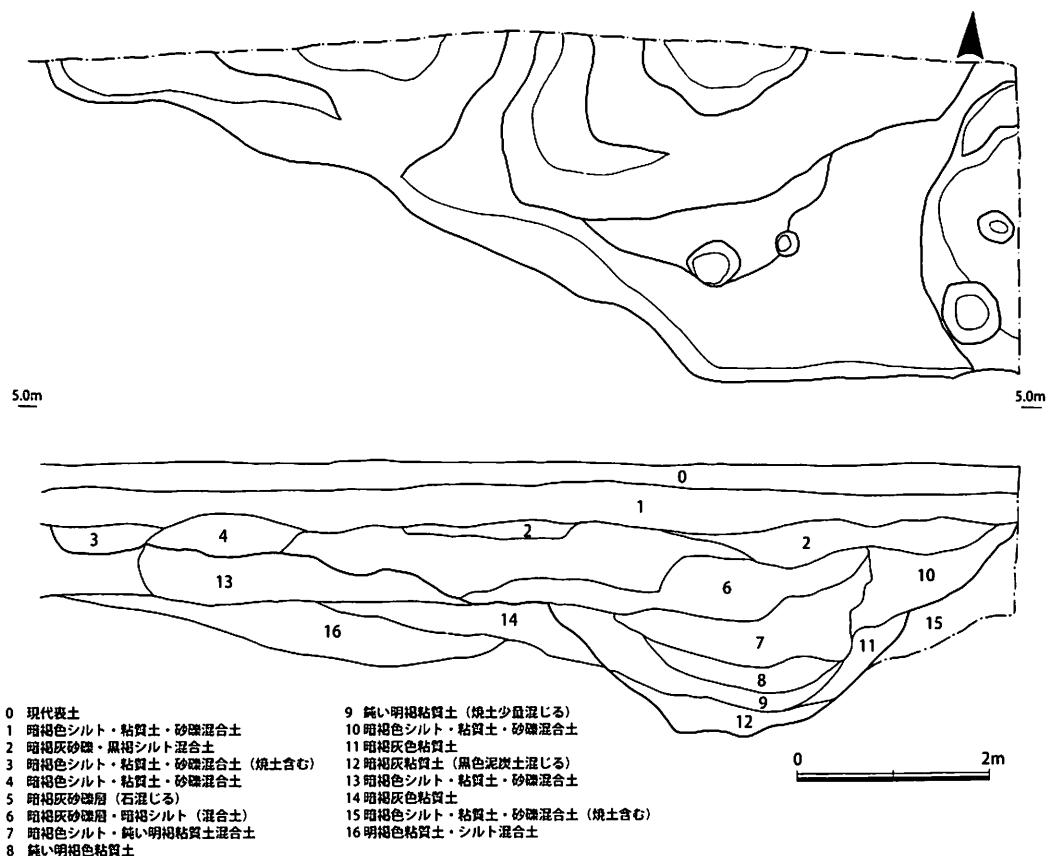
出土遺物 (第50図)

1は青花碗もしくは鉢で、高い高台を有し、見込みには花文および如意頭状の文様が描かれている。2は青磁稜花皿で、内面には櫛描状の文様が描かれる。3・4はロクロ成形の土師器で、4は内面に工具による段が形成

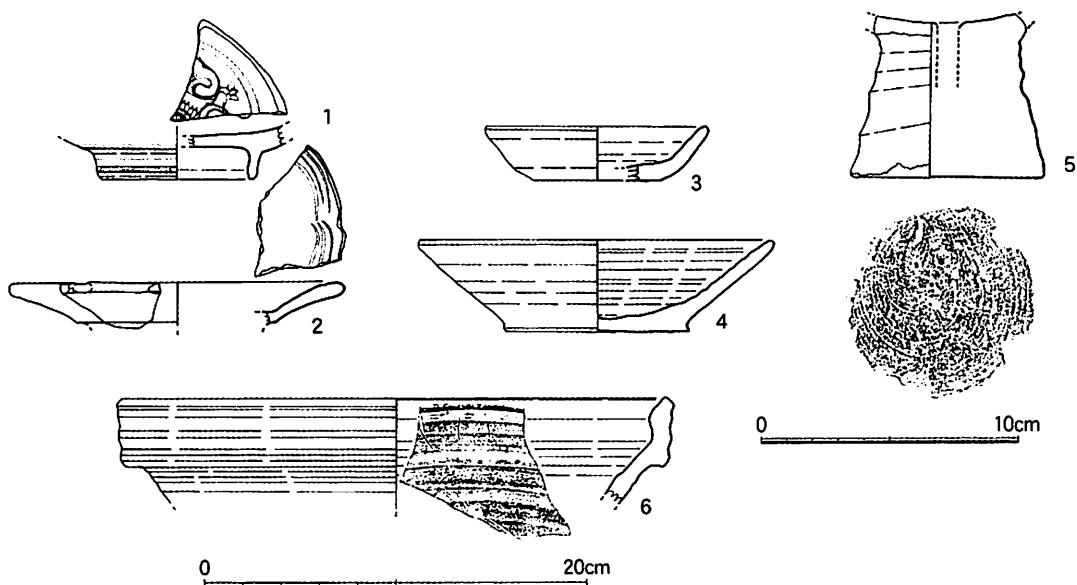


第48図 SE967平面・土層断面図 (1/60)

される。5は土製灯火具で、壊部が欠失しているため全形は不明である。中心部に穿たれた穴は貫通していない。底部には明瞭な糸切り痕を有し、胎土は在地のロクロ成形土器と共通する。6は備前焼擂鉢で、わずかに残る挿り目から、交差する挿り目が施文されていた可能性を伺わせる。



第49図 SX818平面・土層断面図 (1/40)



第50図 SX818出土遺物 (1～5:1/3, 6:1/4)

3 第2面の遺構と遺物

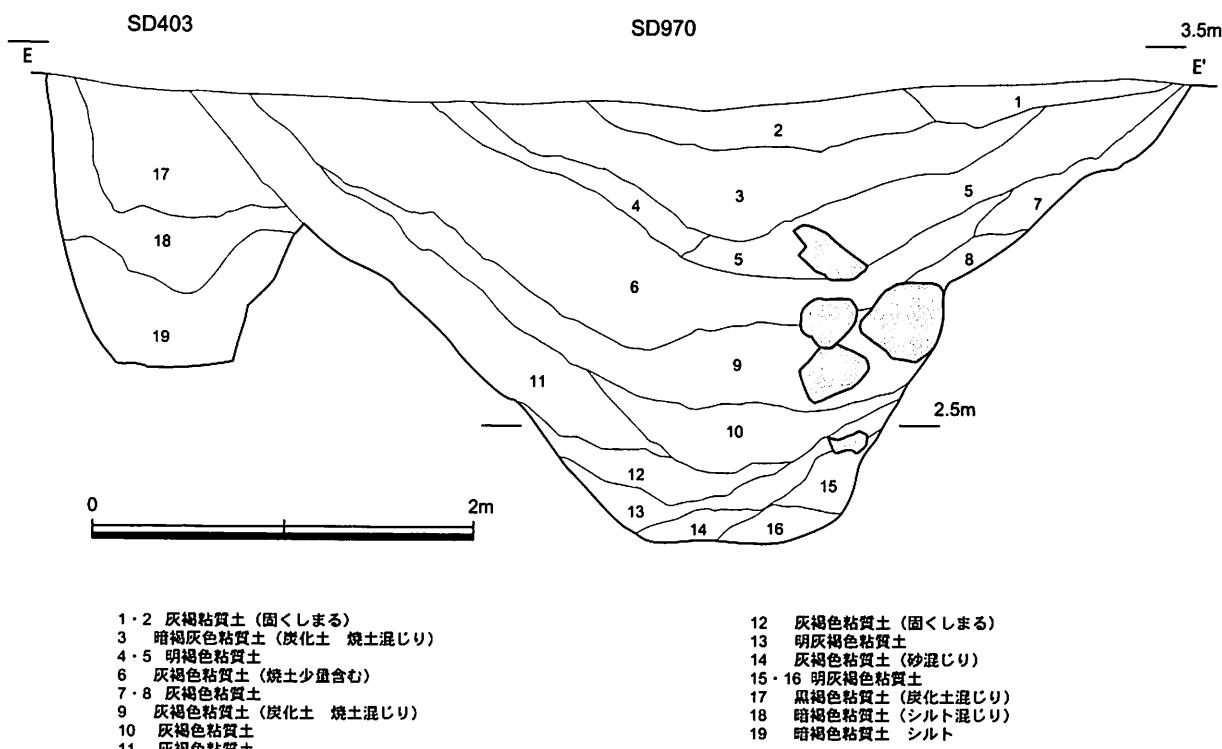
溝状遺構 (SD)

SD970 (第52図・土層: 第51図)

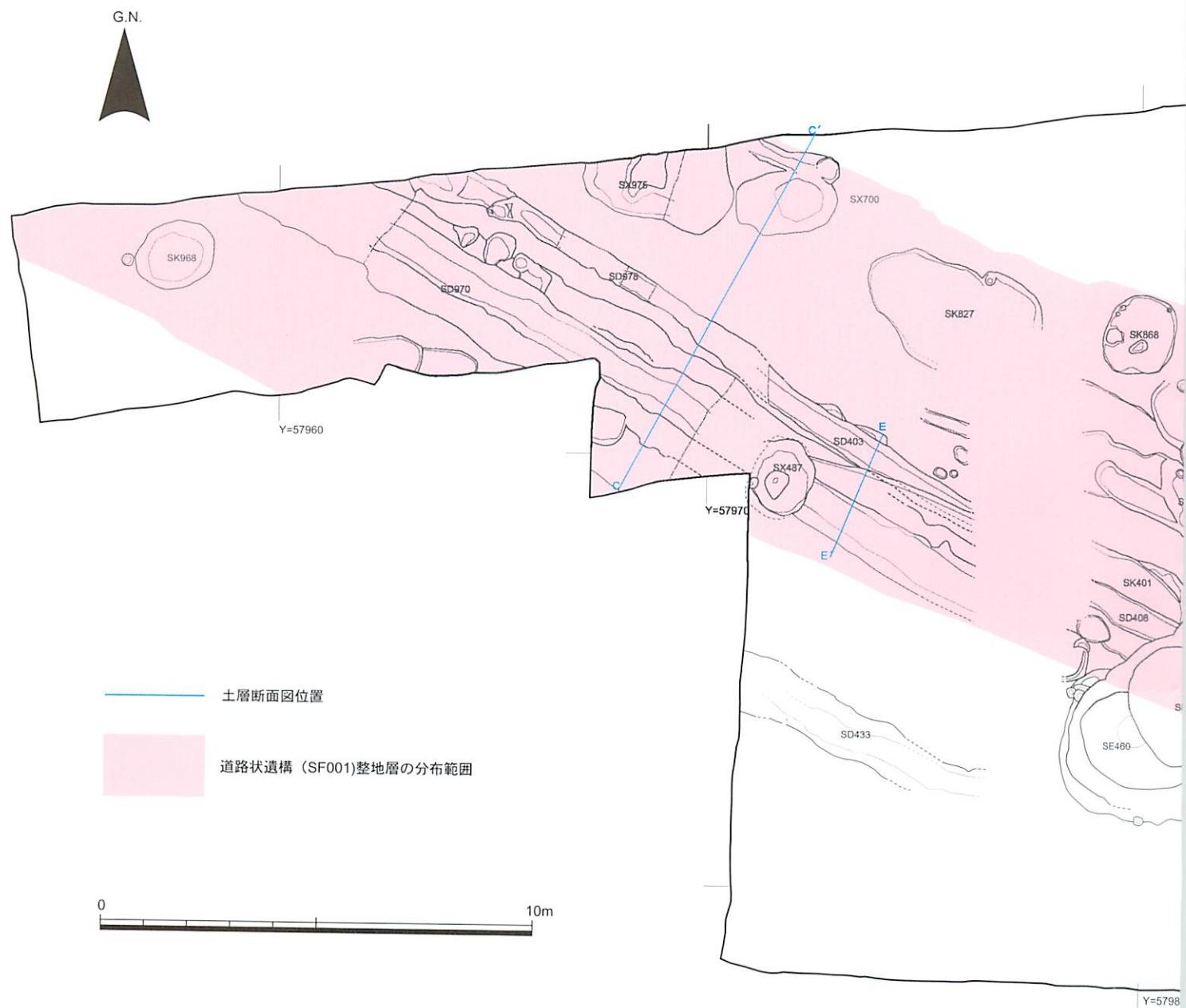
調査区北西から中央付近にかけて検出された溝状遺構である。SE400・460よりも西側で収束しているものと考えられ、SE400・460との切り合いは不明である。断面V字形を呈し、最大幅約2.7m、検出面からの最大深は1.3mを測る。最深部の標高は約1.8mで、地下水の影響のため、埋土の下底部はグライ化しているが水流の痕跡は認められないため、水路とは考えにくい。調査区内を貫通しておらず、また直角方向に延びる対応する溝も認められないが、何らかの区画施設の一部と考えておきたい。数度の掘り返しが認められ、最終的に埋まった後、道路状遺構が築造されてその整地層により上面が覆われている。第1次調査では京都系土師器が出土したが、道路状遺構の整地層を明確に把握して発掘調査が実施できた第2次調査では京都系土師器が出土していない。従って、本来の遺構廃絶時期は16世紀前半以前に遡る可能性が高いと考えられる。

出土遺物 (第53図・第54図)

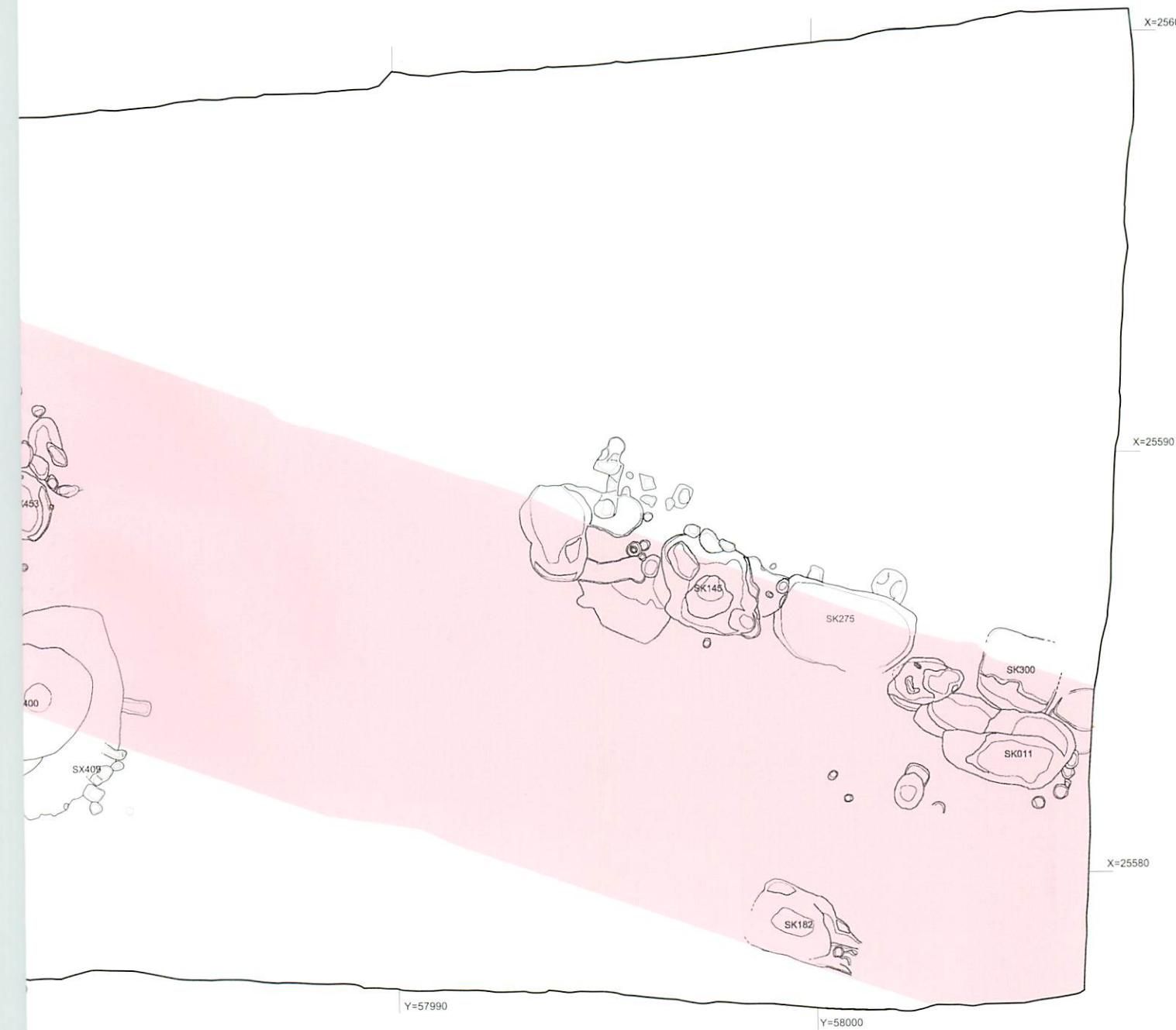
1は白磁皿である。2は見込みと高台付近が無釉の粗製白磁皿である。3～7は青磁碗である。7は口縁部外面に雷文が、内面に雷文と唐草状の文様が陰刻される。8は青磁盤で、見込みには不明な文様がスタンプされているようである。高台内は蛇の目釉剥ぎされている。9は越州窯系青磁碗で、見込みに3箇所の目跡が認められる。高台は削りだされておらず、わずかに上げ底となる。10は、中国産と考えられる焼締陶器の底部で、鉢と推定される。11は、ベトナム産と推定される焼締陶器長胴瓶の底部である。きわめて堅緻な焼成で、胎土には粒子を含まない。暗黒灰色に発色する。12は瓦質土器で香炉と推定される。口縁部外面に雷文がスタンプされる。13～18はロクロ成形土師器小皿、19～30はロクロ成形土師器坏である。



第51図 SD970・SD403 土層断面図 (1/20 西から)



第52図 遺構配置図(道路状遺構)



これらは概ね 15 世紀後半のものと推定される。31～35 は白色に近い胎土を有し、器壁が極めて薄く作られたロクロ成形土師器である。33～35 は底部糸切りの後、ナデ消されている。これらには明瞭な口径の分化が認められ、特に 35 は特大で、復元口径 20.6cm を測る。37 は黒色土器 A 類の碗である。38 は土製灯火具と考えられるもので、中心部に貫通する穴が穿れている。40・41 は備前焼擂鉢で、15 世紀後半～16 世紀前半のものと思われる。42 は備前焼製底部である。43 は軒平瓦である。残念ながら中心飾りは確認できないが、5 単位の唐草文が認められる。44 は鬼瓦の一部と推定されるものである。45・46 は丸瓦である。内面には糸切り痕が認められる。

第 1 次調査出土遺物（第 55 図～第 57 図）

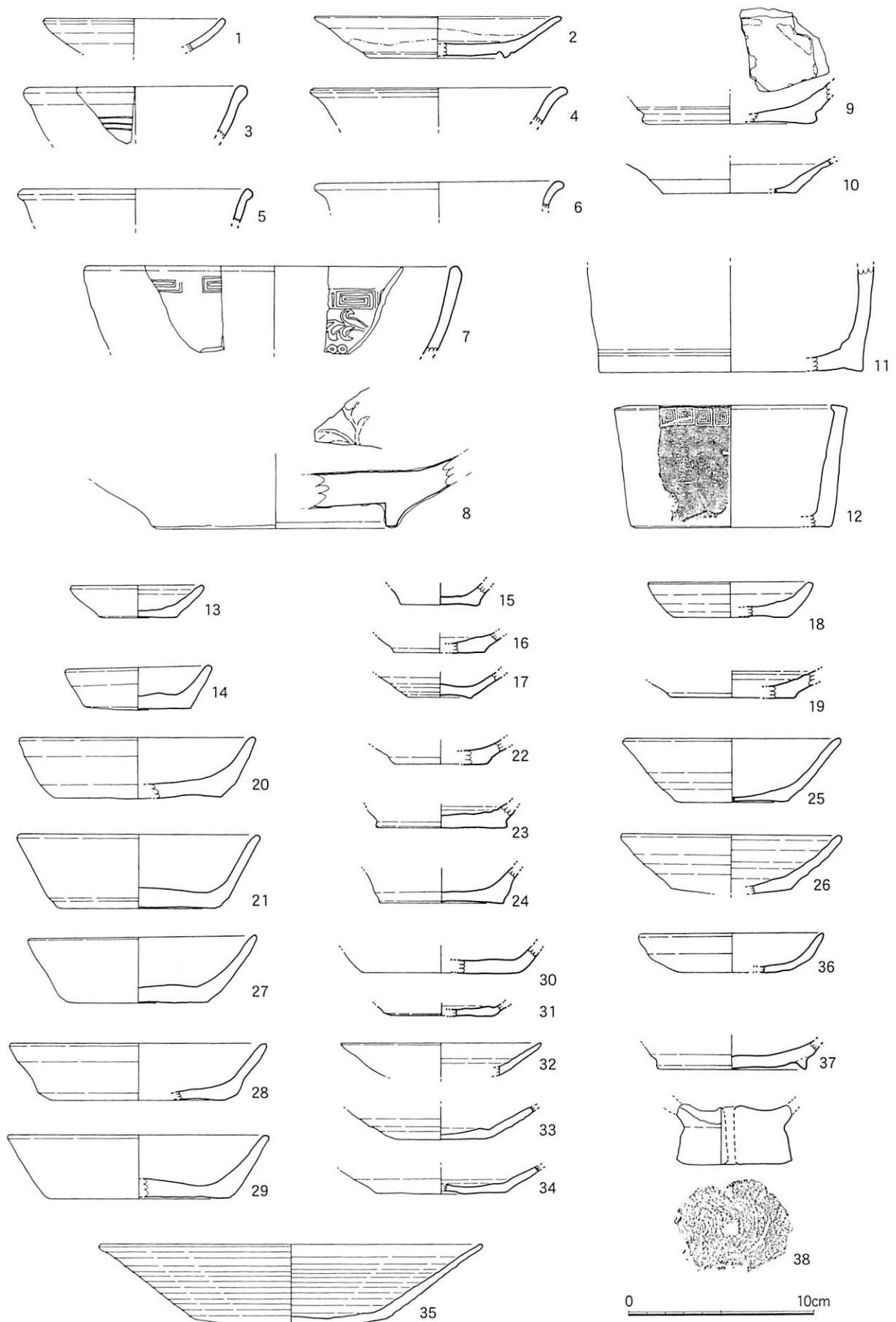
1 は青花小壺である。2～4 は青花皿で、B1 群と思われるものである。5 は翡翠釉といわれる鮮やかな青色の釉が掛かる磁器皿である。6 は白磁小壺である。7 は白磁蓋で、小壺の蓋であろう。底部には糸切り痕が認められる。8～10 は白磁皿である。11～13・16・17 は青磁碗である。14 は青磁で、皿状の製品である。内面には淡緑色の釉が厚く掛かっているが、外面はほとんど無釉である。内面には梢円形状の剥離痕が認められ、何らかの突起物が折れた痕跡かもしれない。壺等の蓋である可能性も考えられる。15 は青磁瓶の耳と考えられる。18 は青磁稜花皿である。19 は青磁酒会壺の蓋である。上面には幅の広いヘラ彫り状の文様が施文されていたようで、これに厚い青磁釉が掛かる。20 は青磁皿である。21 は越州窯系の青磁碗で内面には目痕が確認できる。大宰府分類の II 類に相当する粗製のもので、8 世紀末～10 世紀中頃に位置づけられる。22 は中国産と推定される焼締陶器で、鉢であろうか。表面には薄い褐釉が掛かっているように見受けられる。23・24 は在地系ロクロ成形の土師器小皿である。25～32・41 は在地系のロクロ成形土師器壺である。33～35 は胎土が白色に近く、器壁がきわめて薄くつくられたロクロ成形土師器である。36～40 は京都系土師器で、概ね塩地編年の 1 期にあたる古相のものである。43 は土製灯火具で、壺部が欠失している。上面から開けられた穴は貫通していない。44 も土製灯火具で、完形である。壺部は短くわずかに張り出すのみである。上面から開けられた穴は貫通していない。43・44 はいずれも在地系ロクロ成形土師器と共に胎土である。42 は黒色土器 A 類の碗である。45～47 は備前焼擂鉢である。48・49・55 は備前焼の甕である。50～54 は瓦質土器で、50 は羽釜、51 は火鉢、52・53 は擂鉢、54 は甕である。56～59 は平瓦、60～62 は丸瓦である。残念ながら瓦当の確認できるものは無かった。63 は砂岩製の茶臼である。64・65 は砥石で、64 は結晶片岩製、65 は砂岩製である。

SD403・SD408・SD978(第 52 図・土層：第 51 図)

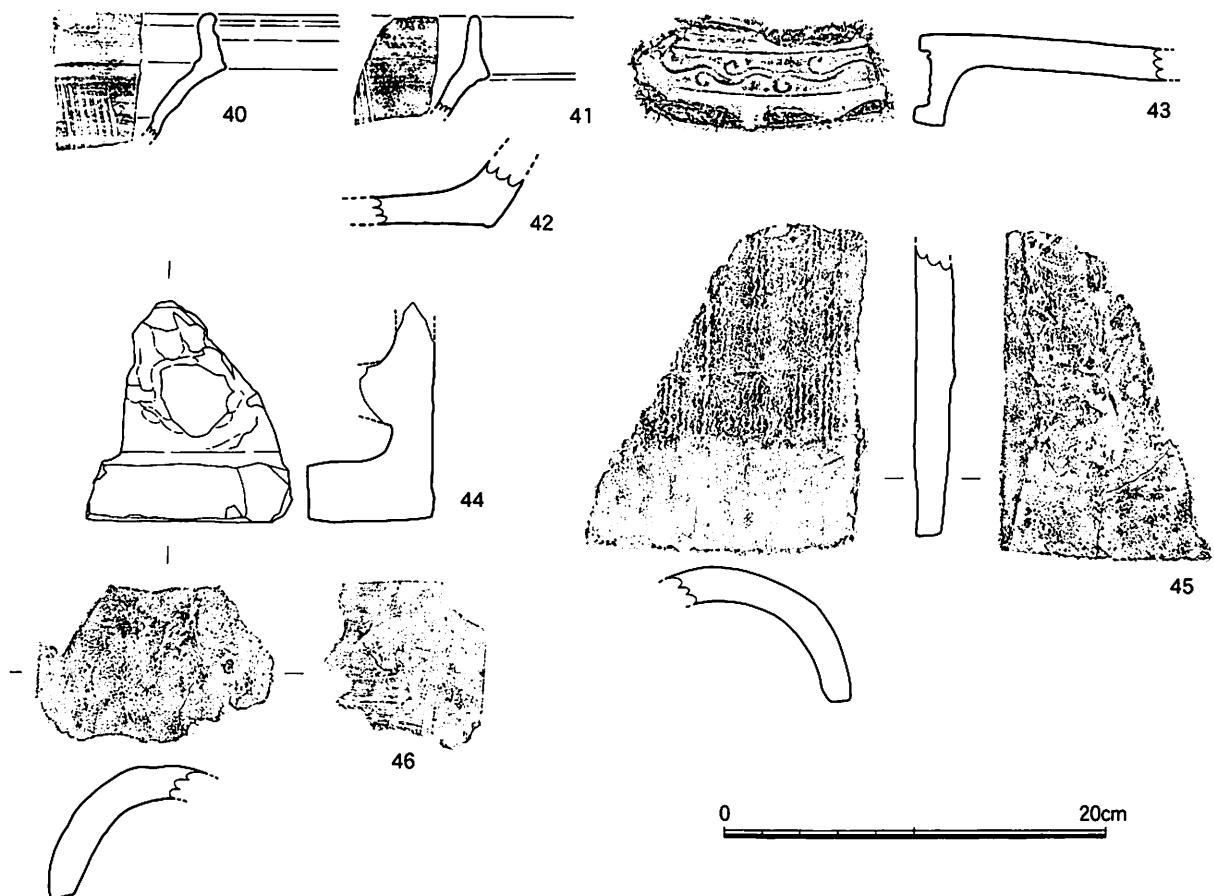
調査区北西部で検出された溝状遺構で、道路状遺構直下の検出面付近においては SD140 に切られていることが確認されている。最大幅 0.7m、最大深 0.7m を測る。SD408 はこの溝の延長と考えられるもので、SE400・460 に切られている。SE400・460 よりも南東側では検出されず、この付近で収束していたものと見られる。第 2 次調査で検出された SD978・973 も同一のものと判断される。出土遺物は僅少であるが、15 世紀後半に遡る可能性がある。

SD403 出土遺物（第 58 図・第 59 図）

1 は青磁碗で、見込みには菊花文がスタンプされる。2・3 は青磁碗で、2 は外面に鎧蓮弁が施文されるが、高台が小さく、I -5-a 類に該当するものと思われる。3 は口縁部が輪花となり、外面には蓮弁状の文様が施文されるようである。4 も青磁碗で、内面には花文等が陽刻されている。5 は無文の青磁碗。6 は白磁皿、7 は 14 世紀代に比定される枢府系の青白磁皿で、内面には唐草状の文様が陽刻される。8 は白磁菊皿であるが、高台内に呉須による圈線が確認できる。9～20 はロクロ成形の土師器小皿及び壺で、概ね 15 世紀後半に位置づけられるものと考えられる。21 は土製灯火具と考えられるもので、底部に糸切り痕を残す。口縁部が明瞭な皿状



第53図 SD970出土遺物1 (1/3)



第 54 図 SD970 出土遺物 2 (1/4)

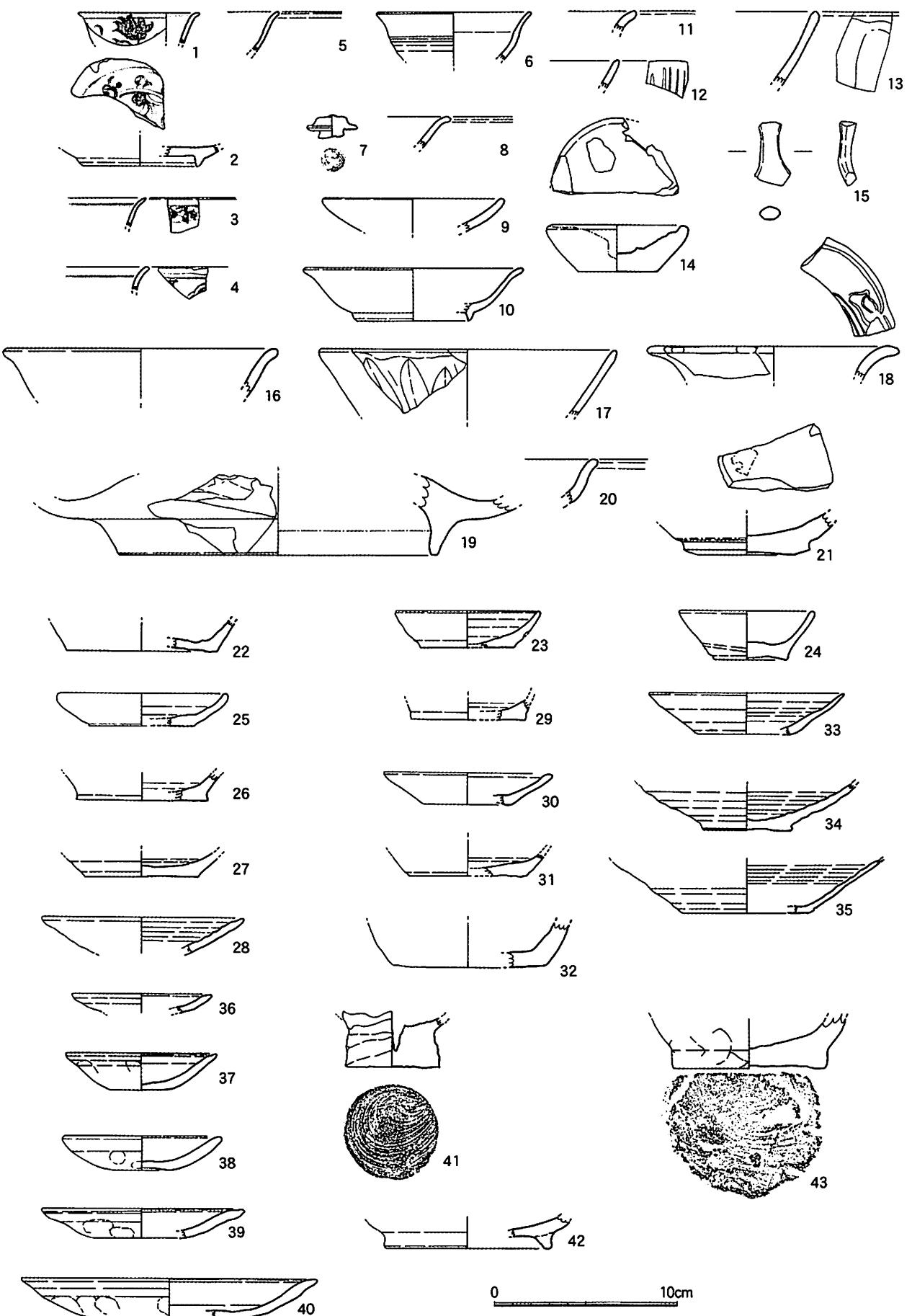
となるもので、胎土は通常のロクロ成形土師器と変わらない。穴は貫通して開けられている。22 も灯火具ではないかと思われるものである。23 は 9 あるいは 10 に類似するロクロ成形土師器小皿の底部に穿孔したもので、灯火具の可能性が考えられる。24 は中国産と考えられる焼締陶器鉢で、口縁部は鍔状に張り出すものである。口縁部上面には凹線が巡る。25・27 は備前焼甕、26 は備前焼擂鉢で 15 世紀前半に比定される。28・29 は瓦質土器の擂鉢である。29 の底部には板状の圧痕が認められる。30・31・33 は瓦質土器の鍋である。32 は土製羽口。35 は瓦質土器の甕である。34 は丸瓦で、内面には糸切り痕が明瞭に残る。

SD978 出土遺物 (第 61 図)

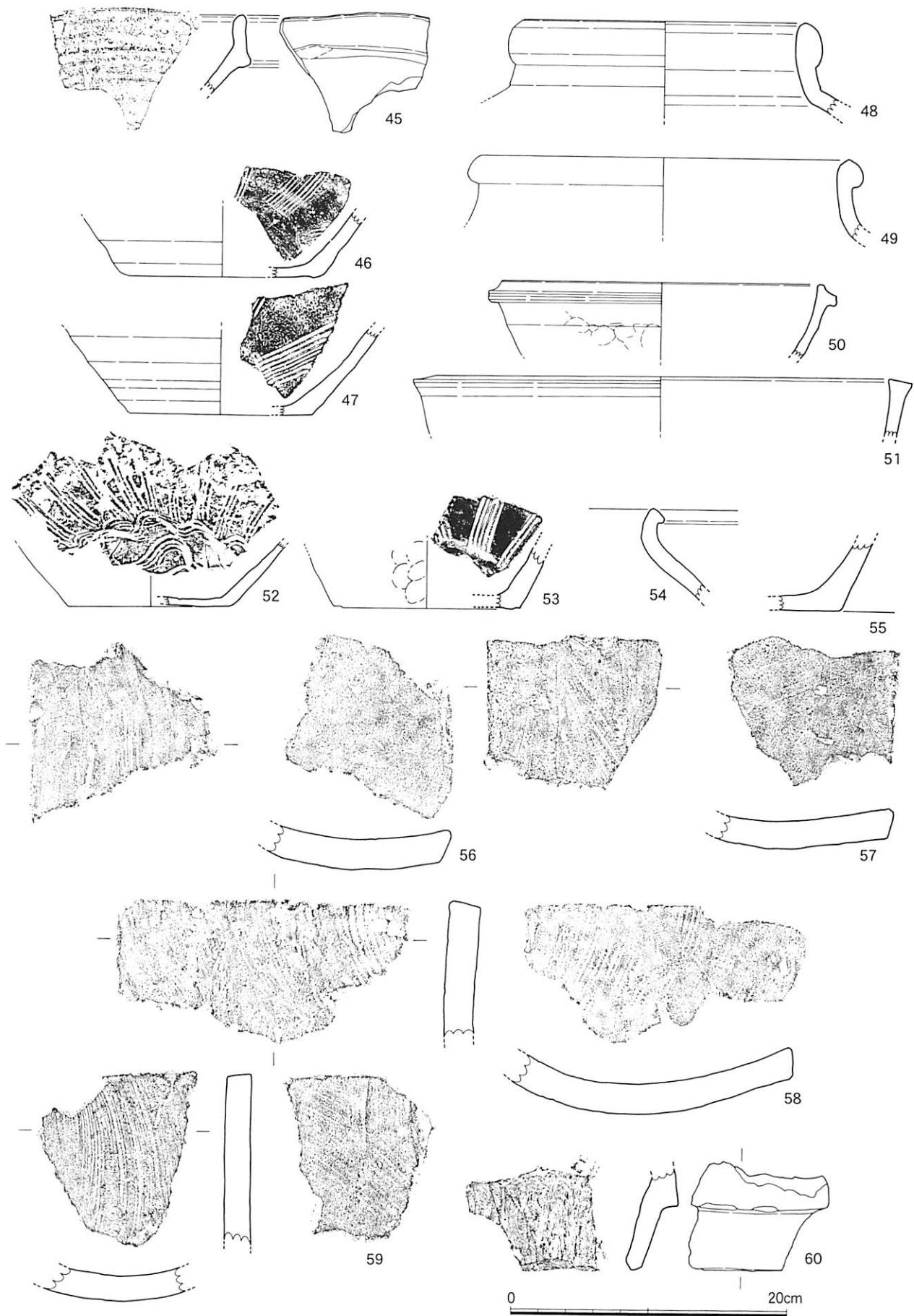
1 は鎌蓮弁を有する青磁碗で 13 世紀に比定されるものである。2～14 は在地系のロクロ成形土師器で、概ね 15 世紀後半代の所産と思われるものである。15 は胎土白色で、器壁の薄いロクロ成形土師器である。16 は土製灯火具と思われ、貫通する穴が穿たれている。坏部は欠失し、全形は不明である。17 は黒色土器 A 類の碗である。18 は中国産と推定される焼締陶器鉢の底部である。19 は瓦質土器擂鉢、20 は備前焼の甕である。21 は備前焼擂鉢で、15 世紀後半のものであろう。22 は瓦質土器の香炉で三足がつくものである。23 は瓦質土器の鍋で、体部下半はヘラケズリされている。24 は土師質土器の甕である。

SD433 (第 52 図)

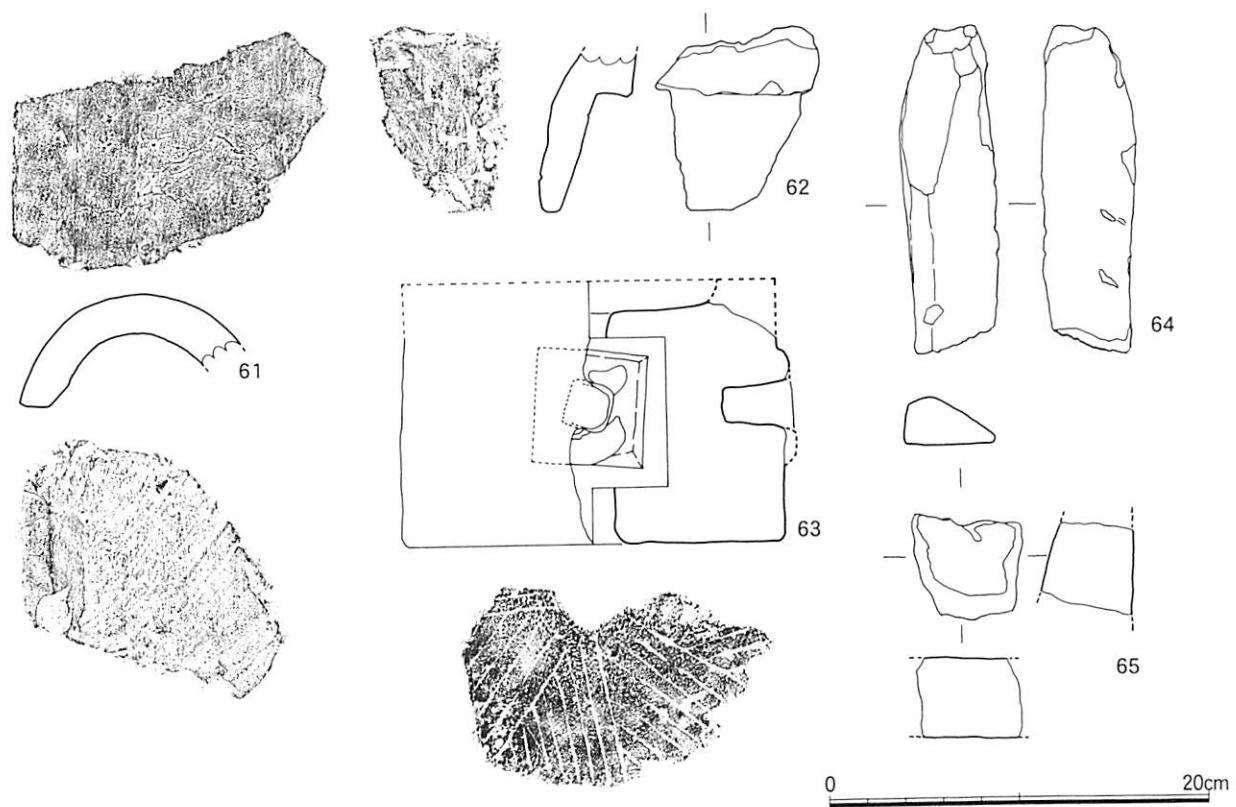
C-3 区で検出され、SD970 の南側に並行する溝状遺構で、主軸方向は SD970 とほぼ一致する。攪乱より東側では検出されず、この付近で収束している可能性が高いとみられる。最大幅は 1.1m あるが、検出面からの最大深は 5 cm 程度と極めて浅く、性格は不明である。図示し得る遺物は無いが、京都系土師器片が出土しているこ



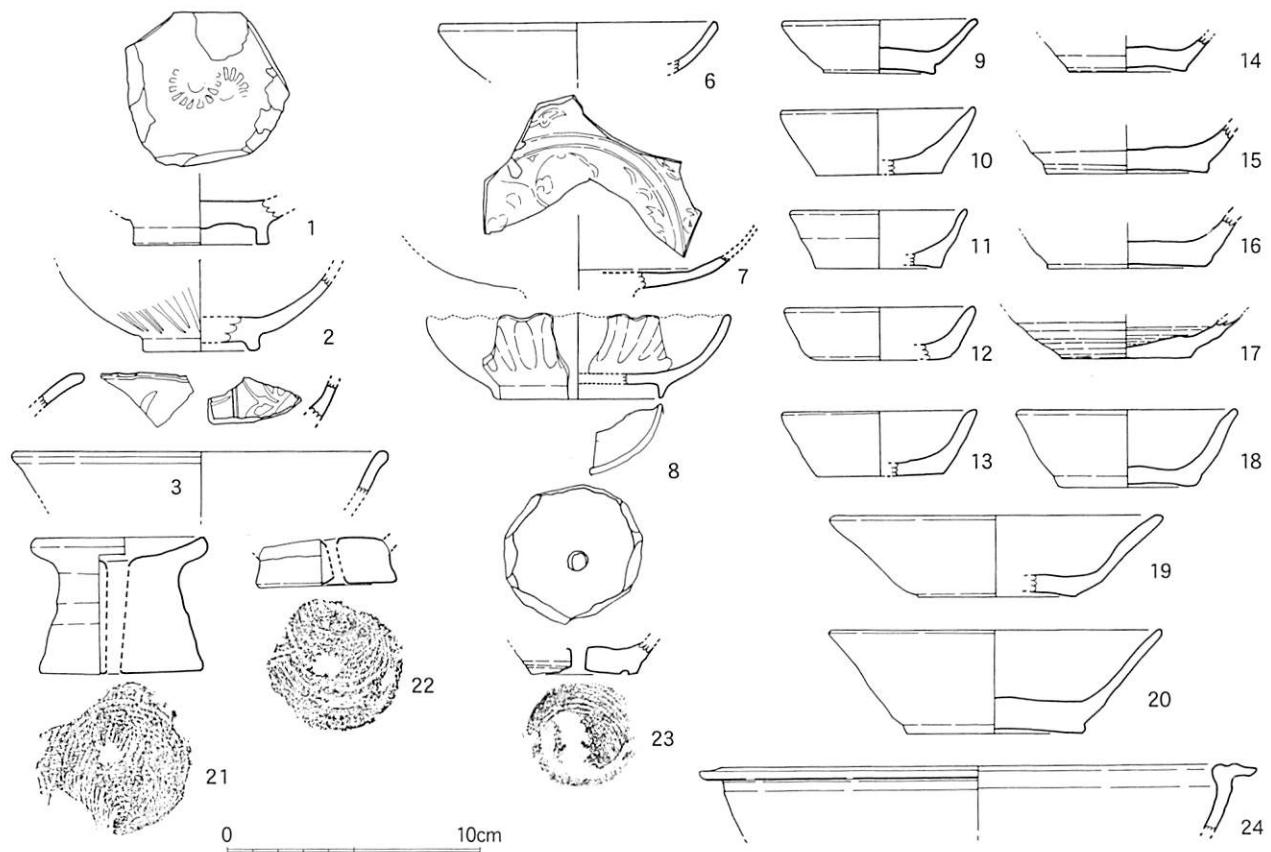
第55図 SD970(第1次調査)出土遺物1(1/3)



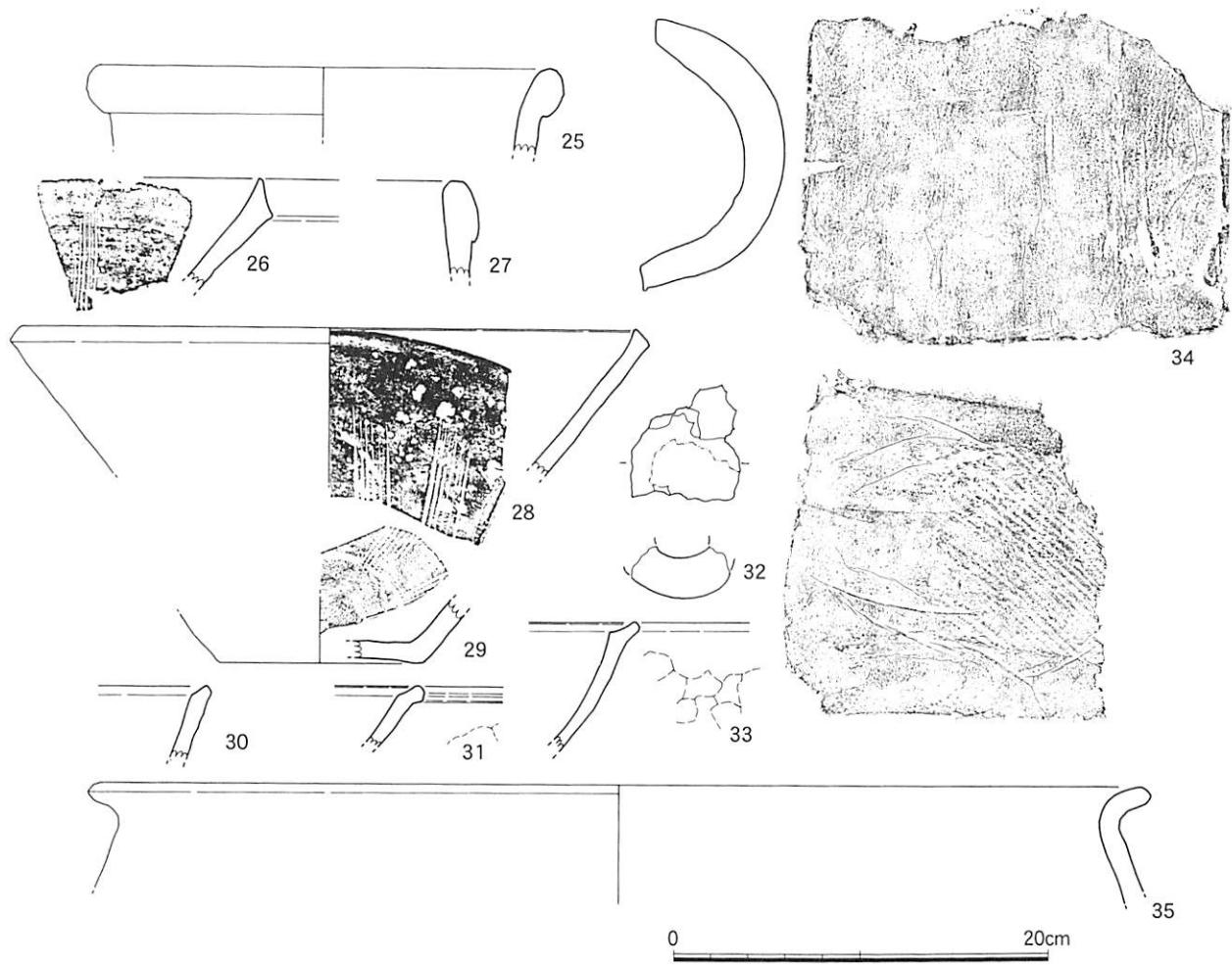
第56図 SD970(第1次調査)出土遺物2(1/4)



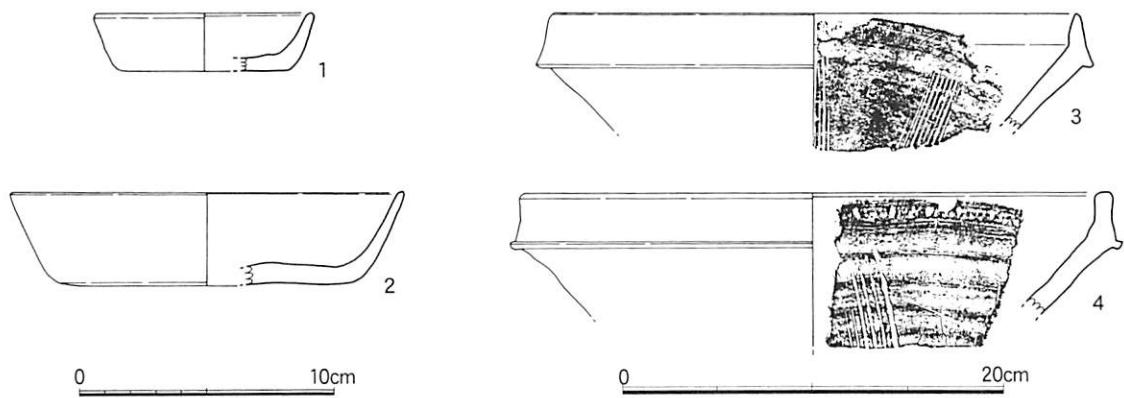
第57図 SD970(第1次調査)出土遺物3(1/4)



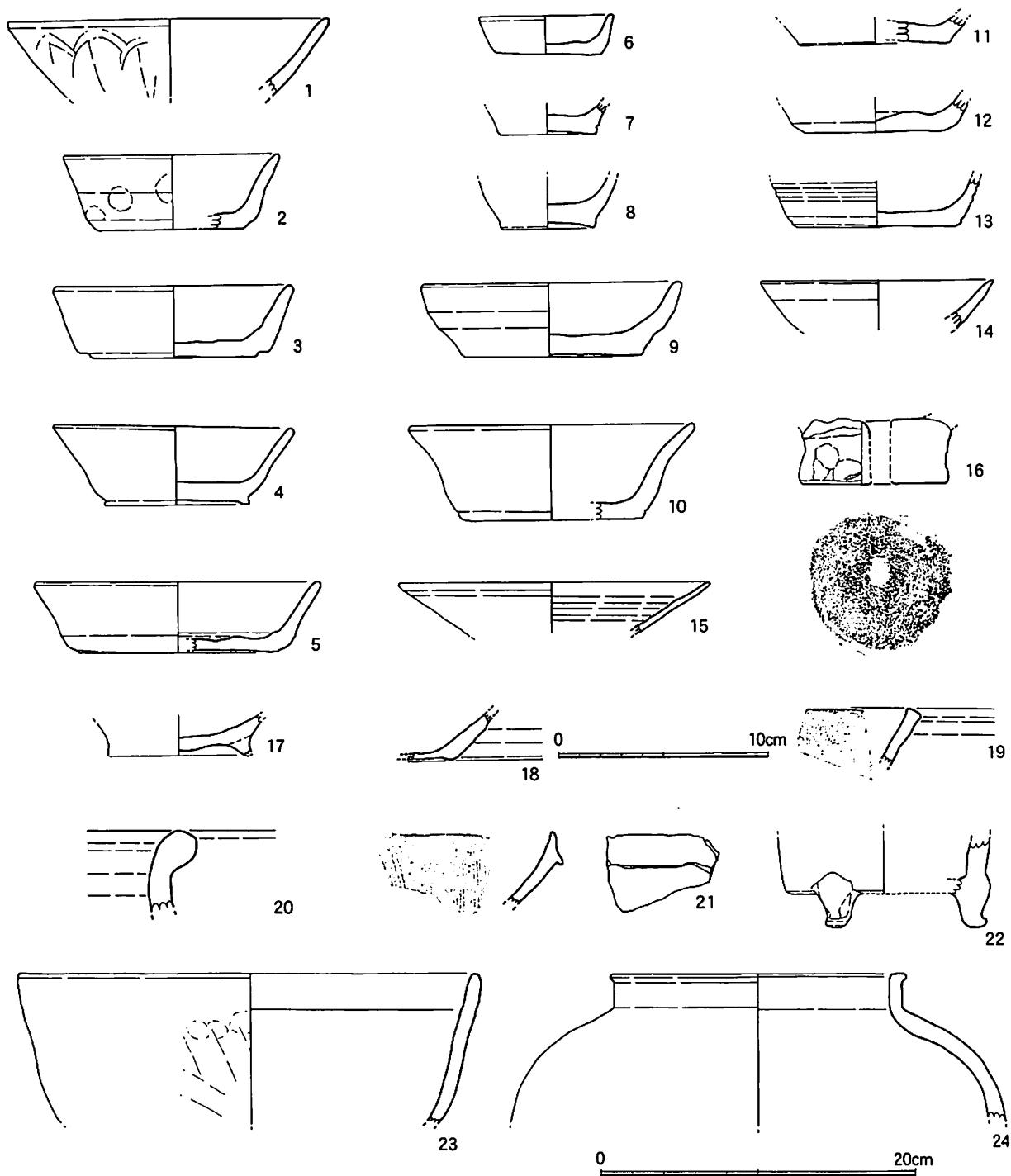
第58図 SD403出土遺物1(1/3)



第59図 SD403出土遺物2(1/4)



第60図 SD408出土遺物実測図(1・2:1/3, 3・4:1/4)



第 61 図 SD978 出土遺物 (1 ~ 18 : 1/3, 19 ~ 24 : 1/4)

とから、廃絶時期は 16 世紀中葉まで下る可能性がある。位置関係・方向及び推定される帰属時期から SD970 との関連が想定される。

土坑 (SK)

SK011 (第 62 図)

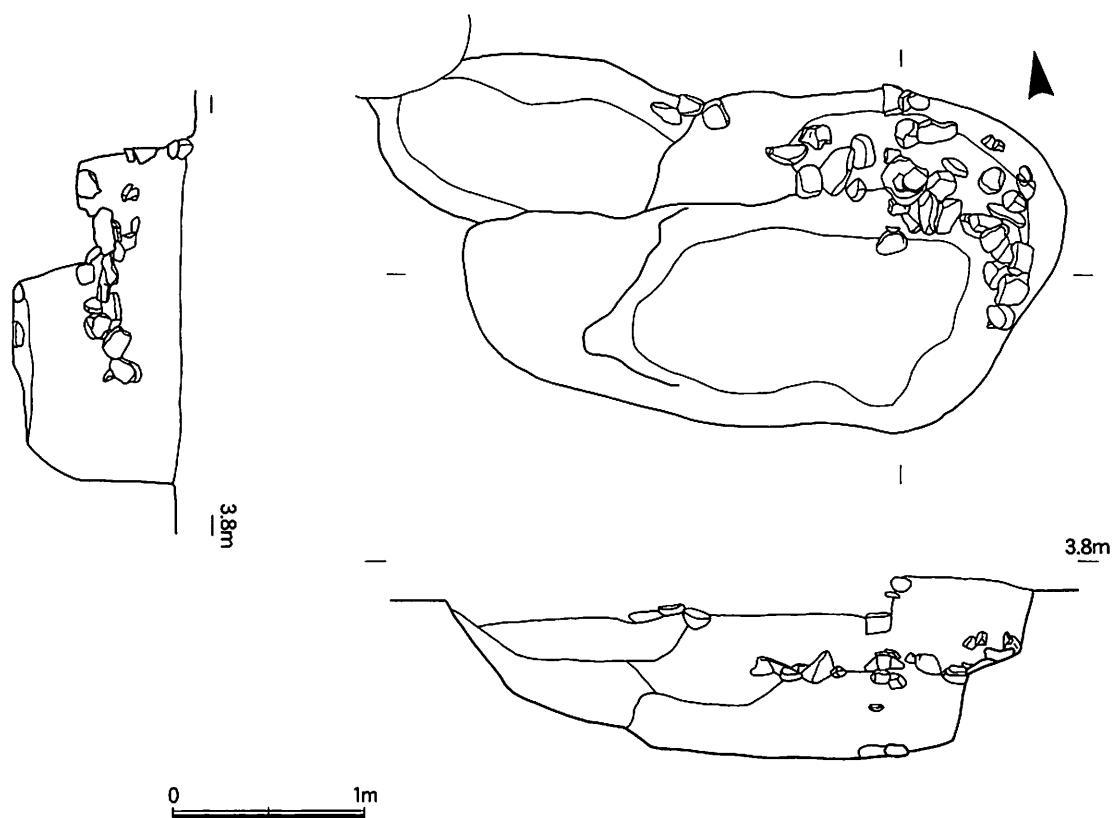
C-6 区で検出された土坑で、長軸 3.7 m、短軸 1.8 m、最大深 0.9 m の大型の遺構である。内部にはテラス状の部分があり、ここから多数の礫が床面ないし壁面に張り付いた状態で出土した。本来は石組みがあったものと推定される。埋土中からは鉄滓や炉壁と推定される焼土塊が出土しており、金属生産と関連する遺構の可能性が考えられる。埋土上部が灰褐色砂質土であり、道路状遺構下部の土層と類似していることから第 2 面の遺構と推定している。

SK145 (第 63 図)

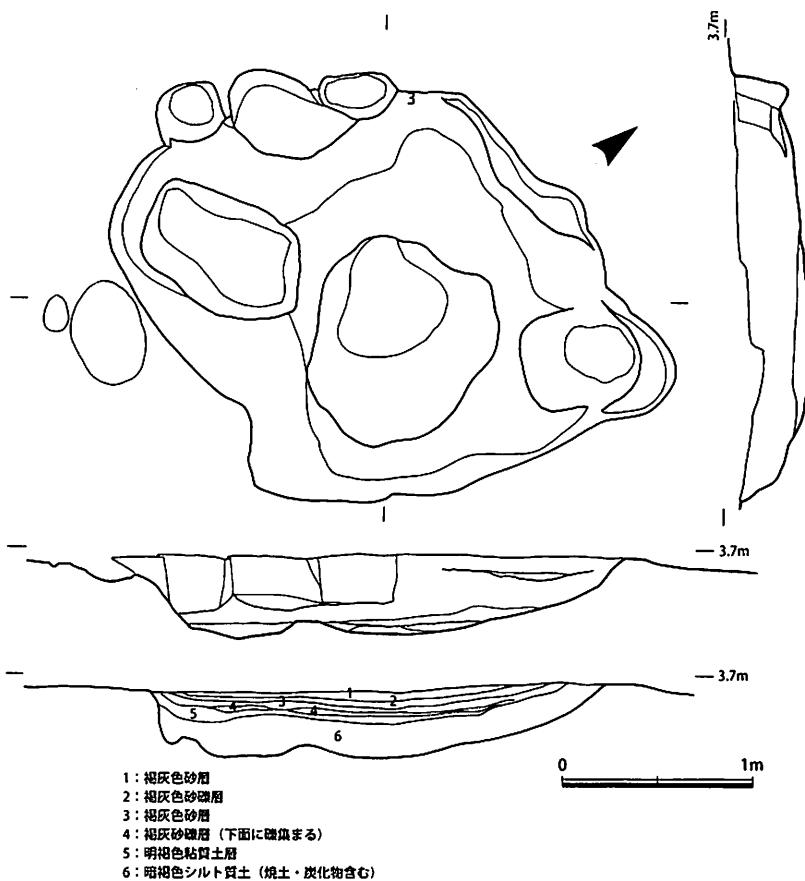
C-5 区で検出された土坑で、長軸 3.1 m、短軸 2.3 m、を測る規模の大きい遺構であるが、深さは最大で 0.35 m と浅いものである。埋土の上半部分は、砂層あるいは砂礫層の互層となっており、これは道路状遺構の整地層と一連のものと推定される。従って、SK145 は、道路状遺構築造により埋められた可能性が高いと考えられる。遺物の中に京都系土師器が存在することから、その廃絶時期は 16 世紀中葉にまで下る可能性がある。

出土遺物 (第 64 図)

1 ~ 3 は青花皿 B1 群である。4 ~ 8 は青磁碗である。4 は 13 世紀代に比定される鎧蓮弁を有するもので、混入品であろう。11 は京都系土師器皿である。9・10・12 はロクロ成形の土師器小皿である。13 ~ 28 はロクロ成形の土師器坏で、内面に工具による段が形成されるものが主体である。薄手・白色の土師器は認められない。29 は瓦質土器の椀である。30 は砂岩製の砥石で、繰り返し使用され、溝状の作業面が全面に見られるまでに至っている。



第 62 図 SK011 平面・断面図 (1/40)



第 63 図 SK145 平面・断面・土層断面図 (1/40)

SK182 (第 65 図)

D-5 区から D-6 区にかけて検出された土坑で、長軸 2.2 m、短軸 1.75 m、最大深 0.45 m を測る。埋土の最上層には、道路状遺構の整地層と酷似した砂礫層が認められることから、道路状遺構よりも下層の遺構と考えられる。出土遺物に最古相の京都系土師器が存在し、埋積時期は 16 世紀前半に遡る可能性がある。

出土遺物 (第 68 図)

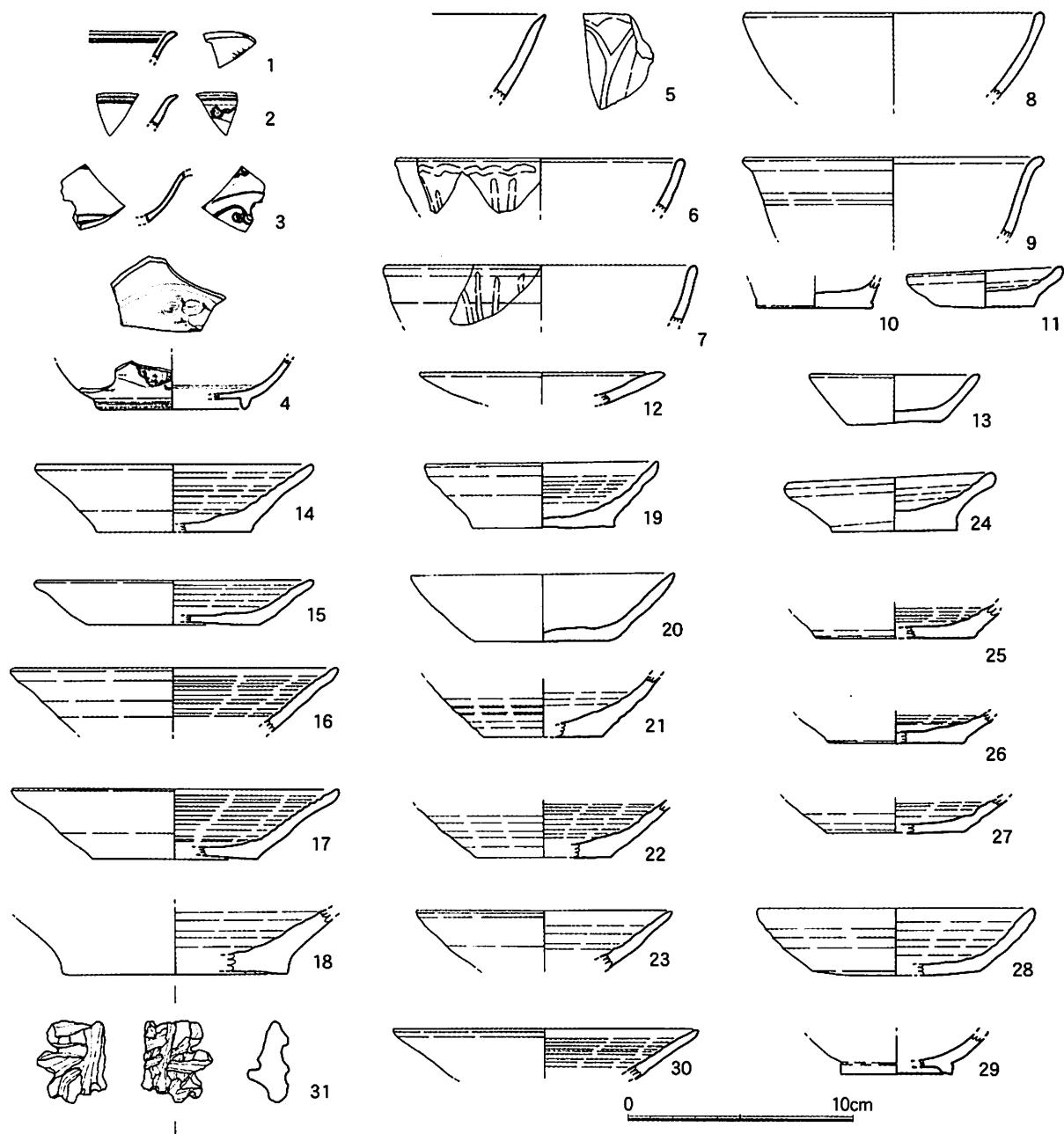
1 は青花皿 B1 群である。2 は京都系土師器皿である。器壁がきわめて薄く、胎土も粒子をほとんど含まない精良なものであるが、色は他の京都系土師器と類似した灰褐色～黄灰褐色系である。豊後における京都系土師器の編年上では塩地編年 1 期に先行する最も古い一群と考えられる。3 はロクロ成形の土師器坏で、内面には工具により明瞭な段が形成される。4 は備前焼擂鉢である。

SK275 (第 67 図)

C-5 区から C-6 区にかけて検出された浅い土坑である。長軸 3.4 m、短軸 1.9 m、深さ 0.3 m である。埋土は道路状遺構整地層と類似した砂礫土層であり、道路状遺構築造に伴って埋められた可能性が考えられる。

出土遺物 (第 69 図 4・5)

4 はロクロ成形の土師器坏、5 は完形品の京都系土師器小皿で、耳皿状に歪められている。



第 64 図 SK145 出土遺物 (1/3)

SK300 (第 66 図)

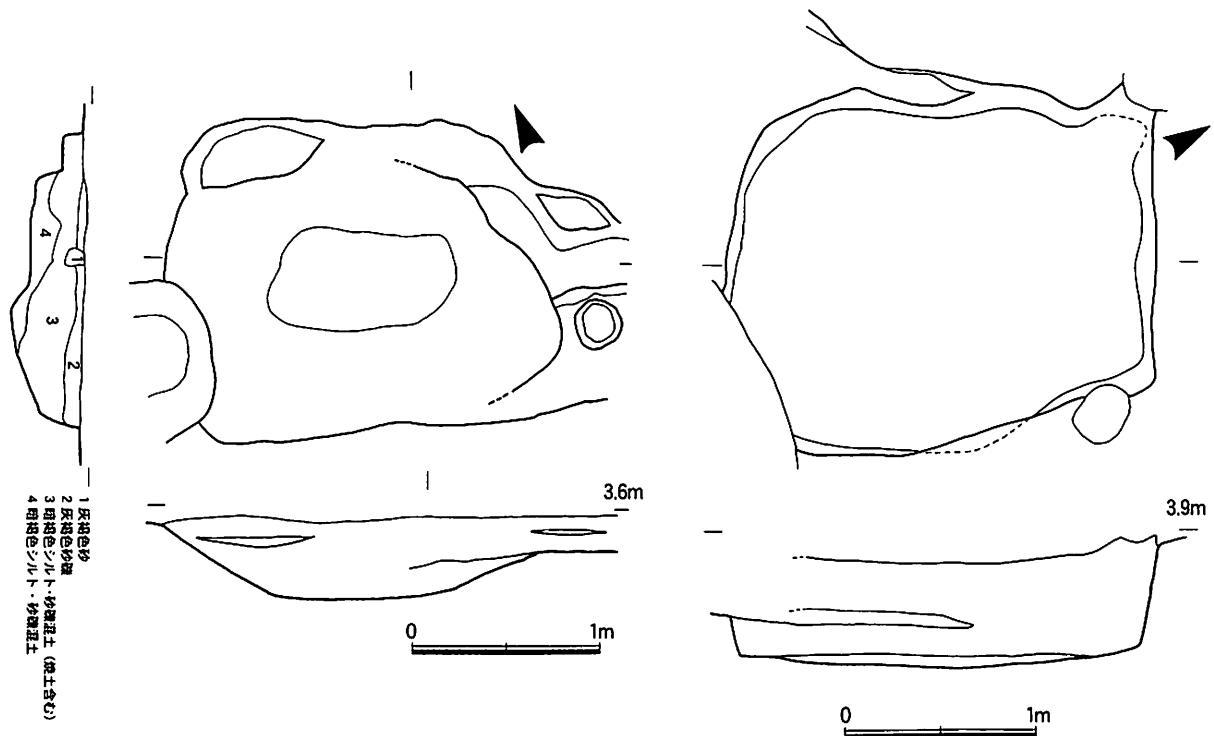
C-6 区で検出された土坑で、 $2.3\text{ m} \times 1.9\text{ m}$ の略方形を呈し、検出面からの最大深は 0.65 m である。埋土は灰褐色粘質土および灰褐色砂質土からなり、道路状遺構整地層下部の土層に類似していることから、第 2 面の遺構としたものである。出土遺物から、16 世紀中葉に位置づけられる。

出土遺物 (第 69 図 1 ~ 6)

1 ~ 3 は京都系土師器で、塩地編年 1 期から 2 期にかけてのものである。5・6 はロクロ成形の土師器坏で、内面は工具により段状に成形される。4 はいわゆる「赤間石」と称される輝緑凝灰岩製の硯である。

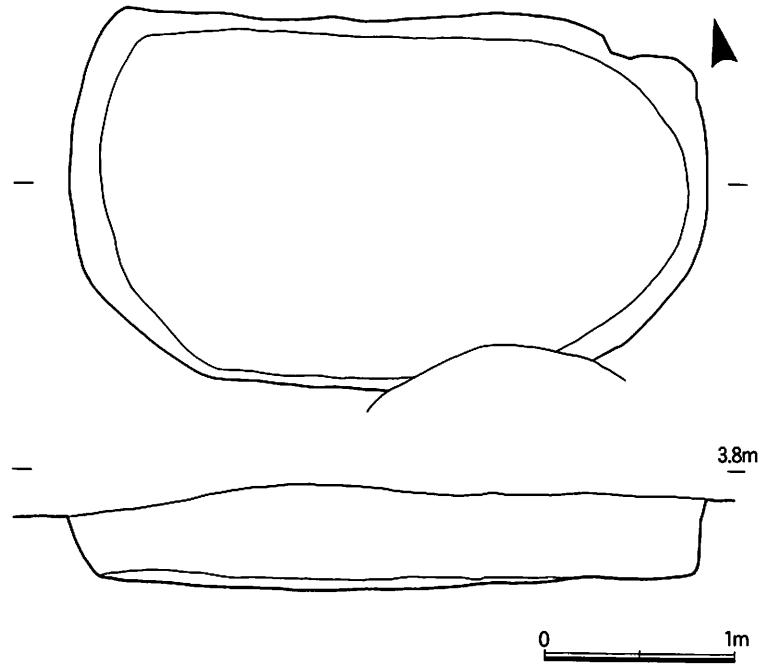
SK401 (第 70 図)

C-3 区から C-4 区にかけて検出された土坑で、SD408 によって切られている。道路状遺構の整地層直下で検

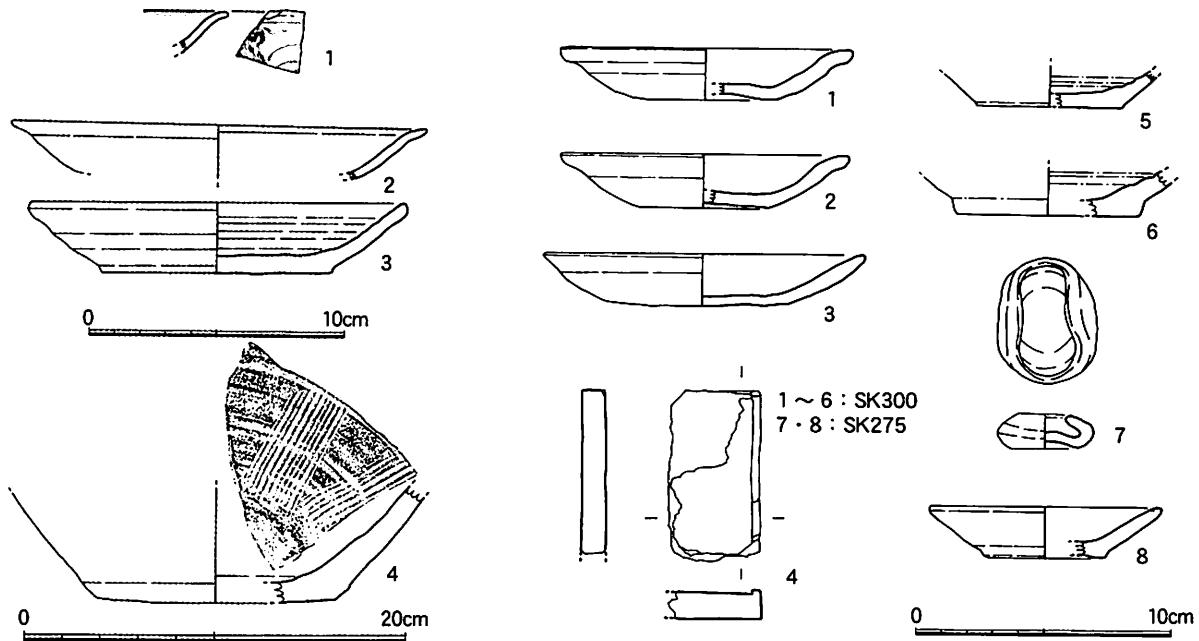


第65図 SK182平面・断面・土層断面図 (1/40)

第66図 SK300平面・断面図 (1/40)



第67図 SK275平面・断面図 (1/40)



第68図 SK182出土遺物 (1~3:1/3, 4:1/4)

第69図 SK275・SK300出土遺物 (1/3)

出され、検出面からの最大深は 0.35 m である。SD408 を挟み南側に隣接する SK476 は、一連の遺構と思われたが、床面のレベルが明らかに異なるため、別遺構と考えられる。出土遺物に古相の京都系土師器が認められ、埋積時期の下限は、16 世紀中葉に下る可能性がある。

出土遺物 (第 71 図)

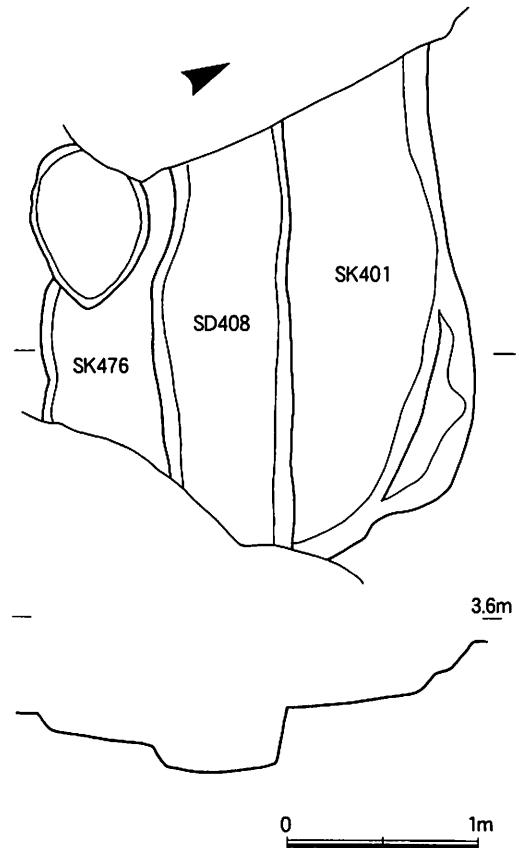
1・2 は青花碗 C 群である。3 は青磁碗で、外面に鎧状に太い沈線を施すものである。4 は、京都系土師器の小皿で、器面を歪めて耳皿状にしたものである。5～8 はロクロ成形土師器の小皿及び壺で、15 世紀代に位置づけられるものである。9 はロクロ成形の土師器で、口縁部に強いヨコナデが認められ、京都系土師器を模倣したものとも考えられるが、胎土や発色は他のロクロ成形土師器と変わらない。10・11 は京都系土師器皿で、塩地編年 1 期に位置づけられるものである。12 は常滑焼の甕の口縁部である。

SK453 (第 72 図)

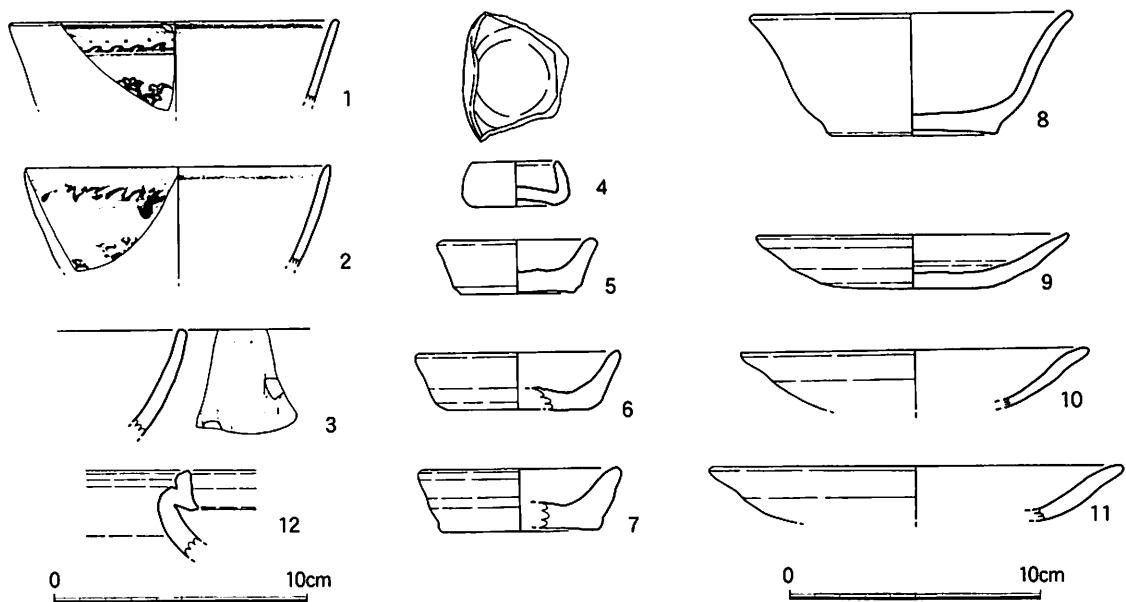
C-4 区で検出された浅い土坑で、SK155 に切られている。長軸 2.0 m、短軸 1.2 m、最大深は 0.15 m である。遺構埋土の上部が、道路状遺構整地層下部の土層と類似しているため、道路状遺構よりも下層に位置づけられたものと判断した。遺物は僅少であるが、16 世紀前半と推定される。

出土遺物 (第 73 図)

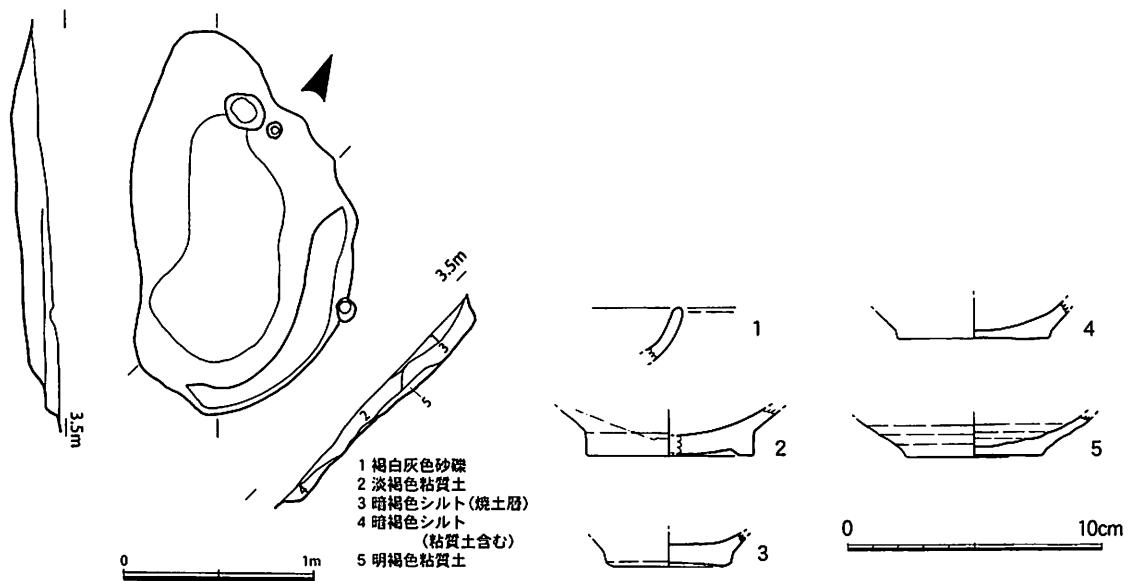
1 は青磁皿、2 は白磁碗の IV 類である。3～5 はロクロ成形の土師器である。



第70図 SK401平面・断面図 (1/40)



第71図 SK401出土遺物 実測図 (1~11: 1/3, 12: 1/4)



第72図 SK453平面・断面・土層断面図 (1/40)

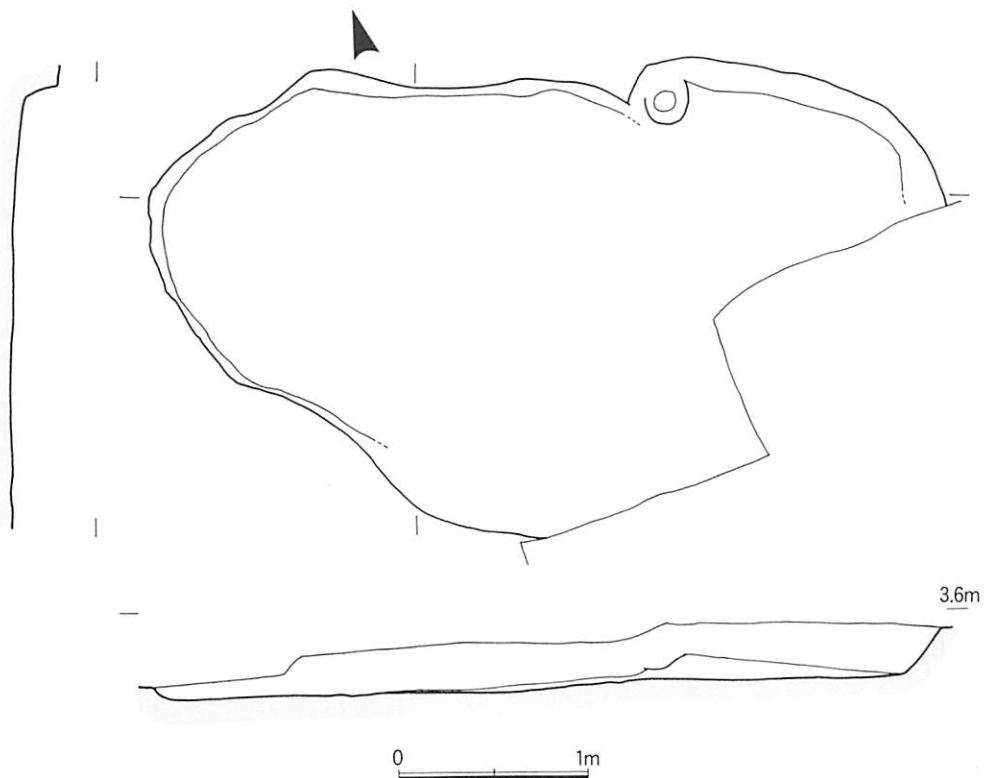
第73図 SK453出土遺物 (1/3)

SK827 (第74図)

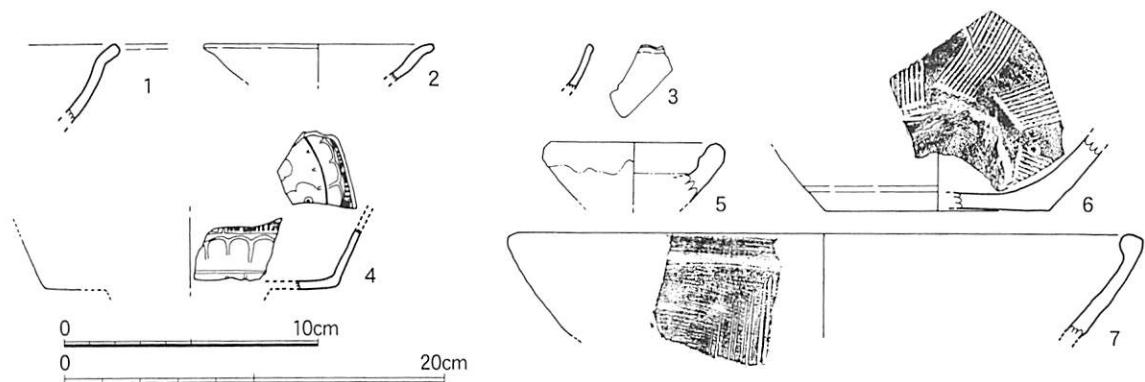
B-3区の道路状遺構直下で検出された浅い土坑で、南側と東側が攪乱により切られているが、現状で長軸4.2m、短軸2.4m、最大深0.3mを測る。

出土遺物 (第75図)

1は青磁碗、2は青磁皿である。3は白磁皿で、菊皿と思われる。4は枢府系の白磁皿で、内面には文様が陽刻される。14世紀代に比定されるものである。5は手づくねで成形されたトリベで、口縁部内外面にはスラグ



第74図 SK827 平面・断面図 (1/40)



第75図 SK827 出土遺物 (1～5:1/3, 6・7:1/4)

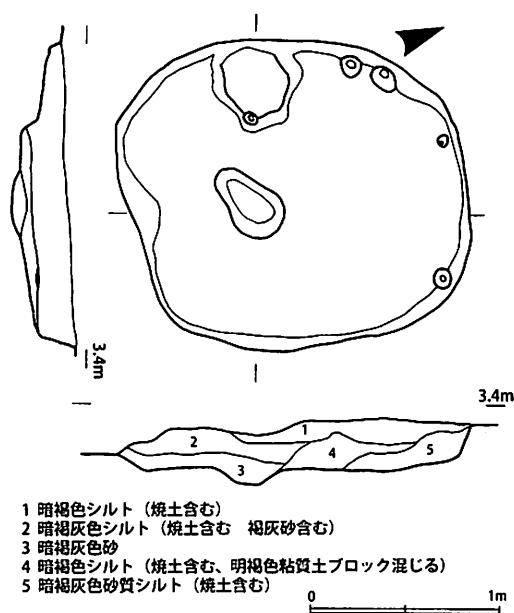
が付着している。6は備前焼の擂鉢である。7は瓦質土器の擂鉢で、口縁端部内面が玉縁状になるものである。15世紀後半以降に比定される。

SK868 (第76図)

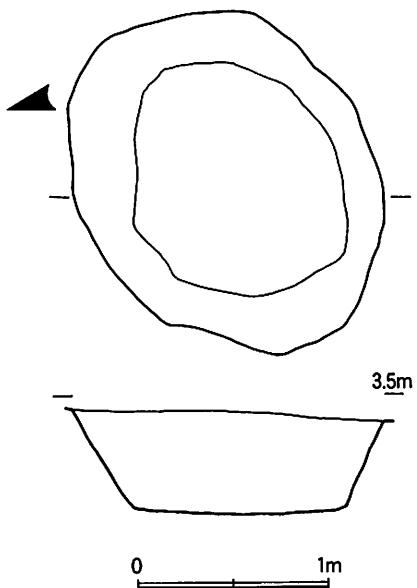
B-3区からB-4区にかけての道路状遺構直下で検出された土坑である。長軸1.9m、短軸1.6mの楕円形状で、攪乱により上部が削平されているため残存する深さは0.3mである。図示していないが、出土遺物に京都系土師器小片がみられるため、廃絶時期の下限は16世紀中葉に下る可能性がある。

出土遺物 (第78図1・2)

8はロクロ成形土師器小皿、9は青花皿B1群である。



第 76 図 SK868 平面・断面図 (1/40)



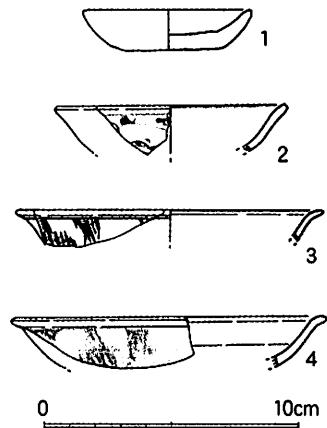
第 77 図 SK968 平面・断面図 (1/40)

SK968 (第 77 図)

B-1 区の道路状遺構直下で検出された土坑で、長軸 1.9 m、短軸 1.5 m、最大深 0.55 m を測る。埋土は、しまりのない暗褐色粘質土単層で、一度に埋め戻されている可能性が高いことが観察された。道路上遺構構造に伴って埋め戻されたことも考えられる。図示できなかつたが、出土遺物中に京都系土師器小片があることから、埋積時期は 16 世紀中葉に下る可能性がある。

出土遺物 (第 78 図 3・4)

13・14 は青花皿 B1 群である。



第 78 図 SK868・SK968 出土遺物 (1/3)

井戸跡 (SE)

SE400・SE460 (第 79 図)

A3 区から A4 区にかけて検出された井戸跡で、2 基の井戸が切り合っており、SE400 が SE460 を切って築造されていることが確認された。両者を合わせると長軸約 6.0 m、短軸約 4.4 m に達する。掘り方最深部の標高はいずれも 0.35 ~ 0.4 m であった。

SE460 は、直径約 75 cm の結桶を井筒として埋置したもので、2 段が残存していた。1 段目と 2 段目の境界付近に相当するレベルでは、ザル状の製品が伏せられた状態で検出された。その直下からは 8 枚の中国錢が出土しており、井戸廃絶時に何らかの祭祀行為が行われたものと推定される。

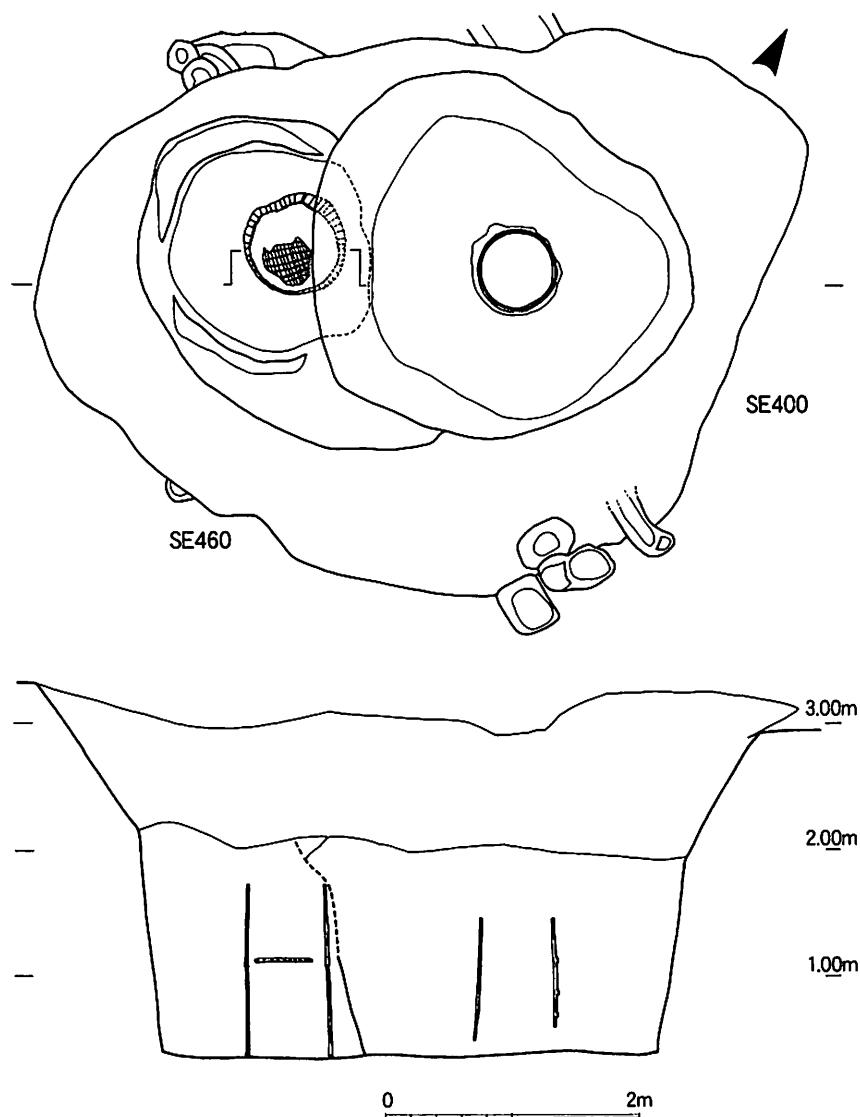
SE400 は、直径約 60 cm の結桶を積み上げて井筒としたものであり、2 段が残存していた。

これらの井戸は埋土の上部から京都系土師器が出土していることから、その廃絶時期の下限は 16 世紀中頃と

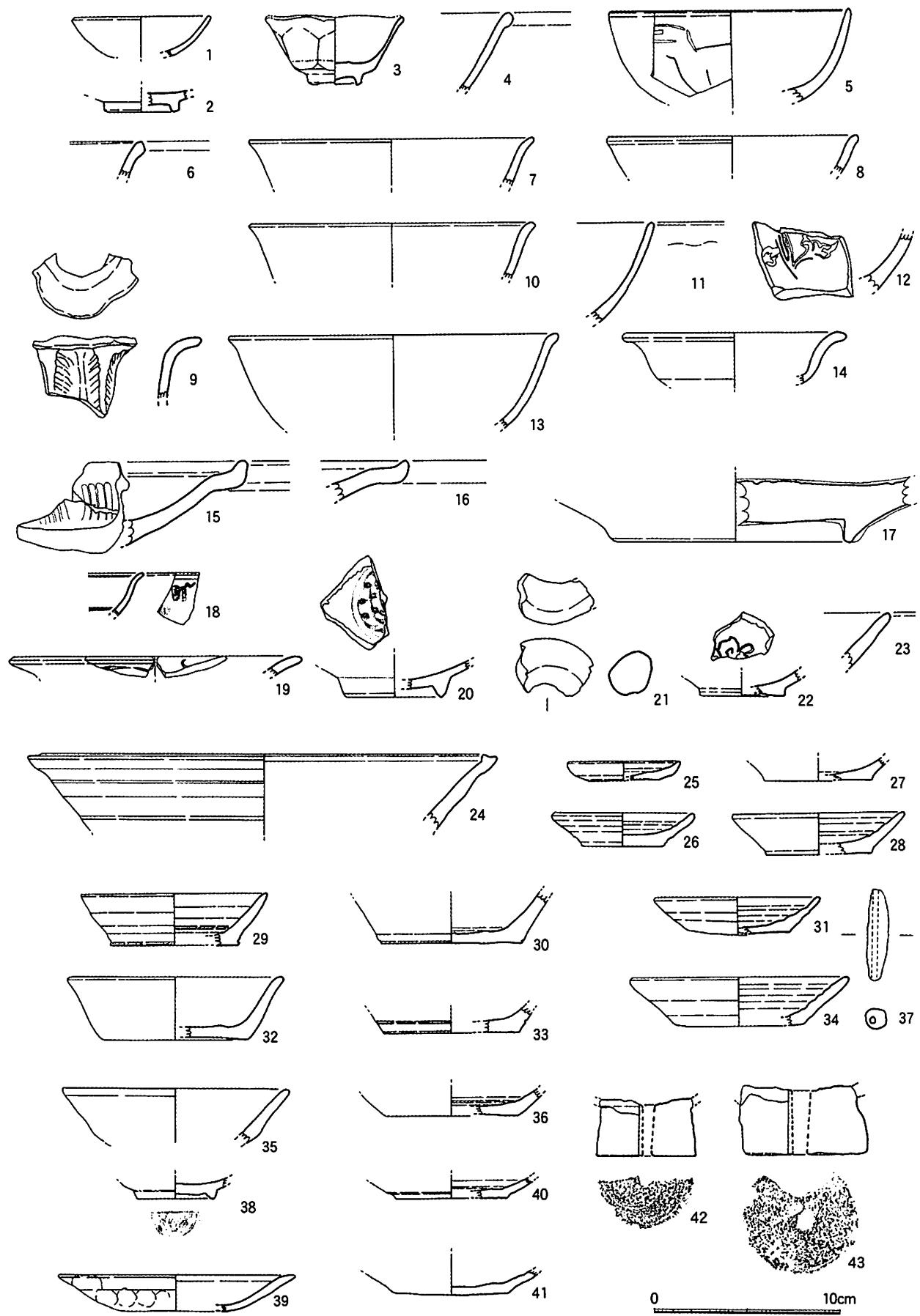
推定される。

SE400 出土遺物 (第 80 図・第 81 図)

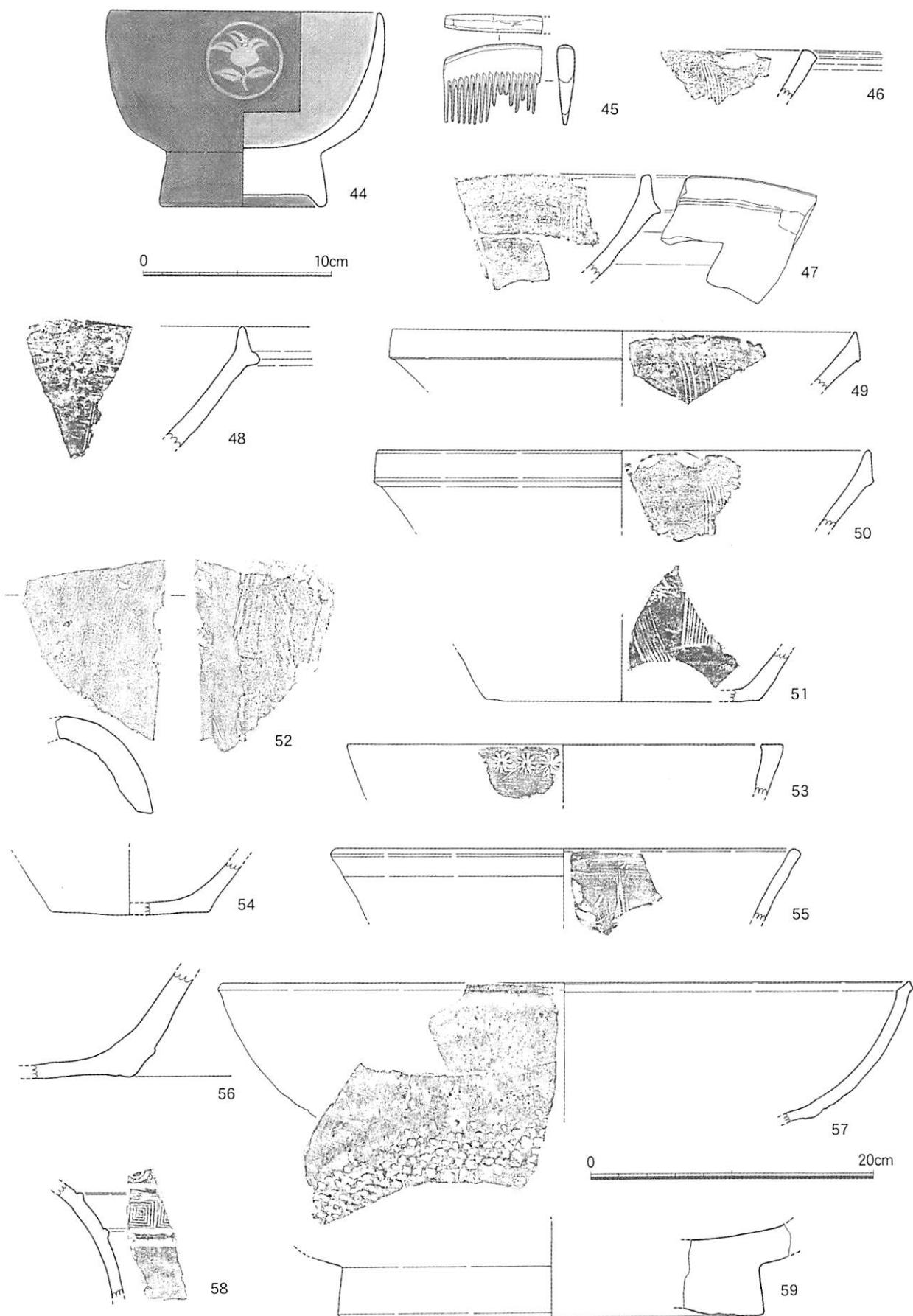
1・2 は白磁皿である。3 は白磁八角鉢で、高台置付けは、3箇所が浅く抉られる。4～13 は青磁碗である。12 は内面に、唐草状の文様が陰刻されているものである。14 は青磁皿である。15～17 は青磁盤である。15 の内面は鎬状の沈線がヘラ彫りされる。17 は見込みに不明な文様がヘラ彫りされているようである。18・19 は青花皿 B1 群、20 は青花碗 C 群であろう。21 はタイ産陶器四耳壺の耳である。淡青灰色に発色する釉がかかる。22 は畿内産と推定される緑釉陶器で、見込みには花文がヘラ彫りされる。23 は越州窯産の青磁碗口縁部である。24 は瀬戸・美濃産の陶器鉢である。内外面に灰釉が掛かる。25～36 は、在地系のロクロ成形土師器である。40・41 は、ロクロ成形土師器で、白色に近い胎土を有するものである。42・43 は土製灯火具で、いずれも坏部を欠失しているため、全形は不明である。在地系ロクロ成形土師器と共に胎土である。39 は京都系土師器皿で、塩地編年 1 期に位置づけられる古相のものである。38 は瓦質土器碗で高台内には糸切り痕が認められる。44 は漆器椀である。外面は黒色、内面には暗赤色の漆が塗られ、丸に橘文及び鳥文が朱漆で施文される。45 は木製の櫛で、16 本の歯が残存する。46～51 は備前焼の擂鉢である。46 は 14 世紀前半に位置づけられるもので、備前焼擂鉢が広域流通しはじめる時期のものである。47～50 は 15 世紀台のものと考えられる。



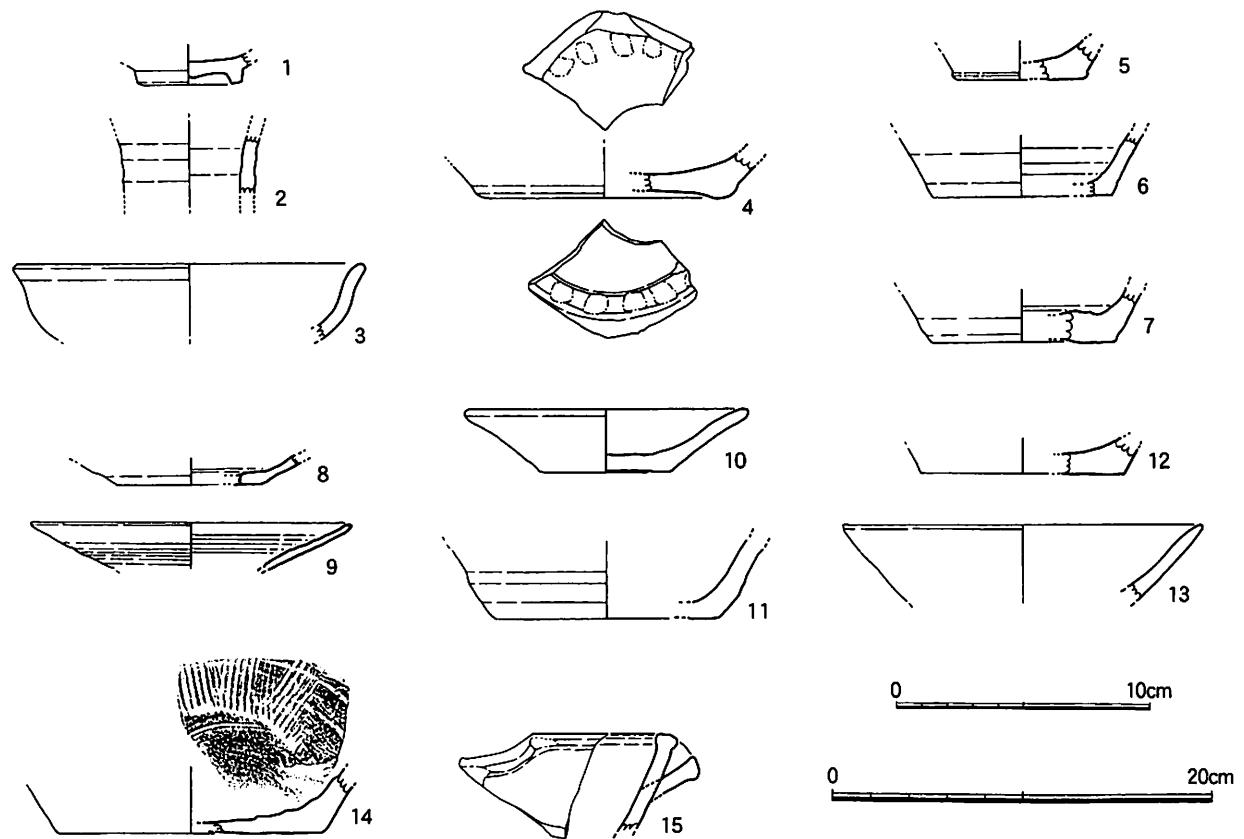
第 79 図 SE400・SE460 平面・断面図 (1/60)



第80図 SE400出土遺物1 (1/3)



第81図 SE400出土遺物2 (44・45:1/3, 46~59:1/4)



第82図 SE460出土遺物 (1~13:1/3, 14·15:1/4)

53は瓦質火鉢で、外面には菊花文がスタンプされる。54は産地不明の焼締陶器鉢で、擂目は認められないが内面が摩滅していることから、擂鉢もしくはこね鉢と考えられる。55は瓦質土器擂鉢である。56は備前焼大甕の底部である。57は瓦質土器の鍋で、胴部下半には格子状のタタキが著しい。58は瓦質土器火鉢。59は茶臼で、安山岩製である。

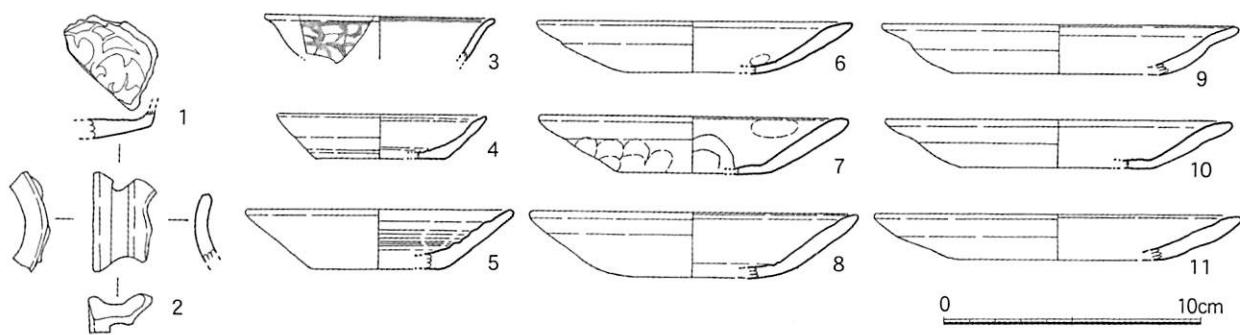
SE460出土遺物 (第82図)

1は白磁皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎされている。2は青磁で、瓶の頸部と推定される。3は青磁皿。4は越州窯系の青磁碗で、見込み及び高台に各5箇所の目跡が確認できる。大宰府分類ではⅡ類とされる粗製のもので、8世紀末~10世紀中頃に位置づけられる。8·9はロクロ成形の土師器で胎土が白色に近い薄手のものである。5~7·10~13は在地系のロクロ成形土師器である。14は備前焼の擂鉢である。15は瓦質擂鉢の片口部である。

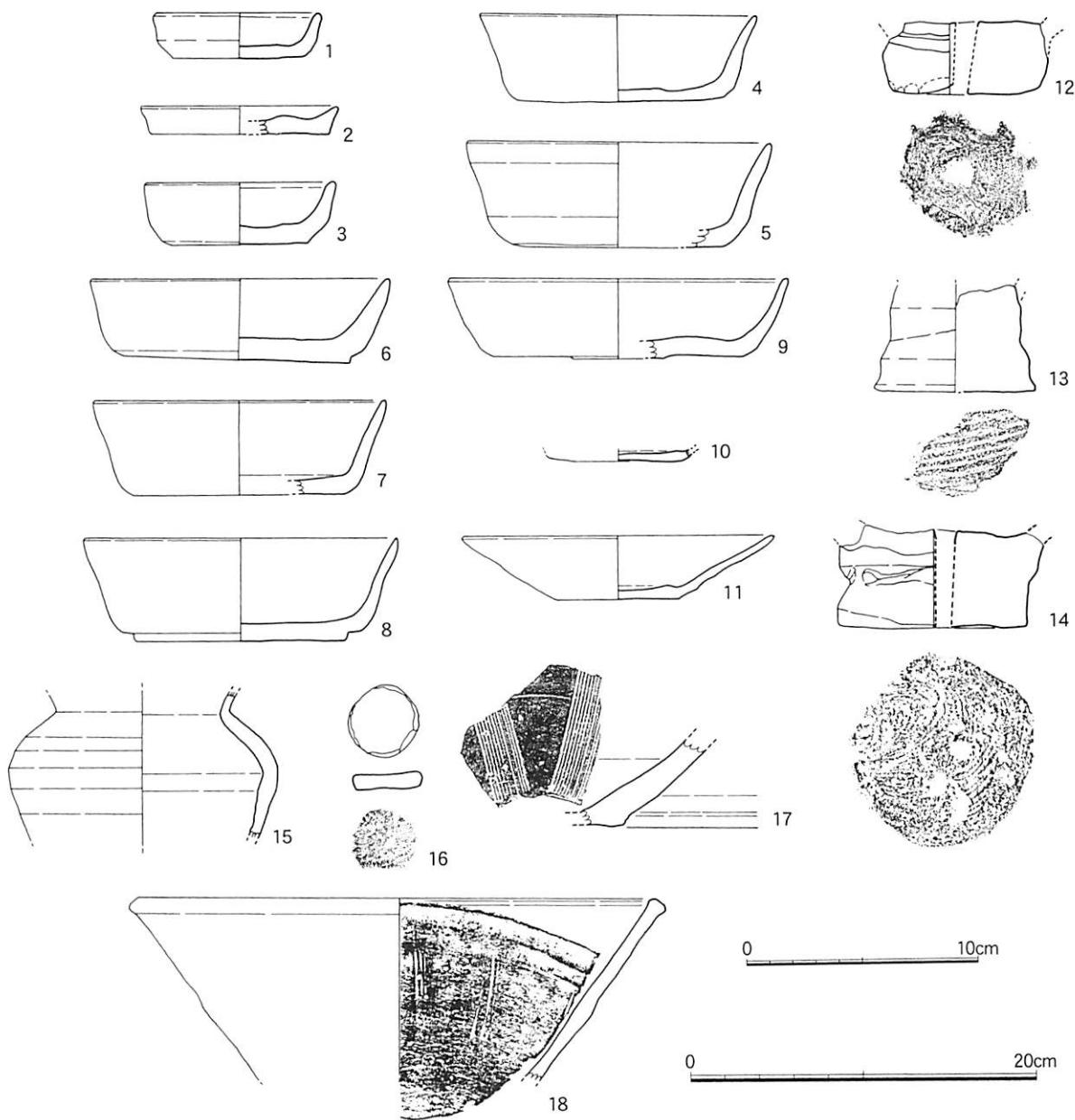
SE400・SE460検出時出土遺物 (第83図)

井戸検出時に出土したものでどちらの井戸に帰属するのか不明なものである。

1は枢府系の青白磁皿で、内面には唐草状の文様が陽刻される。2は青磁瓶の耳と考えられるものである。3は青花皿B1群である。4·5はロクロ成形の土師器、6~11は京都系土師器で、後者は塩地編年1期に位置づけられるものである。



第83図 SE400・SE460検出時出土遺物 (1/3)



第84図 SX409出土遺物 (1~16:1/3, 17・18:1/4)

性格不明な遺構 (SX)

SX409 (第 52 図)

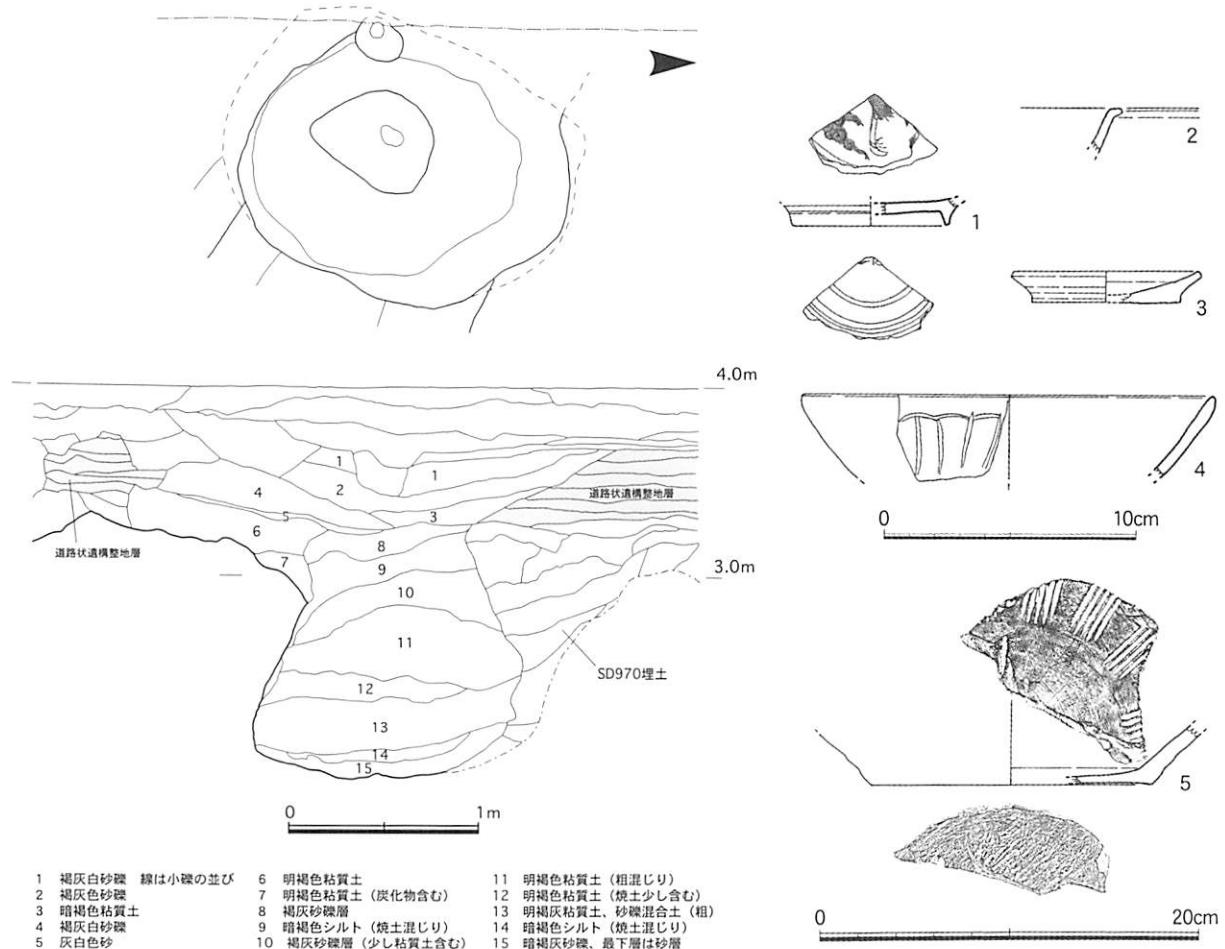
C-4 区で検出された遺構で、SE400・460 に掘り込まれたピット状の遺構である。まとまった出土遺物があるため掲載するが、道路状遺構上層より掘り込まれた遺構である可能性もある。

出土遺物 (第 84 図)

1～9 は在地系の口クロ成形土師器で、坏 (6～9) は口径に対し底径が比較的大きい「箱形」を呈するものである。概ね 15 世紀後半代のものと推定される。10・11 はいわゆる薄手・白色のロクロ成形土師器である。12～14 は土製灯火具と考えられる。坏部を欠失しているため、全形は不明である。12・14 と 13 では器形が大きく異なる。また、前者が在地系土師器と共に胎土を有するのに対し、後者は京都系土師器と類似するより白っぽい色調で粒子をほとんど含まない精良な胎土である。いずれもロクロ成形と推定されるが、13 は底部に板状の圧痕が認められる。SX409 の出土遺物については、その一括性が必ずしも保証できないため、これらが確実に共伴するかどうか疑問がある。15 は備前焼と考えられる広口の壺である。16 は土器片加工品であり、底部を円形に打ち欠いて再加工したものと推定される。17 は備前焼擂鉢である。18 は瓦質土器擂鉢である。

SX487 (第 85 図)

B-3 区から C-3 区にかけての調査区西壁沿いで検出された遺構である。長軸 1.8 m、短軸 1.4 m の橢円形状で、断面形は袋状になり、オーバーハンギングしている。底面は標高 1.95 m であり、最下層は砂層になっており、井戸



第 85 図 SX487 平面・土層断面図 (1/40)

第 86 図 SX487 出土遺物 (1～4: 1/3, 5: 1/4)

の可能性も考えられるが井筒は未検出である。遺構は SD970 の埋土を明らかに切って掘り込まれていることが観察される。さらに上の道路状遺構整地層も切っているようにも見受けられるが、この部分（1～4層）については別の遺構が重複して掘られている可能性が高いと考えられる。

出土遺物（第 86 図）

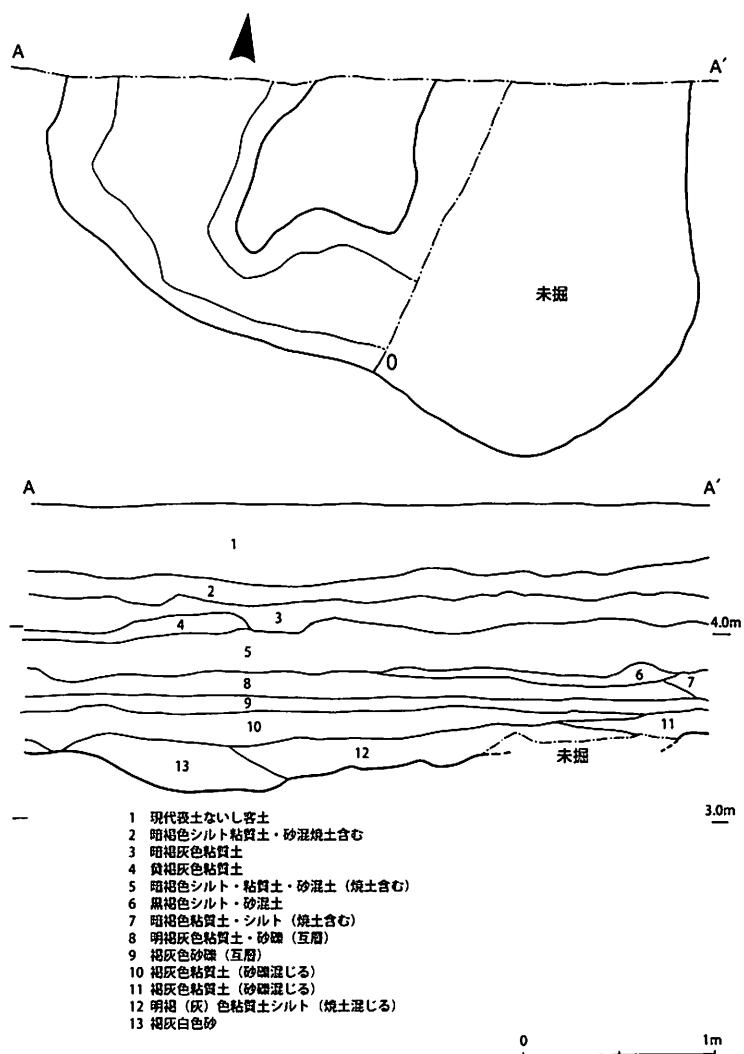
1 は青花皿 E 群である。2 は青磁皿、4 は青磁の碗である。3 はロクロ成形の土師器小皿で、内面に顯著な段を有する壊に伴うものと考えられる。5 は瓦質土器の擂鉢で、底部には板状の圧痕が観察される。

SX975（第 87 図）

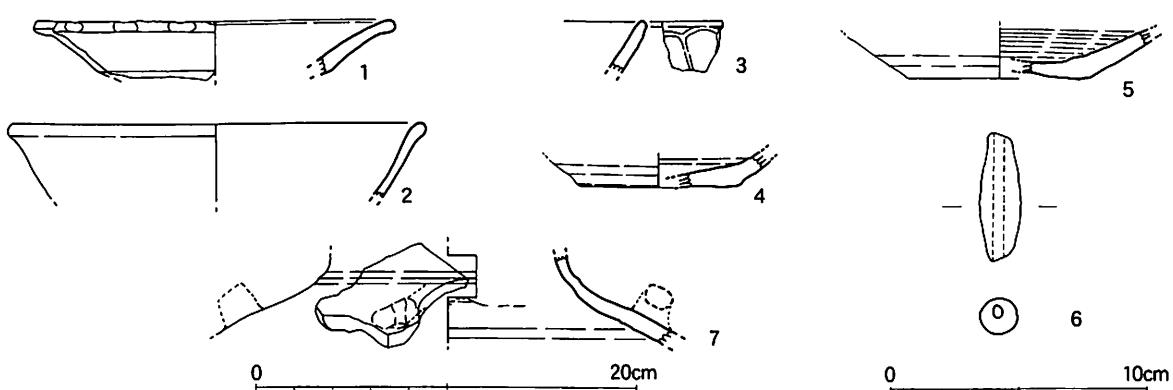
B-2 区から B-3 区にかけての壁面沿いで検出された性格不明の遺構で、浅い土坑状を呈するものである。道路状遺構の直下で検出された。東半分は完掘できておらず、全体の形状は不明であるが、東西 3.3 m、南北 2.0 m 以上の規模がある。検出面からの最大深は 0.35 m で、中央部付近の床面がやや高くなっているようである。出土遺物に京都系土師器が含まれず、16 世紀前半に遡る可能性がある。

出土遺物（第 88 図）

1 は、青磁稜花皿。2・3 は青磁碗である。4・5 はロクロ成形の土師器壊。6 は土錘である。7 は、タイ産と推定される、外面に黒釉の掛かる陶器四耳壺である。頸部が直立し、肩が大きく張る器形と考えられるもので、首里城などで出土例のある 15 世紀代に位置づけられる製品と考えられる。



第 87 図 SX975 平面・土層断面図 (1/40)



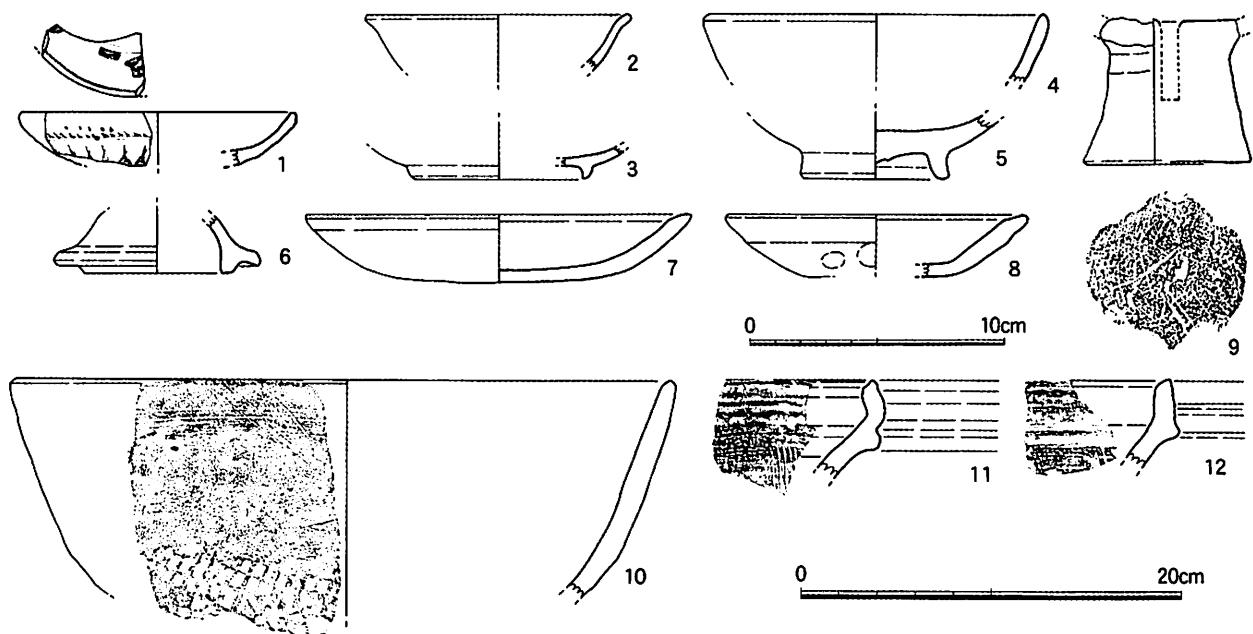
第 88 図 SX975 出土遺物 (1～6: 1/3, 7: 1/4)

SX700 (第 52 図)

B-3 区の遺構検出時に認められた落ち込みで、明確な遺構としては認識できず、道路状遺構整地層の一部であった可能性がある。長軸 5.0m、短軸 0.8m の範囲に広がり、最大深は 0.2m である。

出土遺物 (第 89 図)

1 は青花皿 C 群である。2・3 は白磁皿。4・5 は無文の青磁碗で、同一個体の可能性が考えられる。6 は青磁の蓋である。小型の壺等の蓋であると考えられる。7・8 は京都系土師器皿である。9 は土製灯火具で、壊部が欠失しているため、全形は不明である。胎土は通常のロクロ成形土師器と類似する。底部には糸切り痕が残る。10 は瓦質土器の鍋で、体部下半には格子状のタタキが明瞭に残る。11・12 は備前焼擂鉢で、概ね 16 世紀前半～中葉にかけてのものと推定される。



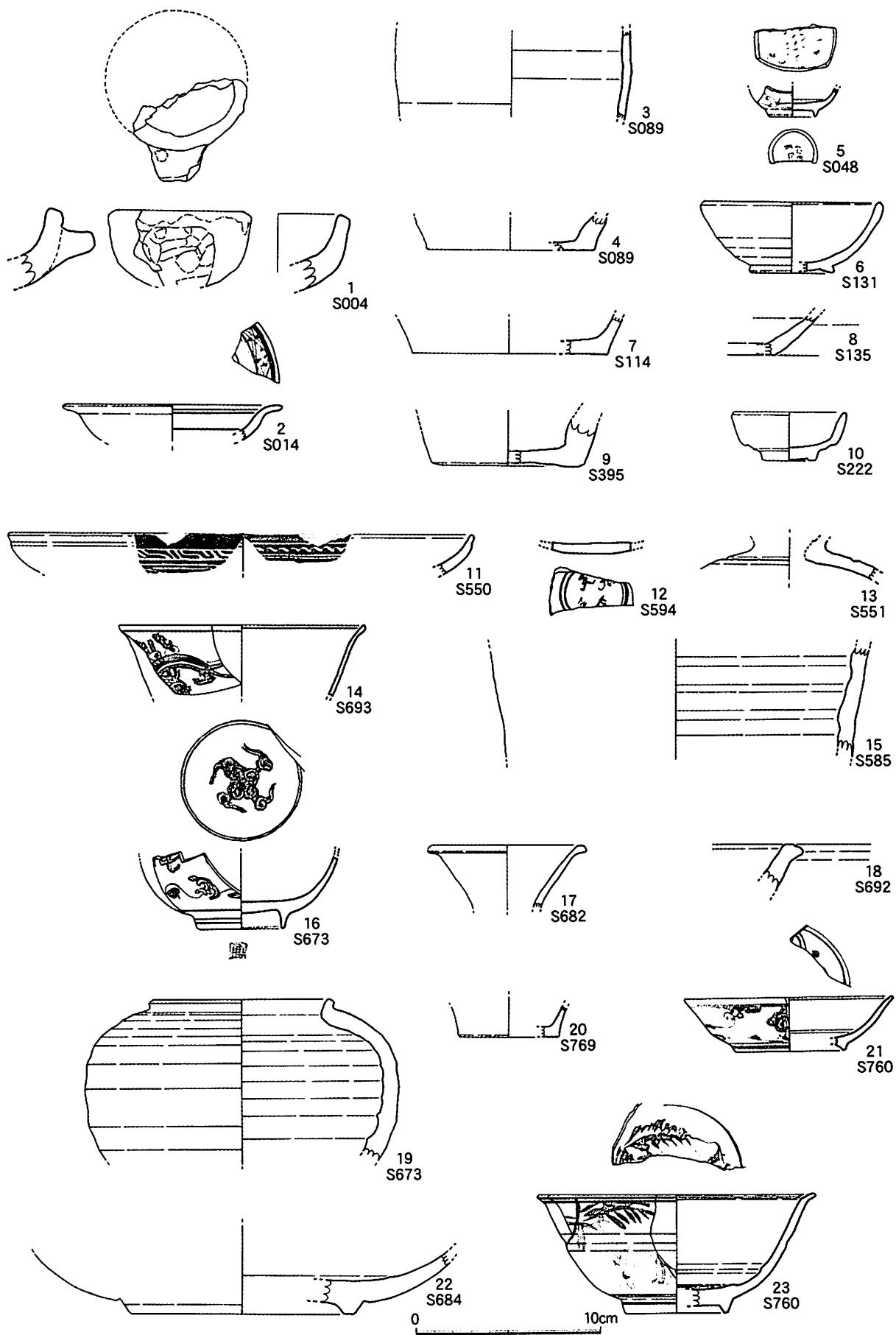
第 89 図 SX700 出土遺物 (1～9 : 1/3, 10～12 : 1/4)

4 その他の遺構出土遺物

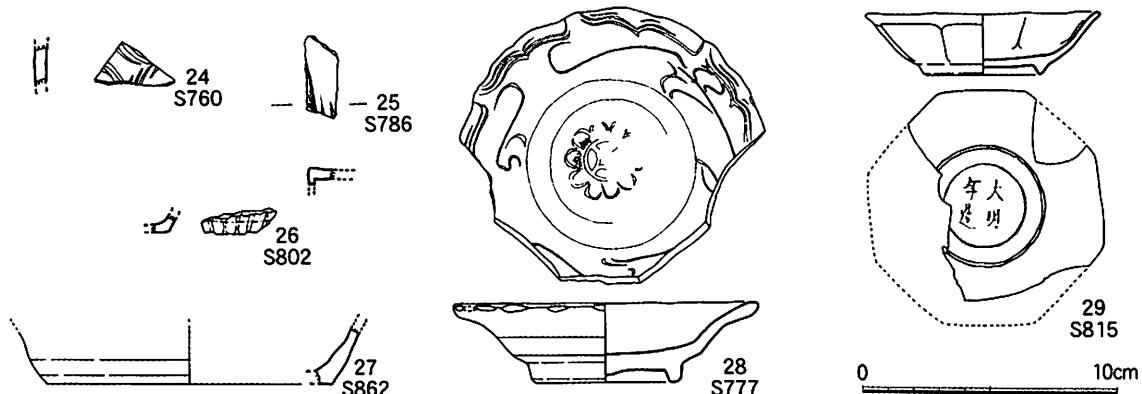
ここでは、既述した主要遺構以外の遺構から出土した遺物について、主要な資料を取り上げ紹介する。

陶磁器・土器 (第 90 図～第 92 図)

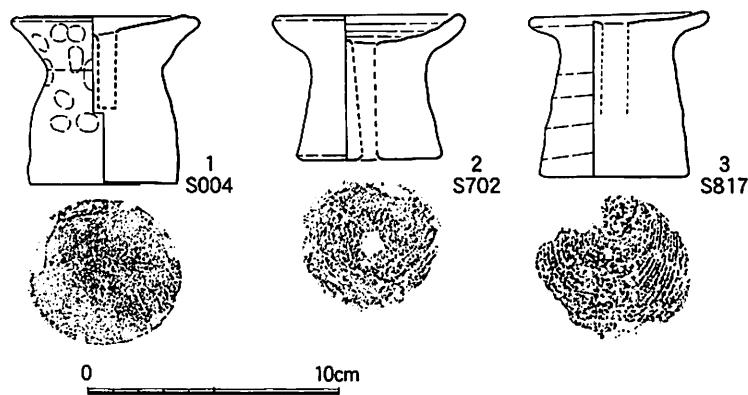
1 は土製のトリベで、全体が二次被熱により還元され、暗青灰色を呈する。内面にはスラグが付着している。2 は漳州窯系の青花皿で、口縁部が強く外反する。口縁部内面には四方櫛文が描かれる。3 は焼締陶器の瓶であろうか。胎土はきわめて緻密で、粒子をほとんど含まない。中国産ではないかと推定される。4・7・8 も中国産ではないかと推定される焼締陶器の底部で、鉢の可能性がある。5 は青花小壺で、高台内には「福」字銘が書かれている。6 は瓦質土器の碗で、体部外面下半には横方向のケズリが著しい。9 は瀬戸・美濃産と推定される陶器で、瓶の底部と考えられる。外面にはわずかに灰釉が認められる。内面は無釉である。10 は瀬戸・美濃産と考えられる陶器小皿で、厚い灰釉がかかる。11 は朝鮮王朝産の象嵌青磁皿で、SK828 出土のものと同一個体の可能性がある。12 は磁器皿の底部で、高台内に「天下太平」銘が認められる。13 は、外面に鮮やかな緑釉の



第90図 各遺構出土主要遺物 1 (1/3)



第91図 各遺構出土主要遺物2 (1/3)

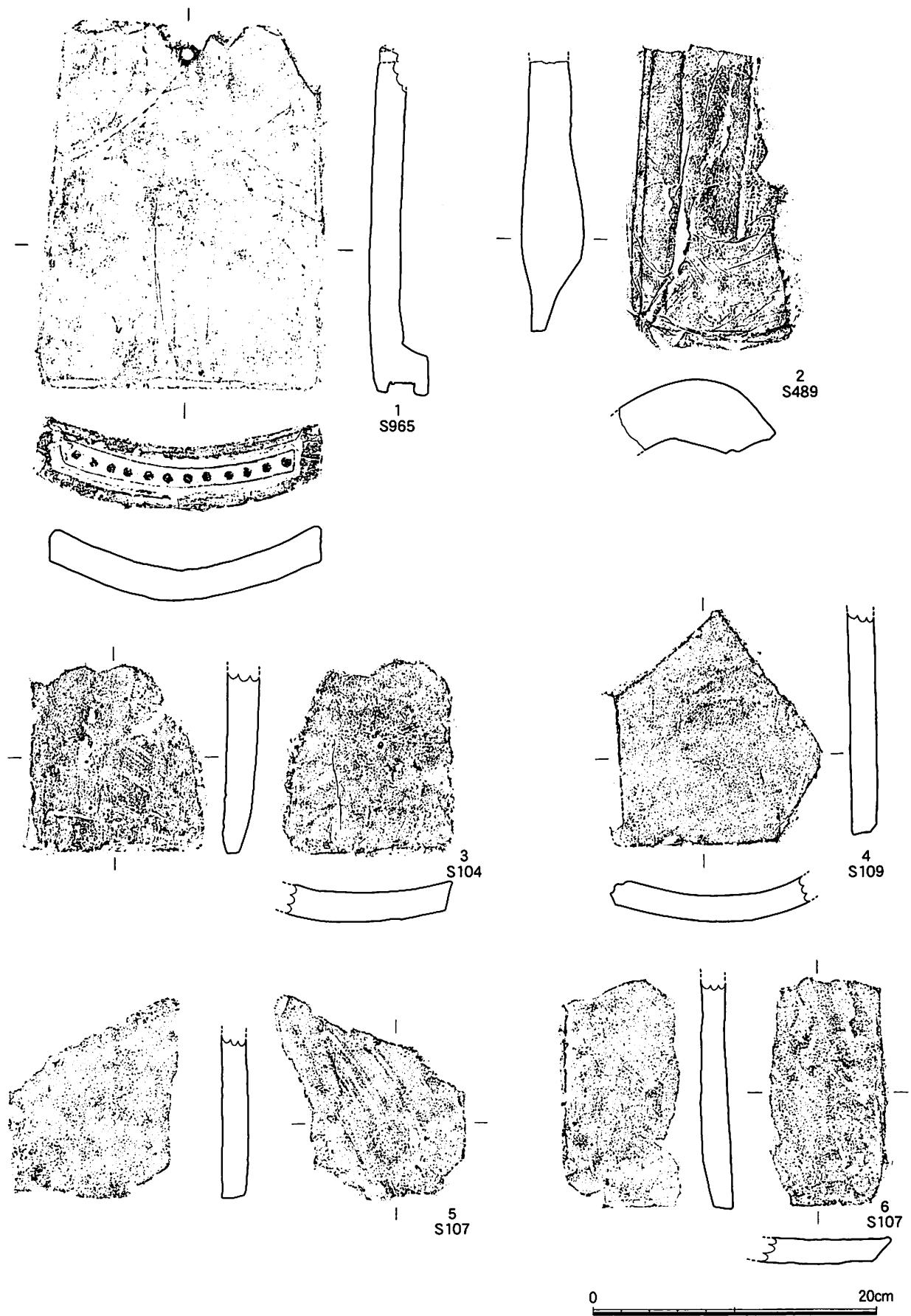


第92図 各遺構出土土製灯火具 (1/3)

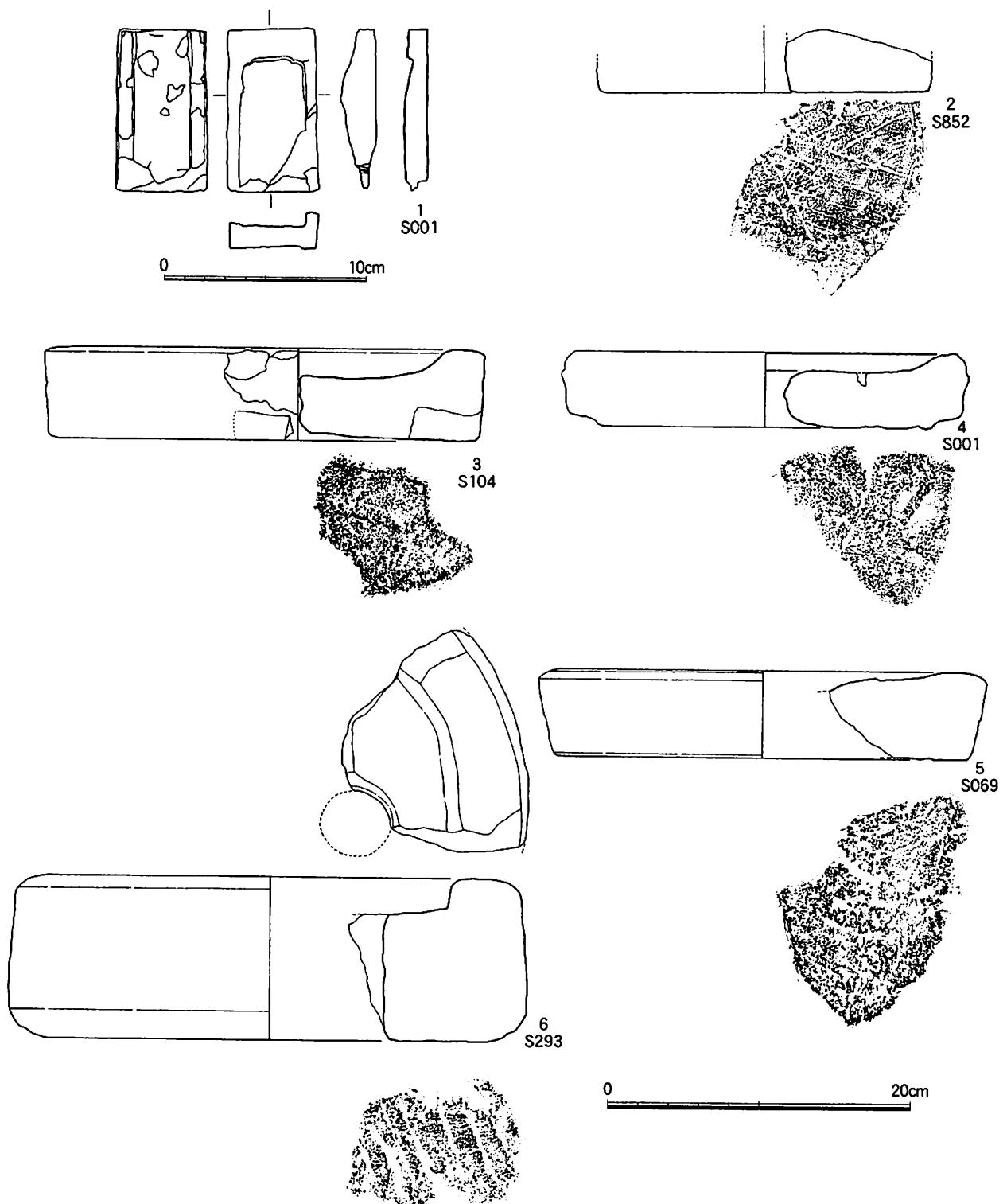
かかった陶器で、華南三彩もしくは華南彩釉陶器の一種と考えられる。胎土は黄白色で軟質である。外面には2条の沈線が認められる。水注の一部と考えられる。14は外面に団龍文が描かれた青花碗で、口縁部はやや外反する。15はベトナム産と思われる焼締陶器で、長胴瓶と考えられる。内面にはロクロによる成形痕が著しい。外面は茶褐色に発色している。16は外面に唐草文、見込に雲文が描かれた青花碗で高台内に落款状の銘が見られる。碗E群に類似するが、見込みの盛り上がりが認められない。17は朝鮮王朝産の陶器舟徳利で、焼成不良のため暗赤紫色ぶ発色している。18は信楽焼で、壺の口縁部と思われるものである。19は焼締陶器の無頸壺で、備前焼と思われる。20は磁器小壺で、暗灰色の胎土に貫入の著しい灰色釉が掛かるものである。中世大友府内町跡第3次調査において、「灰色磁器」として報告したものと同種のものである。21は青花皿B1群である。22は白磁皿である。高台は削り出しであり、胎土も(1)州窯系の磁器に類似する。23は(1)州窯系の青花碗で、口縁端部は外反する。24は青白磁の梅瓶で、外面に櫛描の渦文が見られる。25は色絵磁器の水滴ではないかと思われる。外面に赤い顔料が上絵付けされている。26は青白磁合子である。27は中国産と推定される焼締陶器鉢で、内面には薄い褐色が掛かっているようにも見受けられる。28は龍泉窯系の青磁稜花皿で、内面には櫛描の文様が、見込みには花文がスタンプにより施文される。29は白磁八角皿で、高台内には吳須により「大明年造」銘が書かれる。30～32は、土製灯火具である。

瓦 (第93図)

調査区の全域で瓦が出土しているが、文様のわかる軒平瓦や軒丸瓦はわずかであり、平瓦及び丸瓦が主体である。これらは糸切り痕を有するもののみであり、織豊期に出現する鉄線引きによるものは全く認められない。



第93図 各遺構出土瓦 (1/4)



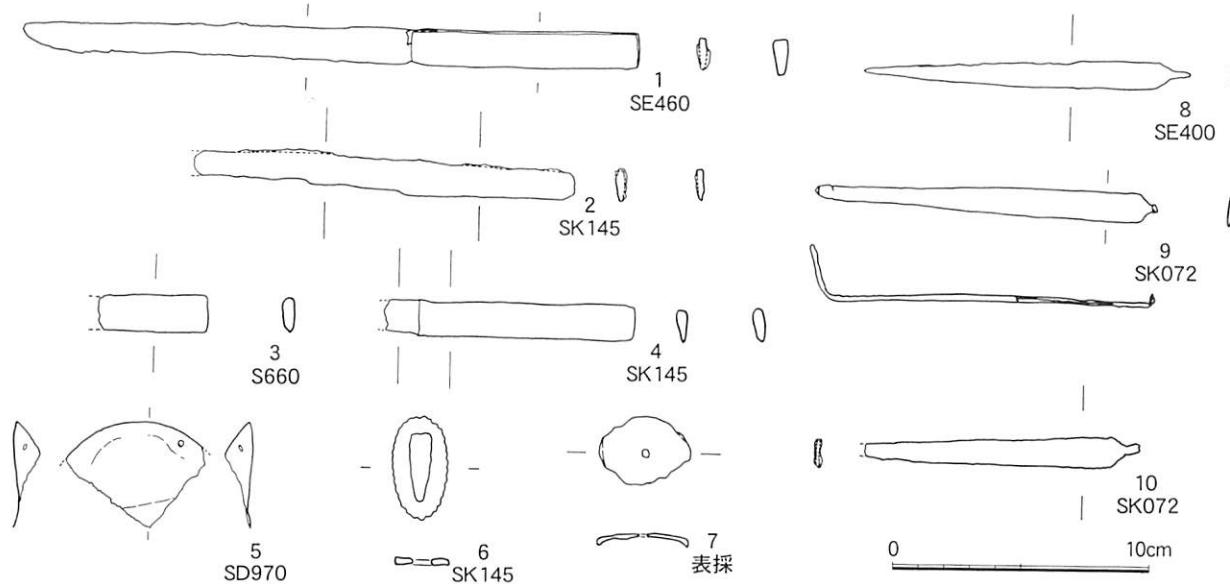
第94図 各遺構出土石製品 (1:1/3, 2~6:1/4)

1は軒平瓦で、囲みの中に12個の珠文を有する文様の瓦当を有する。端部には目釘穴が認められる。2は丸瓦で、内面には糸切り痕が明瞭に残る。3~6は平瓦である。

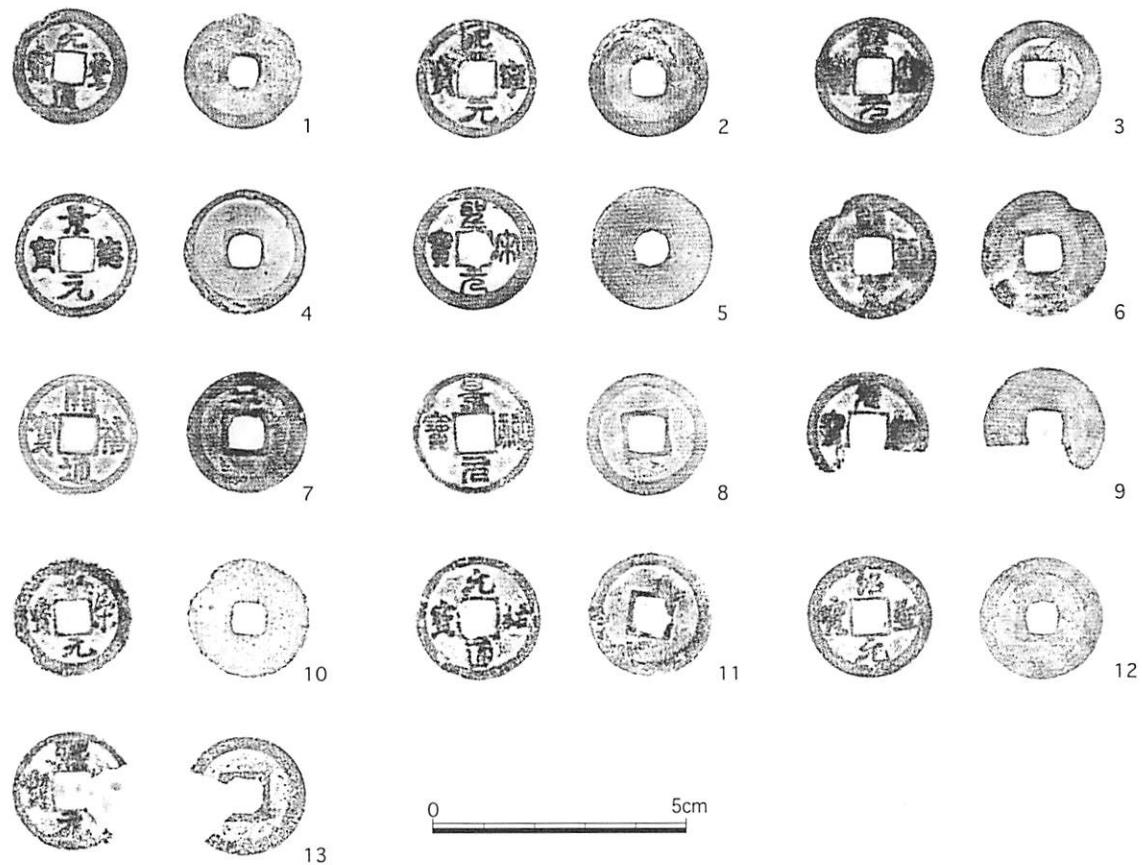
石製品（第94図）

1は硯で、「赤間石」と称される輝緑凝灰岩製である。図正面左側は、一度欠損した後研磨されており、破損後

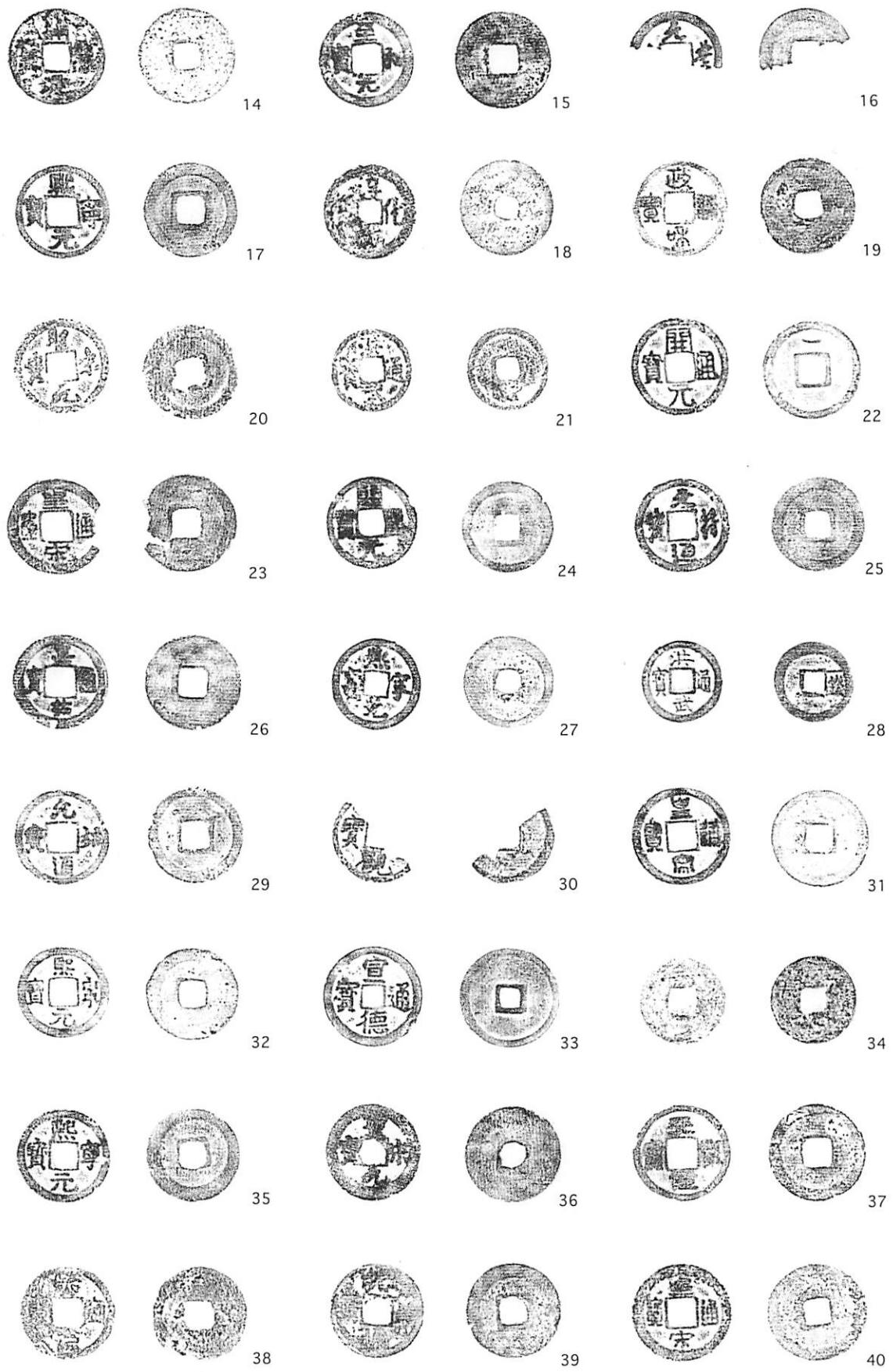
にも再研磨して使用が続けられたものと見られる。2は安山岩製の茶臼である。研面は使用により摩滅が著しく、擂り目がほとんど失われている。3～6は安山岩製の石臼であるが、2に比べ粒子の粗い岩石が素材として用いられている。



第95図 各遺構出土金属製品 (1/3)

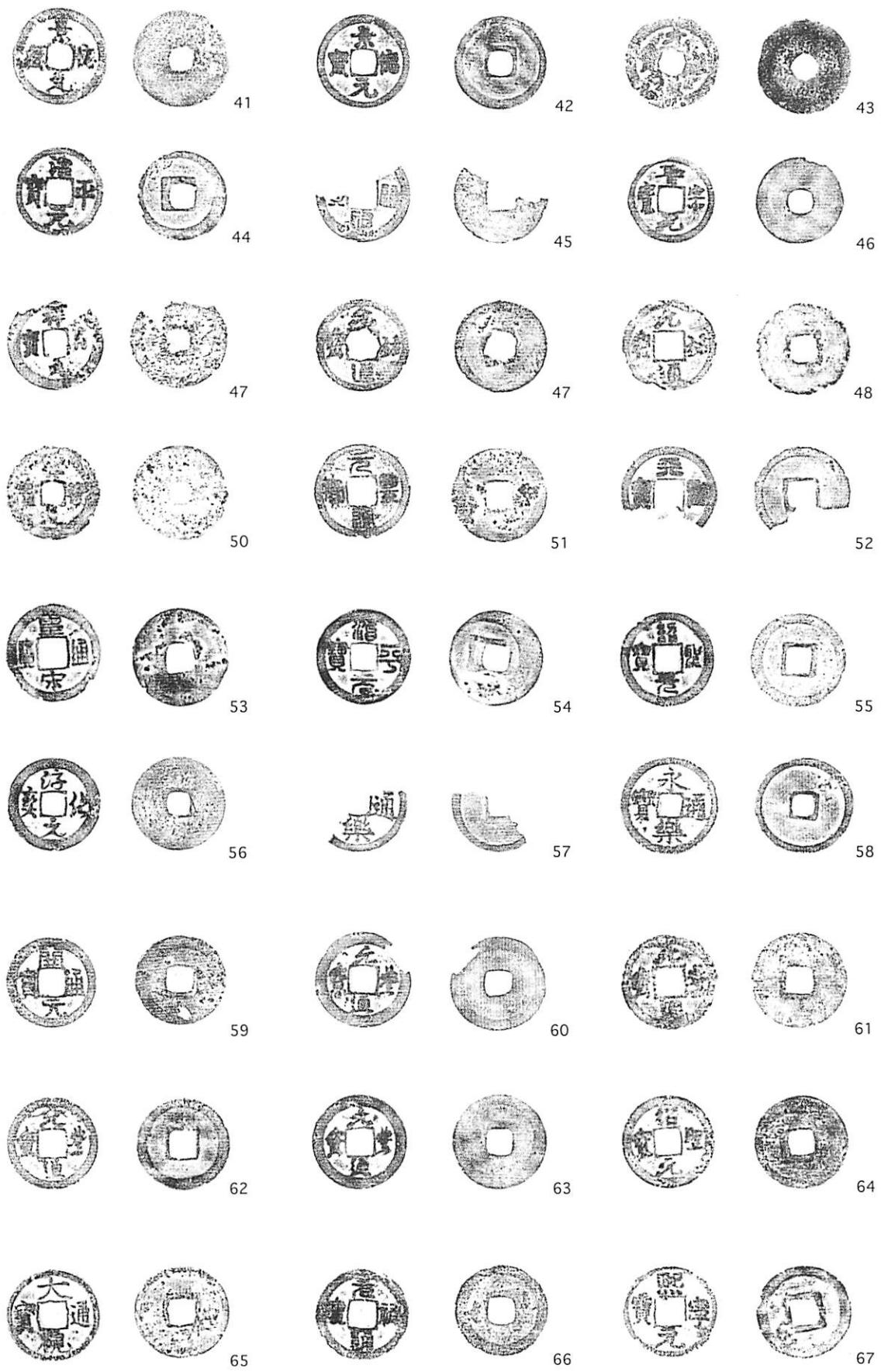


第96図 各遺構出土銭貨拓影 1 (2/3)

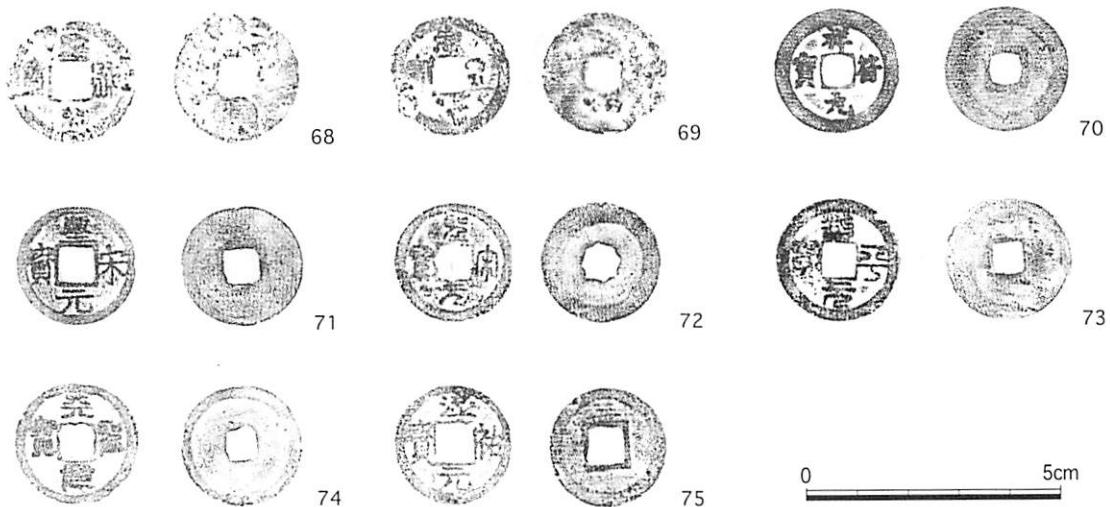


0 5cm

第97図 各遺構出土錢貨拓影 2 (2/3)



第98図 各遺構出土錢貨拓影3 (2/3)



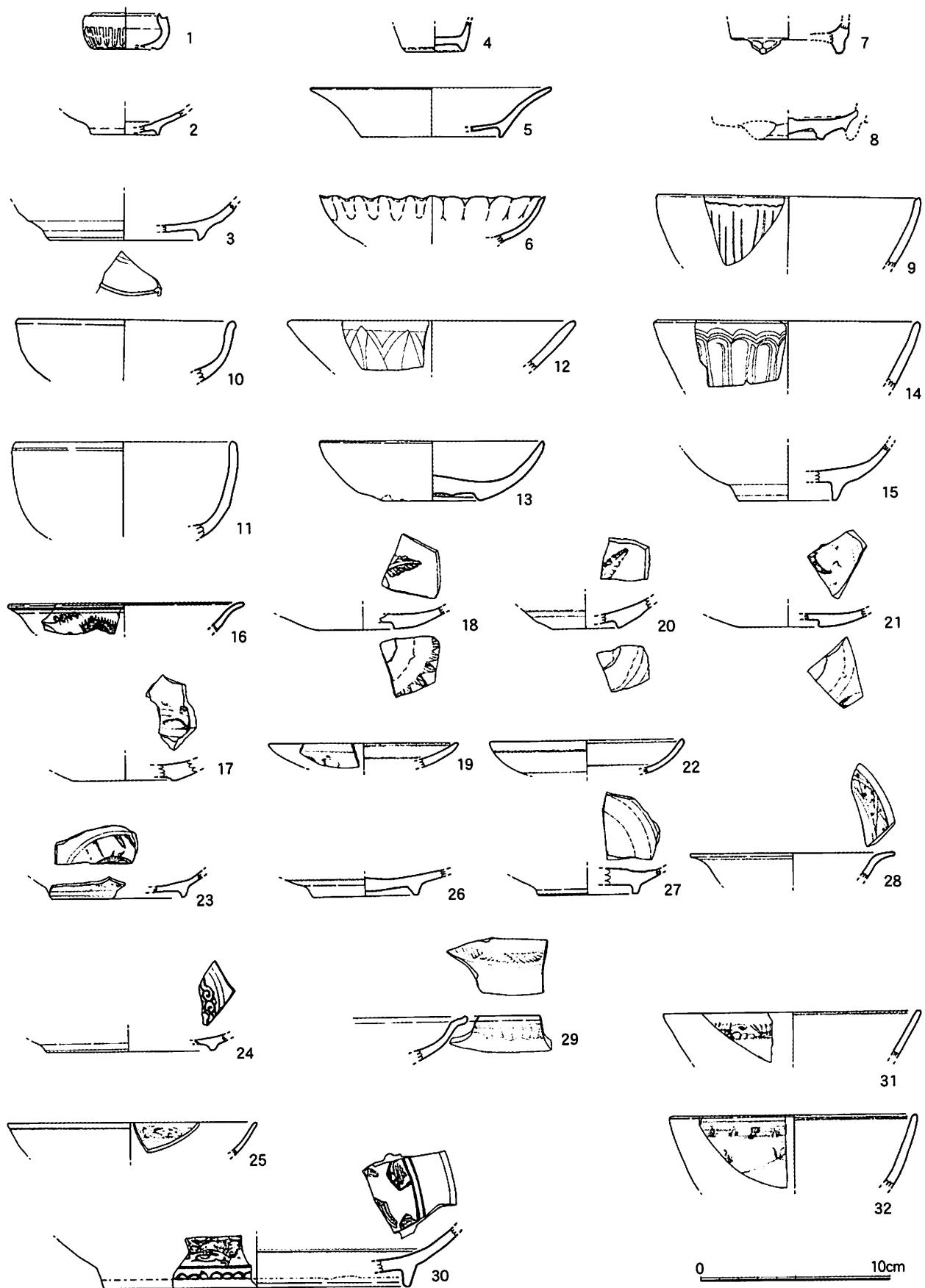
第99図 各遺構出土錢貨拓影4 (2/3)

番号	名称	初鋳年	出土遺構	直径(cm)	重量(g)	番号	名称	初鋳年	出土遺構	直径(cm)	重量(g)
1	元豐通寶	1078年	SE460	2.35	3.2	39	元豐通寶?		SK455	2.46	2.6
2	熙寧元寶	1068年	SE460	2.42	2.7	40	祥符元寶	1009年	SK501	2.53	3.7
3	熙寧元寶	1068年	SE460	2.38	2.4	41	景德元寶	1004年	SK538	2.47	2.6
4	景德元寶	1004年	SE460	2.45	3.1	42	景德元寶	1004年	SK553	2.41	2.9
5	聖宋元寶	1101年	SE460	2.45	3.2	43	元祐通寶?		SK561	2.43	3.0
6	不明		SE460	2.51	3.0	44	治平元寶	1064年	SK561	2.30	2.5
7	開禧通寶	1205年	SE460	2.41	3.1	45	不明		SK590	2.43	*1.5
8	景祐元寶	1034年	SE460	2.46	2.8	46	聖宋元寶	1101年	SK660	2.21	2.1
9	元豐通寶	1078年	SE460	2.43	2.2	47	祥符元寶	1009年	SK660	2.50	2.6
10	聖宋元寶	1101年	SE400-460検出時	2.41	2.1	48	元祐通寶	1086年	SK660	2.43	3.0
11	元祐通寶	1086年	SE400	2.49	2.7	49	元祐通寶	1086年	SX700	2.39	2.4
12	紹聖元寶	1094年	SE400-460検出時	2.48	3.7	50	不明		SF001整地層	2.40	2.9
13	熙寧元寶	1068年	SE400-460検出時	2.43	2.4	51	元豐通寶	1078年	SF001整地層	2.47	4.1
14	開元通寶	621年	SK012	2.47	2.8	52	天聖元寶	1023年	SF001整地層	2.49	2.2
15	至和元寶	1054年	SK128	2.44	2.6	53	皇宋通寶	1038年	遺構検出時	2.49	2.8
16	元豐通寶	1078年	SK137		*1.4	54	治平元寶	1064年	遺構検出時	2.44	2.6
17	熙寧元寶	1068年	SK137	2.41	3.5	55	紹聖元寶	1094年	遺構検出時	2.42	2.6
18	淳化元寶	990年	SK140	2.41	2.8	56	淳化元寶	990年	遺構検出時	2.42	2.6
19	政和通寶	1111年	SK140	2.43	3.2	57	永樂通寶	1408年	出土地不明		*0.9
20	聖宋元寶	1101年	SK140	2.43	2.9	58	永樂通寶	1408年	出土地不明	2.52	2.5
21	洪武通寶	1368年	SK140	2.11	1.4	59	開元通寶	621年	出土地不明	2.34	2.2
22	開元通寶	621年	SK144	2.5	2.2	60	元豐通寶	1078年	出土地不明	2.50	2.8
23	皇宋通寶	1038年	SK144	2.24	2.3	61	元豐通寶	1078年	出土地不明	2.47	2.5
24	開元通寶	621年	SK145	2.35	2.5	62	元豐通寶	1078年	出土地不明	2.39	3.1
25	元符通寶	1098年	SK145	2.41	2.6	63	元豐通寶	1078年	出土地不明	2.45	3.0
26	嘉祐通寶	1056年	SK145	2.43	2.4	64	紹聖元寶	1094年	出土地不明	2.40	2.6
27	熙寧元寶	1068年	SK145	2.34	3.1	65	大觀通寶	1107年	出土地不明	2.43	2.6
28	洪武通寶	1368年	SK145	2.06	3.9	66	元祐通寶	1086年	出土地不明	2.38	2.6
29	元祐通寶	1086年	SK146	2.45	3.3	67	熙寧元寶	1068年	表採	2.40	2.9
30	大觀通寶	1107年	SK146		*1.4	68	皇宋通寶	1038年	表採	2.52	2.2
31	皇宋通寶	1038年	SK172	2.47	2.1	69	不明		表採	2.41	2.4
32	熙寧元寶	1068年	SK185	2.36	3.0	70	祥符元寶	1009年	表採	2.50	2.9
33	宣德通寶	1433年	SK192	2.55	2.9	71	聖宋元寶	1101年	表採	2.42	2.4
34	不明		SK300	2.19	2.3	72	聖宋元寶	1101年	表採	2.40	3.2
35	熙寧元寶	1068年	SK399	2.40	2.6	73	治平元寶	1064年	表採	2.47	2.4
36	聖宋元寶	1101年	SK453	2.47	2.5	74	天聖元寶	1023年	表採	2.43	3.6
37	天聖元寶	1023年	SK453	2.50	3.3	75	淳祐通寶	1241年	表採	2.37	2.7
38	天聖元寶	1023年	SK453	2.41	3.1						

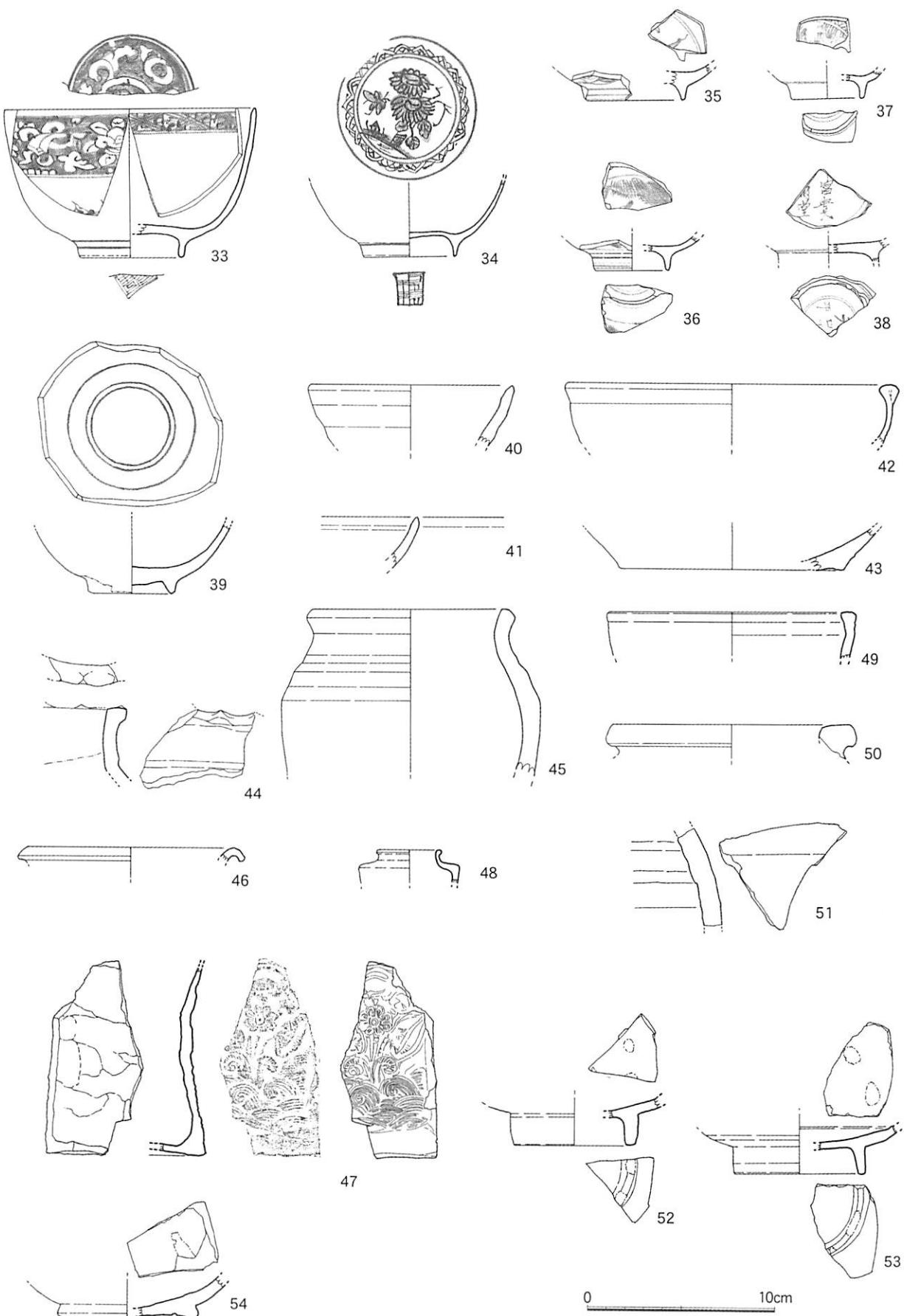
第1表 出土錢貨一覧表

金属製品 (第95図)

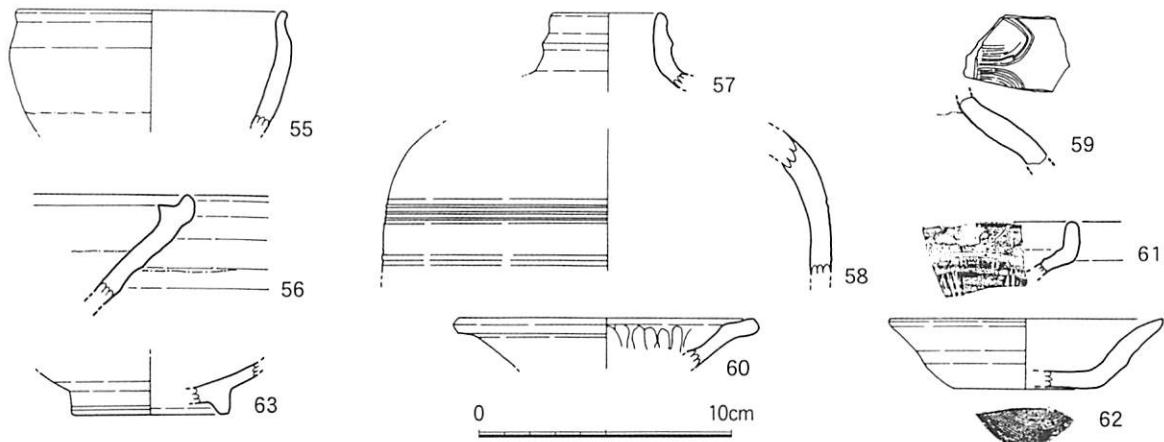
1～4は鉄製の小刀(小柄)である。1はSE460から出土した完形品で、柄の部分は銅板により被覆されている。3・4は銅板により被覆された柄の部分である。2は柄の部分に被覆がみられない。5はSD970から出土した青



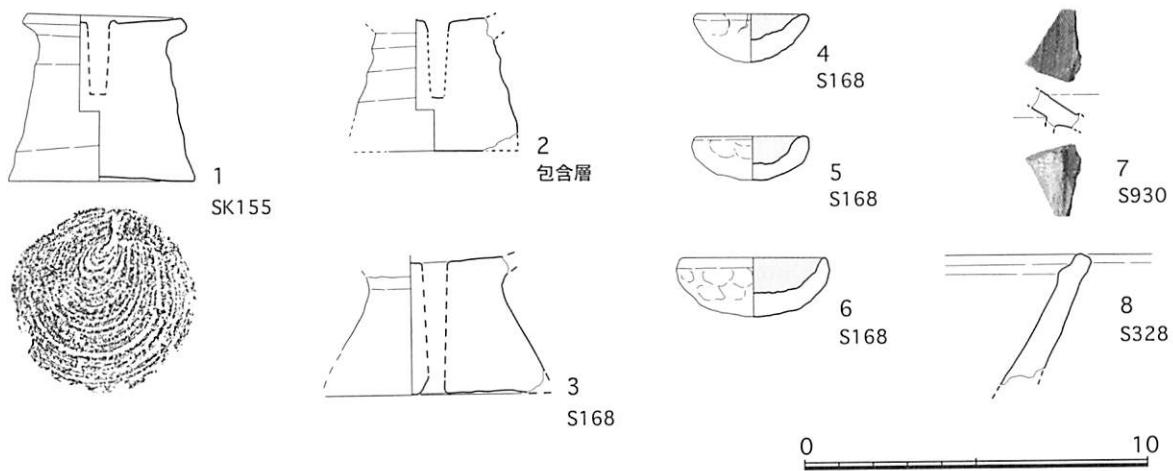
第100図 遺構検出時出土遺物・表採遺物1 (1/3)



第 101 図 遺構検出時出土遺物・表採遺物 2 (1/3)



第102図 遺構検出時出土遺物・表採遺物3 (1/3)



第103図 各遺構出土遺物実測図 補遺 (1/3)

銅製の天秤皿と考えられるもので、紐を通したと考えられる穴が1カ所認められる。6は青銅製の刀装具で切刃である。7は青銅製の金具で、建具あるいは家具に使用されたものと思われる。8～10は青銅製の笄である。

出土錢貨（第96図～第99図）

本調査区では75枚の錢貨が出土した。判読可能なものについては全て中国錢である。このうち初鋳年の最も古いものは開元通寶（初鋳年621年）で最も新しいものは宣徳通寶（初鋳年1433年）である。SE460では伏せた状態の笄状製品の下から8枚の錢貨（1～5・7～9）がまとまって出土したが、井戸廃絶時に何らかの祭祀行為が行われ、その際錢貨が使用されたものと見られる。

5 遺構検出時出土・表採遺物（第100図～第102図）

1は遺構検出時に出土した、青白磁合子である。2は青白磁皿である。3は白磁皿で、高台内に呉須で描かれた二重圈線が見られる。4～6は白磁皿、7・8は青磁香炉である。13は青磁皿で、碁笥底で厚い青磁釉が掛かる。15は内外面に黒褐色の釉が掛かる磁器碗である。16～39は青花である。このうち29は、遺構検出時に出土したものであるが、口縁部が短く屈曲する皿で、17世紀初頭に出現するものと考えられる。17・19・22・26

～28・39は漳州窯系の青花である。40・41は天目碗で、中国産である可能性がある。42・43は中国産と推定される焼締陶器鉢である。42はきわめて薄い体部を有し、口縁部は折り返され、玉縁状となる。44・45は中国産と考えられる褐釉陶器である。44は口縁端部が波状となる。46・47は華南三彩陶器である。46は壺の口縁部と考えられる。47は鶴形水注の台部で、型作りにより成形されており、花及び波状文が認められる。残念ながら遺構検出時の出土である。二次的に被熱しているため、表面が荒れ、釉が薄くなっている。49はベトナム産焼締陶器長胴瓶の口縁部である。50はタイ産と考えられる陶器壺の口縁部で、黒褐色の釉が掛かる。51は黒褐色の釉がかかる陶器の胴部破片である。器表面には明瞭な稜線を有する。胎土に黒紫色の砂粒を含むもので、タイ産もしくはミャンマー産の可能性が考えられる。52・53は朝鮮王朝産の白磁皿である。高い高台を有し、疊付と見込みに砂目積みの目跡が残る。胎土は白色に近く、磁器質である。54は越州窯系の青磁碗で、内面に目跡が認められる。大宰府分類のⅡ類にあたる。55～58は瀬戸・美濃産の陶器である。55は天目碗、56・57は梅瓶、58は折縁ソギ皿である。59は備前焼と推定される小型の播鉢、61は備前焼の壺である。60は畿内産と推定される綠釉陶器碗である。

出土遺物補遺（第103図）

1はSK155から出土した土製灯火具である。ロクロ成形で底部には糸切り痕が明瞭に残る。2は第2次調査区包含層出土の土製灯火具である。ロクロ成形と考えられるが、底部は糸切り後ナデ消されている。3はS168出土の土製灯火具で、器高に対し底径が大きい器形である。底部はやや上げ底状で、ロクロ成形後にナデ消されているものと見られる。4～6はS168出土の土製トリベである。いずれも手捏ね成形であり、内面にはスラグの付着が見られる。スラグはやや暗赤褐色を帶び、青銅製品の生産に関わるものであることが考えられる。7は陶器壺もしくは水注の蓋と考えられるもので、上面に綠釉が掛かり、胎土は黄白色を呈する。華南三彩陶器の一種と考えられる。8は信楽焼と考えられる焼締陶器の鉢である。

第3章 まとめ

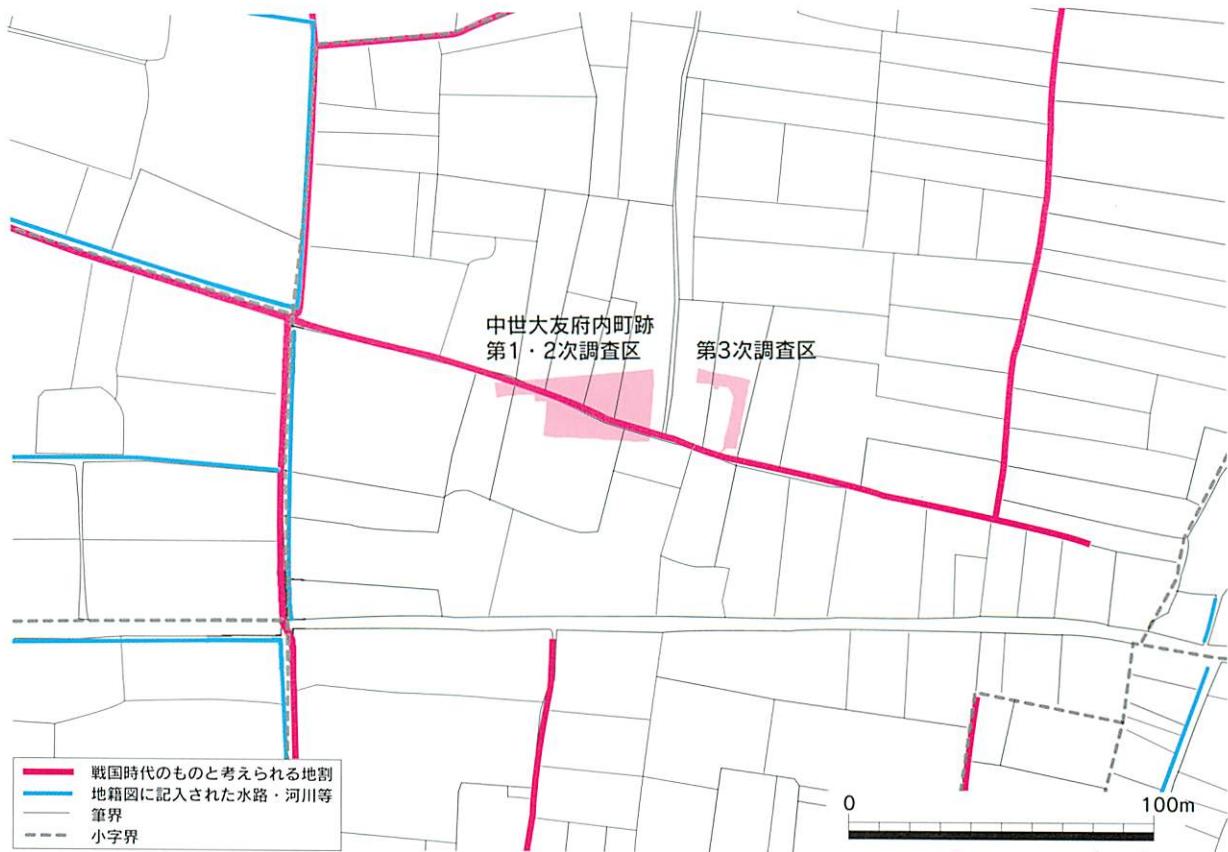
1 遺構について

道路状遺構

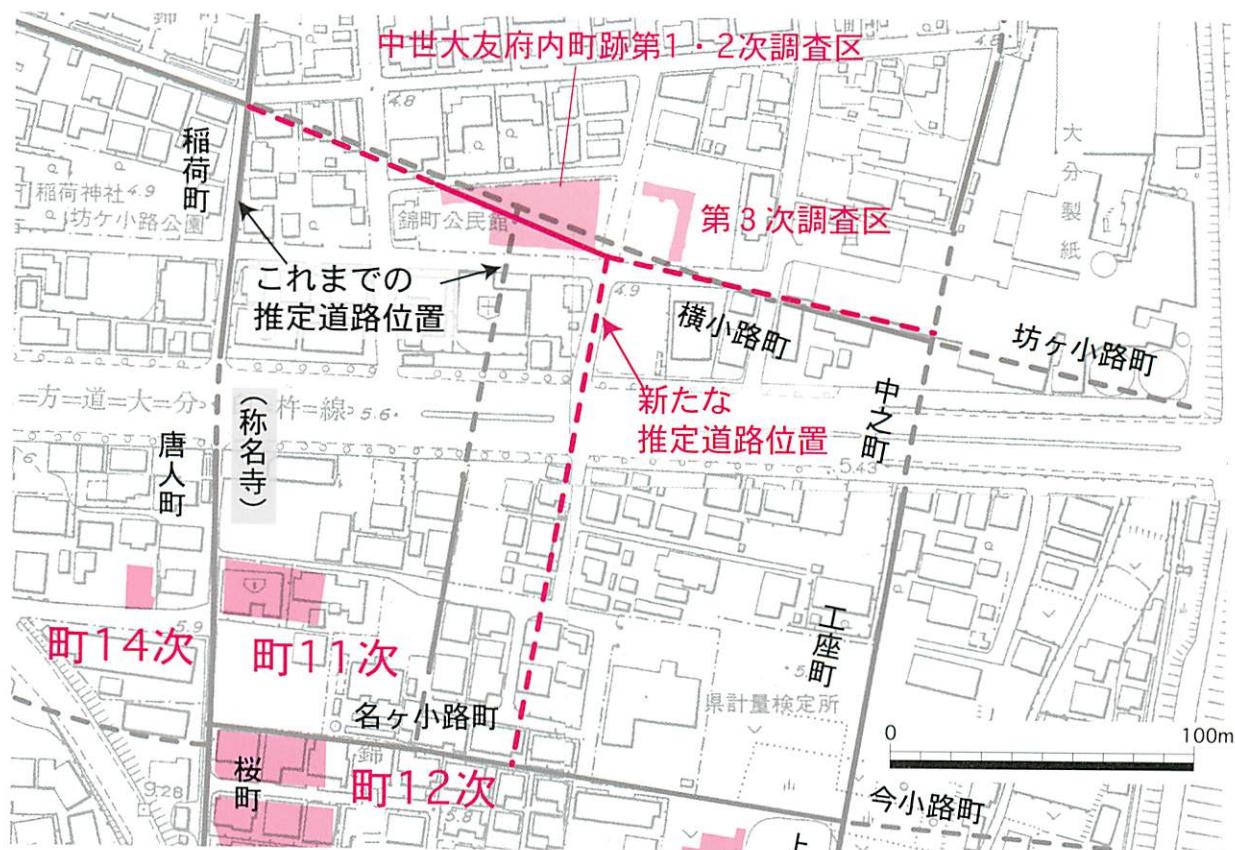
今回の調査で検出された遺構でもっとも注目されるものは、調査区中央部を斜行して検出された道路状遺構である。この遺構については、府内古図に基づく現地比定作業によって「戦国時代の府内復原想定図」（以下、「復原想定図」と称する）が作成された時点でその存在が予想されていたのであり、比定された位置とほぼ一致して遺構が検出された。このことにより、「復原想定図」ひいては府内古図の信憑性が高まり、その後今日に至るまで行われてきた府内町跡および大友氏館跡の発掘調査によっても大きな齟齬はみられないため、その評価が定着した感がある。しかしながら、第1次・第2次調査の結果においてはこれに反する調査結果もあったことが注意される。すなわち、「復原想定図」では第1次調査区の中央部で南から延びてきた道路がT字型に交差するように比定されている（推定線として点線により表記されている）が、第1次・第2次調査の結果そうした遺構は検出されず、これは否定される結果となっている。これについては、大分市歴史資料館が明治時代の地籍図に基づいて行った、「府内古図」の現地比定の方が正しく、第1次・2次調査区と第3次調査区の間にある南北方向の現道が未発見の南北道と考えられる。また、第3次調査においては道路状遺構の方位が第1次・第2次調査と異なっている可能性が高く、第3次調査区は、道路状遺構を含め「一之大路」に直交する地割である可能性が高いことが推定された。以上の「復原想定図」に反する調査結果並びに推定については、先に刊行された第3次調査の報告書（「大友府内5」：平成15年度刊行）で触れたところである。

道路状遺構は最大幅10mと推定されるが、表土剥ぎ時に基底部近くまで掘り下げてしまったため、基底部土層の分布により推定しているに過ぎない。また道路に直交する土層を道路幅全体にわたって図化することができなかつたため、土層によりその形成過程を把握することが不十分となった。このため、遺構が当初から10mであったのか、段階的に拡張あるいは縮小したのかといった時間的変遷については十分明らかにできていない。道路状遺構の範囲と平面的な位置が重複する遺構についても、先述した調査時の限界があり、また出土遺物による時間的位置づけにも限界があったことにより、これらを道路状遺構築造前ないし後に截然と分離することは困難といわざるを得ない。少なくとも16世紀末の段階ではSK137・139・155などが道路状遺構を切る形で築造されており、10mの道路幅はかなり減じていたものと推定される。

一方、道路状遺構の範囲の遺構分布をみると、その中央部分には遺構密度が疎の部分が存在することが認められ、少なくともこの部分が道路状遺構形成以前にも空閑地であった可能性があることが推定されるのである。この空閑地については、地業によって道路状遺構が築造される以前にも、道路の機能を有する部分がこの位置にあつた可能性を示唆するものと考えられる。そうした場合、当該期においては「道路」に隣接する位置に井戸（SE400・460）が築造されていることになる。これは、府内町跡第2次調査SE968や第3次調査において検出された井戸群等に見られるように、道路状遺構築造後（16世紀後半）における井戸の分布が道路状遺構から一定以上距離を置いて配置されている状況とは異なっている。こうした事象は、道路に面した町屋の地割内における空間利用のあり方・表と裏・に起因する可能性が高いと判断できる。従って、道路状遺構築造後の町屋の構造や景観がそれ以前と大きく異なっていたことが考えられる。今回の発掘調査においては、明確な地割を示す明確な区画遺構は検出されなかつたが、明治時代の地籍図には道路をはさむ形で展開する短冊形地割が明瞭に認められる。近世以降にはこのような地割が成立する契機が考えにくいため、地割の成立は中世にまで遡るものと推定される。従って、先述したような井戸の出土状況から見れば、推定横小路町においては、道路状遺構築造後に短冊形地割が成立したものと考えられる。いずれにせよ、道路状遺構が築造されたことにより中世府内町が大きく変貌し、都市的な景観が整ったことは蓋然性が高いと考えられ、その時期が、16世紀中葉頃にあることは今日に至るまでの調査により実証されつつあるといえるのではなかろうか。今後、周辺地域において、地割の成立に関する明確な遺構が



第104図 明治時代の地籍図に見る地割（大分市史中巻付図Ⅱより）



第105図 横小路町における道路推定位置

検出され、確実に検証されることが望まれる。

2 出土遺物について

土製灯火具

中世大友府内町跡第1次・第2次調査では多数の土製灯火具が出土した。出土した土製灯火具をみるとかなりのバリエイションがあり、その一方で型式学的なまとまりも認められる。これについてはすでに小柳和宏氏が大田村岡ノ前遺跡出土資料を中心に分析して、基本的な5類型の分類と「蠟燭立て」としての機能推定を提示している。また、小柳氏はこれらに後出するものとして「6類」を設定し、大分市岩屋寺遺跡、尼ヶ城遺跡、白杵市戸室台遺跡出土品をその例として挙げた。これは「底部が極端に厚く、口縁部の伸びが小さい形態」であるとされ、今日大友府内町跡で多数出土しつつあるものの多くを含んでいると考えられる。

本書において報告した資料は、小柳氏の分類のうち時期的に新しく位置づけられるものが中心となっていると考えられるが、ここで氏の論を踏まえながら土製灯火具を今一度概観してみたい。

本書で報告した土製灯火具は、概ね4種類に分類できる。仮にA～D類とする。

A類：土師器小皿の底部に焼成後穿孔したと考えられるものである。

B類：底部が厚くなったもので全形は不明であるが、小柳氏の4類に類似すると思われる。

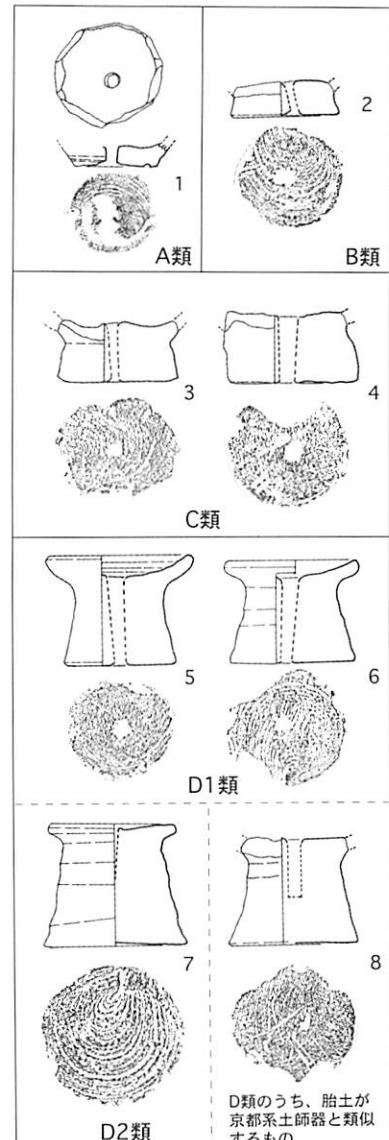
C類：底部がさらに厚くなったもので、小柳氏の5類に類似すると考えられる。口縁部は小皿状に立ち上がるが、残存しているものが無いため不明。

D類：底部が一層厚く、高くなつて台形状を呈するまでに至つたものである。口縁部が小皿状に立ち上がるもの（D1類）と短く張り出すだけのもの（D2類）に細分される。このうちD2類が小柳氏の6類に相当すると考えられる。

なお、D類の中には、京都系土師器と同様な白っぽい胎土のもの（8）が含まれていることが注意される。

これらの資料は15世紀後半以降に位置づけられる各遺構から出土したものであるが、出土状況は必ずしも一括性を保証できるものとは言い難く、同一の遺構に混在して出土している場合が多くみられる。しかし、D2類は16世紀中葉以降に位置づけられる遺構に限定できることが注意される。また、先述したようにD2類には、京都系土師器と類似した胎土のものが認められることから、京都系土師器が府内町に普及する16世紀中葉以降に位置づけられる可能性が高いと考えられる。D1類については口縁部形態によりD2類より古相と考えられるものであるが、道路状遺構より下層の遺構から出土しており、少なくとも16世紀前半までには遡ると推定される。よって、D1類→D2類と変遷すると考えられ、D2類が最も新しく位置づけられると推定される。

すでに、小柳氏は「底部と体部の比がほぼ等しいものから、徐々に底部の比率が大きくなるものへ、という基本的変遷が追える」と指摘されている。本調査地点出土資料についても同様の型式変遷を当てはめてよいのではないかと考えられ、A類→B類→C類→D1類→D2類の変遷も想定される。しかし、A類・B類は出土例が少なく、C類・D類とも形態上の差異が大きいこと、また、C類（=小柳5類）については、白杵石仏群において14世紀後半から15世紀前半には出現しているとされることから、単純にこのような変遷となるかどうか



第106図 出土灯火具分類図(1/4)

かは不明である。本調査地点において14世紀代に遡る遺構は知られておらず、A類・B類・C類が同時期に存在していた可能性さえも考えられる状況である。以上のことから、現状ではC類→D1類→D2類の変遷を想定するに止めておくほか無い。今後、良好な一括資料により検証されることを待ちたい。

さて、このような土製灯火具が出土する遺跡について、小柳氏は「寺院あるいは居館に関わる遺跡」であることを指摘している。すなわち、中世の文献や絵画資料により、14世紀代以降、寺院や武士居館における蠟燭使用は間違いない、蠟燭立ての出土はこうした「場」の性格を反映したものであるとした。小柳氏の指摘後、中世大友府内町跡や、大友氏館が発掘調査されるようになり、その各調査区において土製灯火具が出土することが知られるようになってきた。このような今日の知見からすれば、中世大友府内町においては寺院あるいは居館と同じく蠟燭を使用する生活形態があったものと推測される。おそらくは、府内町における都市的な生活様式が蠟燭の使用を必要としたものと考えられ、都市的地域である中世府内町を特徴付ける遺物の一つと言つてよいと思われる。今後は、府内町及び大友氏館の各調査地点における出土状況が比較され、府内町内のそれぞれの場によって出土状況に差異があるかどうか検討される必要がある。また、こうした土製灯火具が豊後府内以外のものと比較され、その普遍性と特殊性が位置づけられなければならない。

引用参考文献

小柳和宏「灯火具について」『豊後国田原別符の調査Ⅰ』1994 大田村教育委員会

なお、本文をまとめるにあたり、高橋徹氏から土製灯火具について多くのご教示を頂きました。

第4章 付編

「豊後府内における全体遺構配置図の検討」

～遺構の把握と継続管理について～

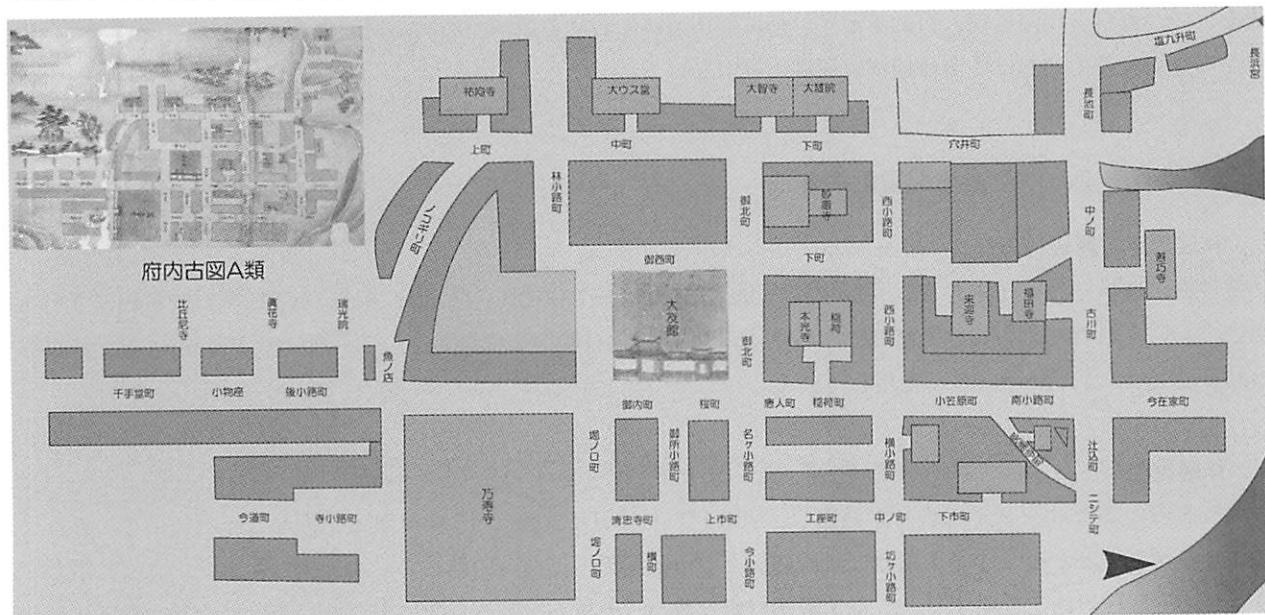
大分市教育委員会 梅田 昭宏

1. はじめに

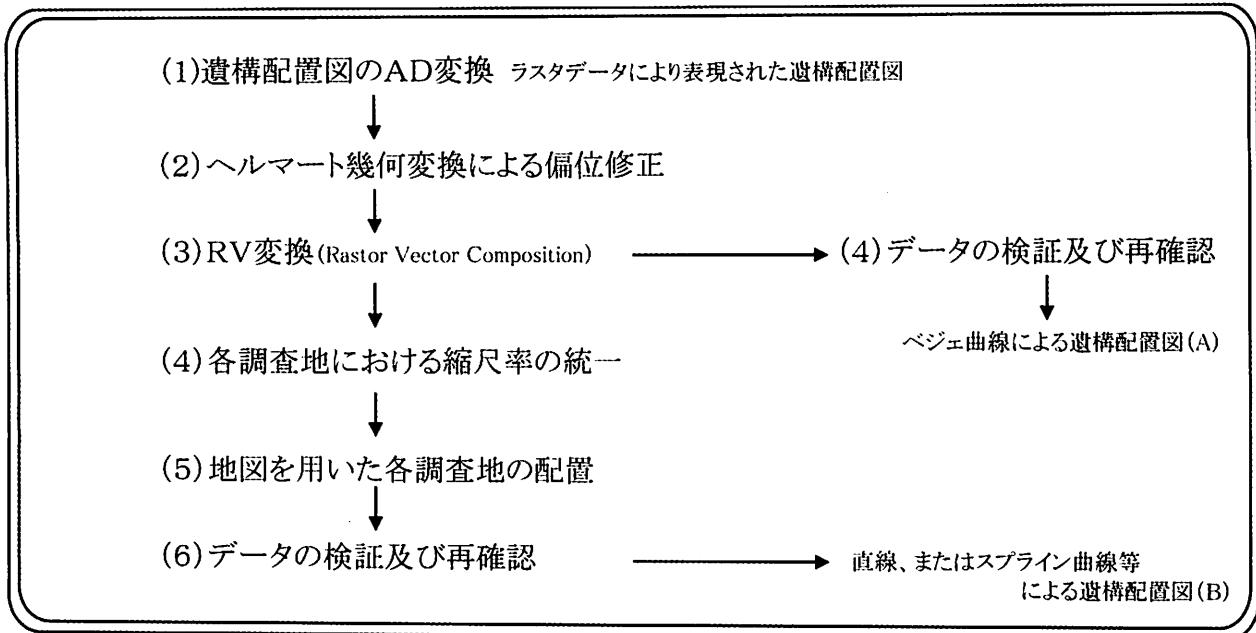
大分川の左岸に位置する微高地には、中世において東西約 0.7 km、南北約 2.2 km の規模を有する町跡が展開していたと推定されている。(大分市史編纂委員会: 1987) この町跡は中世大友城下町跡(註 1)と呼称され、1996 年に調査が行われて以降、中世大友府内町跡は 39 次、大友氏館跡は 14 次(2004 年 1 月現在)に及び調査は継続されている。

この遺跡は、市から長い年月をかけて徐々に町屋が形成された都市と考えられており（鹿毛：2001）、府内古図 A 類（大分市歴史資料館所蔵）においては南北 4 本、東西 5 本の主要道路による区画を伴い、大友氏館を中心に寺社地や商工業地等が展開することが認められる（第 107 図）。また、フロイスが記した『日本史』（松田 川崎訳：1978）には、教会、病院など西欧文化の影響を受けた施設が建設されていたことが示されており、キリスト教を保護した大友氏の方針が町並みに反映されていたと考えられている。

1998年に行われた大分市顕徳町三丁目の発掘調査においては、庭園跡が検出され、方二町（約220m）に展開すると推定される大友氏館跡の可能性が示唆された（高畠：1998）。また、豊後府内における東南アジア産陶磁器の調査所見をふまえ、森本氏の第3期（森本：2000）を更に二分し、想定される時間幅から「南蛮貿易」段階、第3a期の設定及びその特徴を述べている（坪根：2003）。また、豊後府内における種々の建造物の位置を推定する試みは、歴史地理学的な方法論を用いた比定作業（大分市史編纂委員会：1987）を嚆矢に、中世の



第 107 図 府内古図 A 類 模式図



第 108 図 作図過程

豊後府内（府中）を描いた古絵図の変遷の研究（木村：2000）や17世紀前半に府内町が移転した際の町名から府内の空間配置と構造を探る研究（木村：2001）等に引き継がれている。現在、絵図及び文献調査、発掘調査による情報の集約により、豊後府内の具体像が序々に解明されつつあるといえるだろう。

このような研究は町名と町割りを推測できる参照元として使用されており、調査目的の立案や遺構を検討する一助として発掘調査に寄与している。今日においては、発掘調査数の増加から調査成果を基にしたより具体的な検討を行える状況に変化しつつある。しかし、これらの遺跡の位置を確定し、遺構の比較をより良く行う為には精度の高い地図上に遺構が表現された図が望まれる。

本稿においては、平面直角座標II系を用いて調査地を配置し、豊後府内における全体遺構配置図（註2）の作成を行い、資料の作図過程、目的を示す。特に都市遺跡における遺構配置図の情報構造に着目し、一連の作業過程から機械可読化における全体遺構配置図の検討を行う。

2. 豊後府内における遺構配置図の作成

・作図環境と周辺機器

電算機は非メーカー仕様を含む、3.2GHz (Pentium4) ~ 1.00GHz (AMD) 相当のCPUを有する機器5台を用いた。いずれも高い可用性を維持し、LANによる情報共有環境を構築している。OSはWindows XP及びWindows2000、Windows 98を使用している。

・作図目的

豊後府内の調査は約8年の歳月が経過し、2004年1月現在、総計53次に渡る発掘が行われている。徐々に増加する調査地と変わりゆく市街地の景観は個々の位置関係の把握を困難にし、調査地は虫食いのように散在する。改めて豊後府内を俯瞰すると、推定範囲に対し数パーセントを調査したに過ぎないことが喚起される。全体像の把握は長い年月を要することが容易に想定できる。

第2表 作図に用いた各調査地の参考元一覧

中世大友府内城下町跡調査次数	掲載縮尺	参考資料
大友氏館跡第1次	1/600	坪根伸也 塩地潤一 中西武尚ほか 2003.3「国指定史跡 大友氏館跡・発掘調査概報IV-」『大分市市内確認調査概報-2002年度-』大分市教育委員会
大友氏館跡第2次	1/200(第3面)	塩地潤一 2001.12「大友館跡第2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.10 1999』大分市教育委員会
大友氏館跡第3次	1/600	坪根伸也 塩地潤一 中西武尚ほか 2003.3「国指定史跡 大友氏館跡・発掘調査概報IV-」『大分市市内確認調査概報-2002年度-』大分市教育委員会
大友氏館跡第4次	1/125	秦政博 池邊千太郎 高畠豈ほか 2000.3「大友館跡・発掘調査概報I-」大分市教育委員会
大友氏館跡第5次	1/100	秦政博 池邊千太郎 高畠豈ほか 2000.3「大友館跡・発掘調査概報I-」大分市教育委員会
大友氏館跡第6次	1/250(第2面)	塔鼻光司 上野淳也 小住武史 2001.12「大友氏館跡第6次」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.12 2001』大分市教育委員会
大友氏館跡第7次	1/100	塔鼻光司 上野淳也 小住武史 2001.12「大友氏館跡第7次」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.12 2001』大分市教育委員会
大友氏館跡第8次	1/100	塔鼻光司 上野淳也 小住武史 2001.12「大友氏館跡第8次」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.12 2001』大分市教育委員会
大友氏館跡第9次	1/100	塔鼻光司 上野淳也 小住武史 2001.12「大友氏館跡第9次」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.12 2001』大分市教育委員会
大友氏館跡第10次	1/300 1/80 1面 2面 3面 I・II	池邊千太郎 高畠豈 永松正大ほか 2002.3「国指定史跡 大友氏館跡・発掘調査概報III-」『大分市市内確認調査概報-2001年度-』大分市教育委員会
大友氏館跡第11次	1/125	池邊千太郎 高畠豈 永松正大ほか 2002.3「国指定史跡 大友氏館跡・発掘調査概報III-」『大分市市内確認調査概報-2001年度-』大分市教育委員会
大友氏館跡第12次	1/200	坪根伸也 塩地潤一 中西武尚ほか 2003.3「国指定史跡 大友氏館跡・発掘調査概報IV-」『大分市市内確認調査概報-2002年度-』大分市教育委員会
大友氏館跡第13次	1/200	坪根伸也 塩地潤一 中西武尚ほか 2003.3「国指定史跡 大友氏館跡・発掘調査概報IV-」『大分市市内確認調査概報-2003年度-』大分市教育委員会
大友氏館跡第14次	1/100	坪根伸也 塩地潤一 中西武尚ほか 2003.3「国指定史跡 大友氏館跡・発掘調査概報IV-」『大分市市内確認調査概報-2004年度-』大分市教育委員会
中世大友府内町跡第1・2次	1/400	高畠豈 1997.12「中世大友城下町第1・2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.8 1997』大分市教育委員会
中世大友府内町跡第3次	1/400	高畠豈 1998.12「中世大友城下町跡第3次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.9 1998』大分市教育委員会
中世大友府内町跡第4次	1/200	河野史郎 2001.12「中世大友城下町跡第4次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.10 1999』大分市教育委員会
中世大友府内町跡第6次	1/400	塔鼻光司 坪根伸也 2001.12「中世大友府内町跡第6次」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.12 2001』大分市教育委員会
中世大友府内町跡第14次	1/100	池邊千太郎 上野淳也 2002.12「中世大友府内町跡第14次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.13 2002』大分市教育委員会
中世大友府内町跡第15次	1/250	讚岐和夫 塔鼻光司 宮田剛 2002.12「中世大友府内町跡第15次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報vol.13 2002』大分市教育委員会
中世大友府内町跡第19次	1/100	池邊千太郎 高畠豈 永松正大ほか 2002.3「国指定史跡 大友氏館跡・発掘調査概報III-」『大分市市内確認調査概報-2001年度-』大分市教育委員会
中世大友府内町跡第23次	1/1000 1/200	坪根伸也 塩地潤一 中西武尚ほか 2003.3「中世大友府内町跡第23次調査」『大分市市内遺跡確認調査概報-2002年度-』大分市教育委員会
中世大友府内町跡第24次	1/120	坪根伸也 塩地潤一 中西武尚ほか 2003.3「中世大友府内町跡第24次調査」『大分市市内遺跡確認調査概報-2002年度-』大分市教育委員会

特に道路状遺構や土壘状遺構、溝状遺構等は大規模な遺構であるが故に、複数区に跨る可能性が高く、全体の発掘は短い年月では困難である。しかし、これらはある施設を開発する可能性や町割りを想定する上において、その位置関係が時間的、空間的に重視される。豊後府内の各施設や変遷を明らかにする為には、豊後府内の推定範囲を把握する事が可能だけではなく継続的に利用できる遺構配置図、もしくは仕組みそのものを提案、作成する必要がある。

このようなシステムは、各個の視点からまとめられ、ツールとして開発が進められている。電算機を用いた方

法の一つとして奈良国立文化財研究所において行われた遺構図を GIS (Geographic Information System) へ展開を行う試み (平澤: 1998) や古代都城の用排水系統についての研究 (金田: 2000) などが挙げられる。今日においては遺跡 GIS 等と呼称される商用及び研究開発の一端を WWW(World Wide Web) 上において確認できる。

豊後府内では資料として、「府内の町割変遷図」(坂本: 2001) 等が作成されており、中世大友府内城下町跡の調査状況を伺うことができる情報源として存在する。今回の作図は、現状の作図状況を継承し、基礎情報基盤として発展させる試みと位置づけられる。故に、次の 3 点を目的として掲げる。

第 1 に、調査研究を行う為の比較、検討を行う基盤として整理し、発掘調査、研究、及び事前の発掘調査計画の立案に寄与することを目的とする。

第 2 に、現在の情報源自身が紙面に固定された情報である為、視認的可読性、保管性は高いといえる。しかし、情報の共有環境としては不適切であり、媒体から利用できる選択肢は少ない。この点を機械可読化により補足する。

作成される図は豊後府内の推定範囲全体をカバーする遺構配置図である。本稿ではこれを全体遺構配置図と呼称する。各調査地の遺構配置図は豊後府内の記録を行った一資料であり、全体遺構配置図を構成する一部である。これを便宜上、調査地遺構配置図とし、全体遺構配置図の下位に帰属するいわゆる子とする。また、これら遺構図は歴史叙述を行う基礎資料であると同時に調査地内における遺構を図示した希少な情報といえる。このことから継続的に保管される価値を有すると判断され、アーカイブズ (Archives) (註 3) としての特徴を含むと考えられる。しかし、継続使用される現用資料ゆえにデータを相互に補完し、保証する構造をとらなければならない。そのため、本図を作成した場合に起こり得る問題として、使用を行いながら継続した管理が求められる。情報の保証をどのように行うか、より良い方法を探る必要がある。これが第 3 点となる。

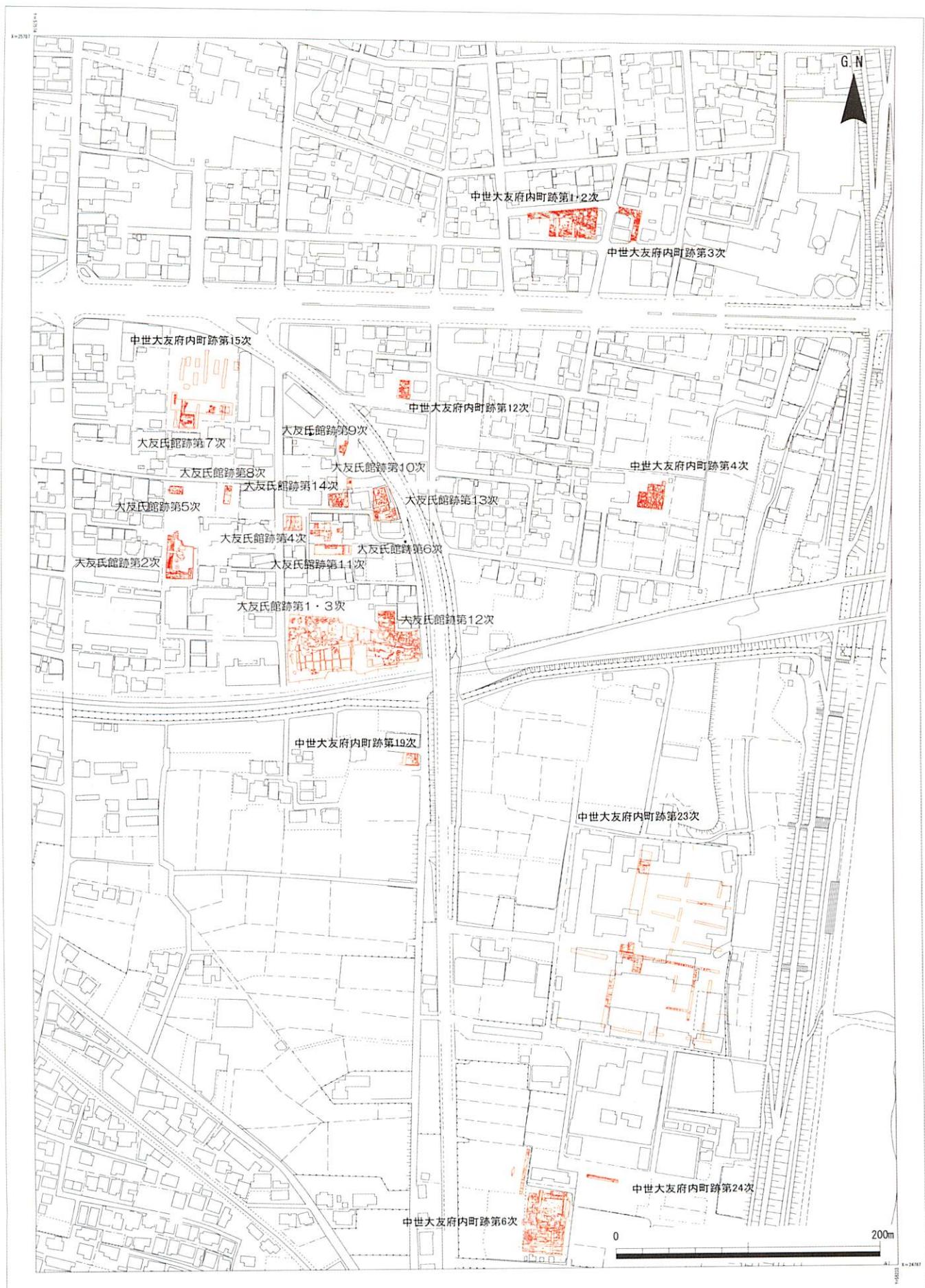
以上の目的から、作業過程を明確にし、図のインテグリティ (註 4) を保持する方法と問題点を示す必要がある。これは個々がデータの運用を考える上からも有用といえる。また、このように透明性を確保することは、新たな視座から作図が必要な段階に到達した場合や、GIS に情報を移設し、様々な検討を行う際に有効と考えられる。第 108 図に作業過程を示す。

・作図手法

参照可能な調査地遺構配置図として第 2 表の資料群が存在する。これを元図として取り扱い、参照元として用いる。座標は平面直角座標 II 系を使用する。今日、新たに座標を補正した世界測地系が示されている(註 5)が、今回は情報の参照元との混乱を避ける為、補正以前の座標値である日本測地系を使用する。

平面直角座標の使用と大縮尺を保持する考えは、遺構相互の位置関係の保証し、遺構形状の再現性を一定の高さに保持する。その為の記述固定媒体として電算機器を用い、機械に依存した情報として扱う。基盤となる地図として 2500 分の 1 の大分市都市計画図を AD 変換 (Analog Digital Composition) したデータを使用する。これらの地図は印刷物としての誤差がある為、ヘルマート幾何変換等を用いた偏位修正を施す。修正作業の情報源として、大分市都市計画課が所有するデータを参照した。

これらの作業を行った後に、各調査地遺構配置図に対し、周辺機器を利用した AD 変換を行い仮想空間にそれぞれの調査地を配置した。これにベクターグラフィックソフトウェアを使用し、芯線化と縮尺の統一化を図った。作成されたデータを DXF (Drawing Exchange Format) に変換し、CAD (Computer Aided Design) ソフトウェアを使用して遺構の再配置を行った。この一連の作業過程を繰り返すことによって、それぞれの各調査区位置を入力した。なお、CAD の特徴より、縮尺は 1 / 1 から格納、出力可能であるが、参照データの縮尺が有する最大公倍数は 1 / 1000 であり、本図は最大 1 / 1000 にて正確な情報が保持される。D A 変換 (Digital Analog



第109図 豊後府内における全体遺構配置図（推定大友氏館跡周縁：1/4000）

Composition) した中世大友府内城下町跡の全体遺構配置図を第 109 図に示す。

3. 作成資料における遺構配置図の検討

・遺構を表現する線形状

一連の作業において、芯線化と縮尺の齊一化を行った段階のデータを DXF 形式に変換し、ベジェ曲線とは異なる曲線の式に置き換える段階が存在する。(第 108 図作業過程 (6)) この時、線形状の位置情報は正確に保持されるが、形状は若干、不適切な状態に再計算される。つまり、この時点において、遺構配置図に描かれた曲線形状の再現性は低下するという問題が生じる。結果、2 種類の曲線形状が抽出されることになる。

A. ベジェ曲線により描かれた再現性の高い線形状 (第 108 図 作業段階 (4 b))。

B. 直線形状、または、スプライン曲線等により表現された再現性の低い形状を有し、且つ、位置を保持する線形状 (第 108 図 作業段階 (6))。

A は、遺構配置図のトレース等に応用可能であるといわれている(註 6)。再現性の高い状態で保持されており、これらを組み合わせて配置することは、遺構を投影した曲線形状を保持する方法として最も望ましいと考えられる。

B は、CAD の利用により A と比較して縮尺が統一されており、ソフトウェア本来の目的から座標が細かく管理されている。従って配置を行う際、精密な作業が可能になる。また、現行の GIS や造築物の図面の多くは CAD との連携が取りやすく、多くのプラットホームを利用できることから柔軟な資料作成を可能としている。この曲線表現は遺構などの表現にはやや劣る。但し、離散値を細かく設定する等により、近似する曲線に導くことも可能である。

これら一連の結果は遺構の形状表現の再現性を高く保ちながら、他用途に利用できる媒体に加工する手法として有効であろうと考えられる。遺構の形状を表現する重要性が高い場合と、精密な位置を確認する場合に応じて選択する必要があると考えられる。

・各調査位置の取り扱い

第 109・110 図は座標値を元に再配置された全体遺構配置図である。今回的方法を用いた結果、少なからず誤差が存在するといえる。原因は AD 変換の入力方法及び機器、人的な資料の取り扱いにあると推定される。図は修正を行った過程 (第 108 図 作業過程 (2)) を含むが、基本的に AD 変換を伴う作業は誤差を含むといわれている。また、媒体の温度変化による膨張・縮小や印刷物を作成する際に発生する元図のゆがみ等も一因として推測される。しかし、1/1000 においての配置では非常に微細な誤差として捉えられ、遺構相互の位置関係に対する影響はほとんど存在しないと考えられる。

参照した調査地遺構配置図は誤植を含む資料が少なからず存在する。本図においては誤植を訂正している。但し、完全に訂正できたわけではなく、報告書及び概報作成作業においての誤りと考えられる元図の非等倍投影は完全に払拭することはできなかった。これらは近似する数値に留めている。また、遺構図は写真測量、トータルステーション、遺方 (オフセット) 測量、(手) 実測等を経て作図される。それぞれ、方法、機材、精度が異なる (宮塚: 1999) ことから、今後は測量方法を明記する必要がある。



第110図 豊後府内における調査区遺構配置図（中世大友府内町跡第1～3次調査区：1/1000）

・遺構図の機械可読化

豊後府内は東西約0.7km、南北約2.2kmの規模と推定されている。これは一つの大きな遺跡であり、各調査地はこの遺跡に対するポイントである。この範囲を明示し、詳細な内容を示すことができる記述固定媒体としては電算機を選択することが賢明といえる。なぜなら紙の場合、大きさが固定される限り広い範囲を明確に表現することは難しく、データは精度を失い劣化するため、詳細な比較、検討には耐えることはできない。また、座標を用いて同じ資料を作成した場合は、だれでも同様の資料を再生産することは困難である。

電算機は、図面の追記や確認作業をより簡便に行なうことが実践でき、発掘調査の適所で用いることにより遺構配置図の作成を支援できる。特に遺構に関する情報の複製を簡易に行なえることは調査に携わる協力者、関係者に情報提供を行うだけでなく、情報を供用する意味においても有効と考えられる。

資料を機械可読化することは本図を共有物として利用できるだけでなく豊後府内を広く周知する手段となると予測される。このように、より柔軟な環境を選択し用いることは、記録資料の利用範囲を広げ、様々な視点からの分析に用いることができるのではないだろうか。

4. まとめ

本稿において、豊後府内の全体遺構配置図の作成を行った。電算機を用いてインテグリティの保全を念頭に置き、種々の作業を行った結果、より詳細な全体遺構配置図を作成する事ができた。豊後府内のような広範囲に跨る遺跡に対しては機械可読化による資料作成の有効性が高いと考えられ、各調査地を正確かつ詳細に表現できた

ことは基礎資料作成における一手法として提案できると考えられる。

今後の課題として、さらに精度の高い資料作成が調査、研究の面から望まれる。そのため、調査記録方法として、現状の記録方針に加え写真測量に代表される情報の保証を伴う方法を併用することが必要となる。ただ本図のような資料作成の為だけではなく、遺構そのものを補足する一資料として、また、アーカイブとして、写真測量を用いる意義は十分と考えられる。複数の媒体を用い保証を行う方針は、遺構の確信性を高める行為といえる。こうした考えは、将来に検証可能な過程を残すことに繋がるのではなかろうか。

また、基礎情報基盤としての機械可読化を考えた場合、種々の測量による情報はそもそも報告者の意図を忠実に再現できているのかという問題が挙げられる。特に写真測量においては、報告者と測量技師間の認識差が顕著に観察できる場合がある。これは遺構と呼称される認識と起伏は異なるという一例と認められ、それが表現に差を生じさせていると考えられる。根本的な認識、表現という段階の整理を行い、機械可読化においては測量方法を相互に比較し、その特徴や長所・短所を考慮した作成プランを試みる必要があるだろう。

今回、作成を行った豊後府内における全体遺構配置図は各調査地の遺構を集約した情報である。そのため、これを十分に機能させる為には、継続使用可能な仕組みと管理方法が求められる。本図はその特徴として各調査地の遺構配置図をリンクする構造を有する。このリンクは相互に正しく情報を保証する関係になければならない。このような関係を確実に保持し、運用する為は、情報の追加は許されるが、既に描かれた図の削除、改変を許可しないことが必要となる。したがって、全体遺構配置図はライトワنس文書（註7）の構造を有することが望ましいと考えられる。このような情報をより正しく継続的に保持される為には、ミスや改竄を防止する方法と記述順序を示す方法をそれぞれ考えなければならない。

機械可読化された全体遺構配置図は、保存管理が必要とされながら長期間、現用資料として継続的に使用され各調査地を相互に正しく追記保証される構造を有する情報として取り扱う必要があると考えられる。機械可読化された情報は発掘調査においても取り扱う機会が多い。これらは非視認的な存在であり環境に対し極めて脆弱である。また、データそのものに対する経年劣化はないが、記録媒体や安易なフォーマット変更により、同様の結果をもたらす可能性がある。電子媒体を含めた記録管理方法を考える必要があるといえるだろう。

5. おわりに

近頃、行政における説明責任から情報公開を前提にした活動や方針を耳にする機会が増えた。GISを導入するだけではなく、他の課と共有し、積極的に利活用する方向性も模索され始めている。そのいずれを果たすとしても継続的な保存と管理を考えなければならない。なぜなら、この考えは行政における説明責任を果たす重要なバックボーンとして利用可能であると想定されるからである。また、より優れた情報公開を行う一助になると考えられ、予想可能な検討課題として挙げられる。

謝辞

池邊千太郎氏においては各種にフォーマットされた地図を閲覧する機会を頂いた。坪根伸也氏においては情報収集の際に、貴重な調査資料を閲覧する機会を頂いた。植田高夫氏、江藤梓氏、小野啓子氏、近藤智史氏、副直美氏は日々の発掘調査を含め、遺構配置図のトレースから、細かい基礎作業まで多忙を極める中、筆者と共に作成を行ってくれた。伏して感謝したい。

註釈

註1 現在、中世大友城下町跡、中世大友府内町跡、中世府内町跡等、各名称が用いられ呼称されている。本稿においては、かつて大分川左岸に広がっていたと考えられる都市景観を豊後府内と呼称し、町屋及び大友館、蔵山万寿寺等それぞれの施設は豊後府内に含まれるという序列を与えており。また、発掘調査においては、中世大友城下町跡、中世大友府内町跡、大友氏館跡と既に呼称されている。調査地点を示す用語として利用されており、場合に応じて使用する。

註2 本稿においては、遺構配置図を各調査区におけるデータとして調査区遺構配置図と呼称し、全体遺構配置図は各調査区を集合させた遺跡全体を俯瞰可能な図として取り扱っている。

註3 アーカイブ、アーカイヴ、アーカイブス等、呼称は多様である。混乱を避ける理由から、アーカイブ、アーカイヴの用語は使用しない。本稿においては引用を除いて、アーカイブスを使用する。

アーカイブは保存することを単に意味する場合があり、現状でのデジタルアーカイブという用語は情報技術を応用した機械可読化による保存を意味すると考えられる。本稿においては「アーカイブスとは、組織体（個人も含めて）における業務の遂行を証拠づけるために記録を作成し、そうした記録群を年々歳々に蓄積し、中間保管庫を経て、処分か、永久保存かの岐路に立たされ、永久保存と評価されて、アーカイブスに移管されたものをいう。」（安澤：2002）に依拠している。アーカイブス、デジタルアーカイブの定義については、未だ検討する余地がある。それは史料学に限らず、アーカイブスという言葉が表現する意図が社会的に周知される途上であり、これに即した検討が各観点から進められていると考えられる。

註4 インテグリティ (Integrity) とは、安全性等の意味と示されているが、本稿に使用しているインテグリティとは機密の保たれた完全性と正確にそれが維持されつづけることを意味する。

註5 世界測地系とは、世界各国の共通で利用できる測地系をいう。国土地理院はITRF94座標系の構築を行っており、現在、順次に移行を図っている。これまで発掘調査において記録された座標は世界測地系とは異なる為、補正計算を行う必要がある。

註6 遺構、遺物のトレースは、ベクターグラフィックソフトウェアを介して行うことが可能といわれている（岡本 1998）。このように電算機を用いて作業を行うことに対し、デジタル、アナログといった二項図式を元にした懷疑的な話を耳にすることがある。これは、急速に情報化社会が進んだ為、個々が咀嚼できない間に、この二つは対抗するとされる観念が社会的に強調された結果と推察されるが語句の意味からも理解できるように対立する関係ではない。ともあれ、問題の中心はデジタルを用いた表現技術ではなく、認識から表現、伝達、再現という実測図の作成過程が内包する問題にフォーカスを移す必要がある。

註7 ライトワーンス文書とは、追記によってのみ書き換えが許可される文書をいう。代表的な書類としては、カルテ、裏譲書等が挙げられる。特に電子カルテは、多くの病院で用いられており、堅牢なシステム作成が求められている（原田 西垣 曾我ほか 2003）。

参考文献

大分市史編纂委員会 1987 「戦国時代の府内復原想定図」（付図）『大分市史 中』

鹿敏夫 2001 「文献・絵図から見た大友館と府内の町～都市と国際性～」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』 大分市教育委員会・中世都市研究会 pp.26

高畠豊 1997 「中世大友城下町第1・2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol.8 1996年度』 大分市教育委員会 pp.56～57

ルイス・フロイス著 松田毅一 川崎桃太訳 1978 フロイス『日本史』第6、7巻 中央公論社

木村幾太郎 2000 「府内古図再考」『Funai』府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報 大分市歴史資料館 pp.10～49

木村幾太郎 2001 「豊後府内城下町移転と府内町」『大分・大友土器研究論集』 pp.79～90

坂本嘉弘 2001 「府内の町割変遷図」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』 大分市教育委員会・中世都市研究会 pp.156～157

宮塚義人 1999 「遺跡・遺構・遺物の図化情報」『考古学と調査・情報処理』 pp.162～163

安澤秀一 2002 「文化情報学を考える」『文化情報学～人類の共同記憶を伝える～』 pp.31

岡本範之 1998 「パソコンを利用した遺物実測について」『日本情報考古学会第6回大会 発表要旨』 pp.6

大分市歴史資料館編 2003 「府内古図」（A類）『豊後府内 南蛮の彩り～南蛮の貿易陶磁器～』 pp.68

坪根伸也 2003 「東南アジア産陶磁器と豊後府内」『豊後府内 南蛮の彩り～南蛮の貿易陶磁器～』 大分市歴史資料館編 pp.75

森本朝子 2000 「日本出土の東南アジア産陶磁の様相」『貿易陶磁研究』第20号 日本貿易陶磁研究会 pp.123

原田篤史 西垣正勝 曾我正和ほか Aug 2003 「ライトワーンス文書管理システム」『情報処理学会論文誌』 vol.44 No.8 pp.2098～2094

平澤毅 1998 「遺跡の情報処理における数値地形図(DM) 活用の試み」『奈良国立文化財研究所年報 1998-4』 pp.38～39

金田明大 2000 「GISを用いた古代都城の用排水系統に関する研究」『地理情報システム学会講演論文集 vol.9』 pp.429～432

参考 HP

国土地理院
URL = <http://www.gsi.go.jp/>

〔編集者註〕

本書の中で第109図及び第110図以外にも、これと類似した遺構配置図が複数あるが、これらについては第4章において提示した手法に基づいて作成したものではない。従って、これらよりも第109図・第110図がより正確な図面であることをお断りしておきたい。

出土遺物觀察表

※法量の数値に*があるものは、復元により推定される値である。

持団番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	高	底径	縁/色調	文様/調整				胎土			備考	
										外面	内面	見込み	底部	石英	角	含	赤	
										文様スタンプ	高台内蛇/目輪刻							
第27回-2	SK137	青磁	鉢		中国				*6.8									
第27回-3	SK137	白磁	皿		中国		*14.9											
第27回-4	SK137	青花	皿	皿B1群	中国													
第27回-5	SK137	青花	皿	皿B1群	中国		*13.2											
第27回-6	SK137	青花	皿	皿B1群	中国		*12.5											
第27回-7	SK137	青花	皿	皿B1群	中国		*13.2											
第27回-8	SK137	青花	皿	皿B1群	中国		*12.5											
第27回-9	SK137	青花	皿	皿B1群	中国		*15.0											
第27回-10	SK137	青花	碗	碗E群	中国													
第27回-11	SK137	青花	皿		中国 龍泉窯系													
第27回-12	SK137	青花	碗		中国 龍泉窯系		*6.0											
第27回-13	SK137	青花	碗	碗C群?	中国													
第27回-14	SK137	青花	碗	碗E群	中国													
第27回-15	SK137	青花	小坏		中国			2.35										
第27回-16	SK137	青花	碗	碗C群	中国	*13.0												
第27回-17	SK137	土師器	坏			*11.4	2.3	*6.4	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ			○	○	○		
第27回-18	SK137	土師器	坏			*12.4	3.9	*6.4	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	○	長石	
第27回-19	SK137	土師器	坏			*10.5	2.8	*6.0	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り		○	○	結晶片	
第27回-20	SK137	京都系土師器	小皿			*8.5	1.8		暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第27回-21	SK137	京都系土師器	皿			*11.4	1.55		淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第27回-22	SK137	京都系土師器	小皿			8.65	2.25		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	「の」字ナデ	○	○	○		
第27回-23	SK137	京都系土師器	皿			*12.6			灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第27回-24	SK137	京都系土師器	皿			*12.1			暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第27回-25	SK137	京都系土師器	皿			*12.7			灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	一方向ナデ	○	○	○		
第27回-26	SK137	京都系土師器	皿			*12.4			灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第27回-27	SK137	京都系土師器	皿			*13.8			淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第27回-28	SK137	京都系土師器	皿			*13.7	2.65		暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第27回-29	SK137	京都系土師器	皿			*13.1			暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第27回-30	SK137	京都系土師器	皿			*11.2			暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第27回-31	SK137	焼締陶器	不明		不明	長 14.5	幅 4.1	厚 8.4										
第28回-32	SK137	焼締陶器	擂鉢		備前焼	*33.1												
第28回-33	SK137	焼締陶器	擂鉢		備前焼													
第28回-34	SK137	瓦質	擂鉢					*17.6										
第28回-35	SK137	瓦	瓦	平瓦														
第28回-36	SK137	凝灰岩	羽口															
第28回-37	SK137	瓦	平瓦															復元径
第28回-38	SK137	砂岩	茶臼															
第28回-39	SK137	砂岩	砾石															
第28回-40	SK137	砂岩	砾石															
第28回-41	SK137	砂岩	砾石															
第29回-42	SK137	瓦	鬼瓦			長 13.0	幅 12.9	厚 7.6										
第29回-43	SK137	土製品	羽口															
第29回-44	SK137	土製品	羽口															
第30回-1	SK139	青花	碗		中国													口縁部・内面にスラグ付着
第30回-10	SK139	土製品	トリベ			*5.6	1.7	2.0										
第30回-11	SK139	焼締陶器	鉢		中国	*38.3												
第30回-12	SK139	凝灰岩	羽口			長 17.5	幅 10.7	厚 8.0										
第30回-13	SK139	焼締陶器	擂鉢		備前焼													
第30回-14	SK139	瓦質土器	擂鉢															
第30回-2	SK139	青花	皿	皿E群	中国	*13.8												
第30回-3	SK139	土師器	小皿			*5.5	赤褐色		ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り		○	○	白色粒			
第30回-4	SK139	京都系土師器	皿			*10.2	*2.1		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○			
第30回-5	SK139	京都系土師器	皿			*8.0	*2.3		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第30回-6	SK139	土師器	坏			*12.8			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○			京都系土師器に類似
第30回-7	SK139	京都系土師器	小皿			*8.4	2.2		赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第30回-8	SK139	京都系土師器	皿			*14.8	3.1			ヨコナデ	ヨコナデ							口縁部スス付着
第30回-9	SK139	黒色土器	桶	A類		*8.0												
第31回-1	SK155	青花	皿	皿B1群	中国	*11.9												
第31回-2	SK155	青花	皿	皿C群	中国	*10.4												
第31回-3	SK155	青磁	皿		中国	*9.8												
第31回-4	SK155	白磁	皿		中国			*4.8										
第31回-5	SK155	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*3.5												
第31回-6	SK155	青磁	模花皿		中国 龍泉窯系													
第31回-7	SK155	青磁	模花皿		中国 龍泉窯系	*13.2												
第31回-8	SK155	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*9.5												
第31回-9	SK155	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*12.1			ヘラ彫り縁 舟									
第31回-10	SK155	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*15.8			ヘラ彫り縁 舟									
第31回-11	SK155	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*6.1				スタンプ	高台内凹部							
第31回-12	SK155	陶器	舟形利		朝鮮			*10.7	赫褐色									
第31回-13	SK155	土師器	耳皿			4.9	1.6	3.3	褐褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○			
第31回-14	SK155	土師器	小皿			7.7	1.7	4.7	明褐色～暗 灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○			

排列番号	追機番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土		備考			
										外面	内面	見込み	底部	石	骨	合	色		
第42図-9	SK735	瓦質土器	鍋			*23.4			ナデ 下半 ケズリ	ナデ				○					
第43図-1	SK650	青白磁	合子		中国 景徳鎮系	*5.0	*2.0	*4.8											
第43図-2	SK650	青磁	皿		中国 景徳鎮系	*12.1	2.4	*6.4											
第43図-3	SK650	青磁	菊皿		中国 景徳鎮系	12.9	3.5	7.5										高台内カンナ削り底	
第43図-4	SK650	青花	皿		中国 漳州窯系			5.6											
第43図-5	SK650	土師器	小皿		在地	*8.2	2.0	*5.1	暗褐色	ヨコナデ 工 具による段		糸切り	○	○	白色粒				
第43図-6	SK650	京都系土師器	小皿		在地	*9.2			明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第43図-7	SK650	京都系土師器	皿		在地	*17.2	2.3	*11.3	明黄褐色~ 明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方向ナ 子							
第43図-8	SK650	京都系土師器	小皿		在地	*9.0			灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第43図-9	SK650	焼締陶器	擂鉢		備前焼														
第45図-1	SK770	青花	小环		中国														
第45図-2	SK770	白磁	皿		中国	*10.6	2.2	*5.7											
第45図-3	SK770	土師器	小皿						*4.0	黒褐色									
第45図-4	SK770	土師器	坏			*10.7	2.2	*5.6	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○				
第45図-5	SK770	土師器	坏			*9.5			淡赤灰色	ヨコナデ	ヨコナデ					○			
第45図-6	SK770	京都系土師器	皿			*13.0	2.5		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第45図-7	SK770	京都系土師器	皿			*10.8	2.35		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第45図-8	SK770	京都系土師器	皿			*12.5	2.1		明褐色~明 黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方向ナ 子							
第45図-9	SK770	京都系土師器	皿			*13.0			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第45図-10	SK770	京都系土師器	皿			*10.8	2.15		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第45図-11	SK770	京都系土師器	皿			*13.1	2.3		灰褐色~赤 褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第45図-12	SK770	京都系土師器	皿			*13.6	2.2		灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り							
第45図-13	SK770	京都系土師器	皿			*15.0	2.15		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方向ナ 子							
第47図-1	SK828	青花	碗	碗E群	中国 景徳鎮系	10.8													
第47図-2	SK828	白磁	皿		中国				*11.6 5										
第47図-3	SK828	青磁	碗		中国 龍泉窯系					へら形									
第47図-4	SK828	青磁	碗		中国				*4.1						文様スタン プ	高台内燃點			
第47図-5	SK828	青磁	碗		中国				*12.8 5										
第47図-6	SK828	象眼青磁	皿		朝鮮	*24.6				白土によ る象がん									
第47図-7	SK828	凝灰岩	羽口																
第47図-8	SK828	焼締陶器	小壺		備前焼	*3.6													
第47図-9	SK828	陶器	瓶?						*4.2	灰褐色						糸切り後高 台削出			
第50図-1	SK818	青花	碗or鉢		中国 景徳鎮系														
第50図-2	SK818	青磁	稻花皿		中国 龍泉窯系	*12.7													
第50図-3	SK818	土器	小皿						*8.6	2.1	*5.1	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○		
第50図-4	SK818	土器	坏						*13.9	3.6	*3.7	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	白色粒		
第50図-5	SK818	土製品	灯火具						6.4	7.5		明褐色~明 灰褐色				糸切り	○		
第50図-6	SK818	焼締陶器	擂鉢		備前焼	*28.4													
第53図-1	SD970	白磁	皿		中国	*9.5													
第53図-2	SD970	白磁	皿		中国				*13.3	*2.25	*7.4								
第53図-3	SD970	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*11.3													
第53図-4	SD970	青磁	碗		中国 龍泉窯系	13.6													
第53図-5	SD970	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*12.0													
第53図-6	SD970	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*13.0													
第53図-7	SD970	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*20.0									文様陰刻	文様陰刻			
第53図-8	SD970	青磁	盤		中国 龍泉窯系				*12.6						文様スタン プ			高台内蛇ノ目釉剥ぎ	
第53図-9	SD970	青磁	碗		中国 潭州窯系	*9.5												見込みに目跡	
第53図-10	SD970	焼締陶器	鉢		中国				*7.1									白色粒	
第53図-11	SD970	焼締陶器	長胴瓶		ベトナム				*14.2										
第53図-12	SD970	瓦質土器	香炉						*10.8	6.6	*10.3								
第53図-13	SD970	土師器	小皿			7.2	1.8	4.3	青褐色~ 灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り						口縁部スス付着	
第53図-14	SD970	土師器	小皿			7.7	2.5	5.8	青赤褐色~ 暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	白色粒				
第53図-15	SD970	土師器	小皿						*4.3										
第53図-16	SD970	土師器	小皿						*3.4	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り						
第53図-17	SD970	土師器	小皿						*6.8	6.2	5.8	明褐色~ 灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	白色粒	
第53図-18	SD970	土師器	小皿						*6.8			明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○		
第53図-19	SD970	土師器	坏						*6.8			明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○			
第53図-20	SD970	土師器	坏						*12.5	3.4	*9.0	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	長石	
第53図-21	SD970	土師器	坏						*12.6	4.0	*8.4	明褐色~ 灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り				
第53図-22	SD970	土師器	坏									*5.1	明褐色						
第53図-23	SD970	土師器	坏									*7.1	淡褐色						
第53図-24	SD970	土師器	坏									*6.8	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○		
第53図-25	SD970	土師器	坏									*6.2	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	
第53図-26	SD970	土師器	坏									*11.6	3.2	*6.6	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	
第53図-27	SD970	土師器	坏									12.2	3.7	7.7	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	
第53図-28	SD970	土師器	坏									*14.0	3.1	*9.4	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	
第53図-29	SD970	土師器	坏									*14.0	3.5	*9.8	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	
第53図-30	SD970	土師器	坏									*8.5			淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	
第53図-31	SD970	土師器	坏		大内系							*5.4	明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	
第53図-32	SD970	土師器	坏		大内系							*10.9			明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ		

擇因番号	追構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土				備考				
														外面		内面		見込み		底部		
										石 英 石	白 口 白	全 色 白	赤 色 白	石 英 石	白 口 白	全 色 白	赤 色 白	石 英 石	白 口 白	全 色 白	赤 色 白	
第53図-33	SD970	土師器	壺		大内系				明灰黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	系切り伝状 压痕									
第53図-34	SD970	土師器	壺		大内系				明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	系切り伝状 压痕									
第53図-35	SD970	土師器	壺		大内系	*20.7	4.5	*10.6	明灰黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	系切り伝状 压痕									
第53図-36	SD970	瓦器	小皿		和泉系	*9.8																
第53図-37	SD970	黒色土器	碗	A類					*8.0													
第53図-38	SD970	土製品	灯火具						*4.8	灰褐色			系切り			○						
第54図-39	SD970	焼締陶器	擂鉢		備前焼																	
第54図-40	SD970	焼締陶器	擂鉢		備前焼																	
第54図-41	SD970	焼締陶器	壺		備前焼																	
第54図-42	SD970	瓦	軒平瓦																			
第54図-43	SD970	瓦	鬼瓦																			
第54図-44	SD970	瓦	丸瓦																			
第54図-45	SD970	瓦	丸瓦																			
第55図-1	SD970(第1 次調査)	青花	小壺		中国 景徳鎮系	*6.4																
第55図-2	SD970(第1 次調査)	青花	皿	皿B1群	中国 景徳鎮系				*6.3							疊付輪踏						
第55図-3	SD970(第1 次調査)	青花	皿	皿B1群	中国 景徳鎮系	*10.0																
第55図-4	SD970(第1 次調査)	青花	皿	皿B1群	中国 景徳鎮系	*12.0																
第55図-5	SD970(第1 次調査)	磁器	皿		中国					ひすいね												
第55図-6	SD970(第1 次調査)	白磁	小壺		中国	*8.4																
第55図-7	SD970(第1 次調査)	白磁	蓋		中国	最大 径2.9	1.3															
第55図-8	SD970(第1 次調査)	白磁	皿		中国																	
第55図-9	SD970(第1 次調査)	白磁	皿		中国	*9.5																
第55図-10	SD970(第1 次調査)	白磁	皿		中国	*11.9 5	*2.9	*6.15								疊付輪踏						
第55図-11	SD970(第1 次調査)	青磁	碗		中国 龍泉窯系																	
第55図-12	SD970(第1 次調査)	青磁	碗		中国 龍泉窯系								ヘラ彫り									
第55図-13	SD970(第1 次調査)	青磁	碗		中国 龍泉窯系								ヘラ彫り									
第55図-14	SD970(第1 次調査)	青磁	蓋?		中国	*7.1	*9.5	*4.2														
第55図-15	SD970(第1 次調査)	青磁	瓶(耳)		中国 龍泉窯系																	
第55図-16	SD970(第1 次調査)	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*14.7																
第55図-17	SD970(第1 次調査)	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*16.2							鍋道弁									
第55図-18	SD970(第1 次調査)	青磁	棱花皿		中国 龍泉窯系	*12.6																
第55図-19	SD970(第1 次調査)	青磁酒会壺	蓋?		中国 龍泉窯系	*17.4																
第55図-20	SD970(第1 次調査)	青磁	皿		中国 龍泉窯系																	
第55図-21	SD970(第1 次調査)	青磁	碗		中国 漳州窯系				*6.9							輪踏					見込み目跡	
第55図-22	SD970(第1 次調査)	焼締陶器	鉢?		中国?				*8.5													
第55図-23	SD970(第1 次調査)	土師器	小皿			*7.8	1.9	*5.1	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	系切り			○○	白色粒					
第55図-24	SD970(第1 次調査)	土師器	小皿			7.3	2.6	3.95	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	系切り	○	○○							
第55図-25	SD970(第1 次調査)	土師器	小皿			*9.0	1.8	*5.7	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	系切り	○	○							
第55図-26	SD970(第1 次調査)	土師器	壺						*7.2	赤灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	系切り			○					
第55図-27	SD970(第1 次調査)	土師器	壺						*6.2	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	系切り			○○	白色粒				
第55図-28	SD970(第1 次調査)	土師器	壺						*11.0	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	系切り伝状 压痕			○○					
第55図-29	SD970(第1 次調査)	土師器	壺						*6.3	明灰褐色	ヨコナデ	ナデ	ナデ	系切り			○○					
第55図-30	SD970(第1 次調査)	土師器	壺			*9.2	1.7	*4.5	明灰色	ヨコナデ	ヨコナデ											
第55図-31	SD970(第1 次調査)	土師器	壺						*6.4	暗灰褐色	ヨコナデ	ナデ	ナデ	系切り	○							
第55図-32	SD970(第1 次調査)	焼締陶器	瓶		備前焼				*8.5													
第55図-33	SD970(第1 次調査)	土師器	壺			*10.4	2.2	*5.1	明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ					○					トリベに転用	
第55図-34	SD970(第1 次調査)	土師器	壺						*4.9	明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ					○					
第55図-35	SD970(第1 次調査)	土師器	壺						*6.9	明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ		系切り	○							
第55図-36	SD970(第1 次調査)	京都系土師器	小皿						*7.5		青灰色											
第55図-37	SD970(第1 次調査)	京都系土師器	小皿						*8.1	2.0	明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方向ナ デ	指おさえナ デ							
第55図-38	SD970(第1 次調査)	京都系土師器	小皿			8.6	2.0		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	指おさえナ デ				内面・口縁部スス付着					
第55図-39	SD970(第1 次調査)	京都系土師器	皿			*10.9			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		指おさえナ デ									
第55図-40	SD970(第1 次調査)	京都系土師器	皿			*16.1	2.2		灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	一方向ナ デ	指おさえナ デ	○							
第55図-41	SD970(第1 次調査)	土師器	壺						*8.2	暗灰褐色	ヨコナデ	ナデ	ナデ	系切り	○	○						
第55図-42	SD970(第1 次調査)	黒色土器	碗	A類					*9.0										○○			
第55図-43	SD970(第1 次調査)	土製品	灯火具						*5.4	淡灰褐色									○○	白色粒		
第56図-45	SD970(第1 次調査)	焼締陶器	擂鉢		備前焼																	
第56図-46	SD970(第1 次調査)	焼締陶器	擂鉢		備前焼				*13.6													
第56図-47	SD970(第1 次調査)	焼締陶器	擂鉢		備前焼				*13.2					8木脚位の 壙日目								

擇図番号	遺構番号	材質	器種	細別	底地/窓	口径	高さ	底径	釉/色調	文様/調整				胎土				備考			
										外面	内面	見込み	底部	石天	角	食	赤				
内面	外	色	石																		
第56図-48	SD970(第1次調査)	焼締陶器	壺		備前焼	*20.2															
第56図-49	SD970(第1次調査)	焼締陶器	壺		備前焼	*26.4															
第56図-50	SD970(第1次調査)	瓦質土器	羽釜			*23.3				招きえ ナデ	ハケメナデ										
第56図-51	SD970(第1次調査)	瓦質土器	火鉢			*32.8					ナデ										
第56図-52	SD970(第1次調査)	瓦質土器	擂鉢						*11.9		ナデ	4本単位掘 り目	4本単位掘 り目								
第56図-53	SD970(第1次調査)	瓦質土器	擂鉢						*13.6			5本単位掘 り目									
第56図-54	SD970(第1次調査)	瓦質土器	壺																		
第56図-55	SD970(第1次調査)	焼締陶器	壺		備前焼																
第56図-56	SD970(第1次調査)	瓦	平瓦																		
第56図-57	SD970(第1次調査)	瓦	平瓦																		
第56図-58	SD970(第1次調査)	瓦	平瓦																		
第56図-59	SD970(第1次調査)	瓦	平瓦																		
第56図-60	SD970(第1次調査)	瓦	丸瓦																		
第57図-61	SD970(第1次調査)	瓦	丸瓦																		
第57図-62	SD970(第1次調査)	瓦	丸瓦																		
第57図-63	SD970(第1次調査)	砂岩製	茶臼						20.0												
第57図-64	SD970(第1次調査)	結晶片岩	砥石						長17.3 幅4.8 厚2.5												
第57図-65	SD970(第1次調査)	砂岩	砥石						長5.4 幅4.5 厚4.9												
第58図-1	SD403	青磁	碗	中国					*5.3												
第58図-2	SD403	青磁	碗	中国 龍泉窯系					*4.6												
第58図-3	SD403	青磁	碗	中国 龍泉窯系						へら足り									高台内輪脚		
第58図-4	SD403	青磁	碗	中国 龍泉窯系							文様焼附										
第58図-5	SD403	青磁	碗	中国 龍泉窯系																	
第58図-6	SD403	白磁	碗	中国					*11.0												
第58図-7	SD403	青白磁	皿	中国																	
第58図-8	SD403	白磁	菊皿	中国					11.8 3.3 8.4												
第58図-9	SD403	土師器	小皿						7.5 2.2 4.4	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○					
第58図-10	SD403	土師器	小皿						*7.6 2.5	*5.0 反弧色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○					
第58図-11	SD403	土師器	小皿						*6.7 2.3	*5.0	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り						
第58図-12	SD403	土師器	小皿						*7.4 2.1	*5.6	明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	長石			
第58図-13	SD403	土師器	小皿						*7.6 2.5	*5.0											
第58図-14	SD403	土師器	小皿							*4.7	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第58図-15	SD403	土師器	杯						*8.4	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○					
第58図-16	SD403	土師器	杯						*6.5												
第58図-17	SD403	土師器	杯						*5.15	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	白色粒				
第58図-18	SD403	土師器	杯						*8.5 3.0	*5.5	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第58図-19	SD403	土師器	杯						*12.7 3.2	*6.2	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第58図-20	SD403	土師器	杯						*13.0 4.1	7.0	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第58図-21	SD403	土製品	灯火具						*6.6	*6.3	明赤褐色										
第58図-22	SD403	土製品	灯火具							*5.2	明褐色										
第58図-23	SD403	土師器	小皿						*4.3	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	燒成前穿孔				
第58図-24	SD403	焼締陶器	鉢	中国?					*19.1												
第58図-25	SD403	焼締陶器	壺		備前焼	*24															
第59図-25	SD403	焼締陶器	擂鉢		備前焼																
第59図-27	SD403	焼締陶器	壺		備前焼																
第59図-28	SD403	瓦質土器	擂鉢						*32.8			招きえ ナデ	6本単位の 盛り目								
第59図-29	SD403	瓦質土器	擂鉢							10.8			7本単位の 盛り目								
第59図-30	SD403	瓦質土器	鍋													○	○	外側スス付器			
第59図-31	SD403	瓦質土器	鍋																		
第59図-32	SD403	土製品	羽口																		
第59図-33	SD403	瓦質土器	鍋									招きえ ナデ	ナデ								
第59図-34	SD403	瓦	丸瓦																		
第59図-35	SD403	瓦質土器	壺						*55.7												
第60図-1	SD408	土師器	小皿	在地					*8.4 2.3	*6.8	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第60図-2	SD408	土師器	杯	在地					*15.2 3.7	*11.7	黄灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第60図-3	SD408	焼締陶器	擂鉢	備前焼					*27.1												
第60図-4	SD408	焼締陶器	擂鉢	備前焼					*36.0												
第61図-1	SD978	青磁	碗						*15.1												
第61図-2	SD978	土師器	杯						*10.2 3.6	*7.0	赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り板状 庄重	○	○	長石			
第61図-3	SD978	土師器	杯						*11.2 3.45	*8.0	淡黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り板状 庄重	○	○	長石			
第61図-4	SD978	土師器	杯						*11.2 4.0	*9.5	明灰褐色～ 淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第61図-5	SD978	土師器	杯						*13.6 3.45	*9.5	明灰褐色～ 淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第61図-6	SD978	土師器	小皿						6.4 1.9	5.15	明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	長石			
第61図-7	SD978	土師器	小皿							*4.6	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第61図-8	SD978	土師器	杯							*12.4 3.5	8.5	明灰褐色～ 淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	白色粒		
第61図-9	SD978	土師器	杯							*13.8 4.5	*8.7	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○			
第61図-10	SD978	土師器	杯							*7.1	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第61図-11	SD978	土師器	杯							*6.6	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	長石			
第61図-12	SD978	土師器	杯							*7.4	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第61図-13	SD978	土師器	杯							*11.0	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○				
第61図-14	SD978	土師器	杯													○	○				

拂図番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	高さ	底径	釉/色調	文様/模様				胎土				備考
										外面	内面	見込み	底部	石英 内 外 合 色 胎	内 外 合 色 胎	内 外 合 色 胎	内 外 合 色 胎	
第61図-15	SD978	土師器	壺			*15.0			明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第61図-16	SD978	土製品	灯火具				*4.8							○	○	○	○	白色粒
第61図-17	SD978	黒色土器	壺	碗A類				6.8						○	○	○	○	長石
第61図-18	SD978	焼締陶器	鉢		中国													
第61図-19	SD978	瓦質土器	擂鉢															
第61図-20	SD978	焼締陶器	壺	僅前焼														
第61図-21	SD978	焼締陶器	擂鉢	僅前焼														
第61図-22	SD978	瓦質土器	香炉											○	○			
第61図-23	SD978	瓦質土器	鉢			*29.4				ナデ ケ ズリ	ナデ				○			
第61図-24	SD978	土師質土器	壺			*14.1												
第64図-1	SK145	青花	皿	皿B1群	中国													
第64図-2	SK145	青花	皿	皿B1群	中国													
第64図-3	SK145	青花	皿	皿B1群	中国		*6.5											疊付痕跡
第64図-4	SK145	青磁	碗		中国 龍泉窯系					輪進井 文様ヘラ 彫り								
第64図-5	SK145	青磁	碗		中国 龍泉窯系	12.8												
第64図-6	SK145	青磁	碗		中国 龍泉窯系	13.8				文様ヘラ 彫り								
第64図-7	SK145	青磁	碗		中国 龍泉窯系	13.0												
第64図-8	SK145	青磁	碗		中国 龍泉窯系	13.1												
第64図-9	SK145	土師器	小皿				*5.0	明灰反色	ヨコナデ		ナデ	糸切り		○	○	○	○	
第64図-10	SK145	土師器	小皿			6.8	1.7	4.5	明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り板状 圧痕	○	○	○	○	
第64図-11	SK145	京都系土師器	皿			*11			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第64図-12	SK145	土師器	小皿			7.4	2.3	4.2	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○			
第64図-13	SK145	土師器	壺			*12.4	3.0	*7.0	黄灰色～銀 褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○				
第64図-14	SK145	土師器	壺			*12.4	1.9	*7.8	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り板状 圧痕	○	○			
第64図-15	SK145	土師器	壺			*14.5			明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第64図-16	SK145	土師器	壺			*14.6	3.1	*7.4	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り板状 圧痕			○	長石	
第64図-17	SK145	土師器	壺					*10.0	暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○			
第64図-18	SK145	土師器	壺			*10.2	2.9	*6.3	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○				
第64図-19	SK145	土師器	壺			*11.7	3.0	*6.0	赤灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○			
第64図-20	SK145	土師器	壺					*5.4	赤灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り					
第64図-21	SK145	土師器	壺					*6.0	明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○				
第64図-22	SK145	土師器	壺			*11.4			明真褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り					
第64図-23	SK145	土師器	壺			9.0	2.7	5.6	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○				
第64図-24	SK145	土師器	壺					*7.0	明真褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○				
第64図-25	SK145	土師器	壺					*5.9	明真灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り板状 圧痕	○				
第64図-26	SK145	土師器	壺					*6.2	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○				
第64図-27	SK145	土師器	壺			*12.2	3.0	*7.5	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り板状 圧痕					
第64図-28	SK145	土師器	壺			*13.6			明褐色～暗 褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り					
第64図-29	SK145	瓦質土器	壺		盤内底		(4.8)											
第64図-30	SK145	砂岩	砾石															
第65図-1	SK182	青花	皿	皿B1群	中国													
第65図-2	SK182	京都系土師器	皿			*16.2			灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第65図-3	SK182	土師器	壺			*15.0	2.7	*8.1	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○			
第65図-4	SK182	焼締陶器	擂鉢	僅前焼				12.6										
第69図-1	SK300	京都系土師器	皿	在地		*11.1	2.0		暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第69図-2	SK300	京都系土師器	皿	在地		*11.4	2.0		灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第69図-3	SK300	京都系土師器	皿	在地		12.6	2.1		灰褐色～暗 褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第69図-4	SK300	輝緑凝灰岩	規			長6.7	幅3.6	厚1.1										
第69図-5	SK300	土師器	壺					*5.7	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	○		
第69図-6	SK300	土師器	壺					*7.1	暗褐色～暗 褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	○		
第69図-7	SK275	京都系土師器	耳皿			4.6	1.3		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り					
第69図-8	SK275	土師器	壺			*8.8	2.1	*4.5	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り					
第71図-1	SK401	青花	碗	碗C群	中国	*12.7												
第71図-2	SK401	青花	碗	碗C群	中国	*12.0												
第71図-3	SK401	青磁	碗		中国 龍泉窯系				文様ヘラ 彫り									
第71図-4	SK401	京都系土師器	耳皿			*3.3	1.8		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○				
第71図-5	SK401	土師器	小皿			*5.9	2.2	*4.6	暗系反褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り板状 圧痕	○	○	○		
第71図-6	SK401	土師器	小皿			*8.0	2.2	*5.7	暗褐色～暗 褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	○	白色粒	
第71図-7	SK401	土師器	小皿			*7.8	2.4	*6.2	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	○		
第71図-8	SK401	土師器	壺			*12.6	4.6	*6.7	明反褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	○	長石	
第71図-9	SK401	土師器	壺			*12.2	2.15	*6.4	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	○		
第71図-10	SK401	京都系土師器	皿			*13.8			淡反褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○	○	○	白色粒	
第71図-11	SK401	京都系土師器	皿			*16.2			淡反褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		糸切り	○	○	○		
第71図-12	SK401	焼締陶器	壺	常滑焼														
第75図-1	SK827	青磁	碗	中国 龍泉窯系														
第75図-2	SK827	青磁	皿	中国 龍泉窯系	*8.7													
第75図-3	SK827	白磁	器皿	中国														
第75図-4	SK827	青白磁	皿	中国														
第75図-5	SK827	土製品	トリベ			*6.6												
第75図-6	SK827	焼締陶器	擂鉢	僅前焼				*11.8					10本単位の 重り目					「招府系」 内面と口縁部にスラグ 付着

排列番号	追機番号	材質	器種	細別	産地/蔭	口径	高さ	底径	胎/色調	文様/調整				胎土				備考	/:接合関係
										外面	内面	見込み	底部	右側	左側	赤色	白		
第75回-7	SK827	瓦質土器	擂鉢			*33.0													
第78回-1	SK868	土師器	小皿			6.5	1.6	4.0	棕褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方向ナデ	糸切り						
第78回-2	SK868	青花	皿	皿B1群	中国	*8.9													
第78回-3	SK968	青花	皿	皿B1群	中国	*11.9													
第78回-4	SK968	青花	皿	皿B1群	中国	*12.0													
第80回-1	SE400	白磁	皿		中国	*7.2													
第80回-2	SE400	白磁	皿		中国	*3.4													高台輪跡
第80回-3	SE400	白磁八角	鉢		中国	*7.3	3.7	*2.2											輪跡
第80回-4	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系														
第80回-5	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*12.8													
第80回-6	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系														
第80回-7	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*15.4													
第80回-8	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*13.3													
第80回-9	SE400	青磁	瓶		中国 龍泉窯系														
第80回-10	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*15.2													口縁部輪花
第80回-11	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系														
第80回-12	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系														
第80回-13	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*17.6													
第80回-14	SE400	青磁	皿		中国 龍泉窯系	*11.2													
第80回-15	SE400	青磁	盤		中国 龍泉窯系														へう形
第80回-16	SE400	青磁	盤		中国 龍泉窯系														
第80回-17	SE400	青磁	盤		中国 龍泉窯系	*11.9													高台内蛇ノ目輪跡
第80回-18	SE400	青花	皿	皿B1群	中国														
第80回-19	SE400	青花	皿	皿B1群	中国	*15.1													
第80回-20	SE400	青花	碗	碗C群	中国 鎏德鎮系	*4.9													登付輪跡
第80回-21	SE400	陶器	四耳壺耳		タイ				銀褐色地										高台内蛇ノ目輪跡
第80回-22	SE400	綠釉陶器			幾内底		*4.5												花文輪跡
第80回-23	SE400	青磁	碗		中国 龍泉窯系														
第80回-24	SE400	陶器	鉢		瀬戸 烟窓度	*23.8			灰地										
第80回-25	SE400	土師器	小皿		在地	*5.9	1.0	*3.6		ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	○					
第80回-26	SE400	土師器	小皿		在地	*7.3	1.8	*2.2	棕褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	不正方向	糸切り	○	○	○	○	○	白色粒 口縁部スス付着
第80回-27	SE400	土師器	坏		在地			*5.8	棕褐色										○
第80回-28	SE400	土師器	小皿		在地	*9.1	2.2	*5.7	白灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	エ貝による段	ナデ	糸切り	○				
第80回-29	SE400	土師器	坏		在地	*9.9	2.8	*6.8	暗反褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り		○	○			
第80回-30	SE400	土師器	坏		在地			*7.5	反色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り		○				
第80回-31	SE400	土師器	小皿		在地	*7.9	2.0	*5.5	明褐色～暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	エ貝による段	ナデ	糸切り	○				口縁部スス付着
第80回-32	SE400	土師器	坏		在地	*11.2	3.4	*7.9	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り		○	○			
第80回-33	SE400	土師器	坏		在地			*7.3	明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り		○	○			
第80回-34	SE400	土師器	坏		在地	*11.4	2.0	*6.6	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	エ貝による段	ナデ		○				白色粒
第80回-35	SE400	土師器	坏		在地	*12.0			淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	エ貝による段	ナデ		○	○			
第80回-36	SE400	土師器	坏		在地			*7.3	棕褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	エ貝による段	ナデ	糸切り	○	○	○		
第80回-37	SE400	土製品	土鍾			長4.9	幅1.1												
第80回-38	SE400	瓦質土器	碗						*4.1										糸切り後粘合貼付
第80回-39	SE400	京都系土師器	皿			*12.7	2.0	*5.1											
第80回-40	SE400	土師器	坏					*6.0	白灰色～暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り						
第80回-41	SE400	土師器	坏					*6.1	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方向ナデ	糸切り	板状圧痕					白色粒
第80回-42	SE400	土製品	灯火具				3.1	*5.1	灰褐色						○	○	○		
第80回-43	SE400	土製品	灯火具					*5.8	明褐色						○	○	○		
第81回-44	SE400	漆器	椀					14.2	10.4	8.6									長40.3 幅(残存部) 50.3 厚9.0
第81回-45	SE400	木製	杓																
第81回-46	SE400	焼締陶器	擂鉢		備前焼														
第81回-47	SE400	焼締陶器	擂鉢		備前焼														
第81回-48	SE400	焼締陶器	擂鉢		備前焼														
第81回-49	SE400	焼締陶器	擂鉢		備前焼	*32.8													
第81回-50	SE400	焼締陶器	擂鉢		備前焼	*34.8													
第81回-51	SE400	焼締陶器	擂鉢		備前焼			*19.2											9本単位の 擂り目
第81回-52	SE400	瓦	丸瓦																
第81回-53	SE400	瓦質土器	火鉢			*31.0													
第81回-54	SE400	焼締陶器	擂鉢?		備前?			*11.4											
第81回-55	SE400	瓦質土器	擂鉢			*32.6													
第81回-56	SE400	焼締陶器	大甕		備前焼														
第81回-57	SE400	瓦質土器	鍋			*49.2	5			湯おさえナデ	ナデ		タタキ						外面スス付着
第81回-58	SE400	瓦質土器	火鉢							火様スター									
第81回-59	SE400	安山岩	茶臼						*29.8										
第82回-1	SE460	白磁	皿	中国				*3.4											
第82回-2	SE460	青磁	瓶	中国 龍泉窯系	*10.3														
第82回-3	SE460	青磁	皿	中国 龍泉窯系	*13.5														
第82回-4	SE460	青磁	碗	中国 漳州窯系	*9.85														見込み、高台に目跡
第82回-5	SE460	土師器	小皿		在地			*5.2	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り						○白色粒
第82回-6	SE460	土師器	坏		在地			*7.0	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り						
第82回-7	SE460	土師器	坏		在地			*7.2	反褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り		○				
第82回-8	SE460	土師器	坏					*5.6	灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り	板状圧痕	○				
第82回-9	SE460	土師器	坏					*12.6	明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ			○				
第82回-10	SE460	土師器	坏					*11.3	2.5	5.4	赤褐色	ヨコナデ	ナデ	糸切り板状圧痕	○	○			
第82回-11	SE460	土師器	坏						*8.9	反褐色～暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り		○	○		
第82回-12	SE460	土師器	坏						*8.1	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	糸切り		○	○		
第82回-13	SE460	土師器	坏						*14.1	反褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ			○	○		

写 真 図 版

遺物写真のキャプション表記例

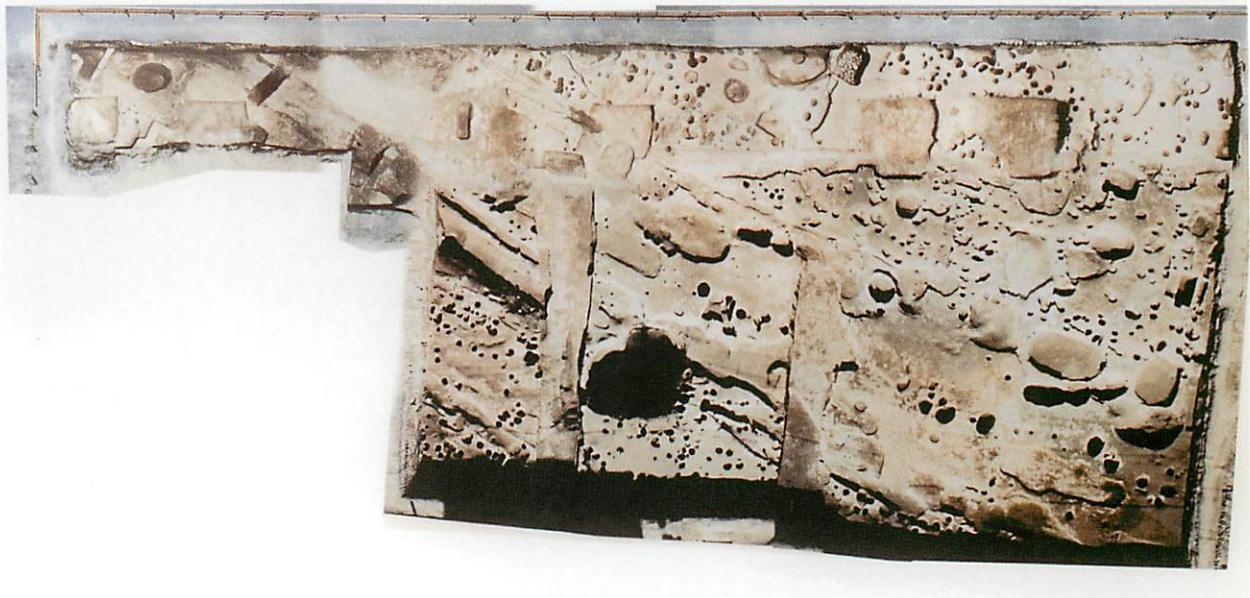
本文中の第84図であれば（84-12）と表記する

真図版 1



2次調査区遠景空中写真（東より）

真図版 2



1次, 第2次調査区全景 (合成写真)



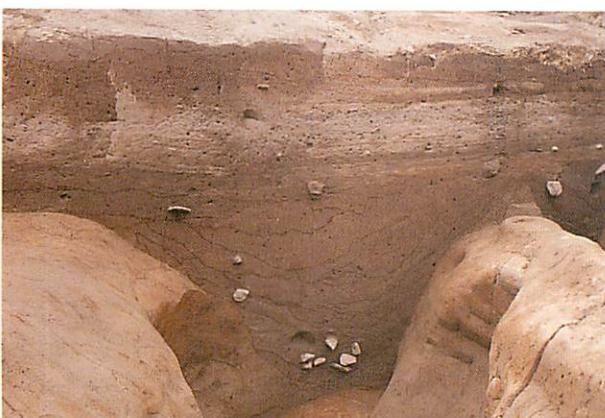
2次調査区全景



道路状遺構（西から）



道路状遺構土層



道路状遺構土層断面と SD970 土層（東から）



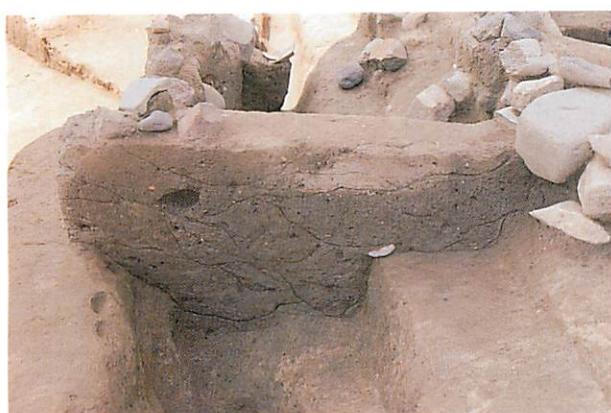
SD140,SD403 土層（西から）



SD140,SD403（南から）



SP551 三彩出土状況



SD799 土層 2（東から）



SD799 土層 3（東から）

写真図版 4



SD799 遺物出土状況 (南から)



SD970 土層断面



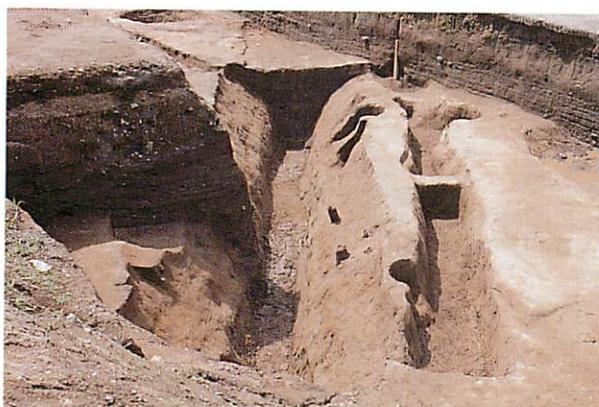
SD970 (南東から)



SD799 南東から



SD820 石列 (南から)



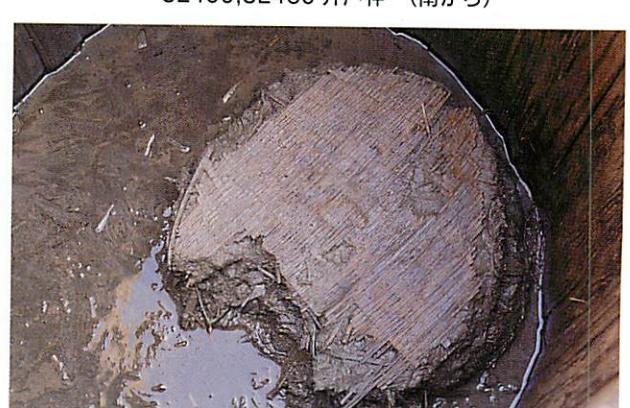
SD970,SD978 (南から)



SE400,SE460 井戸枠 (南から)



SE400,SE460 完掘状況 (南から)



SE460 遺物出土状況



SK011 (南から)



SK012 (北から)



SK013 (南から)



SK072 (南から)



SK137,SK139,SK155 (南から)



SK145 (南から)



SK180,SK148,SK147 (南から)



SK275 (南から)

写真図版 6



SK309 完掘状況（北から）



SK309 遺物出土状況（北から）



SK501 遺物出土状況（南から）



SK610（南から）



SK650 遺物出土状況



SK868（南から）



SK828 遺物出土状況（南から）



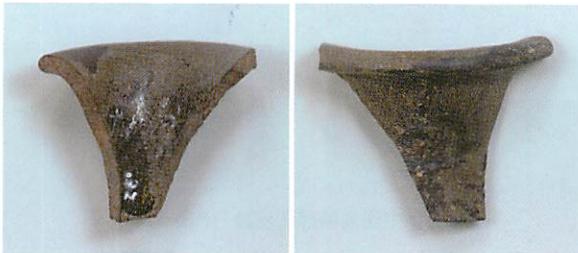
SK828 完掘状況（南から）



SK012 刻花青花瓶 (17-1)



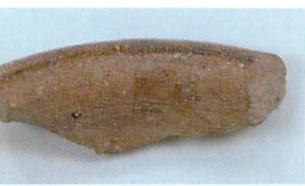
SK013 朝鮮王朝産陶器皿 (19-1)



SK092 朝鮮王朝産陶器瓶 (21-1)



SK101 褐釉陶器壺 (21-4)



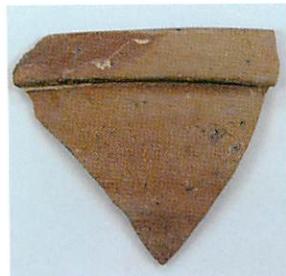
SK137 鬼瓦片 (29-42)



SK137 器種不明焼締陶器製品 (27-31)



写真図版 8



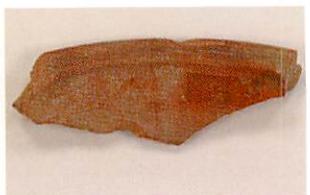
SK139 中国産焼締陶器鉢 (30-11)



SK124 焼締陶器鉢? (23-6)



SK180 中国産焼締陶器鉢 (36-6)



SK147 朝鮮王朝産陶器皿 (33-1)



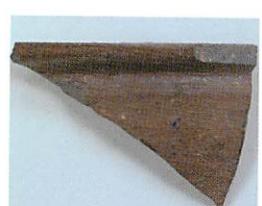
SK155 朝鮮王朝産陶器舟徳利 (31-12)



SK180 五彩皿 (36-1)



SD221 中国産焼締陶器鉢 (11-5)



SD403 中国産焼締陶器鉢 (58-24)



SK180 瓦質土器椀 (36-3)



SD403 青白磁 (枢府系) 皿 (58-7)



SK650 青白磁合子 (43-1)

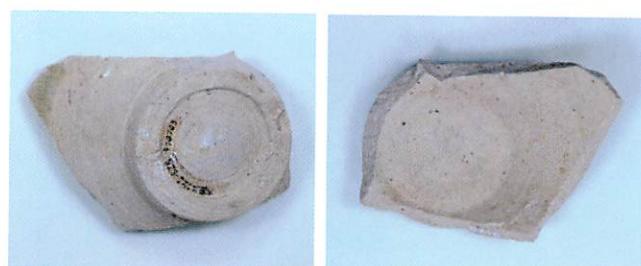


SK650 青磁菊皿 (43-3)





SK827 青白磁（枢府系）皿（75-4）



SK828 濑戸・美濃産？陶器瓶？（47-9）



SK828 朝鮮王朝産象嵌青磁皿（47-6）



SD870 備前擂鉢（15-5）

SD870 備前壺（15-6）



SD870 褐釉陶器壺（表）（15-9）



SD870 褐釉陶器壺（裏）

写真図版 10



SD970 出土 大内系土師器坏 (53-32 ~ 34・39)



SD970 天秤皿 (95-5)



SD970 青磁蓋? (55-14)



SD970 青磁酒海壺蓋 (55-19)



SD970 中国産焼締陶器鉢? (55-22)



SD970 白磁蓋 (55-7)



SD970 翡翠釉皿 (55-5)



SD970 中国産焼締陶器鉢 (53-10)



SD970 鬼瓦? (54-44)



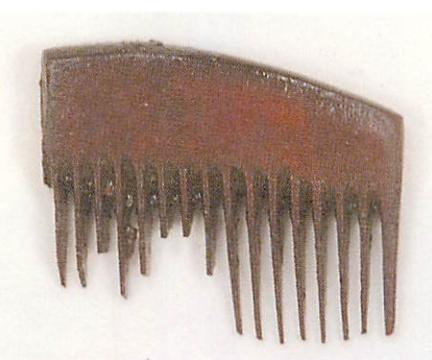
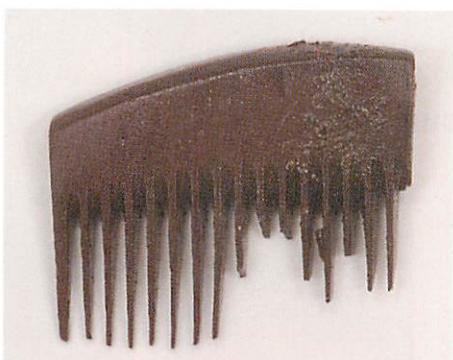
SD970 ベトナム産長胴瓶 (53-11)



道路状遺構出土 中国産焼締陶器鉢 (10-5)



道路状遺構出土 中国産焼締陶器鉢 (10-6)



SE460 木製櫛 (81-45)



SE460 漆器椀 (81-44)



SE400 青磁瓶 (80-9)



SE400 白磁八角鉢 (80-2)

SE400 タイ陶器四耳壺 (耳) (80-21)

写真図版 12



SX975 タイ産陶器四耳壺 (88-7)



SX700 青磁壺蓋 (89-6)

S222 濑戸・美濃産陶器皿 (90-10)



S682 朝鮮王朝産陶器 (90-17)

S089 中国産焼締陶器鉢 (90-4)



S114 中国産焼締陶器鉢 (90-7)

S135 中国産焼締陶器鉢 (90-8)



中国産焼締陶器鉢 (91-27)

中国産焼締陶器鉢 (101-43)



SK001 赤間硯 (94-1)



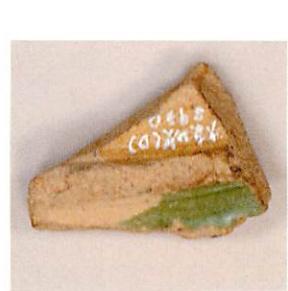
SK760 灰色磁器 小坏 (90-20)



SK585 ベトナム長胴瓶 (90-15)



SK930 華南三彩蓋 (103-7)



S089 中国産焼締陶器瓶? (90-3)



SP551 華南三彩瓶 (90-13)



華南三彩水注 (101-47)

写真図版 14

遺構検出時出土遺物・表採遺物



中国産焼締陶器鉢 (101-42)



褐釉磁器碗 (100-15)



華南三彩瓶? (101-46)



褐釉陶器茶入 (101-48)



華南三彩瓶? (101-46)



ベトナム産焼締陶器長胴瓶 (101-49)



褐釉陶器壺 (101-50)



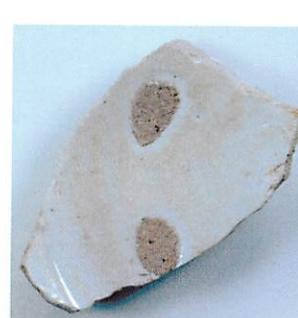
タイ産?陶器壺 (101-51)



瀬戸・美濃産陶器鉢 (102-56)



朝鮮王朝産白磁皿 (101-52)



朝鮮王朝産白磁皿 (101-53)





各遺構出土綠釉陶器碗



各遺構出土越州窯系青磁



小柄・笄

出土灯火具集合写真



灯火具 (11-4)

灯火具 (58-22)

灯火具 (103-3)

灯火具 (103-2)

写真図版 16



報告書抄録

ふりがな	おおともふない
書名	大友府内7
副書名	中世大友府内町跡第1次・2次調査報告 大分駅周辺総合整備事業に伴う発掘調査報告書2
卷次	
シリーズ名	大分市文化財調査報告書
シリーズ番号	第49集
編著者名	高畠 豊 梅田 昭宏
編集機関	大分市教育委員会
所在地	大分市荷揚町2番31号
発行年月日	西暦2004年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
ちゅうせいおおともふないまちあと	おおいたしにしきまち	44201	330051	33 13 45	131 37 20	960402～ 970805	820	区画整理事業 代替地
中世大友府内町跡	大分市錦町2丁目							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中世大友府内町跡	中世都市	戦国時代	道路状遺構 井戸跡 土坑	青花 華南三彩鶴形水注 ペトナム産長胴瓶 京都系土師器 天秤皿	最大幅10mを測る戦国時代の 道路状遺構と、その両側に展 開する遺構群を検出。

大友府内7

中世大友府内町跡第1・2次調査報告
大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

平成16年3月31日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2番31号

印刷 丸徳印刷株式会社
大分市新貝4番50号